

2022 年度

博士学位論文

日韓国際結婚家庭に関する研究  
—アイデンティティと言語を中心として—

指導教授：韓景旭 教授

提出者：21DK002

国際文化研究科 国際文化専攻

梁正善（ヤン・ジョンソン）

## 目次

<b>第1章 序論</b> .....	1
1.1 問題の所在と本研究の目的.....	1
1) 社会の背景.....	1
2) 個人的な体験から.....	2
1.2 用語の定義.....	3
1) 国際結婚.....	3
2) モビリティ.....	3
3) アイデンティティ.....	4
4) 文化的アイデンティティ.....	6
5) 国際結婚家庭における子どものラベル.....	6
6) 継承語.....	7
1.3 論文の構成.....	8
<b>第2章 理論的枠組みと先行研究</b> .....	9
2.1 移動する子どもの概念.....	9
2.2 アイデンティティの概念.....	10
2.3 先行研究.....	11
2.3.1 国際結婚家庭における親子のアイデンティティに関する先行研究.....	14
2.3.2 国際結婚家庭における継承語教育に関する先行研究.....	14
2.3.3 日韓国際結婚家庭を対象とした先行研究.....	16
2.3.4 日本における日韓国際結婚家庭を対象とした先行研究.....	16
2.3.5 韓国における韓日国際結婚家庭を対象とした先行研究.....	18
2.3.6 国際結婚家庭の子どものアイデンティティに関する先行研究.....	20
2.4 先行研究からみた本研究の意義.....	24
<b>第3章 研究方法と研究課題</b> .....	25
3.1 研究方法.....	25
3.2 ライフストーリー研究法.....	25
3.3 言語ポートレート.....	27
3.4 ラポールについて.....	28
3.5 研究倫理について.....	28
3.6 研究協力者の属性.....	31
3.7 研究課題.....	32

<b>第4章 日韓国際結婚家庭の変遷と現況</b> .....	33
4.1 日本における日韓国際結婚家庭の変遷.....	33
4.2 日本における日韓国際結婚家庭の現況.....	34
4.3 韓国における韓日国際結婚家庭の変遷.....	39
4.4 韓国における韓日国際結婚家庭の現況.....	41
<b>第5章 日韓国際結婚家庭のライフストーリー</b> .....	46
5.1 研究協力者の概要.....	46
5.2 日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティ.....	49
5.2.1 Aの子どものアイデンティティ.....	49
5.2.2 Bの子どものアイデンティティ.....	50
5.2.3 Dの子どものアイデンティティ.....	52
5.2.4 Gの子どものアイデンティティ.....	53
5.3 考察.....	54
5.4 日韓国際結婚家庭の母語（継承語）教育とアイデンティティ.....	56
5.4.1 A家族の事例.....	58
5.4.2 B家族の事例.....	59
5.4.3 C家族の事例.....	63
5.4.4 D家族の事例.....	63
5.4.5 E家族の事例.....	65
5.4.6 F家族の事例.....	65
5.4.7 G家族の事例.....	67
5.4.8 H家族の事例.....	68
5.4.9 I家族の事例.....	70
5.4.10 J家族の事例.....	71
5.4.11 K家族の事例.....	73
5.4.12 L家族の事例.....	75
5.5 考察.....	77
5.6 日韓国際結婚家庭の子どもの国籍と名付けについて.....	79
5.6.1 Aの子どもの事例.....	80
5.6.2 Bの子どもの事例.....	80
5.6.3 Cの子どもの事例.....	80
5.6.4 Dの子どもの事例.....	80
5.6.5 Eの子どもの事例.....	81
5.6.6 Fの子どもの事例.....	82
5.6.7 Gの子どもの事例.....	82

5.6.8	Hの子どもの事例	83
5.6.9	Iの子どもの事例	83
5.6.10	Jの子どもの事例	84
5.6.11	Kの子どもの事例	85
5.6.12	Lの子どもの事例	86
5.7	考察	86
5.8	日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ	87
5.8.1	国籍による日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ	88
5.8.1.1	Aの事例	89
5.8.1.2	Bの事例	89
5.8.1.3	Cの事例	90
5.8.1.4	Dの夫の事例	91
5.8.1.5	Eの事例	92
5.8.1.6	Fの事例	92
5.8.1.7	Gの事例	94
5.8.1.8	Hの事例	94
5.8.1.9	Iの事例	94
5.8.1.10	Jの事例	95
5.8.1.11	Kの事例	95
5.8.1.12	Lの事例	95
5.9	考察	96
5.10	名乗りによる日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ	97
5.10.1	Aの事例	97
5.10.2	Bの事例	97
5.10.3	Cの事例	98
5.10.4	Dの事例	98
5.10.5	Eの事例	98
5.10.6	Fの事例	99
5.10.7	Gの事例	99
5.10.8	Hの事例	99
5.10.9	Iの事例	99
5.10.10	Jの事例	100
5.10.11	Kの事例	100
5.10.12	Lの事例	100
5.11	考察	101
5.12	永住による日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ	101

5.12.1	Aの事例	102
5.12.2	Bの事例	102
5.12.3	Cの事例	103
5.12.4	Dの事例	104
5.12.5	Eの事例	104
5.12.6	Fの事例	105
5.12.7	Gの事例	106
5.12.8	Hの事例	106
5.12.9	Iの事例	106
5.12.10	Jの事例	107
5.12.11	Kの事例	109
5.12.12	Lの事例	109
5.13	考察	110
5.14	日韓国際結婚家庭の教育観	111
5.14.1	Aの事例	112
5.14.2	Bの事例	113
5.14.3	Cの事例	114
5.14.4	Dの事例	114
5.14.5	Eの事例	115
5.14.6	Fの事例	115
5.14.7	Gの事例	115
5.14.8	Hの事例	116
5.14.9	Iの事例	116
5.14.10	Jの事例	117
5.14.11	Kの事例	117
5.14.12	Lの事例	118
5.15	考察	118
5.16	日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティに影響を与える諸問題	119
5.17	本章のまとめ	122
<b>第6章</b>	<b>日韓国際結婚家庭における親子の言語ポートレート</b>	<b>125</b>
6.1	A家族の言語ポートレート	126
6.1.1	Aの言語ポートレート	126
6.1.2	Aの夫の言語ポートレート	127
6.1.3	Aの長女の言語ポートレート	128
6.1.4	Aの次女の言語ポートレート	129

6.2	B 家族の言語ポートレート .....	130
6.2.1	B の言語ポートレート .....	131
6.2.2	B の子どもの言語ポートレート .....	132
6.3	C の言語ポートレート .....	133
6.4	D 家族の言語ポートレート .....	134
6.4.1	D の言語ポートレート .....	134
6.4.1	D の長女の言語ポートレート .....	134
6.4.2	D の次女の言語ポートレート .....	136
6.5	E 家族の言語ポートレート .....	136
6.5.1	E の言語ポートレート .....	137
6.5.2	E の夫の言語ポートレート .....	137
6.5.3	E の子どもの言語ポートレート .....	137
6.6	F 家族の言語ポートレート .....	138
6.6.1	F の言語ポートレート .....	138
6.6.2	F の長女の言語ポートレート .....	139
6.6.3	F の次女の言語ポートレート .....	139
6.7	G 家族の言語ポートレート .....	140
6.7.1	G の言語ポートレート .....	141
6.7.2	G の妻の言語ポートレート .....	142
6.7.3	G の子どもの言語ポートレート .....	142
6.8	H 家族の言語ポートレート .....	143
6.8.1	H の言語ポートレート .....	143
6.8.2	H の妻の言語ポートレート .....	144
6.8.3	H の子どもの言語ポートレート .....	144
6.9	I 家族の言語ポートレート .....	145
6.9.1	I の言語ポートレート .....	145
6.9.2	I の妻の言語ポートレート .....	145
6.9.3	I の子どもの言語ポートレート .....	146
6.10	J 家族の言語ポートレート .....	146
6.10.1	J の言語ポートレート .....	146
6.10.2	J の妻の言語ポートレート .....	147
6.10.3	J の子どもの言語ポートレート .....	147
6.11	K 家族の言語ポートレート .....	148
6.11.1	K の言語ポートレート .....	148
6.12	L 家族の言語ポートレート .....	149
6.12.1	L の言語ポートレート .....	149

6.12.2 Lの妻の言語ポートレート .....	149
6.13 考察 .....	150
<b>第7章 結論と今後の課題 .....</b>	<b>155</b>
7.1 日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成要因 .....	155
7.2 世代別による日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ .....	161
7.3 ジェンダー(父が韓国人、母が日本人、父が日本人、母が韓国人)違いによる日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ .....	162
7.4 留学や移動の経験による日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ .....	163
7.5 結論 .....	165
7.6 今後の課題 .....	166
参考文献 .....	167
付録「研究協力者のライフストーリーインタビュー内容」 .....	173
研究協力依頼書 .....	182
研究倫理遵守に関する誓約書 .....	183
謝辞 .....	184

## 第1章 序論

本研究は、日本における日韓国際結婚家庭の親子を事例とした、アイデンティティと言語を中心に行った質的な研究である。

日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティはどのように形成されるのか。世代別、ジェンダー別、留学経験別により分析を行う。

本章ではまず、問題の所在と本研究の目的を述べる。次に、本研究における用語について定義する。最後に、本論文の構成を示す。

### 1. 問題の所在と本研究の目的

#### 1) 社会の背景

グローバル化により国境を越えた移動が日常化している現在、海外に移住する韓国人は増加し、その結果、両親もしくは片親を韓国人として海外で出生し、成長する子どもの数は増えている。2020年6月末における日本の在留外国人の数は288万5904人である。国籍・地域別では韓国43万5459人、中国78万6830人、ベトナム42万415人、フィリピン28万2023人などとなっている。資格別にみると、特別永住者30万9282人、永住者80万872人、留学28万2023人、定住者20万3847人、日本人の配偶者等14万3759人、家族滞在20万3847人などとなっている(e-Stat「都道府県別 在留資格別 在留外国人[総数]」)。日本国内の外国人の増加と同様に、国際結婚のケースも増加している。2019年の国際結婚による婚姻数は2万1457件にのぼり、婚姻全体の約3%を占めている(厚生労働省、2020)。厚生労働省の人口動態統計特集「婚姻に関する統計」(2019)によると、外国人女性と結婚した日本人男性の数は14万911人である。そして、外国人女性のうち、国籍が韓国・朝鮮となっている人の数は1,678人である。このように国際結婚による家庭が増えているにもかかわらず、国際結婚家庭の家族についての支援政策は殆ど整っておらず、トラブルの大半は家庭内の問題として考えられてきた。それに、国際結婚家庭での言語継承やアイデンティティ等を含む研究は、数が少ない上に十分に進んでいないのが現状である。国際結婚家庭では、子どもは自然に二言語を習得し、バイリンガルになると思われがちであるが、二言語と接する機会、基本的な親による言語のインプット、多大な努力などの家族・社会的環境が整わなければ二言語は習得できないのである(Yamamoto2001)。両親の言語が同じで、家庭内で一言語のみを使用するモノリンガル家庭においては、子どもと接する言語についてあまり意識されることはないが、複数の言語がかかわる国際結婚家庭においては、まず子どもに対してどちらの言語を使用するか、という言語選択という問題が生じうるのである(山本2010a)。特に、日本や韓国のように社会の大部分で一言語のみが使用されており、親同士が同じ言語を使用する家庭の場合、言語選択自体について意識されないかもしれない。しかしながら、国際結婚家庭ではまず、生まれた子どもへの言語選択が親の子育ての大きな課題の一つとして挙げられ、それは家庭・社会・親の意識など様々な要因のもとに決定されていく

と考えられる。

## 2) 個人的な経験から

ライフストーリー・インタビューは、調査者と調査協力者の相互行為によって紡がれるライフストーリーを研究の対象としている(桜井 2002)。そこで、筆者も本研究を始めるに至って、自分自身のライフストーリーを語ることで、本研究の問題の所在を明らかにしたい。筆者は 20 代の前半に留学のために日本へ単身で渡った。専攻としては日本文学、言語教育を専門とした。大学院卒業後、高校で韓国語を教えた契機で大学や文化センターなどで韓国語教育に携わってきた。傍ら日本人男性と家庭を築き、子どもを育ててきた。日本の文化や言語についてはある程度自信はあったものの、国際結婚を通して見えるカルチャーショックは大きかった。国際結婚をすることにより、夫の国である日本のしきたりや文化に合わせないといけなかった。留学経験を生かして生活はしてきたものの、日本に永住する外国人として生活する定住者として振舞わないといけない部分も多かった。特に、子育てをする時の夫との衝突と葛藤は大きい価値観の対立でもあった。育児を上手にするために仕事をしながら、修士課程で「児童家族」というコースまで修了していたが、現実には国際結婚という両国の文化と言語の問題が存在していた。子どもに韓国語を受け継がせるために就学前には韓国の絵本を毎日読み聞かせていた。子どもが小学生になってからは韓国語のハングル(文字)を書かせた。また、ハングルの動画などを見せながら学習に取り組ませた。しかし、子どもはある時から反発してきた。「韓国語」をやりたくないということで筆者と子どもの対立が始まった。仕方なく韓国語を学ぶのを一時中止することにした。取り敢えず、子どもの興味分野である歴史、社会、スポーツなどの話題に取組み、家族の会話の中に韓国的な要素を取り入れるようにした。また、子どもの学校給食のメニューの中には韓国の食べ物が結構入っていたので、子どもと韓国の食事についても直接作って食べてもらう機会を増やした。しかし、継承語である韓国語は家庭内では短いセンテンスや語彙だけ使うことに留まり、子どもとのコミュニケーションは、8割以上は日本語になってしまった。葛藤しながら、育児に取り組んでいる私は自分のアイデンティティの揺らぎを感じ始めていた。韓国的なアイデンティティを出すべきか、日本で経験し培ってきた日本的なアイデンティティを出すべきかで大変迷う時期でもあった。同じく日韓国際結婚家庭の親と子どもはどのように生活し、どのように子育てをしているのかと疑問を持ち始めた頃、大学の韓国語の授業で自分は日韓国際結婚家庭の子どもであるという学生と出会った。その学生をインタビューし、その次学生と母親(A)をインタビューした。Aの家族のライフストーリー・インタビューが本研究を始めた直接の契機でもあった。同時に、同じ悩みを抱えている日韓国際結婚家庭の親子を支援するためにボランティア団体を立ち上げた。主な活動の内容は、韓国語の絵本の読み聞かせを通しての継承語教育であった。

私自身を含め、留学経験を持ち、移動を経て異言語異文化能力を身につけた人間が親になった時、異文化異言語の境界線上で育児をするだろう。日韓国際結婚家庭の親は韓国語に対

してどのような意味付けをしているのか。二つの文化が常に混在している日韓国際結婚家庭の親自身と子どものアイデンティティはどのように形成されるのか。

以上の状況を踏まえて、本研究では日韓国際結婚家庭のライフストーリーと言語ポートレートを通して、その生活全般に関わる実態を新たな視点から考察する。さらに、日韓国際結婚家庭の言語継承とアイデンティティはどのように構築されているのか、ライフストーリーを通して明確にし、国際結婚家庭という環境に生きる家族の主観的意味世界を探求する。国際結婚家庭を理解し、支援するためにもその家庭における親と子どものアイデンティティの実態を把握することは大変有意義なことだと考える。

## 1.2 用語の定義

### 1) 国際結婚

嘉本(2001)は、日本での国際結婚とは日本人と外国人の婚姻を示し、その境界は「日本人」という国籍であると指摘した。日本での国際結婚が成立する前提条件として「第一、国内外において社会的に認められた婚姻制度であること。第二、婚姻前において近代国民国家日本の国籍を保有する者と外国籍を保有するものとの婚姻であること」を挙げている。また、西洋での規範は、民族、人種、文化、宗教、階級、国籍等が異なる男女間の結婚形態は包括的に「インターマリッジ(inter-marriage)」と呼ばれる。その下位形態の一つで、異なる文化背景をもつ者間の結婚が「異文化間結婚(intercultural marriage)」であり、日本ではさまざまな結婚形態を区別することなしに、国籍等の違う者同士の結婚を一般的に「国際結婚(international marriage)」と言い、日本人と日本人以外の結婚を指す(鈴木 2012 : 1)。本研究では、基本的に日本で広く普及している「国際結婚」の概念を用いるが、場合によっては「異文化間結婚(intercultural marriage)」を使用することもある。

### 2) モビリティ

社会学者アーリ(2015, Urry2007)は、現代社会を「移動性」の視点から分析することを提唱している。移動をめぐる社会科学全体を捉え直そうとした「移動論的転回」(mobility turn: Urry,2007)論が示しているように、「カルチュラル・スタディーズ、フェミニズム、地理学、移民研究、政治学、科学研究、社会学、交通研究、観光学などからの貢献によって少しずつ変容し」(2015 : 16)、さらには物理化学や文学・歴史研究ともつながり、現代社会についての研究成果が各分野で現れている。人間生活が「静止」「定住」「単一」というよりは、「動態」「移動」「複合」の生活世界である、という捉え方である。また、言語やアイデンティティの研究にも新しい視点と捉え方が提起されている。言語をもはや静的かつ固定的なものではなく、動態性や複合性のあるものとして捉えるパラダイム・シフトが主張され、ことばやコミュニケーションのあり様に捉え直しが求められている(Pennycook & Otsuji,2015)。言い換えれば、「流動的なプロセスこそ、ことばの本質」であり、「ことばにおける移動」は常に起こっているという主張である。また、人のアイデンティティも同様に

変容し続け、複合するものという視点が提起され、他者との多様な関係性から交渉され、グローバル化の中で多くの人々が国境を越え移動し、帰属する社会や国が固定されない状況が拡大するにつれ、人生を通じて形作られ変容していくという捉え方が次第に説得力を増してきている（三宅、2016:102）。

本研究では「移動可能性」という側面に注目し、結婚による文化間移動が生じる際に、当事者の物理的移動、社会的移動、および家族関係の維持にもたらされる試練と機会を究明する。留学の経験がある人々の国境を越える移動は、動態的に追跡することが重要であるため、移動から生まれる新たな可能性と変化を解明することは、モビリティの定義を補完するために有益であると考えられる。

### 3) アイデンティティ

エリクソン(1959)は、「自我アイデンティティの感覚とは、内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力が他者に対する自己の意味の普遍性と連続性とに合致する経験から生まれた自身のことである」（エリクソン、1973：112）と述べている。すなわち、アイデンティティ問題は、歴史的な文脈や社会・文化的文脈のなかで考慮しなければならないし、アイデンティティの感覚には、「自身(confidence)」が関係している。しかし河井(2013)は、「ポストモダン社会においては、人の移動が多く、アイデンティティ形成に強い影響を与える力や場が失われつつあり、アイデンティティ形成の領域が多領域化している。アイデンティティ形成を支える価値が様々で、社会的文脈が断片化している」と指摘し、エリクソンのアイデンティティ理論を、「人間に本来備わるアイデンティティが文脈を越えて首尾一貫性を持って人生のバランスを約束する」という概念として把握した上で、断片化と首尾一貫性のなさを特徴とした点を批判した。

ホール(1998)は、アイデンティティを「すでに達成され、さらに新たな文化的実践が表象する事実として考えるのではなく、そのかわりに、決して完成されたものではなく、常に過程にあり、表象の外部ではなく内部で構築される『生産物』として考えなければならない」としている。また、ホールがアイデンティティ形成の主題について述べた、「あるもの」というだけでなく「なるもの」としてのアイデンティティ、あるいは「記憶や幻想、語りや神話を通じて構築されるアイデンティフィケーションの地点という「位置化(positioning)」概念は大変重要である」と考える。

Norton(2000)は、社会言語学的観点からアイデンティティを個人が社会との関りをどのように理解しているかについて述べ、それは時間と空間を乗り越えて変化し続けるものであるとした。小野原(2004)は、多言語話者のアイデンティティを考察し、それには個人が「中心」と「周辺」を自由に移動できる存在であることを意識し、「中心」と「周辺」を個人の意志によって選択することが重要であると指摘し、また細川(2009：35)は、アイデンティティを「『自分とは何か』『自分とはだれか』という問題を考え続ける過程で形成される行為者の自分自身に対する答え」とし、人間形成の支援であると議論を展開した(細川、

2011a : 23)。一方、川上(2010 : 212)は多言語に触れながら育った大人へのインタビューから、アイデンティティを「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」と定義している。空間を移動し、複数の言語と文化に身を置く人々は、常に自分の位置や周囲との関係を確認し、自らの置かれた状況にふさわしい言語や文化的規範を選択し使用しながら「ありたい自分」を表出していると考えられる。

本研究では、これらの定義を前提に、アイデンティティを「自分の認識と他者との認識をふまえて形成および再構築される、個人が選択・決定する自己に対する可変的な認識」と定義する。

バイリンガルの方は、多様な言語を通して様々な環境において自分の言語的アイデンティティを交渉しながら、多様な言語的アイデンティティを構築していく (Block, 2007 : 13)。言語は、個人や他者によるアイデンティティの解釈を左右する重要な源である (Warschauer, 2000)。さらに、言語はアイデンティティの構築の土台でありながら、アイデンティティ衝突や紛争、交渉と妥協の主な場である (Crawshaw et al, 2001)。

Block の考えでは、言語的アイデンティティは、言語知識 (流暢性)、所属 (個人的アイデンティティ及び民族的アイデンティティ) と継承権 (遺産) からなるという。また、言語知識はアイデンティティに影響を与える、言語自体に関わるすべての側面であると言う。ここでは、言語で話す力、理解する力、読み書きをする力や考える力とともに、文法に関する知識や発音なども関わるといえる。所属は、様々なコミュニティへの所属とともに国籍を意味する。そして継承権は、拡大家族を通して個人が感じる言語と文化の関係性であると言う。この関係性を分析する場合、個人にとって意味を持つ文化的人工物 (cultural artifacts) に触れる必要がある (Leung et al, 1997)。文化的人工物は、継承文化に伝える物及び象徴であり、個人にとって意味を持つ物である。文化的人工物の例は、食器やおもちゃをはじめ、子どもの遊び、行事の祝い方など多岐にわたる。

三宅(2016 : 102)は、社会言語学視点から「新たなパラダイムでは、アイデンティティはダイナミックで文脈依存的なものとして捉えられ、固定的なものではなく、行動や実践やコミュニケーションの中で形作られていくものとして扱われる」と指摘し、アイデンティティは交渉可能であり、人生を通じて形作られて変容していくものであるという考えは、グローバル化の中で多くの方が国境を越え移動し、帰属する社会や国が固定されない状況が拡大するにつれ、次第に説得力を増してきていると述べている。三宅(2021 : 12)は、「トライリンガル」や「クワドリンガル<sup>1</sup>」など様々な新しい用語が出ている中で、複言語主義もこの流れの一つであると述べている。即ち、新たなパラダイム・シフトによって言語使用というものが変化し、アイデンティティにも影響していることを指摘している。

そのほか、岩崎 (2018) は「個々人は自分の所属する民族や国家などの文化的グループに

---

<sup>1</sup> 柳瀬(2018 : 9)はグローバル化の流れの中で生じた構造的変化に着目した新しい概念で、アメリカの移民研究において提唱されたものである。

基づいて安定した本質的核を持つという従来の捉え方とことなり、アイデンティティは多様で動態的かつ流動的で矛盾をも内容すると考えられている」と述べている。

以上のように、近年のアイデンティティの見方は様々であり、より広く多角的な観点から探る必要性が増している。

#### 4) 文化的アイデンティティ

箕浦(1984:246)は、「文化的アイデンティティとは、国籍がどこであれ、日本人であるとかアメリカ人であるとかいうことからくる深い感情、ライフ・スタイル、立ち居振る舞い、興味や好みや考え方を全部ひっくるめたもの」であるとし、また鈴木(2008:33)は、「自分がある文化に所属しているという感覚・意識」(文化的帰属感・貴族意識)、あるいは「ある文化・社会のなかに自分の居場所があるという感覚・意識」としている。一方、Tajfel(1978)は「社会的アイデンティティ」の一側面として、Hall(1990)は「位置取り」の過程として文化的アイデンティティをとらえている。

多文化環境で成長する国際児にとって、文化的アイデンティティの形成は中核的な課題(問題)であり、「自分についての総合的・統合的な意識」であるアイデンティティの形成と深くかかわっていると考えられる。

本研究ではまた、文化間を移動し留学の経験を持ち、日韓国際結婚家庭を築いている親の成人期におけるアイデンティティはどう発達し変化するのかを考察する。岡本(1994)は、成人期において、アイデンティティは危機と再体制化(再統合)の繰り返しによって、より高いレベルに発達していくことが明らかになっていると指摘している。

本研究では、前述の定義を参考にし、文化的アイデンティティをアイデンティティの一側面であり、「国籍がどこであれ、生活様式、考え方、利害、生活上身近な関心や問題、深い感情を基礎として、自分がある文化・社会に帰属し、その文化・社会のなかに自分の居場所がある感覚・意識」と定義する。

#### 5) 国際結婚家庭における子どものラベル

関口(2003)は、ハーフ(Half)を現在最も一般的に使用されている呼称として、否定的・感情的含みを内在する使い古しの日本語の呼称を避け、1960年代から活躍し始めた「白人系混血」のタレントを指すトレンド的な名ベルとして、英語“half”を語源とする「ハーフ」が使われるようになったが、「半分日本人、半分外国人」といった半人前のニュアンスがあるため、これも要注意放送用語に含まれ、「混血児」または「混血」への言い換えが奨励されていると指摘している。しかし今日、特に若者の間では、英語の語源に含まれる「半分日本人」という否定的意味は意識されず、ハーフのタレントの「カワイイ・カッコいい」「バイリンガル」といったイメージが「ハーフ」ラベルの典型的なステレオタイプとなっている。

関口(2003)は、国際児(intercultural children)をこれまでのネガティブな含みを残すラベルに代わって、異人種/異民族間結婚の子どもたちを形容する新しいポジティブな呼称と

して、国際児童年である 1979 年にそれを提起した。しかし、「人種の異なる者同士の婚姻によって、両方の特色が混じって生まれた児童」(日本弁護士連合会)と定義され、自覚的な親やジャーナリストの間で使用されてはいるものの、社会で一般的に広く認められている呼称とはまだいえない。鈴木(2004)は、「国際児 (intercultural children)」は、「国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子ども」を指すものとし、たとえば日本人女性とアメリカ人男性、日本人男性とフィリピン人女性、韓国人男性とドイツ人女性の間生まれた子どもなどがそうである。

## 6) 継承語

国際結婚家庭での言語使用を考えると、まず「母語」とは何かという問題を考えなければならない。なぜなら、「母語」という言葉の定義は1つではないからである。Skutnabb-Kangas(1988)は、母語を4つの面から定義している。一つ目は出自、最初に習得された言語、二つ目は運用能力、最も熟知している言語、三つ目は機能、最も頻繁に使う言語、四つ目はアイデンティティ、自分または他人が母語と見なしている言語、だと言う。しかし、国際結婚家庭に生まれた子どもの言語環境を考える場合、その定義には揺れが生じる。「日韓国際結婚家庭の子ども」を例にすると、最初に習得される言語は母親が話す日本語であるが、学齢期になって現地の学校に通い始めると、現地の言葉、つまり日本語の方が優勢な言葉になる。この場合、一つ目の定義に当てはめると韓国語が母語になるが、二つ目や三つ目の面では日本語が母語になり、一義的な定義ができない。

一方、多言語環境に育つ子どもたちの言語教育を研究する中島は、母語を「初めてのことば」「土台になることば」とし、母語が人間形成に重要な役割を担っており、その子どものルーツになると述べている(中島 2016)<sup>2</sup>。一般的に「母語教育」と呼ぶとき、この出自が共通した基準になっており、「家庭で最初に親を通して学んだことばの教育」のことを指している。

継承語について、中島(2016)は次のように説明している。

「子どもは、幼少のころは親の言語を自分の母語として育つが、学校に上がり、社会の成員になる過程において、現地語がいちばん強いことばであり、自信のあることば、同世代の仲間のことばになっていく。かと言って親のことばが外国語になってしまうかというところではない。(中略)こういうことばを外国語と呼ぶわけにはいかないし、かといって母語と呼ぶわけにはいかない。したがって、このことばは親から受け継いだ「継承語」と呼んで区別する必要がある。」<sup>3</sup>

中島(2005b) はまた、「継承語」と呼ぶことで、保護者や教育者の努力によって「意識的に」継承させなければならないということを強調している。本研究ではこの立場に沿って、「日韓国際結婚家庭子ども」が使う韓国語を「継承韓国語」、その教育を「継承韓国語教育」

<sup>2</sup> 中島和子(2016)『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』アルク, p.20

<sup>3</sup> 中島和子(2016)『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』アルク, pp.151-152

として、論を進める。ただし、文献で「母語教育」が用いられている場合はそのまま使用する。

### 3. 論文の構成

本研究は大きく7章から構成されている。

第1章の序論では問題の所在、研究目的、用語の定義、本論文の構成について述べる。

第2章では、理論的枠組と先行研究について述べる。先行研究については、日韓国際結婚家庭の親と子どもを巡る視点から概観し、その問題点を述べる。

第3章では研究方法を詳細に記述し、研究課題を設定する。

第4章では、日本における日韓国際結婚家庭の変遷と現状、および韓国における韓日国際結婚家庭の変遷と現状を比較し、考察する。

第5章では、日韓国際結婚家庭の親子のライフストーリー・インタビュー調査を通じて、個人の事例から日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティがどのように形成されるかについての結果をまとめる。

第6章では、日韓国際結婚家庭の親子の言語とアイデンティティの関係を言語ポートレートで描きだし、考察する。

第7章の結論では、研究内容を総括し、今後の課題について述べる。

## 第2章 理論的枠組みと先行研究

本章では、本研究の理論的枠組みと先行研究について述べる。まず、「移動する子ども」概念について述べる。二重言語の言語使用とアイデンティティとの関係を見るためにアイデンティティ概念を用いる。

### 2.1 「移動する子ども」の概念

「今、ここ」の日常的移動の横軸と、「あの時そしてこれから」という過去と未来を繋ぐ個人史的移動の横軸を持つ(図1)。幼少期から複数言語環境で成長する人の生を捉え、理解するには、このような分解概念としての「移動する子ども」が有効であると考えられる。その視座はどのようになるのか。

川上(2011)は、子どもは「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」を日常的に移動した(する)体験を持ち、それらの体験が、自分にとって意味のある経験としての「自伝的記憶」「展望的記憶」となり、「言語自己感」を形成していくと考えられると述べている。その過程で、他者や社会との相互作用の関係性から生まれる、主観的かつ動的な「移動とことば」に関する記憶が変化しつつ、アイデンティティを構築していくことになる。つまり、これらの子どものアイデンティティの構築に、子ども自身が自らの「移動とことば」に関して、主観的に意味づける経験と記憶が大きな役割を果たすと考えられる。その経験と記憶を、川上(2013)は「移動する子ども」と呼んでいる。

川上によると、「移動する子ども」とは目の前の生きている子ども(実態概念)ではなく、幼少期より複数言語環境で成長したという子ども自身の経験と記憶を中心とした分析概念である。その分析概念は、「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」の移動経験の貯蔵庫が3つあり、それらが相互に影響しつつ重なり、記憶が形成されていく、また、「今、ここ」の日常的移動の横軸と、「あの時そしてこれから」という過去と未来を繋ぐ個人史的移動の横軸を持つ(図1)。幼少期から複数言語環境で成長する人の生を捉え、理解するには、このような分解概念としての「移動する子ども」が有効であると川上は述べる。

川上は「移動する子ども」学の対象は、目の前の子どもだけを考察の対象とせず、居住地がどこであれ、複数言語環境で生活する子ども、学生、大人、障がい者、高齢者など、すべての人々を含むと述べた。川上の「移動する子ども」に連なる研究群には、親の立場から「移動する子ども」の親の視点に立つ研究も包括される。本研究においても、川上が定義付けした「移動する子ども」概念を援用する。

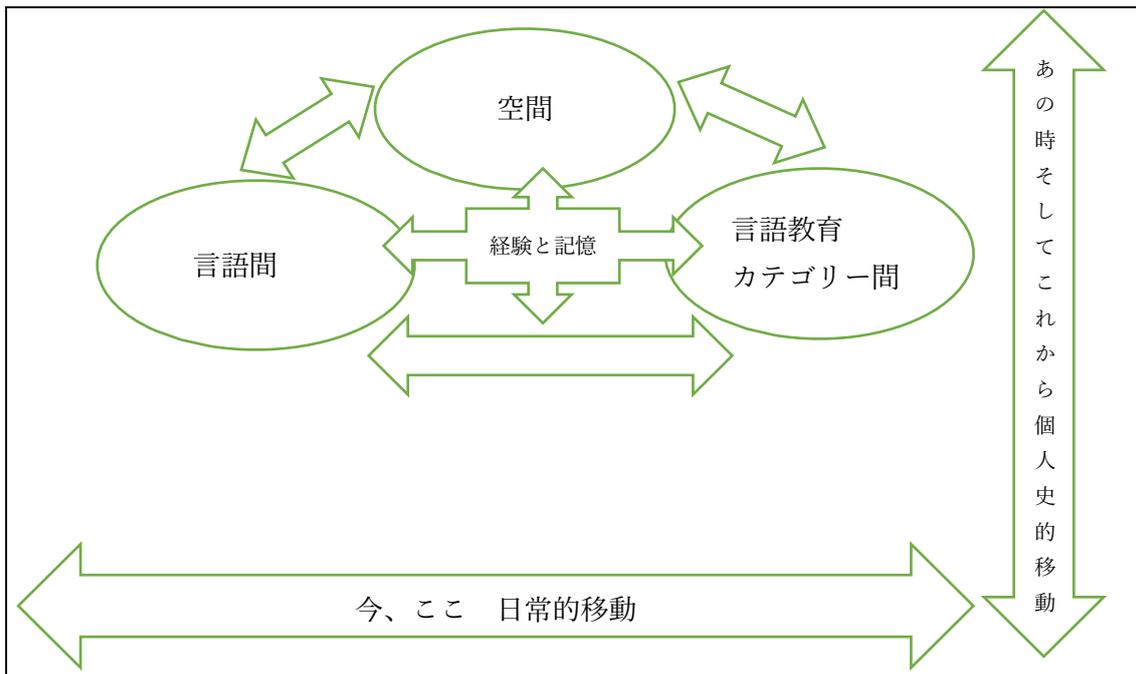


図1「移動する子ども」の分析概念（川上 2011）

## 2.2 アイデンティティの概念

ポスト構造主義的・社会構成主義の立場によれば、アイデンティティは確固とした不変なものとしての個人がもっているのではなく、動的かつ共同的過程(岩崎、2018)の中で形づくられていくものである。コミュニケーションの中で、話者の位置どりによって、その場で形づくられ交渉されるものとしてのアイデンティティは、「移動する人」にとって絶えず大きなゆらぎを内包している。

アイデンティティは、多様で動的かつ流動的で矛盾をも内容すると考えられている。Hall(1990;1996)は、文化的アイデンティティは常に生産過程であり変容を続けると捉える。したがって、アイデンティティの自己意識は伝統への帰還ではなく伝統の創造であり、「ルーツ(roots)へ戻る」というより「経路(routes)を受けとめる」ことである。

川上(2010a:212)は、アイデンティティを「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」と定義し、その意識を「他者からのまなざし」(川上、2010b:18)が影響を与えていることを述べている。また、川上(2011)は「移動する子ども」という分析概念を提唱し、空間、言語間、言語教育カテゴリー間を移動する中で、多様な人々に多様な言語で接触した経験と、自分が持っている複数の言語についての意識の二つが、移動する子どもたちのアイデンティティの形成に影響を与えると論じている(川上編、2010;2013)。

留学経験を持つ日韓国際結婚家庭の親は、留学とワーキングホリデーという移動を通してアイデンティティの再確認や交渉の契機となり得る。さらに、二つの文化と言語が飛び交う国際結婚家庭で養育されている子どものアイデンティティは、鈴木(2014:16)が報告しているように「父親の文化と母親の文化という二つの文化(国)を融合(統合)した、自己肯

定的なアイデンティティ」自然な「国際児としてのアイデンティティ」である。鈴木はまた、文化についての知識や理解は、文化的アイデンティティと強い関係があるが、言語との関係は明確ではないと述べている。

岩崎(2018)は、母親が日本人で父親が英国人の自称「ハーフ」のハナさんを留学前、留学中、留学後に分け、アイデンティティを動的な捉えようとした。留学がもたらすアイデンティティの変容を言語ポートレートと語りによって調査し、アイデンティティの変容を明らかにしたのである。ハナ(仮名)さんの事例からは、ある個人にとっての留学の意味やアイデンティティ形成を知るには、留学前のライフストーリーを含むさまざまな常態的な移動の経験と記憶の積み重ねも考慮し、探求する必要があることが明らかになった。また岩崎(2021)は、2015年から4年間のHazel(仮名)の言語ポートレートとその語り、インタビューを通して、2回の留学を含むモビリティによる「ことばの生きられた経験」がもたらした言語レパトリーとアイデンティティの変容を探った。Hazelの言語アイデンティティの変化は、学習者から使用者アイデンティティへの変容でもあり、成人アイデンティティへの移行とも重なっている。

なお、岩崎(2022)は、ことばの学習と移動の経験が豊富なスロバキア出身のDenisa(仮名)の言語ポートレートと語りを通して、Denisaが捉えた周囲の言説と、それに応じて身体化された情意、そして、進学・キャリア形成などを含む6年間の移動の軌跡に伴う言語レパトリーの変容を論じた。さらに、ことばの学習や使用に関わるイデオロギーがどのように言語レパトリーに影響したのかを明らかにし、ことばの学習と使用について考えた。ことばの経験についての語りおよび言語ポートレートから、言語レパトリーの変容を探り、ことばの学習と使用について考えた。

### 2.3 先行研究

国際結婚のさまざまな側面については、文化人留学、社会学、心理学、精神医学などの領域で研究されてきた(Berger & Hill, 1987; 嘉本 2001; 桑本 1995; 鈴木 2000; 竹下 2000)。日本における国際結婚の増加とともに、近年では日本人がかかわる国際結婚の研究も増えつつあるが(花井 2016; 佐竹・金 2017; 鈴木 2012)、その研究成果の蓄積は十分とは言えない。国際結婚者の異文化適応やアイデンティティに焦点を当てた研究が多いなか、異文化交流という視点から国際結婚を捉えると考えられる研究には、小林(1992)、矢吹(1997、1998)などが挙げられる。

小林(1992)は、日本人とドイツ人との結婚において、夫婦の調整課題として出現する項目(居住地の選択、夫婦の共通の言語、食事の習慣など)に関して、一方的調整、能率的調整、混合的調整等の調整パターンに着目し、調整過程の分析を行い、調整の際の言語化の重要度について言及している。矢吹(1997、1998)は、日本在住で米国人の夫をもつ日本人女性を対象に調査を実施し、日米夫婦間に違いが見られる調整課題である子育て観・子育ての方法や性役割観が夫婦間でどのように調整されていくかに焦点をあてている。Fontaine(1990)は、

異文化間結婚を成功させるための要因として、文化背景の異なる配偶者が受け継いだ文化認識すること、およびお互いの関わりの際に文化を一致させることを挙げている。

鈴木(2014:16)は、父親と母親の出身の違う子どもたちを「国際児」と呼び、「父親の文化と母親の文化という二つの文化(国)を融合(統合)した、自己肯定的なアイデンティティ」が自然な「国際児としてのアイデンティティ」であるとし、母親が日本人で父親がドイツ人のドイツ在住の10代前後から30代前半の女性10名にインタビューを行い、二言語・二文化の知識と文化的アイデンティティの関係を調査した。その結果、半数は両文化への帰属感があったが、4名はドイツ優位、1名は日本優位であった。文化に関する知識や理解は、文化的アイデンティティと強い関係があったものの、言語との関係は明確ではなかったと報告している。

日本における日本人との国際結婚家庭の子どもの文化的アイデンティティに関する研究については、鈴木(2004, 2008b)が代表的である。鈴木(2004)は、国際結婚家庭の子どもの「国際児」と呼び、彼らは二つの文化が混在している国際児としてのアイデンティティであり、そのアイデンティティを形成するためには両言語と両文化に対する知識を習得することと国際児をポジティブ的に受け入れる環境が必要だと言及している。鈴木(2019)によると、国際結婚の親(日系一世)から日系国際児(日系二世)への言語・文化継承(習得)にかかわる主な要因として、①「居住国(地)」②「親自身の志向性」③「子どもの言語、文化2、教育についての親の考え方(姿勢)④「家庭の言語・文化(の選択)」と⑤「保育園・幼稚園・学校選択」と⑥「家庭環境」⑦「子どもの個性と発達(年齢)」の7つを挙げ、国際家族における子どもへの言語・文化継承のメカニズムを提示した。すなわち、①ホスト国の言語・文化が優位ななか、②「親の志向性」は、③「子どもの言語、文化、教育についての考え方」と密接に関連しながら、④「家庭の言語・文化」や⑤「学校選択」に影響を及ぼし、⑥家庭の経済状況等とともに、言語・文化の継承に大きく関与する。さらに、上記の③「子どもの言語、文化、教育についての考え方」、④「家庭の言語・文化」、⑤「学校選択」は⑦「子どもの個性や発達」と相互に影響し合い、国際児への言語・文化の継承(習得)が進行する。その際に、時間の経過により①「居住地」の社会的・文化的・経済的状況、②「親自身の志向性」③「言語、文化、教育dについての親の考え方」、⑥「家庭の経済状態」なども変化していくが、それらは、言語・文化を含む子供の発達全般に影響を及ぼしている」と鈴木は指摘している。

竹田(2005)は、海外に居住する国際結婚家庭の98名(子ども33名、父母59名)を対象に彼らの二つの文化の社会化とアイデンティティ形成過程を調査した。その結果、父母の出身国の文化伝達がどのように継承されていたのかが大きく異なった。父母の積極的な文化教育が子どものポジティブなアイデンティティ形成に影響を与えており、一つの文化に重点を置き、もう一つの文化を抑圧する社会化方式はポジティブな影響を与えない。さらに、地域社会で受ける差別的なメッセージはアイデンティティ形成に否定的な影響を与えるより、むしろ自身を発展する力として作用されるとしている。

石井(2012)は、日本に居住するアメリカと日本の国際結婚家庭の子ども 19 名の学校、地域社会での経験と文化的アイデンティティ形成について研究した。彼らは「相手によってアイデンティティが異なってくる」、「自らどこの国の人であるのか混乱」、「英語が話せるがアメリカ人は自分を日本人として見る」等のアイデンティティクライシスを経験していた。また、新たな友達（同じ境遇にいる知人）との出会い、就職・結婚等の人生の転換点、自らのルーツを探し求める行為などを通して、アイデンティティへの混乱を克服し自らのアイデンティティを新たに構築していることを明らかにしている。

鄭(2013)は、日本に居住する日韓国際結婚家庭の子ども 3 人を対象にアイデンティティ形成と家庭、学校での経験を通して自らのカテゴリー化を調査した。研究対象者のアイデンティティは、日本人か韓国人と日本人の間に迷っている場合もあった。言語を通して、母親が韓国人であることを認識し授業参観で韓国人の母親の紹介することにより自分の二重文化的アイデンティティを意識することが多かった。また、韓流の影響で日本国内でも韓国に対する認識変化が起こり、韓国語学習や韓国文化の接触を通じて韓国に関心を持つようになった。研究対象者は国家制度の枠、帰属意識、文化接触の頻度等個人の経験を尊重し学校や友達関係の中でもアイデンティティを形成していた。

日本人との国際結婚家庭の子どもの文化的アイデンティティ研究で明らかになった文化的アイデンティティ形成要因及び関連要素をまとめると次の「表 2-3」になる。

表 2-3 「日本人との国際結婚家庭子どもの文化的アイデンティティ形成の要因及び関連要素」

研究者	年	研究協力者	文化的アイデンティティの形成要因、関連要素
鈴木	2004 , 2008 b	国際結婚家庭子ども	① 居住地②父母の出身国家組み合わせ③日本人父母の性別④外見的特徴⑤家庭環境⑥学校環境の選択
竹田	2008	海外で居住する日本人との国際結婚家庭	父母の出身国家の文化教育、二つの文化共生、差別的メッセージのアイデンティティ形成にマイナスの影響を与えない
石井	2012	日本に居住する日米国際結婚家庭の子ども	相手によってアイデンティティが変わる。言語、友達、共通の話題、人生の転換点、アイデンティティの探求
鄭バロナ	2013	日本に居住する日韓国際結婚家庭の子ども	授業参観、文化接続の頻度、羨ましがらる環境、父母の国籍、名前、友達との関係、言語能力
竹内	2016	韓国に居住する日韓国際結婚家庭の子ども	周辺の人々(父母、友達)、国籍、日本人の友達有無、名前、アイデンティティの変化

一方、韓国に居住する国際結婚家庭の子どものアイデンティティに関する研究は最近に

なって増加しつつある。国際結婚家庭の子どもの中で青少年の学生が増えることにより、調査が可能であり研究の必要性が求められている。

外国人父母の出身国に焦点を当てた研究には牧野(2011)がある。この研究は、韓国に居住する韓日国際結婚家庭の中で母親が日本人である高校生、大学生の文化的アイデンティティを調査したものである。彼らの文化的アイデンティティは、韓国人(4名)と韓国人と日本人を統合した(6名)の二つの類型に分けている。また文化的アイデンティティの形成に影響を与える要因としては「母親の継承語教育」、「幼児期から日本語と韓国語を併用」、「日本人コミュニティで友達との交流」、「友達との態度」、「母親の出身国に関する愛着」であった。この研究は、韓国にいる韓日国際結婚家庭の子どもの文化的アイデンティティに関するはじめての研究として意義がある。しかし、一部の地域における10名だけの研究対象では、それを一般化するには無理がある。

### 2.3.1 国際結婚家庭における親子のアイデンティティに関する先行研究

박선영(2019)は、ベトナム結婚移住女性の物語のアイデンティティを自己ライフストーリーである手記を通して明らかにした。結婚移住女性の物語のアイデンティティに影響を与える要因としては自己認識と韓国語能力、個人的・社会的支援及び社会的テーマ、経済活動及び子どもの世話などがあることを明らかにした。特に言語能力、なかでも韓国語能力は結婚移住女性のライフに影響を与える重要な要因として、各状況に合う多様な形態の韓国語教育と学習者に合わせた韓国語教育内容が移住女性の個人的・社会的支持の役割を担う可能性があるとして述べた。そして、物語のアイデンティティの研究結果、移住理論の中で行為性(agency)接近方法がベトナムの結婚移住女性達の移住であることが分かった。また、韓国・ベトナム多文化家族の相互文化教育の必要性とベトナムの結婚移住女性が結婚移住女性に対する連帯意識と結ばれ彼女らに対する支持役割を自任していることを明らかにしたことに意義がある。

박갑룡(2014)の研究は、結婚移民女性の子供に焦点を当てている。文献研究、アンケート調査、インタビューなどの調査方法を用いて、結婚移民女性の子どもの自己アイデンティティと民族及び国家アイデンティティの相関関係を分析し、これに基づき、韓国国民としての役割を高めるための示唆を提案した。

### 2.3.2 国際結婚家庭における継承語教育に関する先行研究

社会的少数集団に属するマイノリティーの子どもの母語や言語教育についてはユネスコにおいても、2000年から毎年2月に国際母語デー(International Mother Language Day)が開催され、母語による教育が支持されている。中島(2005)は継承語教育について「外国語教育が贅沢品であるとするならば、継承語教育は必需品である」<sup>4</sup>と述べている。中島(2016)

---

<sup>4</sup> 中島(2005:170)「カナダの継承語教育その後—本書の解説にかえて」『カナダの継承語教育—多文化・多言語主義を

はまた、母語を子どもが出合う「初めてのことば」、「土台になることば」という意味で使用しており、継承語については「現地語のプレッシャーで十分に伸びない」、「家や民族コミュニティでしか通じない」という特徴を持つと指摘する。また高橋(2020)は、継承語を「現地語である日本語能力のほうが高くなったために、たとえそれが最初に学んだ言語であっても意思疎通が難しく、文化とともに継承していくべき言語」と定義し、論を進めている。これらの議論からは、現地語ほど伸びなかった親の言語を継承語として捉えていることが分かる。

真嶋(2009)・庄司(2017)・高橋(2020)は、継承語教育の意義は大きいと述べている。継承語教育とは言語や文化を保持・継承する、家族とのコミュニケーションを維持する、認知力が身に付き、母語習得も促進される、アイデンティティを形成する、児童生徒の異文化・他言語理解につながる、国際社会に貢献できる社会的、個人的「資源」となる。

その教育的意義は大きいにもかかわらず、「日韓/韓日国際結婚家庭の子女」のような子どもは社会の周縁的な立場であるため、継承語教育はその用語だけでなく意義も一般的に認められるところまではいっていない。その要因の一つは、現地語で社会生活を営んでいる子どもたちに対し、なぜ継承語教育が必要なかがあまり議論されていないからではないだろうか。そのため、その必要性についての認識が、個人においても社会においても形成されていないと思われる。このような現状を踏まえ、以下ではまず母語・継承語教育の必要性や意義について先行研究から確認する。

継承語教育の意義や必要性が徐々に認識されるにつれ、韓国において日韓国際結婚家庭やその子どもたちを対象にした継承日本語関連の研究が始まった。それらの研究は管見の限りそれほど多くはないが、花井(2012)、高橋(2010)、曷(2014)、竹口(2011)、青木・尾関(2013)、卒(2014)が挙げられる。

花井(2012)は、ソウル・京畿道地域に住む日本人の母親 105 名を対象に日本語継承に対する意識調査を行い、韓国社会における日本語への評価の高さ、日本語教育に対する親の積極性、在留外国人への政策支援、母親の日本人コミュニティへの積極性を継承要因として挙げている。次に、高橋(2010)は韓日国際結婚家庭の親と子ども 65 名を対象にアンケート調査を行い、言語生活状況や親の態度について調査した。その結果、96.9%の親が日本語継承を望んではいるが、64.6%は特別な日本語教育は受けず、家庭での会話やテレビなどを通して日本語習得が行われていることが明らかにしている。次に、曷(2014)と竹口(2011)は、それぞれ日本人の母親 7 名と日本人の父親 4 名にインタビュー調査を行い、日本語継承に与える要因を分析した。その結果、日本人の母親による自然な形での日本語使用、家族の配慮、経済的支援、夫婦間の教育観の一致などが子どもの日本語継承に影響を与えることを述べた。青木・尾関(2013)は 4 名の親へのインタビュー調査により、日本語継承には親の意識や言語環境だけでなく、子ども自身の日本や日本語への考えや帰属感も影響していると論じ

た。また予 (2014)は、韓国の幼稚園・小学校・中学校に通う 38 名の子ども(26 家庭)の母親を対象にアンケート調査を行い、子どもたちの二言語能力と言語使用の実態を調査した。

これらの研究からは、継承語の習得には社会環境、家庭環境、学校環境などの様々な要因があることが示唆されている。

従来のバイリンガル研究では、社会と個人という両側面は「お互いに孤立したもの」として分析されてきたため全体像をとらえることが難しかったが、この巨視的モデルにより、社会と個人の関係をバイリンガル形成に置ける相補的要因として位置づけることが可能になった(岡崎 2006)。

### 2.3.3 日韓国際結婚家庭を対象とした先行研究

社会科学分野において国際結婚家庭の文化を扱った先行研究は数多くあるが、それらの傾向は偏っている。最も多く見られるのは、国際結婚を「2つの文化」の出会いと捉え、「2つの文化」から夫婦に合う習慣を選択・協議する状況に注目した研究「Maxwell (2006)、윤형숙(2004)、김이선·김민정·한건수(2006)、한건수(2006)、채옥희·홍달아기·김정훈·이남수(2006)」、あるいはそのような「二者択一的な習慣・役割・規範」に対照的な実践としての「創造的な結合と選択の可能性」に注目する研究「Breger & Hill (1998)、矢吹(2005)」である。国際結婚した夫婦の間に生まれた子どもたちについても、二つの言語を習得する状況に注目した研究「新田(1996)、朴(2001)、吉田(2006)」、アイデンティティに注目した研究「吉田(2005)、김민정(2008)」、子どもたちに対する差別や地域社会の受け止め方に注目した研究「전경수 (2008)、남영호 (2008)、박동성 2008)」など、研究傾向は偏っている。

### 2.3.4 日本における日韓国際結婚家庭を対象とした先行研究

宋(2013)は、女性移住者を被害者とみなすアプローチではなく、丹念なフィールドリサーチによって、彼女たちが政策的な支援によって力量を強化しつつある主体的な存在であることを検証し、可視化することができたと述べた。国際結婚移住女性が増加している現象それ自体、あるいはその現象に対応する形で開始された多文化家族支援政策に対して、もっぱら批判的な視点から分析されていた。そのため、各地方の実施機関における事業の推進実態や、支援を受けている女性移住者の生活や意識に切り込んだ研究は皆無であった。しかし、女性移住者 12 人にスノーボール・サンプリング方式によるインタビュー調査を行った。その調査を通じて、移住女性たちの生活ぶりや移住後の変化、支援の効果、支援の問題点などを詳細に聞き取り、それらを整理・分析し、移住女性たちの力量強化の面から多文化家族政策の効果を検証することができた。また、地域レベルにおける政策遂行過程を丹念に検証した点で事業実施主体である多文化家族支援センターについて、その制度設計や事業実態を整理した。そのうえで、丹念なフィールドワークを行い、現場における事業実施体制の問題点をえぐり出すと同時に、力量強化の視点から、就業支援事業に着目して施策の効果検証を試み、今後の施策の方向性を示した。

金(2017)は、韓国の国際結婚の現況と国際結婚移住女性に対する支援の詳細について考察した。2006年より、女性家族部、文化体育観光部、教育部などが性暴力・性売買被害の外国人女性に対する支援事業や、結婚移住女性を対象とした韓国語教育・社会適応支援事業を始めた。韓国政府は2007年12月に「結婚仲介業の管理に関する法律」を制定し、2008年6月から規制に乗り出した。설동훈ほか(2014)は、2012年8月に1,468ヶ所あった仲介業者が、2013年には急激に減少し、2014年11月には463ヶ所にまで減少したことを指摘した。加えて2015年2月の法改定では、管轄自治体による国際結婚仲介業の事業所に対する年1回以上の指導・点検を実施するよう義務付けられており、行政機関による管理・監督の責任が強化されている。また、2006年11月から女性家族部は、DV・性暴力・性売買などの緊急状況に陥った移住女性のために「移住女性緊急支援コールセンター」を設置した。被害を受けた移住女性たちが、365日24時間ホットライン(1366)による相談および緊急避難支援を受けられるようにすることで、移住女性の命と人権を守ることが目的であった。

花井(2018)は、2009～2011年に実施した韓国人男性との婚姻により、韓国に居住する日本人母(以下、在韓日本人母)の量的・質的調査の継時的調査(2016～2019年)を行った。調査当時、子どもへ日本語を使用していなかった4名の在韓日本人母を対象に、面接調査から家族・社会変化などが、どのように家庭での言語使用や教育に影響を与えているのかを探った。その結果、4名の家庭では、母子間の韓国語使用には変化がない者が多かったが、日本語習得に対する考え方が以前とは変化し、日本の家族との紐帯、日本文化への興味、将来の進路や就職などの目的のために日本語が学習されていた。第1回目の調査では、日本の家族との意思疎通が困難なことを後悔しつつも、義父母との同居や夫が日本語を理解できなかったことや、韓国人として育てたいなどの理由で母親は子どもに韓国語を使用していた。しかし、子どもが成長し、子ども自らが日本語を習得したいと考え、日本語の学習を開始した者が多かった。これには、日本文化の影響と母親の国という親近感、将来の選択肢の拡がりが増しているのではないかと考える。また、日本語は将来、日本の大学進学のためと語った母親からは、韓国の教育に対する不満が語られた。韓国の教育過剰からの逃避策として、日本の大学入学を選択肢の一つとして考え始め、日本語の学習を開始していた。家族・社会変化の背景には、常に韓国の教育問題が関与していると考えられる。過剰な教育体制は、家庭での言語使用にも大きく影響を及ぼし、今後も韓国社会の大きな課題になるのではないかと考える。

李(2017)は、日韓国際結婚の「多文化家族」を中心に、日韓国際結婚の夫婦間の問題、結婚移住女性の社会適応の問題を検討した。東北3県(宮城、岩手、福島)の日韓仲介型国際結婚した20人の事例を基に分析した。移住女性の「社会との関係性＝リレーションシップ」が非常に限定され、弱いことが問題であると指摘している。彼女らが日本社会とつながっている関係性を、単なる個々人のリレーションシップからシティズンシップ(市民権)に変えなければいけない。また、社会構成員として、市民としての日本語を学ぶ権利、社会活動に参画する権利、社会保障を受ける権利を明文化することが重要であると述べ、日本社会に

既に移民として定住している定住外国人を移民として宣言し、あらゆる行政サービスに移民の権利を明記すべきであると述べている。

劉（2006）は、都市部に住む韓国人妻を対象とし、日本文化への適応・変容をみるための調査分析を行った。その際、中澤（1996）が提示した4段階評定との比較分析が行なわれていた。劉は、中澤（1996）での農村におけるアジア系外国人妻の生活と居留意識に関する調査分析の中で、韓国人妻50人の分析結果を参考・引用し、都市部の韓国人妻と比較をした。比較項目として、家庭内の食生活、近所付き合い、夫の両親との関係、夫の異文化理解度、暮らしの満足度、宗教が含まれている。これらの項目のなかで、宗教及び夫の異文化理解度以外の項目において、農村部の韓国人妻のほうが都市部の韓国人妻より適応度が高いという結果が見られた。

鈴木（2003）はバリ島の日本人国際結婚女性を例に、夫の出身国に居住することになった妻が、どのような経緯によって国籍を変える気持ちに至るか、また国籍を変更する場合の理由は何かを明らかにした。さらに、国籍変更が文化的アイデンティティ（文化的帰属感）に及ぼす影響についても考察を行った。

鈴木は、インドネシア国籍に変更する日本人女性は「実生活上の快適さ」と「永住の決意（覚悟）」という2つの理由を挙げているとし、当事者が置かれている社会・文化環境の中で、両者の理由が複雑に絡み合い、国籍変更に至ると推察した。そして、国籍変更は自分自身と日本（両親を含む）との関係、自分自身との新しい国との関係（自分の居場所を見つけられるかどうか）などを慎重に再吟味する過程であり、アイデンティティの問題と深く関わっていることが示唆された。

以上のような海外に住む日本人妻を対象とする研究以外にも、外国人男性と結婚し日本に居住している国際結婚カップルに関する研究がある。国際結婚により日本に移住している男性の場合、結婚移住女性とは異なる側面がみられた。

目黒（2007）によれば、結婚は夫と妻となる2人が、それぞれの過去に展開してきた社会関係を一つの家族ネットワークと再編するものである。しかし、国際結婚した女性は、一方的に夫のネットワークに組み込まれ、母国で形成した社会資源が利用できず、夫側の家族や社会または文化への適応を一方的に押し付けられることが問題であるとしている。国際結婚で国際移動をしている女性のパターンは、日本国内だけに限らず海外においても、ジェンダーや異文化への適応など重層的な困難に直面しかねないことは明白な事実である。「移民の女性化」が進む今日の国際的情勢において、近年の日本国内の国際結婚に関する研究でも国際結婚した女性を結婚移民として位置づけ、議論する傾向が見られるようになった。

### 2.3.5 韓国における韓日国際結婚家庭を対象とした先行研究

国際結婚家庭子女のアイデンティティに関する研究では、신혜정（2007）、송선진（2007）などがある。신혜정（2007）は、韓国人の男性と外国人女性との国際結婚家庭子女のうち、ソウルと全羅南・北道地域の小学生129名（母の国籍が中国49名、日本40名、フィリピ

ン 20 名、他 20 名) を対象に質問紙調査を行い、彼らの学校適応や文化適応ストレスと、韓国と母の出身国の二重文化に対する興味の程度を調べ、これらの変数がアイデンティティに与える影響を分析している。調査の結果、アイデンティティに与える要因として、韓国語能力、交友関係、文化適応ストレスなどを挙げ、文化適応ストレスが低いほどアイデンティティは高くなることが明らかになった。また、言語能力との関わりに関して、母の出身国の言語能力が高い対象者ほど二重文化に興味を持ち、二重文化に対する興味が高いほどアイデンティティも強くなることを明らかにしている。さらに父母の対話時に使用する言語が、「母の国の言語のみ」の対象者の場合は二重文化に対する興味度が最も高く、「韓国語のみ」の場合は二重文化の興味度が最も低いことが明らかになった。しかし、신혜정自身も述べているように、研究で用いられた自我アイデンティティの尺度は一般青年の自我アイデンティティを測定するための尺度であるため、多文化家庭の小学生がその尺度を理解するには限界があると述べている。

송선진 (2007) は、国際結婚家庭子女のアイデンティティ発達の水準が一般児童と比較したときにどのような差が出るのか、また彼らのアイデンティティに影響を与える要因を調べる目的で、国際結婚家庭子女と一般家庭子女の小学 5、6 年生を対象に質問紙調査を行った。調査の結果、国際結婚家庭子女のアイデンティティ発達の点数が一般児童に比べて統計的に有意差を示しながら低かったとし、アイデンティティ発達に相対的に大きな影響を与える変数として、外見の差異と韓国語能力が挙げられるとしている。

上記のような多文化家庭子女たちのアイデンティティ発達の研究に関して早향숙・김진한(2010) は、これらの研究は多文化家庭子女を理解する根拠にはなるが、生涯発達段階の中で彼らの発達の特徴を全体的に眺望することができる理論で分析されたものではないとしている。また、そのために彼らのアイデンティティは学校の状況に限定され、一般学生と比較して相対的に劣等な水準にあるという否定的なイメージで分析される外なかったとしている。結論として、多文化家庭子女たちを対象とするアイデンティティ発達理論は、韓国の一般学生に適用させる理論とは分離して、独自の発達理論体系を持つ必要があるとした。

韓国における多文化家庭子女たちの言語・文化的アイデンティティ形成に関しては、이재분 (2008) が多文化家庭学生たちの自我アイデンティティの水準を把握するために、学生たちの文化的アイデンティティ問題と関連した面接調査を実施している。80 名の面接対象児童(小学生)のうち、45 名が自身は韓国人であると答え、26 名は国家的アイデンティティの混乱を示し、残り 9 名は自身が二重国籍を持っていると応答したと述べている。しかし、多文化家庭における子女たちの文化的アイデンティティ形成に与える要因までは明らかにしていない。

牧野(2011)は、韓日国際結婚家庭の子どもの言語・文化的アイデンティティの形成に影響を与える要因として、母親の言語・文化に対する態度と友達の態度等を挙げている。これらは、親の両文化を適切に取り入れアイデンティティを確かめる必要な条件として、日本語継

承の教育及び二重言語併用と交友関係の形成、母親が日本人である友達の間でコミュニティ形成を挙げている。

家庭内における言語使用や家庭内日本語教育に触れた高橋(2010)の研究は、日韓国際結婚家庭の現状は明らかにしているが、日韓国際結婚家庭の養育志向、親の日本語継承の意味付けなど深い分析には至っていない。花井(2009)・竹口(2011)は、日本人母と日本人父の継承要因について、各家庭に焦点を置き、韓国における日本語の地位の高さ、家族との良好な関係が継承要因の一つであると分析している。言語の経済性が高いことが継承要因の一つではあると考えられるが、家族を取り巻く環境、韓国社会の制度の変化、韓国の特殊性について十分な考察が行われていない。

ユン・セラ(2021)は、日本出身の結婚移住女性(10名)の韓国社会・文化適応経験を現象学的研究(phenomenological research)の方法を通して、日本出身結婚移住女性の韓国社会・文化適応の経験を本質的な問題点と原因を明らかにし、構造化して分析した。面談の結果、日本出身結婚移住女性の韓国社会の社会・文化適応経験事例に対する意味ある語りから15個のトピックを引き出した。また、それらを7つにカテゴリー化し、「韓国文化の差異による異質」、「日本文化に対する排他性」、「異邦人としての社会適応経験」、「異邦人としての文化適応経験」、「二つのアイデンティティの混在」、「韓国で移住者として生活・世界経験適応現象」、「日本出身結婚移住女性の移住者としてのアイデンティティ」に細分化して論を進めた。研究対象者は、経済的に安定して教育と文化水準も高いほうである。しかし、研究対象者は韓国社会に定着する過程に異邦人としての文化的疎外感、言語コミュニケーションの問題による疎外感、夫方の家族及び地域社会の構成員などの問題を経験している。そして、祭祀のために飲食準備などが大変難しく、数多くの葛藤を経験している。

### 2.3.6 国際結婚家庭の子どものアイデンティティに関する先行研究

箕浦(1994:213)は、文化的アイデンティティを「個人がその中で生きている社会・文化システムと自分をどのような関係において捉えるかをしめす自己意識」と定義し、異文化に育つ子どもの特質を記述し、理論的な考察を試みた。その結果、自己認識の基盤に文化的要素をおくか、国籍をおくか、つながっている国と国との間の力関係をおくかにより、文化的アイデンティティが影響されることが明らかになった。つまり、当事者が自分の内外の文化的要素をどのように意味づけしているかが、アイデンティティの構築につながったと言える。

Kanno(2000)は、アイデンティティは流動的で複数あり、さらにその複数のアイデンティティは互いに矛盾することもあると述べている。つまり、一人の人間が相反する二つのアイデンティティを表出させ得ることを意味する。例えば、カナダに住む人が、ある場面で英語話者としてのアイデンティティを一番強く持ち、別のある場面ではフランス語話者としてのアイデンティティを表出させるというケースがあるのではなからうか。Kannoは、バイリンガルのアイデンティティを分析するためには、複数の側面を持つアイデンティティという捉え方が適していると述べている。

窪田(2005)は、アメリカにある大学付属の英語学校の上級レベルの学習者が参加する会話ストラテジー(Conversational Strategies)コースを対象にエスノグラフィー調査とインタビュー調査を行い、調査参加者がアメリカの文化・英語・適切な話し方などに対して、どのような思いや期待をもって教室に参加するのか、それが参加者の言語行動にどのように反映されているかを分析した。その結果、学習者のアメリカ文化・英語に対する思いや期待は、「演じられるアイデンティティ」を通して現れていた。そのアイデンティティは、アメリカ英語のアイデンティティを演じる言語の標識の使用頻度や、アメリカ英語のアイデンティティを演じることへの志向の程度により、「アメリカ英語のアイデンティティ」、「新しいアイデンティティ」、「母語のアイデンティティ」、「葛藤するアイデンティティ」の4つに分類された。ある言語や文化に対する思いや期待が「演じるアイデンティティ」に影響したこの結果は、箕浦(1994)の結果とも関連しているといえよう。

ルーシ・ツェ(Lucy Tse, 1998)は、米国での民族的少数派のエスニックアイデンティティ形成が第1段階から第4段階へと移行していくとモデルを提唱<sup>5</sup>した。それぞれの段階における継承語習得に関する特徴を述べると、第一段階では継承語を、その子どもの理解できるレベルでインプットすると習得可能だという。第2段階では、継承語に否定的になるため、継承語のインプットがあっても、継承語の維持や習得は難しいとしている。第3段階では、十分な継承語のインプットがあれば習得は可能だという。第4段階では、継承語のインプットが十分であれば習得は可能だが、十分ではない場合、継承語の維持は難しいと考えられている。このモデルを踏まえて樋谷(2010)は、このモデルがライフサイクルの中でどのように子どもが継承語を習得するかを民族意識との関連で考察した。今後、子どもの年齢や発達段階や他の社会的要因などがどのような影響を与えるかを深く探る必要があると述べている。

アイデンティティと言語の相関関係について知念(2008)は、日本語力(自己評価)が高い子どもは、自己評価が高いと思っていない子供に比べ、日本人としてのアイデンティティが高いとした。一方川上(2010)は、言葉の力が低いためにアイデンティティが混乱し、言葉力が高いことがアイデンティティを安定させるとは単純に言えないと指摘した。また、中島(1999)がトロント在住の日系高校生を対象に行った調査では、英語は話せるが日本語が片言しか話せない高校生も、自分は日系人だという意識をしっかりと持っていたという。つまり、継承語とアイデンティティ形成は関連があるという報告が数多くある一方、それが確認できなかったという報告もある。

鄭(2013)は、日本に在住する三人の韓日国際結婚家庭子女の事例を中心に、日本の多文化社会への変化過程と韓国人たちの日本移住の歴史と背景を整理し、家庭と学校という背景での韓日国際結婚家庭子女たちのアイデンティフィケーションについて調査し、韓日国際結婚子女たちの自己カテゴリー化過程の分析を行った。3項目の調査を通して、日本社会

---

<sup>5</sup> 第1段階では、自分のエスニックグループに対しての意識レベルが低い。第2段階グループ(その社会の主流のグループ)への帰属意識が高くなるとしている。次自分のアイデンティティを肯定化する第3段階に進み、最後の4段階では、自分のエスニックグループへの積極的に関わりながら様々な心の葛藤が解決されるとしている。

で韓日国際結婚家庭子女たちがどのように日本人と区別化及び他者化されているか、そしてその中で韓日国際結婚家庭子女がどのように自己カテゴリー化するのか、周りの人たちとどのような関係を形成しているのかを明らかにした。研究対象者たちは、授業参観を通して日本人たちと他者化される経験をし、さらに現在の日本における韓流ブームにより周りの人たちの韓国に対する認識が変わることにつれ、日本人の研究対象者に対する態度も変わるようになった。また、韓流の影響で日本内での韓国に対する認識変化、韓国語学習や韓国文化接統を通して韓国に関心を持つようになった。研究対象者は国家制度の枠、帰属意識、文化接統の頻度等による個人的な経験を大事にしながら、学校や友達的生活世界の間関係の中でアイデンティティを形成していた。

鈴木(2014)は、両親の一方が日本人、他方が外国人である 日系国際児の(文化的)アイデンティティ形成の主な要因として、①「居住地(国)」、②「両親の国(文化)の組み合わせ」③「日本人の親の性別」④「国際児の外見的特徴」⑤「家庭環境」⑥「学校環境」、さらに、⑦「出生地」「年齢」「性別」などを挙げている。発達過程のなかで、上記の①～⑦の要因がダイナミックに絡み合うなかで、日系国際児の(文化的)アイデンティティが形成されていく(鈴木 2004, 2007, 2008, 2012a)。特に、「居住地(国)」は、自然環境、言語・文化、経済・社会システム等を包括しており(国際児に対する受容度も含まれる)、国際児のあらゆる側面に大きな影響を与え、個人を作っていく土台(基礎)である(鈴木・藤原 1994、鈴木 1997)。「居住地」の重要性は、「居住地の規定性(Domicile Determination)」(鈴木 1997, 2008)として指摘されている。また、居住地の社会がほかの文化に開かれている程度は、国際児の住み心地にも大きく関係する(鈴木 2004)。鈴木は、これらの要因にはさらに、「国際児としてのアイデンティティ」の形成の条件である、二言語・二文化の習得が(文化的)アイデンティティ形成の要因として加わると述べている。鈴木はバイカルチュラル環境/多文化環境で成長してきた、10代後半から30代前半のバイリンガルの日独国際児女性10人(母親が日本人、父親がドイツ人)を対象に、文化的アイデンティティ(文化的帰属感・意識)について考察した。その際、国際児をとりまく居住地の環境、両言語の習得、両文化の知識、および二つの考え方・感じ方の理解に着目した文化的アイデンティティについては3タイプに分類した。タイプ①は、両文化への帰属感・意識が同程度(5事例)タイプ②は、日本が優位な場合(1事例)、そしてタイプ③は、ドイツが優位な場合(4事例)があった。ただし、その程度には個人差があった。特に事例A(両言語力、両文化の知識・理解はほぼ同程度でネイティブと同じか、ネイティブに近い)はバイカルチュラル・パーソン(Gutierrez, 1985)であると考えられた。「言語」「文化知識」「文化(感じ方・考え方)理解」のうち、「文化知識」と「文化理解」は文化的アイデンティティ(文化的帰属感・帰属意識)との強い関係が示唆されたが、「言語」については明確ではなかったと述べている。

内山(2017)は、ドイツに住む日系二世の子どもについて行った調査し、自分の社会環境を自分なりに理解し、期待されている自分を考え、文化的アイデンティティを調節できる子ども

もがいることを明らかにした。この調節するアイデンティティの例として、現地校の歴史や文化の授業中に意見を求められ、日本人・日系人の生徒が自分に期待されている反応を察知し、自分の立ち位置を決めたりすることなどが考えられるのではないだろうか。

中山(2016)は、韓国人留学生 5 名のライフストーリーから、各留学生の日本語のネットワークの中でのできごとを彼らが語る際に現れる「自分らしさ」を考察した。同研究では、アイデンティティを「ライフストーリーの中で語られるネットワーク内(の出来事)の中で負わされ、また引き受ける形で(再)構築される研究協力者の特徴的な位置」(中山 2016:56)と定義した。留学生のライフストーリーを分析した結果、彼らが持っていた文化資本がネットワークの中で再解釈され、彼らは自分をどのように提示するかというアイデンティティの構築・交渉の場面に置かれていた。言い換えると、文化資本を基として構築される個人のアイデンティティは、自分の意志や他者の解釈を繰り返された上で、交渉の結果として現れるものだということが明らかになった。

中山は、韓国人留学生へのライフストーリー・インタビューを通じて、ライフストーリーに見られる「自分らしさ」と、日本語を話す自分に対する評価としての「自分らしさ」を明らかにしようとした(中山、2008)。中山は、カナダへの移民が社会的な関係性の中で英語習得を進め「正統な話者」となるという学習者の側から言語学習を描いた Norton (2000)の研究を評価しつつも、「正統な話者」というアイデンティティが一度手に入れられると変わらないもののように捉えることを批判し、社会的関係性の中で見られる学習者の(再)構築されるアイデンティティの「個人史的意味」を考えることが重要であると主張する。そして、それゆえに日本語教育においては「学習者の言葉に耳を傾けることの大切さをここで述べたいと思う」(p. 190)と最後に結論として述べている。

張(2018)は、留学生(4組)、就労留学生(4組)、出稼ぎ者(3組)で来日したニューカマーの子どもたち 11 名(15 歳~27 歳)の文化的アイデンティティを考察した。子どもの文化的アイデンティティ形成に影響を与える環境は子ども自身によるものではなく、親の社会階層や親の日本での人生設計プラン、親の子どもの文化的アイデンティティを中心に、それを取りまく親の来日経緯、日本での生活、滞日プラン、子どもに対する教育方針等が関係していると指摘している。

## 2.4 先行研究からみた本研究の意義

本研究は、既存の国際結婚家庭の女性の文化適応や子どもの継承語教育とアイデンティティ形成だけに関わる研究とは異なる。先行研究から、親と子どもを研究協力者として扱った研究は管見の限り見当たらない。また、研究者自らが「移動する親」として、「移動する子ども」である子どもと親が言葉を介して向き合う家庭を詳細に追う研究(佐伯 2013)や、複数言語環境において、何を目指してどのように養育をすべきかという当事者的な意識で、子どもとの複数言語を介した関係性を考察した研究は限られており(高橋 2013)、議論の余地が残る。

以上の研究では、親子の複数言語をめぐる関係性は述べているものの、親自身を移動する主体としてのエイジェンシーと捉え、養育者である親が、複数言語と異文化との出会いとその中での体験を経て、どのように自分の人生を設計し、子どもを養育していくのか、そのライフを深く掘り下げた意味世界までは描かれていない。

日韓間で国際結婚をしている親の移動(留学経験を含む)を通して、見えてくるアイデンティティの変化と移動の経験がある。留学の経験がある親自身の移動により、日韓国際結婚家庭を築いている親は、自身のアイデンティティと子どものアイデンティティ形成にどのような影響を与えているのか。

本研究では、親の世代別、ジェンダー別、留学経験別に日韓国際結婚家庭の親と子どものアイデンティティがどのように形成されているのかをめぐり、研究協力者の日本での生活実態を調査し、親と子どもの二世代のアイデンティティを同時に分析し、論を進める。

### 第3章 研究方法と研究課題

前章では、本研究に関連する先行研究を概観し、その成果と不足点をもとに研究課題を設定した。本章ではこれからの研究課題を解明するために、本研究で採用したライフストーリーインタビュー調査及び言語ポートレート調査にもとづき、調査方法及び分析・考察の方法について論じる。

#### 3.1 研究方法

研究方法としては、ライフストーリー研究法と言語ポートレートを用いる。詳細については3.2と3.3で述べる。

#### 3.2 ライフストーリー研究法

本研究では主に「ライフストーリー研究法」を援用する。ライフストーリーは、語り手の自己アイデンティティと密接に関わっている。この研究法が注目されるようになった背景には、従来の研究のテーマにはなかった新しい社会問題や、これまであまり注目されてこなかった人びとに対する関心などがある。本研究におけるインフォーマントは、日本社会や研究者たちからほとんど注目されることのなかった「日韓国際結婚家庭の親子」たちである。

ライフストーリーとは、「個人が生活史上で体験した出来事やその経験についての語り」（桜井 2005:12）であり、語られたことは、「語り手とインタビュアーとの言語的相互行為による共同の産物」（桜井 2002:152）である。語り手は聞き手の問いをきっかけに、聞き手と語り手の「いま・ここ」での関係性の中で、自分にとって意味ある出来事を選択し、ストーリーを構築する。また、ライフストーリーは語り手の自己アイデンティティとも密接に関連している。「語ることを通して『私』は自分という人間がどういう人間であるか、どういう人生を歩んでいるかを改めて認識すると同時に、他者から認識（承認）される」（大久保 2009:2）のである。

したがって、ライフストーリーの語りは、聴き手に対する語り手の「アイデンティティ・ワーク<sup>6</sup>」（小林 2005）であり、そこでは「物語としての自己」（やまだ 2000:27）が語りを通して構築されるのである。語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された「対話的混合体」にほかならない。とりわけ、語ることは過去の出来事や経験が何であるかを述べることに「いま・ここ」（桜井 2002:30-31）を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きることである。この手法を用いてライフストーリー・インタビューを行ってきた桜井は、従来のアプローチでは語り手が「何を語ったのか」といった「語られる内容」にばかり関心が払わ

---

<sup>6</sup> 「ライフストーリーを語ることは、私とはなにものであるかを語ることであり、私を表明するアイデンティティ・ワークであることだ」（小林 2005:213）

れ、「それがどのように語られたのか」といった「語りの様式」には着目されてこなかったことを指摘している。だが実際には、「語られる内容」はインタビュアーである調査者と語り手との間で繰り広げられるインタビュー行為と関係なく生成されるものではないため、「語られる内容」に加え、「いかに語ったのか」という「語りの様式」にも注意を払う必要があるという。こうした観点に立つのが「対話的構築主義アプローチ」である。

また三代(2015b)は、ライフストーリー研究法を「調査協力者の語りを調査者である私自身との対話を通じて構成されたストーリーとして考察する」姿勢を自らの立ち位置として示し、社会学の立場からライフストーリー研究を確立した桜井の「対話構築主義アプローチ<sup>7</sup>」を理論的基盤とし、調査者と研究協力者との間の相互行為によって構築される「語り」を重視した。三代によれば、ライフストーリー研究法とは「インタビューを語り手と聞き手が構成したストーリーとして解釈することで、語り＝声の社会的意味に迫ろうとする研究法」である。

2000年代以降、社会学の分野で始まったライフストーリー研究は言語教育の分野でも盛んに採用されるようになった。国境を越える移動を経験した人々のライフストーリーは、移動がいかにアイデンティティの変容や意識の変化をもたらすかを語っている(三代2011、川上2013)。川上(2009)は国家間を含む空間的移動のほかに、言語間の移動や言語教育カテゴリー間の移動を念頭に「移動する子供」のライフストーリーを探った。

一方、稲垣(2016)は「移動する女性」の「複言語育児」の在りようを「家族の過去の歴史や親の人生、家族の願望、将来の計画等を全て包括した『思い』をも含む育児」であることを示すために、ライフストーリー研究法を採用した。

筆者自身も「移動する女性」であり、日韓国際結婚家庭の構成員として調査協力者との当事者性を共有している。本研究では、自由意思で国際移動を経験した複数の言語話者である日韓国際結婚家庭における親が、移動と言語の関係とアイデンティティ構築にどのような影響を与えているのかを、ライフストーリー・インタビューから日韓国際結婚家庭の歩みについて、親の立場と子供の立場からそれぞれ見出そうとしたものである。

本研究で取り上げる「日韓国際結婚家庭の親子」も、その存在の全体像を把握することが

---

<sup>7</sup> 桜井(2002)によると、ライフストーリーへのアプローチには「実証主義アプローチ」、「解釈的客観主義アプローチ」、「対話的構築主義アプローチ」の三つがある。まず、「実証主義アプローチ」とは、語られるライフストーリーが真実なのかどうかを重視するアプローチであり、ライフストーリーを科学的で客観的なものにしなければならないといった考えがその根底にはある。調査手法としては、既存の理論をもとにしてあらかじめ仮説を設定し、演繹的に推論していく仮説検証型が主に採用され、調査の妥当性を高めるために、さらに他者からの聞き取りや記録文書などの資料が用いられる。二つ目に、「解釈的客観主義アプローチ」は「実証主義アプローチ」とは異なり、帰納論的な推論とともにライフストーリーを解釈し、インタビューを重ねていくことによって、社会的現実を明らかにしようとするものである。分析的帰納法が基本的な考え方とされるこのアプローチは、具体的な事例を詳細に調査し、次の事例と重ね合わせ、二つの事例をもとにした普遍化を行い、さらに次の事例を用いて修正を加えながら普遍化をしていくというものである。上記の二つのアプローチに対し、3つ目の「対話的構築主義アプローチ」では、インタビュー場における相互行為が重視され、語りは「語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるもの」として捉えられている。

難しく、これまでの研究ではあまり可視化されることのなかった人たちである。以上のような状況を踏まえ、「日韓国際結婚家庭の親子」の存在を把握し、彼らがどのような人生を歩んできたかを明らかにしていくためには、未だ探求されていない社会的現実や少数事例を照射するのに有効な手法とされる「ライフストーリー研究法」が最適だと考えたのである。

### 3.3 言語ポートレート

言語ポートレートは、身体の線画に自分の言葉を位置付け、好きな色で描いたもので、言語ポートレートを描くという活動や描かれた言語ポートレートがライフストーリーを語るための糸口となり、同手法はインタビューの質問だけでは得難いストーリーを聞き出すことができる大変有効な方法である。言語ポートレートは、描く活動と描いたものを説明する活動からなる。人の体の形をした図を配り、色ペンを使っていろいろな言語との関係を表す自分の姿を描いてもらう。髪、服や靴を加えてもよい。描いた後、自分のポートレートについて説明してもらう。描画は思考の表現化であると同時に、思考を促すものである。思考の断片を集めながらの言語ポートレートに対する解釈は、調査者ではなく描いた者が自身で語るものである。語っている間にも、「ふりかえりが進む」(Castellotti et Moore, 2009: 52-54) ことがある。そして、その言語の背景の文化面についても描写されることが多い。言語ポートレートは自分自身の言語に関する感覚と、それを理論的に理解するための一つの有効な方法である。

Block (2007) は、第二言語を介する主観的立場によるアイデンティティの形成について論じ、移住や留学経験のもたらすアイデンティティの形成の研究の必要性を唱えている。言語ポートレート手法は、Krumm (2001) が複数言語を話す子どもや若者の言語レパトリーとそれぞれのことばへの想いや感情を見るために用いた方法で、話者にとってのそれぞれのことばの役割やことばに抱く想いなどが色と身体メタファーを通してマルチモーダル<sup>8</sup>に表現される。

言語ポートレートは、1990年代から移民の子どもたちが自己のことばについて抱く感情を表現できる方法として用いられていた(Krumm 2013)が、大学生や成人に自己の言語レパトリーについて振り返る機会を与え、アイデンティティの意識について探る方法としても活用される(Coffey 2015、Lau 2016)。一方、成人の言語レパトリーやアイデンティティの意識について知る方法としても活用されている(Coffey 2015、姫田 2016)。また、言語ポートレートを描く作業が振り返りの機会となり、言語レパトリーの背後にあるバイオグラフィのナラティブを引き出す糸口ともなる。さらに、ナラティブ<sup>9</sup>ではことばへの思いやストーリー<sup>10</sup>が線状に順を追うのに対し、言語ポートレートは全体と部分の関係性をも可視化し、亀裂や重なりといった矛盾した関係も視覚的に表すことのできるマルチモーダル

---

<sup>8</sup> マルチモーダルとは、Multi (複数) と Modal (様式) を組み合わせたコンピューター用語である。

<sup>9</sup> 広義の語りによって語る行為と語られたもの(やまだ 2021)。

<sup>10</sup> ストーリーとは、複数の出来事をつなぐことで構成される物語である(森岡 2015)。

ル (multimodal) な手法である。

言語ポートレートは、個人的な言語価値の意識化を促す場であり、また同時に、その意識化の結果を証明するツールとして活用できる。言語ポートレートの中に描きこまれる言語イメージは、単に周囲で共有されるイメージの言い換えとはならず、学習の経緯や使用における態度、能力自己評価、将来の活用など、多くの要素を反映する。適応のために隠れている言語もそこに表れる。複数言語リソースの相対化により、また自分との関係に特化することにより、従来の単一言語イメージ調査とは異なった主観的意味世界が表現される。

姫田(2016)は、日本でフランス語やドイツ語を第二外国語として学習する8名の大学生が描いた言語ポートレートを紹介し、そのうち2年後に再び言語ポートレートを描いた協力者2名の言語ポートレートが変化したことに言及している。その2名は、2年の学習言語が主に使われる国への短期留学をしていたことで、留学が変化に影響した可能性を示唆している。

岩崎(2016)は、留学経験を持つ元留学生が国際結婚をすることにより再び移動し、二つの言語、二つの文化あるいは複言語複文化の中で親と子どものアイデンティティの変容を言語ポートレートとライフストーリー・インタビューによって調査し、従来見逃されていたアイデンティティの構築を明らかにした。ポスト構造主義によりアイデンティティの流動性が認識されているが、具体的変容の報告はインタビューによるものが多い。本研究では、言語ポートレート研究方を援用し、留学の移動を経験した国際結婚家庭の親と子どものアイデンティティの構築と変容の軌跡をマルチモーダルに捉える。

### 3.4 ラポールについて

「ラポール (rapport)」とは、相互に信頼し合い、感情の交流を安心して行える関係が成立している状態を指す。信頼関係と同義語とされる場合が多く、本研究においても信頼関係と同義語として位置付ける。

桜井(2002)は、ラポールを調査以前にあるものではなく、調査過程で構成されるもの、常に変化するものであると述べている。調査過程を通じて、ラポール形成に努めると同時に、ラポールが一様にある、ないという問題ではないことを意識し、むしろ、研究者と協力者の間にどのようなラポールがあり、それがどのようにインタビューの語りを制約しているのかに研究者が意識的になることが求められている。

本研究における筆者と協力者の関係は多様で、協力者が次の協力者を紹介してくれるという、いわゆる「雪だるま式」サンプリングという状態になった。知人や協力者の紹介を受けた協力者とは予め面識がなく、十分なラポール関係を持ってインタビューに臨んだとは言えない。そのようなケースでは、一度目のインタビューでは互いを知るような、自己紹介の話題から始めるようにした。

### 3.5 研究倫理について

次に、本研究における倫理的対応について述べる。桜井(2002)は、ライフストーリー・イ

インタビューを日本で行う際に、事前に承諾書へのサインを求めると、研究協力者は余計に警戒し、充実した語りを引き出せなくなるとし、一律に承諾書へのサインを事前に求めることへの疑問を呈している。

本研究では、研究協力者には事前に趣旨説明を行い、同意をいただいた上で、対面と非対面<sup>11</sup>で日本語と韓国語によるインタビューを行った。インタビューは非構造化インタビューで、留学経験や移動の経験、国際結婚に至る経緯、家庭内での言語使用、継承語教育、育児、教育価値観等を中心に、ライフストーリーを話してもらった。その音声を録音し、のちに文字化した。また、そのときの状況をフィールドノートに記録した。研究協力者には、研究への使用の承諾書（添付資料）に署名してもらった。研究協力者には、いつでもこの調査を中止できること、また公表したくない内容については、データの不使用、消去に応じる旨を伝えた。また一度目のインタビューの筆者の解釈について、次のインタビューのときに協力者に確認してもらおうなどして、定期的に研究の方向性を協力者と確認するように努めた。

謝礼はお土産を送ったり、僅かな金額ではあるが直接渡したり、口座に送金した。また、研究協力者と2020年度以前には食事をしたりして信頼関係を築いた。調査時間は最短で1時間半、最長で4時間以上あった。また同一人物に複数回にわたり調査を行うこともあった。

表 3-6 研究協力者のプロフィール（日韓国際結婚家庭）

	結婚年数	滞日年数	滞韓年数	出会国	留学経験&移動経験	妻		夫		第1子	第2子	子どももの国籍	家庭の主言語	帰国
						年齢・学歴	職業	年齢・学歴	職業					
A 家族	26年	30年		日本	妻：日本の大学卒 夫：20代仕事の関係で頻繁に韓国へ渡航	50歳 大学卒	英語・韓国語 講師	55歳 大学卒	自営業	24歳 (小中高公立、私立大学卒) 会社員	19歳 (小中高公立、私立大学在学中)	日本	日本語	年に1~2回
B 家族	29年	50年		日本	妻：日本の大学卒	68歳 大学卒	牧師	58歳 大学卒	公務員	28歳 (研究員)	×	日本	日本語と韓国語	年に2~3回
C 家族	31年	31年		韓国	妻：日本の大学、大学院卒	56歳 博士	大学講師（非常勤）	58歳 大学卒	会社員	30歳 (小・中・高)	27歳 (小・中・高)	日本	日本語	年1~2回

<sup>11</sup> 新型コロナウイルス感染症拡大による移動の制限のよりやむを得ず Zoom を使い非対面でインタビューを実施。

										公立、 私立 大学 卒)	公立、 私立 大学 卒)			
D 家 族	17年		夫：1 年	日本	夫：韓国留学1年	47歳 大学卒	主婦	54歳 大学卒	会社員	15歳 中3	13歳 中1	二重 国籍	日本語	年に一 回
E 家 族	9年	14年	夫：1 年	日本	妻：日本交換留学1年、国 際交流員5年 夫：韓国交換留学1年	39歳 修士	大学講 師（非 常勤）	41歳 修士	大学職 員	4歳 幼 稚 園(年 少)	×	日本	韓国語	年に1 ～2回
F 家 族	15年	19年		日本	妻：日本留学1年、国際 交流員3年 夫：台湾留学1年	46歳 大学卒	自営業 (韓国語 教室 & 韓国語 翻訳通 訳 & 観 光ガイ ド)	49歳 大学卒	自営業	13歳 中1	9歳 小3	二重 国籍	韓国語 と日本 語	年に1 ～2回
G 家 族	10年	11年	妻2年	韓国	妻：韓国留学1年、お仕 事1年 夫：中国留学4年、香港 留学2年、イギリス留学 1か月	38歳 大学卒	会社員	38歳 大学卒	会社員 (契約社 員)	7歳 (小 1)	×	二重 国籍	主に韓 国語	年に 1～2回
H 家 族	7年	12年	妻 留学5 年	日本	妻：韓国留学5年 夫：カナダ留学1年	43歳 大学卒	会社員	40歳 大学卒	会社員	5歳	×	二重 国籍	日本語	年に1 回
I 家 族	6年	2年4 ヵ月	妻：留 学1年 結婚	日本	妻：韓国留学1年 夫：日本留学2年	31歳 大学卒	主婦	34歳 大学卒	就活中	3歳	×	二重 国籍	日本語	年に1 回
J 家 族	5年	7年	生活 2年間	日本	妻：ニュージーランド1 年、カナダワーキングホ リデー (WH <sup>12</sup> ) 2年	37歳 大学卒	主婦	33歳 大学卒	会社員	3歳	7カ 月	二重 国籍	日本語	年に1 回

<sup>12</sup> ワーキング・ホリデー制度とは、二つの国・地域間の取り決め等に基づき、各々の国・地域が、相手国・地域の青少年に対して自国・地域の文化や一般的な生活様式を理解する機会を提供するため、自国・地域において一定期間の休

					夫:日本留学2年6ヵ月、 仕事4年半									
K 家 族	7年	12年		日本	夫:日本留学2年	29歳 専門大 学卒	看護師	35歳 大学卒	会社員	6年 (小 1)	3歳	二重 国籍	日本語	年に2 回~3 回
L 家 族	4年	10年		日本	夫:日本留学6ヵ月、国際 交流員として3年、現在 国際交流関係  妻:アメリカに6ヶ月留 学	40歳 専門大 学卒	司書(育 児休職 中)	35歳 大学卒	会社員	18ヵ 月	×	二重 国籍	韓国語 と日本 語	コロナ で帰省 できず

### 3.6 研究協力者の属性

インタビューは、1回から多い研究協力者では4回以上行った。一度のインタビュー時間は1時間から4時間程度であった。これらは研究協力者との関係性の中で決まってくることで、無理に統一することはしなかった。すべてのインタビュー記録を文字化し、分析したが、本研究ではそのうちの12組のライフストーリーを取り上げて考察の対象とした。本研究ではグラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下 1999)のように、語りの内容に基づくモデル化を目的としていない。モデル化よりも、一人ひとりのライフストーリーに寄り添って、その意味を深く解釈していくことを重視するところにライフストーリー研究の意義があるからである。

研究協力者の属性(抜粋)を示したものが表1である。妻の年齢60代が1名、50代が2名、40代が1名、30代が4名、20代が1名である。教育のレベルは専門学校から大学院修了までである。夫と知り合った場所は、日本が11人(留学や仕事のための滞在中)、韓国が1人である。結婚期間は、5年未満が1人、5年以上10年未満が6名、10年以上15年未満が1名、15年以上20年未満が1名、20年以上が3名である。妻の職業は講師が3名、牧師が1名、主婦が3名、自営業が1名、会社員が2名、看護師が1名、司書が1名である。

夫の年齢は50代が4名、40代が3名、30代が5名である。教育のレベルは大学卒と大学院修了でほとんどが大学卒である。職業は自営業、会社員、大学職員、公務員、就職活動中など多岐にわたる。留学経験と国際的モビリティの有無では、妻が日本5名、韓国2名、ニュージーランド・カナダが1名、アメリカが1名、夫が日本5名、韓国2名、中国1名、

---

暇を過ごす活動とその間の滞在費を補うための就労を相互に認める制度。ワーキング・ホリデー制度は、1980年にオーストラリアとの間で開始されたことに始まり、1985年にニュージーランド、1986年にカナダとの間で開始された。その後、1999年4月から韓国、同年12月からフランス、2000年12月からドイツ、2001年4月から英国、2007年1月からアイルランド、同年10月からデンマーク、2009年6月から台湾、2010年1月から香港との間で開始された。更に、最近では2020年4月からオランダとの開始を発表し、現在は26ヶ国の協定国がある。(外務省ホームページより 2022.8.1 閲覧) <https://www.jawhm.or.jp/>

台湾が1名である。

子どもの年齢は、7カ月から成人までさまざまである。家庭内での言語は日本語が7組、日本語と韓国語3組、韓国語が2組である。子どもの国籍は日本が4組、二重国籍が8組である。

### 3.7 研究課題

本研究では、大きく4つの研究課題を設定する。

1. 日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティはどのように形成されるのか。
2. 世代別にみる日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成はどのように異なるのか。
3. ジェンダー(父が韓国人、母が日本人、父が日本人、母が韓国人)の違いによる日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成はどのように行われるのか。
4. 留学や移動の経験による日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成にどのように影響をもたらすか。

## 第4章 日韓国際結婚家庭の変遷と現況

### 4.1 日本における日韓国際結婚家庭の変遷

鈴木(2000, 2008)は日本の「国際結婚」変遷を4つ(明治時代初期から1986年以降)の時期に分類した。日本人の「国際結婚」は、日本人と外国人の結婚が法的に認められ、太政官布告第103号(内外民結婚条規)が布告された、明治6年(1873年)に始まった(それまでの「国際結婚」は正式な結婚ではなかった)。しかし、歴史社会学や家族社会学の視点から研究している嘉本(2008a)は、国際結婚がいかに関政治的文脈や時代背景により変化してきたかを考察し、第Ⅰ期(1965～74年)から第Ⅴ期(1998～2007)に区分している。一方、賽漢卓娜(2017:74)は、嘉本(2009)の分類に基づきながら、さらに2008年以降の国際結婚についてもその傾向を背景要因とともに検討し、新たに第Ⅵ期(2008～2015)を追加し提示している。

第Ⅰ期は、「国際結婚」は制度化されたが、血統重視のために歓迎されなかったし、外国人と結婚した日本人女性は国籍を失った。国際結婚は特殊なものであり、ごく一部の人に限られていた。第Ⅱ期は、終戦後、占領軍として日本にやってきた外国人男性と日本人女性との間で結婚が行われるようになった。1950年には、国籍法の改正により、日本人女性が外国人男性と結婚しても日本国籍を喪失しなくてもすむようになるが、その子どもは、父親の国籍(外国籍)しか取得できなかった(子どもは、父親が日本人か、母親が日本人で父親が不明か、あるいは、両親とも不明の場合に限り、日本国籍を取得することができた)。第Ⅲ期は、経済、文化、教育などの各方面で積極的な国際交流がおこなわれるようになり、1965年には、総婚姻件数の1%を超えるようになり、一般の人々の間にだんだんと広がっていく。しかし、周囲には必ずしも容易に受け容れられない場合も多かった。1975年頃の境に、「国際結婚」の主流が、日本人女性と外国人男性の婚姻から日本人男性と外国人女性の婚姻へと変化していく。また、1985年には、新国籍法が施行され、母親が日本人の場合でも子どもは日本国籍を取得することが可能になった。第Ⅳ期は、1986年、初めて、フィリピン人女性2人が山形県朝日町の農村に嫁いで以来、農村の日本人男性とアジア人女性との国際見合い結婚が急増していく。他方、国際化に伴い、「国際結婚」も比較的にならぬ形でおこなわれ、受け入れられるようになる。日本人男性と外国人女性の国際結婚が1985年から急激に増加し、国際結婚全体の60%以上にのぼった(佐竹2006)。第Ⅴ期は、1992年にフィリピンやタイとの国際結婚件数が公表されて以降、中国、フィリピン、韓国・朝鮮、タイの4カ国の女性が、割合は変化しながらも、常に85%以上を占めている(高谷2015:215)。第Ⅵ期は、第Ⅴ期の傾向が2000年代半ば以降も依然として続いている。第Ⅶ期は、2008年のリーマンショックや2011年の東日本大震災による影響(賽漢卓娜2017)によって、国際結婚が多かった時期の約半数ほどに減少している。日本における国際結婚の特徴として、日本人男性と外国人女性の国際結婚が多い点や、外国人女性の中でもアジア出身の女性が多く占めている点が明らかになった。

表 4-1 日本における国際結婚の変遷

	時期(年)	名称	特徴	関連施策	時代背景
第Ⅰ期	(明治時代初期～第二次世界大戦)	国際結婚のあけぼの	国際結婚は特殊なもの		血統重視
第Ⅱ期	(第二次世界大戦後～1960年頃)	国際結婚先駆けー“戦争花嫁”	子どもは、父親の国籍(外国籍)しか取得できない	1950年、国籍法の改正	
第Ⅲ期	(1960年頃～1985年頃)	国際結婚の拡大	母親が日本人の場合でも子どもは日本国籍を取得することが可能	1985年新国籍法 <sup>13</sup>	
第Ⅳ期	1986年～90	農村の国際見合い結婚と国際結婚の一般化	農村の日本人男性とアジア人女性との国際見合い結婚が急増		バブル経済期
第Ⅴ期	1991～97	国際結婚高水準維持期	男性の国際結婚横ばい	入館法改正	バブル崩壊期
第Ⅵ期	1998～2007	国際結婚再上昇期	男性の国際結婚激増	興行ビザの制限厳格化	失われた10年
第Ⅶ期	2008～2015	国際結婚退潮期	特に男性の国際結婚下落	国際法改正	リーマンショック、東日本大震災

出典：竹下(2000)、嘉本(2001, 2008)、賽漢卓娜(2017)を参考に筆者作成

## 4.2 日本における日韓国際結婚家庭の現況

2020年に厚生労働省が公表した人口動態調査によると、日本の国際婚姻件数(表4-2)は、1980年の7,261件から1990年の2万5,626件へと10年間で急増した。しかし、2006年以降からは、2008年のリーマンショックや2011年の東日本大震災による影響(賽漢卓娜2017)によって、国際結婚が最も多かった時期(2005年4万1,481件)の約半数ほどに減少している(表4-2)。

2020年における日本の婚姻総数52万5,507件のうち、夫妻の一方が外国人である件数は1万5,452件で、全体の3%となっている。夫が日本人・妻が外国人の件数は9,229件で、国際婚姻総数の6割を占めている(表4-2)。2020年度の妻の国籍別婚姻件数の多い順

<sup>13</sup> 平成20年12月12日、国籍法が改正(平成21年1月1日施行)され、出生後に日本人に認知されていれば、父母が結婚していない場合にも届出によって日本の国籍を取得できるようになった。(法務省 [moj.go.jp](http://www.moj.go.jp), 2022年7月16日閲覧)

では、中国 2,393 件(25.92%)、フィリピン 1,955 件(21.18%)、韓国・朝鮮 1,300 件(14.08%)、タイ 637 件(6.9%)となっていた(表 4-3)。しかし、新型コロナウイルスの影響により、2020 年度は中国が 2,393 件、韓国・朝鮮 1,300 件、フィリピン 1,955 件、タイ 637 件に減少していた。妻が日本人・夫が外国人の婚姻件数 6,223 件のうち、夫の国籍別に多い順では、韓国・朝鮮 1,575 件(25.30%)、米国 1,025 件(16.47%)、中国 629 件(10.10%)、ブラジル 255 件(4.09%)となっている(表 4-4)。

以上のように、近年日本の国際婚姻件数は減る傾向にある。一方、国際結婚家庭の国籍構成が多様化し、国際結婚家庭に育つ子ども、国際結婚家庭に生まれた子どもが増えている。厚生労働省(2020)が公表した人口動態調査によれば、1987 年から 2020 年まで国際結婚家庭に生まれた子どもは合計 56 万 6,895 人である。

2020 年における日本の出生総数 84 万 835 人のうち、夫妻の一方が外国人である家庭の子どもの出生数は 1 万 6,807 人で、全体の 1.9%となっている(表 4-5)。夫が日本人・妻が外国人の家庭の子どもの出生数は 7,720 人で、国際婚姻による出生総数の 5 割を占めている(表 4-5)。妻の国籍別子どもの出生数の多い順では、中国 2,358 人(30.54%)、フィリピン 1,466 人(18.98%)、韓国・朝鮮 1,176 人(15.23%)、タイ 303 人(3.90%)となっている(表 3-6)。妻が日本人・夫が外国人の婚姻による子どもの出生数は 9,087 人のうち、夫の国籍別子どもの出生数の多い順では、韓国・朝鮮 2,106 人(23.17%)、米国 1,439 人(15.83%)、中国 1,200 人(13.20%)、ブラジル 409 人(4.72%)である(表 4-7)。

日本では、国際結婚で生まれた子どものことを「混血」「ハーフ」「ミックス」「ダブル」「国際児<sup>14</sup>」などと呼び、呼び方が時代とともに変わっている。国際結婚で生まれた子どもをめぐるラベルの変遷については嘉本(2008: 145)が詳しい。

近年、日韓関係が冷え込んでおり、とりわけ歴史認識問題が深刻化している。敏感な外交・政治問題をはじめ、マスメディアの報道などが原因で、両国の国民感情が悪化する傾向にある。こうした現状は、日韓国際結婚家族、とりわけ、そこに育つ子どもにも影響を及ぼしかねない。日韓国際結婚家庭の子どもが自ら開示しなければ、周りは彼らが「国際児」であることに気づかないだろう。韓国にルーツをもつことが日韓国際結婚家庭に育つ子どもの文化継承、アイデンティティの形成にどう影響を与えるのか。子どもたちが自身の置かれている状況をどう捉え、どのように展望しているのか。本研究では日韓国際結婚家庭の親と子どもの言語とアイデンティティの問題を中心に二世代の声を拾うことにした。

---

<sup>14</sup> 国際児(intercultural children)は、国籍の異なる男女の間に生まれて子どもである。多文化児(multicultural children)と呼ばれる場合もある(鈴木 2001:10)。

表 4-2 夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数

年代	総数	夫妻とも日本	夫妻一方が外国	夫日本・妻外国	妻日本・夫外国
1970	1,029,405	1,023,859	5,546	2,108	3,428
1975	941,628	935,583	6,045	3,222	2,823
1980	774,702	767,441	7,261	4,386	2,875
1985	735,850	723,669	12,181	7,738	2,525
1990	722,138	696,512	25,626	20,026	5,600
1995	791,888	764,161	27,727	20,087	6,940
2000	798,138	761,875	36,263	28,326	7,937
2005	714,265	672,784	41,481	33,116	8,365
2010	700,222	670,015	30,207	22,843	7,364
2015	635,156	614,241	20,984	14,815	6,169
2020	525,507	510,055	15,452	9,229	6,223

出典：厚生労働省 統計情報・白書『人口動態調査』より筆者作成

表 4-3 夫妻の国籍別にみた「夫日本・妻外国」年次別婚姻件数

年代	夫日本・妻外国									
	総数	韓国・朝鮮	中国	フィリピン	タイ	米 国	英 国	ブラ ジル	ペル ー	その他 の国
1970	2,018	1,536	280	…	…	75	…	…	…	217
1975	3,222	1,994	574			152				502
1980	4,386	2,458	912	…	…	178	…	…	…	838
1985	7,738	3,622	1,766			254				2,096
1990	20,026	8,940	3,614	…	…	260	…	…	…	7,212
1995	20,787	4,521	5,174	7,188	1,915	198	82	579	140	990
2000	28,326	6,214	9,884	7,519	2,137	202	76	357	145	1,792
2005	33,116	6,066	11,644	10,242	1,637	177	59	311	121	2,859
2010	22,843	3,664	10,162	5,212	1,096	223	51	247	90	2,098
2015	14,815	2,268	5,731	3,072	939	199	44	278	83	2,201
2020	9,229	1,300	2,393	1,955	637	240	55	247	92	2,310

注：フィリピン・タイ・英国・ブラジル・ペルーについては1992年から調査しており、1991までは「その他の国」に含まれる。

出典：厚生労働省 統計情報・白書『人口動態調査』より筆者作成

表 4-4 夫妻の国籍別にみた「妻日本・夫外国」年次別婚姻件数

年代	妻日本・夫外国									
	総数	韓国・朝鮮	中国	フィリピン	タイ	米国	英国	ブラジル	ペルー	その他の国
1970	3,438	1,386	195	...	...	1,571	...	...	...	286
1975	2,823	1,554	243			631				395
1980	2,875	1,651	194	...	...	625	...	...	...	405
1985	4,443	2,525	380			876				662
1990	5,600	2,721	708	...	...	1,091	...	...	...	1,080
1995	6,940	2,842	769	52	19	1,303	213	162	66	1,514
2000	7,937	2,509	878	109	67	1,483	249	279	124	2,239
2005	8,365	2,087	1,015	187	60	1,551	343	261	123	2,738
2010	7,364	1,982	910	138	38	1,329	316	270	100	2,281
2015	6,169	1,566	748	168	36	1,127	235	344	115	1,830
2020	6,223	1,575	629	188	19	1,025	204	255	87	2,241

注：フィリピン・タイ・英国・ブラジル・ペルーについては1992年から調査しており、1991年までは「その他の国」に含まれる。

出典：厚生労働省 統計情報・白書『人口動態調査』より筆者作成

表 4-5 父母の国籍別にみた年次別出生数

年代	総数	夫妻とも日本	夫妻一方が外国	夫日本・妻外国	妻日本・夫外国
1987	1,346,658	1,336,636	10,022	5,538	4,484
1990	1,221,585	1,207,899	13,686	8,695	4,991
1995	1,187,064	1,166,810	20,254	13,371	6,883
2000	1,190,547	1,168,210	22,337	13,396	8,941
2005	1,062,530	1,040,657	21,873	12,872	9,001
2010	1,071,305	1,049,339	21,966	11,990	9,976
2015	1,005,721	986,642	19,079	9,459	9,620
2020	840,835	824,028	16,807	7,720	9,087

注：1) フィリピン・タイ・英国・ブラジル・ペルーについては1992年（平成4年）から調査しており、1991年（平成3年）までは「その他の国」に含まれる。

出典：厚生労働省 統計情報・白書『人口動態調査』より筆者作成

表 4-6 父母の国籍別にみた「夫日本・妻外国」出生数

年代	夫日本・妻外国									
	総数	韓国・ 朝鮮	中国	フィ リ ピ ン	タイ	米国	英国	ブラジ ル	ペ ル ー	その 他 の 国
1987	5,538	2,850	803	…	…	188	…	…	…	1,697
1990	8,695	3,184	1,264	…	…	161	…	…	…	4,086
1995	13,371	3,519	2,244	5,488	851	178	55	406	105	525
2000	13,396	3,345	3,040	4,705	736	142	51	397	85	895
2005	12,872	2,583	3,478	4,441	509	122	47	217	92	1,383
2010	11,990	2,129	4,109	3,364	380	135	46	230	103	1,494
2015	9,459	1,823	3,477	1,773	389	146	41	270	100	1,440
2020	7,720	1,176	2,358	1,466	303	165	48	285	106	1,813

注：1）フィリピン・タイ・英国・ブラジル・ペルーについては1992年（平成4年）から調査しており、1991年（平成3年）までは「その他の国」に含まれる。

出典：厚生労働省 統計情報・白書『人口動態調査』より筆者作成

表 4-7 父母の国籍別にみた「妻日本・夫外国」出生数

年代	妻日本・夫外国									
	総数	韓国・ 朝鮮	中国	フィ リ ピ ン	タイ	米国	英国	ブラジ ル	ペ ル ー	その 他 の 国
1987	4,484	3,039	287	…	…	641	…	…	…	517
1990	4,991	3,048	375	…	…	829	…	…	…	739
1995	6,883	3,281	716	83	22	1,171	183	130	76	1,221
2000	8,941	3,427	913	151	77	1,380	256	305	135	2,297
2010	9,976	2,502	1,225	180	98	1,754	441	362	145	3,269
2005	9,001	2,604	952	131	89	1,547	340	345	157	2,836
2015	9,620	2,387	1,247	234	73	1,480	395	432	172	3,200
2020	9,087	2,106	1,200	352	60	1,439	345	409	146	3,030

注：1）フィリピン・タイ・英国・ブラジル・ペルーについては1992年（平成4年）から調査しており、1991年（平成3年）までは「その他の国」に含まれる。

出典：厚生労働省 統計情報・白書『人口動態調査』より筆者作成

### 4.3 韓国における韓日国際結婚家庭の変遷

ハン・ゴンス&ソル・ドンフン(2006)は、韓国人の国際結婚の変遷を5つの時代区分からまとめた。また、馬越(1994)は韓国の教育政策の変遷過程を政権の変遷を軸に4つに区分し、政策の特徴を示している。本研究ではハン・ゴンス&ソル・ドンフン(2006)と馬越(1994)を参考にし、韓国人の国際結婚の変遷を述べる。

第Ⅰ期(1876~1909年:国際結婚のあけぼの)は、「韓日国際結婚」は日本の植民地政策による人口行動とともに行なわれた国際結婚である。国家的な統制と懐柔のもとで行なわれたもので「同和政策」の一方的な道具として使われた。また、1900年代初日本、ハワイ、中南米等の大規模農園の移住労働者も含まれている。

第Ⅱ期(1910~1945年:国際結婚のあけぼの)は、日本植民地期に土地と生産手段を奪われた農民や労働者が満州や日本本土へ移住した時期である。1932年に日本帝国主義によって作られた満州国へは、韓国人の集団移住が大規模に進められた。一方、日本本土へは主に労働者として移住した。「内戦一体」「内戦結婚」が奨励され、(戦前)在韓日本人妻の多くは「国際結婚」という認識なしに朝鮮人の夫と結婚していた。1937年の中日戦争から1941年に始まった太平洋戦争の間に多くの韓国人が日本の植民地に移住し、1945年8月には約230万人にのぼった。日本敗戦後は多くの移住者が韓国に帰還することによってその数が急減し、1947年の日本在住韓国人は59万8,507人になった<sup>15</sup>。

第Ⅲ期(1946~1962年:国際結婚の先駆け―「戦争花嫁」)は、1948年8月に大韓民国として独立を果たすが、1950年「朝鮮戦争」の期間中に発生した戦争孤児、軍人と結婚した女性やその子ども、学生などが養子縁組、家族再会、留学などの目的でアメリカやカナダへ移住した時期である。1950~64年に約6,000人の女性が米軍人との結婚をきっかけにアメリカへ渡った。また、約5,000人の子どもが戦争孤児、「混血児」、養子として、1945~65年に約6,000人の留学生が同地域に渡った。アメリカに渡った人のほとんどがそのまま定住し、本国の家族や親族をアメリカに呼び寄せた(Yuh 2002:23-24)。

第Ⅳ期(1963~1979:国際結婚の変化)は、海外留学や海外勤務等の経験を通して外国の男性や外国の女性と結婚する国際結婚が増加することにより、「戦争花嫁」という否定的なイメージが緩和される。朴正熙政権では「国際化」という、民族主体性を持つことを助長した。1965年には「日韓基本条約<sup>16</sup>」が締結され、植民地支配に対する賠償の代わりに「日韓請求権及び経済協力協定<sup>17</sup>」が締結された(吉澤 2005:151-153)。1973年には高校の第二外国語

---

<sup>15</sup> 1945年時点の在外韓国人(当時は日本国籍者)の数は、中国東北部(満州地方)160万人、中国本土10万人、日本210万人、ソ連20万人、欧州3万人である。合計403万人は、当時の全韓国人数の実に6分の1にあたる。

<sup>16</sup> 1910年に発効した日韓併合条約は「もはや無効」であることを確認し、日韓併合により消滅していた両国の国交の回復、大韓民国政府が朝鮮半島における「唯一の合法的な政府」であることが合意。

<sup>17</sup> 日本が3億ドル(当時の為替レートで約1,080億円)を日本の生産物や役務によって無償で提供し、または2億ドル(720億円)を貸し付けて経済的に協力する(第1条)ことを条件に、両国及び両国国民間の財産、利益、請求権に関する問題が「完全かつ最終的に解決されたこととなることを確認する」(第2条)である。

の選択科目に日本語が導入されることになる。導入にあたり、森田(1985:530)が、「韓国国民として主体性をもち、日本語を完全な外国語として学ぶ民族的な考えが成立していたと観察される」と述べている。この時期には対日政策による(戦前)在韓日本人妻の日本引き上げや一時帰国が奨励され始めるが、手続きが煩雑で実際は困難であった。これらの背景には日本経済の発展が大きく影響を及ぼしている。(戦前)韓日本人妻たちにとっても、ほとんどが貧困と差別と闘い中で、日本の発展が日本人としての誇りとなっている。

第Ⅴ期(1980～1990:国際結婚の拡大―統一教による国際結婚)は、統一教による国際結婚が増えた。1988年に6,500組のうち日韓国際結婚が2,639組である。1986年の韓国人と外国人との婚姻件数は2,705件で、1990年の婚姻件数は4,710件である。1985年の芙蓉会<sup>18</sup>の子どもたち2世の人数調査は1,117名(海外日系人協会、2000)となるが、そのほとんどは日本語を話すことができなかった。この時期は、韓国の国際化が進む一方で、(戦前)在韓日本人妻は歴史教科書問題、政治家の発言などに脅かされた。

第Ⅵ期(1991～現在まで:農村の国際お見合い結婚と国際結婚の一般化)は、1980年代から農村地域における未婚男性の配偶者探しが深刻な社会問題となった。この問題に対する対策の一つとして、1992年韓国と中国の国交が正常化したことから中国延辺地域の朝鮮族女性との集団お見合いが農村地域の自治体の斡旋によって行なわれた。1995年から韓国政府は、農村の独身男性と中国朝鮮族女性と国際結婚を推進し、農業村部の人口減少の危機を克服しようとした結果、国際結婚が増加した。とりわけ東南アジアからの移住女性との国際結婚の増加が著しい。1998年の日本大衆文化の段階的開放、2002年のワールドカップの日韓開催、インターネットの普及などによる情報化の拡大により、日韓の緊張関係は緩和傾向にあったと考えられる。これにより(戦前)在韓日本人妻の会「芙蓉会」も日本人という重荷からも解放され、あえて日本人同士が集まり、慰労する必要が減少したこと、また高齢化も原因となり現在は月例会なども開催されていない。

表 4-8 日韓国際結婚の変遷

	時期(年)	名称	特徴	関連施策	時代背景
第Ⅰ期	1876～1909年	国際結婚のあけぼの	国際結婚は特殊なもの		植民地政策
第Ⅱ期	1910～1945年	国際結婚のあけぼの	1932年に日本帝国主義により日本本土へ移住		内戦一体 内戦結婚

<sup>18</sup> 芙蓉(ふよう)会。朝鮮半島出身の男性と結婚し、戦後を韓国で過ごしてきた女性たちの集まり。

第Ⅲ期	1946～62年	国際結婚の先駆けー 戦争花嫁	1950～64年に渡っ て約6,000人の女性 が米軍人と結婚。		朝鮮戦争 <sup>19</sup>
第Ⅳ期	1963～79年	国際結婚の変化	1973年高校の第二 外国語の選択科目に 日本語が導入。	日韓基本条約 (1965)。	朴正熙政権 の「国際化」
第Ⅴ期	1980～1990	国際結婚の拡大ー 「統一教による国際 結婚」	国際結婚の増加		1988年ソ ウルオリン ピック開催
第Ⅵ期	1991～現在ま で	農村の国際お見合い 結婚と国際結婚の一 般化	1995年から韓国政 府は、農村の独身男 性と中国朝鮮族女性 と国際結婚を推進		1992年中国 と国交が正 常化。 1997年IMF 金融危機 1998年日本 大衆文化を 段階的に開 放。 2002年ワー ルドカップ。

#### 4.4 韓国における韓日国際結婚家庭の現況

韓国の国際結婚と国際離婚の状況は次の通りである。韓国統計庁の「国際結婚状況」(2021年)によると、国際結婚件数(1万3,102件)は総結婚件数(19万2,507件)の内14.6%の割合を占めており、依然高い水準を維持しながら推移している(図1)。外国人との結婚は10,300件で、前年比14.6%(-2,000件)減少した。外国人妻の国籍は、中国(27.0%)、タイ(17.7%)、ベトナム(14.7%)の順である。外国人夫の国籍は米国(31.0%)、次いで中国(18.9%)、ベトナム(10.7%)である。

国際結婚婚姻件数は新型コロナウイルス<sup>20</sup>の影響が主な要因と見られる2018年より55%減少(1万541件)している。外国人との婚姻は1万3,102件で2020年度に比べて2,239件、14.6%減少している。2021年度の婚姻件数(19万2,507件)の内、外国人との婚

<sup>19</sup> ソ連崩壊を受けて公開された機密文書によると、1950年6月25日にソ連のヨシフ・スターリン書記長の同意と支援を取り付けた金日成首相率いる北朝鮮が事実上の国境線と化していた38度線を越えて韓国に侵略戦争を仕掛け(国際政治史を専門とする五百旗頭真も奇襲と呼ぶ)勃発した。

<sup>20</sup> 新型コロナウイルス(英語: Novel coronavirus, nCoV)とは、コロナウイルス科オルトコロナウイルス亜科に属するウイルスのうち、医学上、公衆衛生上重要なものについて名付けられる暫定的名称である。

姻(1万3,102件)比率は6.8%で、2020年度(21万3,502件)より0.4%減少している。外国人妻の国籍は中国が27.0%、タイが17.7%、ベトナムが14.7%の順である(表4-9)。一方、外国人夫の国籍は米国が31.0%、中国18.9%、ベトナム10.7%である。2019年までにはタイやベトナム妻が増加していた理由としては防弾少年団(BTS)や「パクハンソ シンドローム<sup>21)</sup>」等の韓流<sup>22)</sup>の人気の高まったと分析している(YTN ニュース 2020.3.19)。しかし、タイやベトナム妻が減少した理由には新型コロナウイルスの影響がある<sup>23)</sup>。国際結婚の減少は、全国の結婚仲介業代理店の閉鎖にもつながり、2019年の379から2021年3月時点で354に減少した。

韓国人と外国人の婚姻件数は2017年に2万603件、2018年に2万2698件、2019年は2万3643件に達した。韓国の婚姻総数に占める国際結婚の割合は8.5%→9.7%→11.1%に上昇した。2019年度の全体結婚総数10件に1件が国際結婚であった。しかし、新型コロナウイルスにより、国際結婚は減少、新生児の数にも影響があった。国際結婚家庭では、年間約2万人の子どもが生まれる。全体的に出生回避の現象により、国際結婚世帯の新生児の数も2018年の1万8,079人から2019年の1万7,939人と0.8%減少した。しかし、これは同じ時期に国内の総出生数が7.4%減少したことと比較して低いレベルである。国際結婚家族の出産数の割合が全体の5.9%を占めている。

国際結婚の増加に伴い、多文化家庭の児童も年々増加している。韓国行政自治部の「外国人住民現況報告(2020年)」によると、「外国につながる児童<sup>24)</sup>」は27万5,990人である。また、その父母の出身国別による集計では、朝鮮族を含む「中国につながる児童」が最も多く(9万191人)、その次がベトナム(9万3,617人)、フィリピン(2万4,243人)、カンボジア(1万1,301人)の順である(表4-10)。集計上「その他」に含まれていたカンボジア出身者の子どもは、2010年から独自集計されるほど増加しており、これはカンボジアを対象とする結婚仲介業者が増えたことに起因する。

なお、多文化家族における子女の年齢別統計(表4-11)では、6歳以下が11万5,579(42%)人であり、7歳から12歳の小学生10万7,286人(39%)と合わせると全体の81%に上る。今までの多文化子どもの支援政策が主に幼児<sup>25)</sup>・児童を対象とする支援であったが、今後は多文化児童生徒の成長とその発達段階に合わせて中・高・大学生への支援を強化

---

<sup>21)</sup> 韓国のサッカー選手出身の監督。2017年よりベトナム代表監督。アジアでもサッカーの弱点として取り上げられたベトナム代表は、2018年AFC U-23カップ(準優勝)に続き、2018年ジャカルタ・ダナン・アジア競技大会(4位)でも、各試合でチームの歴史を最高の記録に更新し、新たな歴史を切り拓いた。2019年、東南アジアアジア競技大会(サッカーチームは22歳未満、国内オリンピック委員会が共催)で60年ぶりに優勝(出典:namu.wiki)。

<sup>22)</sup> 韓流(かんりゅう、ハンリゅう、英: Korean wave)とは、2000年代以降に東アジアで起こった韓国大衆文化の流行(出典:韓国観光公社, 韓流実態調査報告書, 2003)

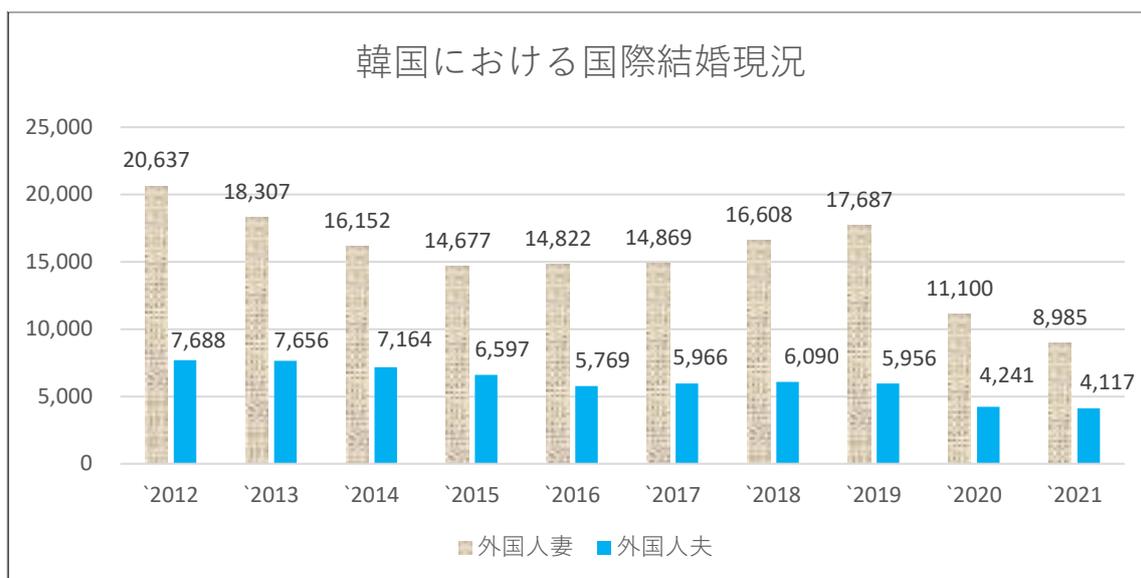
<sup>23)</sup> COVID-19の余波で、「国際結婚」は急落しました...韓国人と外国人の数が37.2%減少|ソウルの新聞(seoul.co.kr)(2022年7月17日閲覧)

<sup>24)</sup> 児童とは、十八歳未満のすべての者をいう。ただし、当該児童で、その者に適用される法律によりより早く成年に達したものを除く。(第一条) 児童の権利に関する条約: 文部科学省(mext.go.jp)(2022.7.31 閲覧)

<sup>25)</sup> 幼児1歳から小学校就学の始期に達するまでの者(分提出各種法令による児童等の年齢区分(mhlw.go.jp)2022.7.31 閲覧)

する必要性があることが統計結果から示唆される。韓国統計庁『韓国の社会動向』2019年度「多文化家庭の学生の実態及び発達の推移」では、多文化家庭の小学生から高校生までの実態が報告されている。多文化家庭の生徒の学校生活における困難は、学年が上がるにつれて徐々に減少し、性別ごとにやや異なる様相が現れている。多文化家庭の生徒の生活満足度は、小学6年生まで上昇するが、中等学校に進学した後は低下し続けている。

図 4-1 韓国での国際結婚現況



(出典：統計庁(人口動態年報：2021)より筆者作成)

表 4-9 出身国別の結婚移民者の推移

国別国際結婚件数[単位：件] 最近の更新日：2022-05-02(入力予定日：2021-06-30)

年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	
国際結婚総件数	29,762	28,325	25,963	23,316	21,274	20,591	20,835	22,698	23,643	15,341	13,102	
韓国男性+ 外国女性	22,265	20,637	18,307	16,152	14,677	14,822	14,869	16,608	17,687	11,100	8,985	
外国 女性 の 国 籍	中国	7,549	7,036	6,058	5,485	4,545	4,198	3,880	3,671	3,649	2,524	2,426
	ベトナム	7,636	6,586	5,770	4,743	4,651	5,377	5,364	6,338	6,712	3,136	1,319
	フィリピン	2,072	2,216	1,692	1,130	1,006	864	842	852	816	367	260
	日本	1,124	1,309	1,218	1,345	1,030	838	843	987	903	758	723
	カンボジア	961	525	735	564	524	466	480	455	432	275	137
	タイ	354	323	291	439	543	720	1,017	1,560	2,050	1,735	1,589
	米国	507	526	637	636	577	570	541	567	597	432	457
	その他	1,796	1,899	1,640	1,810	1,801	1,789	1,902	2,178	2,528	1,873	2,074
韓国女性+ 外国の男性	7,497	7,688	7,656	7,164	6,597	5,769	5,966	6,090	5,956	4,241	4,117	
外国	日本	1,709	1,582	1,366	1,176	808	381	311	313	265	135	140
	中国	1,869	1,997	1,727	1,579	1,434	1,463	1,523	1,489	1,407	942	777

男性 の 国 籍	米国	1,632	1,593	1,755	1,748	1,612	1,377	1,392	1,439	1,468	1,101	1,276
	カナダ	448	505	475	481	465	398	436	402	363	257	223
	オーストラ リア	216	220	308	249	254	197	203	189	178	82	77
	その他	1,188	1,331	1,572	1,931	2,024	1,953	2,101	2,258	2,275	1,724	1,624

(出典：統計庁(人口動態統計年報2021)より筆者作成)

表 4-10 出身国家別にみた子女の現況(2020年、単位：人)

国籍別	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
合計	107,689	121,935	151,154	168,583	191,328	204,204	197,550	201,333	222,455	237,506	264,626	275,990
中国 (朝鮮族)	18,669	31,404	33,186	39,278	42,294	43,890	35,439	36,610	38,090	39,642	41,149	41,529
中国	35,932	29,800	34,852	33,231	37,084	38,824	40,351	37,963	43,197	44,016	49,826	50,662
ベトナム	22,491	27,517	34,256	41,238	49,458	54,737	57,464	56,468	71,864	77,218	88,476	93,617
フィリピン	10,687	11,926	13,937	15,820	18,020	19,568	19,918	20,146	22,270	22,873	24,502	24,243
日本	6,838	5,734	14,510	16,237	17,806	18,185	7,773	9,485	6,886	6,930	7,858	7,932
カンボジア	-	2,554	3,565	4,690	5,961	6,777	7,016	6,909	9,448	10,037	10,850	11,301
モンゴル	1,681	1,807	2,250	2,468	2,802	2,952	2,771	2,719	3,132	3,212	3,944	3,678
タイ	1,563	1,711	2,082	2,427	2,663	2,767	2,254	2,543	2,609	2,875	3,607	4,389
アメリカ	683	821	1,207	1,422	1,697	1,855	6,140	5,874	4,899	5,581	8,417	9,708
ロシア	736	766	1,090	1,139	1,289	1,319	1,017	1,058	1,155	1,034	1,304	1,386
台湾	770	1,129	1,191	1,615	1,758	1,892	2,877	2,522	2,995	3,081	3,543	3,609
その他	7,639	6,766	9,028	9,018	10,496	11,348	14,530	19,036	15,910	21,007	21,150	23,936

(出典：行政自治部、「外国人住民現況調査報告書」)

表 4-11 多文化家族(結婚移民者・帰化者)の子どもの現況(2020年、単位：人)

年齢別の現況					
年齢	6歳以下	7～12歳	13～15歳	16～18歳	合計
人数	115,579	107,286	34,445	18,680	275,990
%	42%	39%	12%	7%	100%

(出典：行政自治部、「外国人住民現況調査報告書」)

表 4-12 多文化学生の現況(単位：人、出典：教育統計、4.1. 基準) 総括

人数 \ 年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
多文化学生数 (A)	82,536	99,186	109,387	122,212	137,225	147,378	160,058
全体学生数(B)	6,097,297	5,890,949	5,733,132	5,592,792	5,461,792	5,355,832	5,332,044
多文化学生比率 (A/B*100)	1.35%	1.68%	1.91%	2.19%	2.51%	2.75%	3.00%

(出典：2022 多文化教育計画(教育部)より筆者作成)

表 4-13 多文化学生の現況（単位：人、出典：教育統計、4.1. 基準）類型別

区分	2019 年				2020 年				2021 年			
	小	中	高	合計	小	中	高	合計	小	中	高	合計
国内出生	83,620	15,906	8,543	108,069	85,101	19,556	9,117	113,774	86,410	25,430	10,255	122,095
中途入国	5,163	2,153	1,381	8,697	5,068	2,488	1,575	9,151	4,969	2,801	1,657	9,427
外国人家庭	15,175	3,688	1,596	20,459	17,581	4,791	2,081	24,453	20,051	5,817	2,668	28,536
合計	103,958	21,747	11,520	137,225	107,770	26,835	12,773	147,378	<b>111,430</b>	<b>34,048</b>	<b>14,580</b>	<b>160,058</b>

（出典：2022 年度多文化教育計画（教育部）より筆者作成）

## 第5章 日韓国際結婚家庭のライフストーリー

本章では、日韓国際結婚家庭の研究協力者のライフストーリーインタビューを示しつつ分析を行う。主に言語とアイデンティティに関する内容を紹介する。まず、各家庭を簡単に紹介する。A~C、E、Fは韓国人女性で、日本人男性と結婚した家庭である。Dは日本人女性で、在日韓国人と結婚した家庭である。G~Lは韓国人男性で、日本人女性と結婚した家庭である。

### 5.1 研究協力者の概要

Aの長女はインタビュー当時19歳(大学2年生)であり、小学校の教諭が夢だったが困っている人の支援がしたくて、地域包括支援学科に入った。夫は日本人で、自営業者である。Aは韓国人であり自宅で英語教室を開きながら公民館等で韓国語も教えている。子どもが幼い時に日本に帰化している。次女は当時15歳であった。母のルーツである韓国、韓国の文化に常に触れて、韓国語を学びたいということで、大学で開設されている韓国語の授業を受講することになった。韓国は母の里帰りに合わせて年に1~2回は訪れている。「韓国語スピーチ大会<sup>26</sup>」等にも参加することができ、憧れの韓国へ留学等を考えていたが、国家試験も控えており、時間のロスと家族の反対もあり断念した。現在は社会人として働きながら地域貢献をしている。

Bは60代後半の女性。54年から60年まで、父の駐日韓国外交官としての仕事の関係で福岡に在住。72年に再来日し、東京の駐日韓国大使館勤務。79年、〇〇大学英米文学部を卒業後、総合企画会社「(株)〇〇」を設立。ジャーナリストとして、日韓の新聞、テレビや通信社に関わる。88年ソウル五輪公式スポンサー「松下パナソニック」リエージョン、90年日本衛星放送ハイビジョン番組「有田3部作」の制作を機に有田町に移住。94年韓国文化交流センター、96年〇〇クラブを設立。99年サントリー「地域文化賞」、2000年国際ソロプチミスト「女性栄誉賞」、01年国際交流基金「地域交流振興賞」、04年西日本国際財団「アジア貢献賞」など受賞多数。1991年から2004年まで〇〇県立大学で教える。現在は住居を〇〇市に移し、〇〇〇クラブ代表と日本基督教団〇〇教会牧師としての二つの顔をもって日韓交流の活動を行っている。Bの子ども(ゆ:仮名)は日本と韓国のつなぐ研究者であり、活発に活動している。

Cは31年前に言語交換ということで日本人夫と出会い結婚。家族からの国際結婚の反対があったが、日本で結婚生活を始める。5年間は夫の家族と一緒に住むことにより長男と次男の育児言語は日本語になるのだが、姑さんが留守の時には韓国語の絵本や童謡を聞かせたりした。夫は簡単な韓国語が話せて、Cの韓国にいる家族からの電話内容を理解している。

---

<sup>26</sup>「話してみよう韓国語」には中高生、大学生、会社員、主婦など、様々な年齢、職業の方々が参加しており、韓国語学習者層の厚さを物語っている。初級学習者はもちろん、中級以上の学習者も参加できる部門を設定しているので、学習者が学習歴に応じて繰り返しチャレンジすることもできる。

[https://www.koreanculture.jp/korean\\_speaking\\_2020.php](https://www.koreanculture.jp/korean_speaking_2020.php)(2022.9.22)

成人になった子ども達は、大学生の時に第二言語として韓国語を2年間学び、卒業旅行としてCと一緒に韓国を訪れる。Cは文化センターなどで韓国語を教えることになるが、日本語をもっと勉強したくて、日本の大学へ編入し、博士課程を修了する。現在は大学で非常勤講師として韓国語と韓国文化を教えながら生活している。

Dは、結婚前は旅行が大好きで頻繁に韓国や欧米を旅した。社会人になってから夫(在日三世)に出会い、結婚して18年目。15歳と13歳の娘をインターナショナルスクールに通わせている。小学生から子どもをハングル土曜学校へ通わせている。日本名を名乗るのではなく、夫の名前である〇を名乗り、娘達も夫の姓を名乗っている。子ども達の名前は日本でも韓国でも使える漢字を使って名前を付けている。Dの家庭では韓国の料理をよく作っている。

Eは日本に滞在して14年目。史学専攻、日本語副専攻、韓国語教育専攻。国際交流員として5年間勤めた後、日本人の夫と結婚。現在4歳の男の子を育児中。大学で非常勤講師として韓国語を教えている。子どもは日本名で国籍も日本。家庭内での言語は韓国語が90%、日本語が10%、親から子どもへの言語は韓国語。韓国にいる両親と韓国語で映像通話を子どもと毎日3分から10分くらい電話する。Eの夫は大学3年生の時に文部省大学生訪韓団<sup>27</sup>として10日間韓国語を訪問、大学3年生の時には1年間韓国へ留学。翌年には、月に3～4回程釜山を旅行した。専門は韓国の古代史である。

Fは1997年日本の姉妹大学に1ヶ月研修で来日。98年で同じ姉妹大学に1年間交換留学生として再び来日。大学(日本語専攻)卒業後、日本の〇〇市で国際交流員として3年間働きその後帰国。大学院へも進学するが中途辞退。警察公務員に合格して勤務。しかし、日本から韓国に戻り韓国で4年目を迎えてた時点で日本語をだんだん忘れていくことに危機感を覚える(自我を忘れつつある感覚)。2007年日本人の夫と結婚し、1年間京都で生活。現在は中学校1年生の娘と小学校3年生の娘の育児と、仕事をしながら、韓国の大学院(韓国語教育専攻)へも通いながら、日本生活19年目を迎え、〇〇市で生活している。子どもが幼い時には、1カ月から5カ月間、韓国にある子ども園へ入所させる程、母語継承のために熱心だった。現在、子ども達は韓国語の勉強も頑張っている。

Gは今年で来日11年目を迎える。中学生の時に親戚が中国人と結婚していて大学は中国へ進学するために中国語学院に通いながら準備をしていた。中国の大学では日本語を専攻し、香港では英語も2年間勉強した。在学中には南米を除いてほとんどの国を旅行していた。その後、韓国に戻りワーキングホリデーで韓国に来て旅行会社で勤めていた妻との交際が始まりその後妻と結婚するために来日した。サービス関係の仕事が続けるが、生まれた子

---

<sup>27</sup> 日本とアジア大洋州の各国・地域との間で、対外発信力を有し将来を担う人材を招へい・派遣し、政治、経済、社会、文化、歴史、外交政策等に関する対日理解の促進を図るとともに、親日派・知日派を発掘し、日本の外交姿勢や魅力等について被招へい者・被派遣者自ら積極的に発信してもらうことで対外発信を強化し、我が国の外交基盤を拡充する。対象者：【派遣】高校生～大学院生等、期間：10日間程度、規模：約3,100人(平成31年度当初予算)  
[https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4\\_007738.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_007738.html)(2022.9.4閲覧)

どもの顔も見ることが出来ず不規則な生活なので退職し、私立大学の職員になる。現在、日本人の妻と小2の娘がいる。妻は大学在学中に韓国の大学に1年間交換留学。その後ワーキングホリデーで1年間旅行会社に勤める。その後、日本に戻りサービス関係の仕事に転職し、Gと結婚。Gの家庭は家庭内では夫も妻も子どもも韓国語を使い、韓国料理をよく作っている。また、Gの韓国にいる親族と映像通話で韓国語を話している。

Hは2009年度から2011年3月まで日本への編入留学を経て、2011年から1年間カナダへ語学研修。2012年からWHで来日。2012年11月から現在まで会社員として働いている。Hの妻は2006年から2010年まで5年間、韓国の大学で国語国文学を専攻。日本に戻ってきて貿易会社で働き、Hと2年間の交際を経て2015年結婚。現在、結婚7年目を迎えている。共働きしながら5歳の娘を育てている。Hの家庭内の言語は日本語であるが、意識的に韓国語や韓国文化を教えようとはしていない。

Iは2009年日本に編入留学を通して妻に出会う。2011年から2016年までの交際を経て2016年に結婚式。Iは製造業の会社で日本へ輸出する会社に勤めていた。Iの妻は韓国の大学に1年間交換留学し韓国関係の仕事で日本で5年間働いた。2016年から2021年まで韓国に居住。2022年1月から、日本の〇〇市に永住(子供の教育)のために来日。現在4歳の息子を育児中。Iの家庭では日本語を話している。

Jは2009年9月から編入留学で来日。2012年4月から2017年3月まで私立大学に勤務。2017年4月から2018年9月まで〇〇市国際交流センターで勤務。2017年結婚。2019年4月から2020年9月まで日本関連の会社で勤め、韓国で在住。2022年10月から日本の会社に勤務。妻は高校生の時に1年間ニュージーランドに交換留学、大学ではタイ語を専攻し、大学卒業後は短大に入り直して保育士になる。3年間の保育士を経て、カナダで2年間WHを経験。日本に戻ってから私立大学の職員として働き、Jと出会う。現在は4歳と1歳の子どもを育てながら日本で生活している。

Kは2010年3月日本に二重学位<sup>28</sup>のために来日。専攻は経済学、副専攻は日本語。〇〇市の観光ホテルに1年半勤めた後、〇◇市で5年間営業と販売の仕事をした後、電機関連会社で勤務、2022年4月から〇△市本社で勤務中。看護師である妻と、6歳の息子、3歳の娘を子育て中。家庭内では日本語を話している。新型コロナウイルスの流行前には3カ月ごとに韓国を訪問していた。家では韓国の食事を好んで食べている。

Lは観光経営を専攻し日本語は副専攻。半年間日本の大学に交換留学。2011年に日本に国際交流員として来日。〇〇市で5年間国際交流員を勤めた後、◎◎市に移り、国際会議の企画業務を1年6カ月間担当。2018年から●●市に移り、出版業兼IT情報関係の仕事をしている。Lの妻は英語専攻で、短大の時に韓国語を2年間習い、卒業後にも3年間独学で勉強。JRで3年間、〇△大学で1年間務めた後、〇□図書館で司書として7年間勤務。その

---

<sup>28</sup> 二重学位取得プログラムとは 協定を締結している大学に在籍しながら、大学の3年生(あるいは2年生)として入学し、2年間(あるいは3年間)で卒業に必要な単位を修得すると〇〇大学および協定大学双方の学位が取得できるプログラム。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1415302.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1415302.htm)(2022.9.6 アクセス)

後、□○大学図書館で2年間働く。7年間の交際を終えて、2018年結婚。現在は育児休暇中、1歳5カ月（インタビュー当時）の娘が一人いる。家庭内では子どもの母語継承のためにもできれば韓国語で話そうと努力している。

## 5.2 日韓国際結婚家庭の子供のアイデンティティ<sup>29</sup>

本研究で扱う日韓国際結婚家庭の子供の文化的アイデンティティ<sup>30</sup>形成<sup>31</sup>はどのようになっているのだろうか。箕浦（1990）はアメリカに渡った子どもたちの文化的アイデンティティについて、学齢期の子どもにとって両親よりも仲間集団の方が文化エージェントとしての影響力が大きいと述べている。

また、子どもは親の「文化資本<sup>32</sup>」の枠の中で成長し、影響され、「文化的再生産」がなされるといふ。

中でも、子どもに身体化されていく親の思想、価値観といった「文化資本」をブルデューは「ハビトゥス」と呼んだ。それは幼児期から家庭教育において、子どもに無意識的の形跡され積み重ねられ、持続する習慣となっていく。「ハビトゥス」は「知覚、思考、評価、行為のシェーマ」として、当事者の主観的な意味世界を基礎づけ、行動の基盤になる。そして、「ハビトゥス」は個々の行動に反映され、行為者のアイデンティティも形成していく。

### 5.2.1 Aの子どものアイデンティティ

まず、Aのインタビューの内容から窺えるのは、学齢期の周りの友達からの影響を受けていることと、自分は周りの友達とは違う環境にいることに気づくことで自分のアイデンティティに揺らぎを感じていた。しかし、大学生になってからは韓流ブームもあり、Aのアイデンティティは児童期にゆらぎもあったものの大学生になってからは肯定的に変わってい

---

<sup>29</sup> アイデンティティ (identity) は、Erikson (1950) によって、広く普及した概念である。アイデンティティ問題は、歴史的な文脈や社会・文化的文脈のなかで考慮しなければならないし、アイデンティティの感覚には、「自信 (confidence)」が関係している。

<sup>30</sup> 箕浦 (1984) は、「文化的アイデンティティとは、国籍がどこであれ、日本であるとかアメリカ人であるとかということからくる深い感情、ライフ・スタイル、立ち居振る舞い、興味や好みや考え方を全部ひっくるめたもの」、鈴木 (2008) は、自分がある文化に所属しているという感覚・意識 (文化的帰属感・帰属意識) あるいは「ある文化・社会のなかに自分の居場所があるという感覚・意識」としている。したがって、文化的アイデンティティについても、生育歴や文化・社会のなかでの自分自身の位置づけやそれに対する「自信」が問題になると考えられる。

<sup>31</sup> 箕浦 (1990) は、アメリカにわたった日本人の子どもたちの文化的アイデンティティ形成過程を以下のように述べている。9～15歳は、文化化の影響を最も強く受け、対人関係の文化的意味が形成されやすい感受期である。8歳以前は、言語習得も早い短期間で第一言語が第二言語に対する優位を失いやすい。9歳以降は、第一言語に第二言語が付加されることが多い。学齢期の子どもにとって両親よりも仲間集団の方が文化エージェントとしての影響力が大きい。滞在4年以上と4年未満では文化的同化度が大きい異なる。

<sup>32</sup> ブルデュー (P. Bourdieu) の「文化資本 (cultural capital)」という概念は、広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。具体的には以下の三つに分けられる。1) 家庭環境や教育を通して各個人のうち蓄積されたもろもろの知識・教養・機能・趣味・感性など (身体化された文化資本)。2) 書物・絵画・道具のように、物質として所有可能な文化的財物 (客体化された文化資本)。3) 学校制度やさまざまな試験によって得られた学歴・資格 (制度化された文化資本)。

ることが推察される。A の次女はインタビュー当時 15 歳であった。年に 1～2 回程韓国の親族を訪問し韓国の文化に触れていた。しかし、生活全般が日本であり韓国は心のふるさとであると語った。Y はインタビュアーである。

Y：自分のアイデンティティに悩んでいたことはありますか？

A の長女：韓国のいどこに会いに行くのは年に 1 回で多くても 2 回ほどでした。周りの子は近くに親戚がいていいのに、なぜ私は周りに母親の親戚がいないのかと小さい時には不満でした。今は全然そうではないんですけど。韓流ブームになったのでプラスのイメージになりました。（2018 年 6 月 4 日、一回目のインタビューより）

Y：「自分は日本に近い韓国に近い」どちらですか？

A の次女：自分は日本寄りかな。韓国に住んでみたいけど現実的には難しいのではないのかと思っています。日本は生活のふるさとであり、韓国はこころのふるさとであります<sup>33</sup>。（2019 年 2 月 23 日 四回目のインタビューより）

## 5.2.2 B の子どものアイデンティティ

成人になった B の娘（ゆ：仮名）のアイデンティティの形成はどのように形成されているだろう。日本の文化と歴史について誇りを持ち、「日本人としてちゃんとしたい」、「自分は誰よりも日本人らしく日本人」、「良き日本人」でありたい。しかし、親と祖母が韓国人である。思春期の時に韓国人である母親と向き合っていくのも大変だろうから、医師を目指して勉強する。ところが、高校 2 年時に課外サマースクールに招待されていた、薩摩焼の陶芸家の沈壽官 15 代目<sup>34</sup>の講師からは「二つの国を背景に持っていてその国のことがわかるのは、それはすごく個性だからあなたにしか出来ない生き方がある」と言われ、そこに集まっていた 200 人の前で号泣してしまう。その後、進路は韓国語を学べる大学へ進学することになる。ゆは、結局サマースクールの集会で「その時がすごく明確に変わりました(進路変更と自分のアイデンティティ)」という。「知ろうとしなかった国、知らない国だったんです。韓国は。言葉もしゃべれないし、文字も読めないし、何考えているかよくわからない国」と言っている。よく知らない国だった韓国は、自分のことを知るために勉強しないといけない国であった。B の娘（ゆ：仮名）は自分のことを知るために韓国語が学べる大学へ進学し、日韓交流史、朝鮮通信使に関わる研究をすることになる。

Y：National.

ゆ：そうですね。私はそれが格好！エモーショナル (emotional) なのに。普通人間なので。そうか！すごいな。日本ってすごい国だなとしていててすごく自分の中で日本の歴史であったり、文化とかそういうのはすごくいいものだというふうにすごく考えていてて自分もそういう人間になりたい。自分もそういう日本人としてちゃんとしたいみたいな。いうところがあったんですけど、そこで母とアイデンティティにぶつかるわけなんですよ。つまり、自分は誰よりも日本人らしく日本人。なんというかな、良き日本人みたいな、なのに。ありたいのに。この人たちみたいに半分日本人じゃないな。親が韓国人だなあというところに。

あのう、思春期になるとぶつかる。で、どうしたらいいんだろう。でも、とはいえ、韓国に向き合うのも今から大

<sup>33</sup> 文字の下線は筆者による（以下、同様）。

<sup>34</sup> 第 15 代沈壽官（シム スグァン（심수관））は 14 代の長男で本名は一輝。薩摩焼の陶芸家の名跡。1983 年に早稲田大学を卒業、1988 年にイタリア国立美術陶芸学校を修了。1999 年、14 代在世中に 15 代沈壽官を襲名、現在に至る。鹿児島県日置市東市来町美山（旧・苗代川）に窯元を置く。http://www.chin-jukan.co.jp/introduction.html（2022.9.20 アクセス）。

変だなというのもある。だから、私高校生の時、本当医者になろうとずっといていた。それ、まったくそういう(日韓文化)に関わらなくていい。行こうと思って考えていたんですけど、高校生になった時に、とあるサマースクールに参加してそこで講師で来ていた先生が薩摩焼を作った「沈壽官(ちんじゅかん)」さんってするんですけど、そのかたが講師だったですね。沈壽官 14、15 代は母の親しい友達だったんですけど、私が生まれる前から私のことを知っている。で、その時に、私ハーフなんですけど。なんかどうやって生きていたらいいんですかと。

Y：悩んでいたんですね。

ゆ：そうそう。高校生、一番進路が分かれる時だったからですね。どうやって生きていたらいいですかね？というのは相談していた時になんか二つの国を背景に持っていてその国のことがわかるのは、それはすごく個性だからあなたにしか出来ない生き方があると言われた時に、その時、周りに 200 人くらいいたんですけど、そこで号泣しちゃって。すごくないたんです。その時。それで、そのサマースクールが終わって帰ってきて学校に文系になりますって。韓国語を勉強する大学に行きますって。変わったんですね。そうですね。

その時がすごく明確に変わりました。自分の中で結局今まで知ろうとしなかった国、知らない国だったんです韓国は。言葉もしゃべれないし、文字も読めないし、何考えているかよくわからない国、日韓関係も悪いですね。だからよく知らない国だったんですけど、自分を知るためにでもやっぱ勉強しないとイケないと思ったのが高校生の時ですね。(2022.2.16 インタビューより、原文日本語)

ゆは大学に進学して、現在は研究者として韓国と日本を行き来しながら活動している。しかし、現在も韓国語を使うことによって後ろめたさを感じているという。それは、「私やっぱり根っこは日本人だと思うんですけど。アイデンティティの比率で言うことですね。育ってきた人間の、私の人生の中で今までの比率でいうと日本人 100%という感じ自覚が長かったの」という。幼い時からずっと韓国語を使っていたわけでもなく、周りの国際結婚家庭の子どものように堪能に韓国語を使いこなせるわけでもなく、大人になってから韓国語を学び、韓国へ留学まで行って帰って来た。留学から帰ってきて通訳の仕事にも関わっているけど、「日本の他の子と比べたらものすごく韓国的文化とか私の中に内面化しているかもしれないし、韓国の人と比べるとそうでもないのかっというところもあって」と言い、韓国人の母親と韓国語で話しをしている時は「途中半端な感じが残っている」と述べる。

ゆ：ファッションハーフみたい。日本人でも、でも根っこは日本人だろうというところがあるんですね。なので、だげどなんか別にそんな無理してしゃべれなくてもいいのに無理してしゃべっているような。その後ろめたさは若干ありますね。本当にバイリンガル、本当の上手いバイリンガルだったらもっとしゃべるようになって。

Y：おそらく、韓国語をしゃべっている時には後ろめたさというふうにおっしゃってくれたんですけども、韓国語をしゃべる時に違う自分、違う人格、人格ではないけど、作られている人格という自分が出てくるのではないかなあ。そういう意識が働くから、かもしれないんですけど。

ゆ：つまり、そうあらねばというみたいなどころがあるんですよ。つまり、私やっぱり根っこは日本人だと思うんですけど。アイデンティティの比率で言うことですね。育ってきた人間の、私の人生の中で今までの比率でいうと日本人 100%という感じ自覚が長かったの。なので、どこかでそれが強いので、でも今は自分の中でちゃんと韓国語を自分の中のもう一つのなんていうのかな、こう国って受け止めようってという思いもあるし、今だって在日コリアンみたいにそういうこうトランスナショナル(transnational)な人たちの自分がして(研究)いることもあるので、自分自身もどこかで当事者としてそういうのを受け止めようという思いがあって。それはそうあらねばみたいなどころはあるのもっと言葉もやらなきゃなあとか。

その文化的なところも勉強しなきゃなああって。だから、私あんまりそのわからないんですね。身に付いているのかもしれないし、日本の他の子と比べたらものすごく韓国的文化とか私の中に内面化しているのかもしれないし、韓国の人と比べるとそうでもないのかっというところもあって。まだ、だからものすごく中途半端な感じが残っているというのはいくらでもあります。昔よりはよく(韓国語がしゃべれるように)なったけど、まだ中途半端なという感覚というのはいくらでもあります。(2022.2.16 インタビューより、原文日本語)

### 5.2.3 Dの子どものアイデンティティ

国際児にとって、最も自然なのは、どちらの文化（国）のアイデンティティをもつかではなく、「国際児としてのアイデンティティ」、すなわち、二つの文化（国）が混合（融合）したアイデンティティを形成することであり、国際児がそのようなアイデンティティを形成するためには、二つの言語力と二つの文化の知識を習得していること、そして、国際児を肯定的に受け入れる環境の存在が不可欠であることが指摘されている（マーフィ重松，2002；鈴木，2004）。Dの長女（M）と次女（N）はインタビューの内容からみると、鈴木らが指摘した融合したアイデンティティが形成されたといえる。

Dの長女（M）と次女（N）15歳と13歳である。思春期を迎え、自分のアイデンティティについても悩む時期でもあるが、彼女たちのアイデンティティはどのように形成されているのか。インタビュー内容から見てみよう。Mは母親が日本人で父親が在日韓国人3世である。Mは新型コロナウイルス流行の前には年に2回は韓国を旅行していた。学校はインターナショナルスクールに通っていて主に英語を使っていて、その次が日本語、その次が韓国語である。韓国語はハングル土曜学校<sup>35</sup>に小学生から通い始め、現在も通っている。日本に住んでいるので、価値観とか、考え方が日本よりになっていて、小さい頃からこの日本で生活したことしかないのでもの日本の考え方なので脳の中は日本だという。しかし、手足を使って韓国のことを学んだり触れたりする部分もある。学校では自分の国を代表する衣装を着たり、自分の国の文化をひろげるというイベントがあったりして、日本も韓国も体験している。Mは日本と韓国の国際児であるが、彼女は心に紫色ハート形を描いていた。「日本と韓国の国旗で青（色）と赤（色）がすごく特徴だったと思うんですけど、その色を混ぜると紫になるんですね。その時、心の中は日本のことも尊重しているし、韓国の子とも尊重しているので、どっちも混ぜ合って、こう紫（色）になったという形」と言う。また、韓国のドラマや映画やK-popを通して韓国の文化を友達同士でシェアすることにより、韓国語をもっと真剣に取り組んだ。韓国文化に触れる機会を多く取り入れている。自分のルーツである韓国と日本のことを尊重していてその二つの色が混じり合った場合は紫（色）になるというMのアイデンティティは二つの文化的背景に関する明確な自覚があるとともに、韓国に愛情や敬意もある。国籍についてはまだ二重国籍であり、国籍選択については、D（Mの母）は子ども達に選択肢を与えと言った。

M：韓国に旅行に行ったりすることが多くて韓国の街、文化や食べ物とか人々も増えたりすることあるんですけど、やっぱり本当の韓国人と比べると思考とか、その価値観とか、考え方が日本よりになっていて、小さい頃からこの日本で生活したことが、したことしかないのでものそういう面では日本が違うので日本的な考えとか、脳の中が日本のほうに重視とした感じになっていて日本だけです。脳の中は。

<sup>35</sup> 子供ハングル学校は日本の小・中・高等学校に在学中の九州地域在日韓国人学生たちをために毎週土曜日に運営される週末定時制学校となる。教育内容は韓国語、韓国歴史や文化などであり、ハングル学校の勉強を通じて韓国人としての民族アイデンティティの育成とともに、大学など韓国内の各種学校進学を準備することができる。

[http://fukuoka.kankoku.or.kr/icons/app/cms/?html=/jp/sub/int1\\_4.html&shell=/jp/layout.shell:51](http://fukuoka.kankoku.or.kr/icons/app/cms/?html=/jp/sub/int1_4.html&shell=/jp/layout.shell:51) (2022.9.19 アクセス)

M: 日本と韓国の国旗で青と赤がすごく特徴だったと思うんですけどその色を混ぜると紫になるんですね。その時、心の中は日本のことも尊重しているし、韓国のことも尊重しているので、どっちも混ぜ合って、こう紫になったという形。

M: 手足を使ってくれて韓国とのことについて学んだり触れたりしたので、真ん中は日本だとしても脳みそのようにですね。中は日本としても実際に自分が触れたことは、韓国のこともあるよと。韓国を象徴している手足の四つの部分だけ青を使っている。

M: 学校では自分の国を代表して自分の国を表現して衣装を着たり、自分の国の文化を広げるといったイベントがあったりして、そういうときに韓国のこともしたり日本のこともしたり。

M: 国籍については選ばなきゃいけないっていうことはしているんですけど、今の状態でこう確信しているというか決まったりはしていないんです。

M: 私は友達が6年生の時にいたんですけども。  
 その友達からもともと K-pop とか韓国のメディアのこととかは知ってたんですけど、その友達からそういう影響を受けて、K-pop にすごいハマったんですね。  
 そのおかげで韓国の歌とか聞いてると、歌詞を覚えたり、その単語を習ったりするときに、その K-pop を通じて韓国語はもっと上達するようになったりとか韓国語にもっと興味を持って、真剣に取り組んでいきたいなあというきっかけがすごいその友達にあってそれからは、今でも現在もそうなんですけど、韓国のドラマとか映画とか、あのうショーとか歌をとかすごい、そういう韓国のものに触れることが多くなった。

M: Instagram<sup>36</sup>とかあのう音楽を聞く時も必ず韓国の様子は入っていて。韓国の友達がいるとかその音楽が流れてきたりとか、そういう面で言うと1時間以上はかかる。(2022.3.5 言語ポートレートインタビューより、原文日本語、下線筆者)

D の次女 (N) は 13 歳で姉と一緒に学校に通い、ハンブル土曜学校にも小学生から通っている。頭の両サイドに韓国と日本の国旗を描いていた。その理由としては自分が「韓国と日本のハーフで、日本と韓国っていうことだったので」、また、韓国と日本という「食べ物や服」のイメージが強くて、韓国は韓服 (ハンボク) を日本は着物を描いた。韓流の影響もあり、学校内では友達の影響もあり、K-pop を聞くことが多いと言った。

N は自分のルーツが韓国と日本であることを自覚している。また、食文化や洋服を通して韓国と日本の文化的背景を持っている自分のことを表現しようとした。また、最近 SNS の発達により移動せずに韓国の文化を楽しむことが出来る。特に、友達同士で好きな K-pop の歌を聞いたり共有している。

N: 国旗二つに描いた理由は、えっと私は韓国と日本のハーフで、日本と韓国っていうことだったので、絵を描いたときにも服で表しました。

N: 韓国と日本を描いてと言われたら、まず食べ物や服をイメージが強くあって。あのう、韓国はハンボクを左に描いて、日本は着物で花は柄、日本はちょっと花が多い着物が多いと思ったので花にしました。

N: 私は学校で友達からの影響もあったり、歌が結構好きなので韓国の歌を聞くこともよくあります。(2022.3.5 言語ポートレートインタビューより、原文日本語、下線筆者)

## 5.2.4 G の子どものアイデンティティ

G の娘は小学校 2 年生で親と一緒にインタビューを受けた。質問に対して大抵韓国語で

<sup>36</sup> Instagram (インスタグラム、略: インスタ) は、メタ・プラットフォームズが所有するアメリカの写真・動画共有ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) であり、ケビン・サイストロム (英語版) とマイク・クリーガー (英語版) によって作成され、2010 年 10 月に iOS でサービスが開始された。https://about.instagram.com/ja-jp/(2022.9.20 アクセス)

答えてくれた。G の家庭内ではほとんど韓国語を話す。G の妻も韓国に留学と1年間旅行会社で勤めた経験もあり、家庭内では子どもとG の妻は韓国語で話す。子どもは自分のパパが韓国人であることを誇りに思っているし、自分が韓国人であることを自慢している。また、学校の音楽の時間に「メッセージ」という歌を歌うことによって好きな韓国語と中国語も英語もみんな(クラスメート)と一緒に歌えたことがとても楽しい思い出になっていた。

Y: 韓国語を話すのを好きなの? (原文韓国語)  
G: なぜ好きなの? 韓国語を話す時誰と?  
G の娘 (S) : 고모(叔母)、고모부(叔父)、할머니(お祖母さん)、할아버지(お祖父さん)、아빠(パパ)、엄마(ママ)  
S: 학교에서(学校で)韓国語を習っている。  
G: 誰と?  
S: みんな (クラス全員)。  
Y: 音楽の時間(メッセージ<sup>37</sup>の歌)に? 学校で韓国語を習っていて(歌っていて) どうだった?  
S: 재미있었어요 (面白かった)。안녕하세요? (こんにちは)、감사합니다 (ありがとう)、안녕히 가세요 (さようなら)。  
G: そんな(韓国語) のが出るとすべて知っているから優越感を感じたのでは?  
学校ではこの子が二重国籍であることを知っているんです。(娘が) 韓国人だと自慢していたんですよ。「私は韓国人です」と言ったよね。  
S: みんなが(私が) 韓国人(であることを知っている)…。保育園の時から。  
G: 保育園に通う時から友達に「パパが韓国人の人という韓国人だと言っていた」。その隣の小学校へ入学することになって(保育園からの) 友達も同じ小学校に通っているのでS ちゃんのパパが韓国人であることをみんな知っているかもしれないし、二重国籍であることを知っていると思います。  
Y: そうなんだ。友達から○○ちゃん韓国人だねと言われるとどんな気持ち?  
S: 気持ちいい。  
Y: ママとパパとS ちゃんと韓国語を話す時にはどう?  
S: なんとなく、いい(好き)。(2022.4.17 インタビューより、原文韓国語と日本語、下線筆者)

### 5.3 考察

A の長女は学齢期の周りの友達からの影響をうけていて、自分は周りの友達とは違う環境にいることにきづくことで、自分のアイデンティティにゆらぎを感じていた。しかし、韓流ブームもあり韓国の文化に触れることで、A のアイデンティティは肯定的に変わることがわかる。A の次女は1年に1~2回程韓国の親族を訪問していた。しかし、生活全般が日本であり韓国は心のふるさとであると語る。

B は高校生の時自分は100%日本人だと思っていたと語る。しかし、親が韓国人であることで日韓文化に関わりなく生きるためには理科系を選んで、医師になるためずっと勉強してきた。ところが、課外サマースクールに招聘講師として来られている先生から二つの国の背景を持っていて、その国のことがわかるのは、それはすごい個性だから、君にしか出来ない生き方があると言われる。以前は知ろうとしなかった国、知らない国、よくわからない国

<sup>37</sup> 小学生の音楽2、音楽でみんなとつながろう、p.7、メッセージ(題名)、杉本竜一(作詞、作曲)。教科書掲載曲一覧令和2年度版(2020年度版)小学校音楽教科書のご紹介(kyogei.co.jp)https://textbook.kyogei.co.jp/2020shou/songlist.html(2022.9.19 アクセス)

だったが、その後、進路を変更し、自分を知るために勉強するようになる。Bの子どもは高校2年生の分岐点で明確に変わったと語る。大学に進学し韓国語を学び、1年の韓国留学を終えて母親と韓国語で話す時には「(韓国語を)無理してしゃべっているような、後ろめたさは若干ありますね。本当にバイリンガルならもっとしゃべる」と語る。アイデンティティの比率で言うと日本人だと思って生活してきたことも長かった。しかし、自分が研究領域である日韓文化交流史を研究すればするほど自分は研究対象者であり当事者である。だからこそ、「そうあらねば」ともっと言葉(韓国語)もやらないといけない義務感にかられる。Bの子どもは「日本の人と比べれば韓国的文化は自分の中に内面化されているかもしれないが、韓国人の人と比べればそうでもない」と語る。Bの子どもは「中途半端な感じが残っている」と語る。Bは研究者でもあり、どこかで研究対象者でもあるなかで日韓文化交流のために自分が果たすべきことは多いと感じている。

Dの長女(M)は学校では自分の国の文化をひろげるイベントもあり、自分の国を代表する衣装を着用し、Mのルーツである両国を体験している。家庭内でも韓国の食文化に常に触れ、小学生からはずっと土曜ハンゲル学校に通っていた。Mは「日本のことも尊重しているし、韓国の子とも尊重しているので、どっちも混ぜ合わさって、紫(色)になった」という。Dの次女(N)は自分が日韓国際結婚家庭の国際児であることも自覚している。両国の国旗、食べ物、伝統衣装の文化的な要素を取り入れ自分のアイデンティティを表現している。

Gの娘は小学校2年生で親と一緒にインタビューを受けた。質問に対して大抵韓国語で答えてくれた。Gの家庭内ではほとんど韓国語を話す。Gの妻も韓国に留学と1年間旅行会社で勤めた経験もあり、家庭内では子どもと韓国語で話す。子どもは自分の父が韓国人であることを誇りに思っているし、自分が韓国人であることを自慢している。また、学校の音楽の時間に「メッセージ」という歌を歌うことによって好きな韓国語と中国語も英語もみんな(クラスメート)と一緒に歌えたことがとても楽しい思い出になっていた。Gの娘はまだ8歳でアイデンティティの形成段階である。生活の中で、韓国的な要素は家庭内の親との韓国語会話と親族との電話会話、食文化を通して韓国を感じている。また、好きな昆虫や食べ物の動画のみて、韓国語での名称を探している。

CとKの子どもには研究協力を得ることができなかった。E、H、I、J、Lの子どもはまだ小学校に上がらず自分のことについて語るのが難しく子どものアイデンティティに関するインタビューは難しいと判断した。

日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティの調査結果を以下の表5-1にまとめる。

表5-1 日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティ

	Aの長女 (24歳)	Aの次女 (19歳)	Bの子ども (28歳)	Dの長女 (15歳)	Dの次女 (13歳)	Gの子ども (8歳)
成長した(している)国	日本	日本	日本	日本	日本	日本
文化的アイデンティティ	日本と韓国	日本と韓国	日本と韓国	日本と韓国	日本と韓国	日本と韓国

家庭内の言語	日本語	日本語	日本語 と韓国語	日本語	日本語	韓国語
--------	-----	-----	-------------	-----	-----	-----

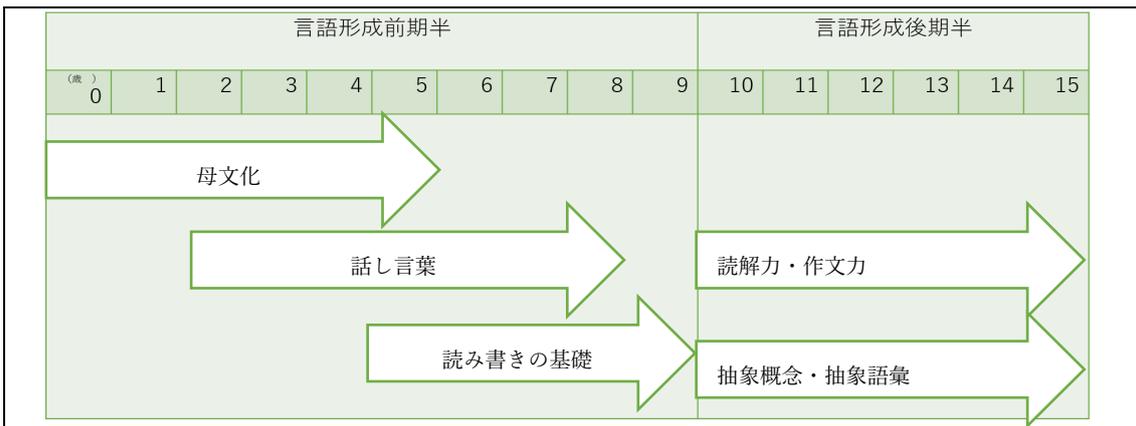
#### 5.4 日韓国際結婚家庭の母語（継承語）教育とアイデンティティ

言語学者スクットナブ・カンガス（Tove Skutnabb-Kangas）（1989）は、母語について4つの側面から定義している。第一、母語とは子どもが最初に学ぶ言語である。いわゆる生活の中で母親が話す言語である。第二、人が最も頻繁に使う言語である。第三に人が最も上手に使用できる言語。第四に、母語とはアイデンティティ形成のための言語である。佐伯（2013）は、家庭は子どもの社会化を進める第一の場であると同時に、子どものアイデンティティ形成に大きな影響を与える日常的なことばの実践の場であると述べている。

丸井（2012）は、アイデンティティは異文化と接触したときに自分と他者との違いを認め、他者と接触して行く過程でアイデンティティが形成されていくと指摘し、また、国際結婚家庭の場合家での言語使用の状況、それに伴う子供の家庭以外の場所における言語選択がアイデンティティの形成に影響すると述べている。そして、家庭環境における複雑な事情により異なる言語環境の間を行き来していると言語アイデンティティの分裂に陥ることもあれば、複数のアイデンティティを持つケースも少なくないと指摘している。つまり、国際結婚家庭の子どもたちは親の意思決定と行動によりどのような複数言語環境に置かれるかに左右される。

中島（2010）は、子どもの言語形成過程について、具体的な年齢を基準に「図 5-1」のように図式化して示している。そして、バイリンガル育成のために、それぞれの時期に会う動き賭けや関わり方について説明している。

図 5-1 子どもの言語形成期と第一言語・文化の習得(中島、2010)



この図によると、習得の順序は、母文化→話し言葉→読み書きの基礎→読解力・作文力/抽象概念・抽象語彙の順になる。尚、矢印でしめされている部分は、言語領域の核になる部分が発達する時期という意味で、発達はその以降も継続される。

「言語形成期前後」の4～6歳は幼稚園などで集団生活ができるようになり社会性が発達する。この時期は文字に対する興味も出てくるので、本の読み聞かせを通して活字に興味

があるということを認識することが大事である。そして、6～8歳は話し言葉が固まって読み書きの初歩を習得することが勧められている。また、この時期のこどもは文法的な規則そのものを理解できる時期ではない(中島 2010)。

「言語形成期後半」の小学校後半からは、読解力・作文力をはじめとし、抽象概念や抽象語彙を理解できる能力が発達する時期であるが、これらはもちろんその言語での正規の教育を受けることで可能になる。この時期は、言葉の分析力が伸びるために、文法規則を学んだり単語や漢字を取り出して覚えたりして、意図的な努力によって継承語を強めることができる。そして、13歳の中学生以降には、親よりも同年齢の仲間の影響の方が大きくなるので、よい学習仲間がいれば、継承語の学習に自ら意欲的に取り組む傾向がある(中島、2010)。

中島(2010)の論を継承語教育に当てはめて考えると、小学校前半時代までは、成人対象の外国語教育でよく行われる文法の説明や句型練習などは適当ではないということが示唆される。

また、二つの言語文化環境下で育つ子どもたちの言語能力の問題については、言語発達という側面と二言語併用という側面の両面から捉える必要がある。発達心理学分野における「言語発達」という側面からみると、岡本(1985)<sup>38</sup>は、言語発達には「1次的事物」と「2次的事物」があるという。「1次的事物」とは、幼児期に具体的に現実場面において、少数の親しい人との間で用いられる話し言葉である。いわゆる相手とのコミュニケーションを中心とした日常会話である。「2次的事物」とは、現実場面を離れた状況で不特定の相手に一方的に使われるもので、話し言葉だけでなく書き言葉もふくまれる。この「2次的事物」を使うことは、表現したいことはすべて事物の中に託さなければならないために言語を操作する力が求められる。

国境を越えた移動をする、または移動の経験がある家族にとって、子どもへの言語教育は親の関心事である。家族の言語政策 (Family Language Policy、以下 FLP) の分野では知見や議論が蓄積されてきた。FLP とは、家族における言語選択や家族観でのリテラシー実践に関連した、家族メンバーによる明示的かつ明白な、または暗黙的かつ隠然として言語計画と定義 (King, Fogle & Logan-Terry, 2008; Curdt-Christiansen, 2018), Curdt-Christiansen and Huang (2020) によると「家族が特定の言語をどのように認識しているかという『言語イデオロギー』、個人が言語を使って実際に行うことである『言語実践』、特定の言語を維持・発展させるために用いられる介入手段を意味する『言語管理』 (Curdt-Christiansen, 2020:175) という相互に関連する Spolsky (2004/2009) の言語政策の3要素で構成されている。松岡

---

<sup>38</sup> 岡本夏木(1985: 52)『ことばと発達』岩波新書

他(2022)は、「FLP ダイナミックモデル」に示されている外的要因<sup>39</sup>と内的要因<sup>40</sup>を援用し、FLP の影響要因を全 114 家族対象(タイで子育てをする日本人家族・泰日家族)の調査から学校選択から要因を分析した。日本人家族では子どものエイジェンシー要因と子の言語発達は親の責任という日本語習得という教育的ニーズを日本人学校に求めている実態が見えてきたと述べている。

#### 5.4.1 A 家族の事例

A の家族は育児言葉としては韓国語を使用したものの、ある程度の年齢になると家庭内でも家庭外でも日本語のみになってしまっていた。A は、日常の生活様式の中で食文化<sup>41</sup>は「韓国式」であるが、他人の前で韓国語を話すことに抵抗感を持っていると語っていた。それは日本のマスメディアの韓国に対する過剰な報道による周囲の人々の反応を敏感に感じるとることと、韓国語を話すことにより目立ってしまうこともあり、あまり使わなくなってしまうという。当然、子供達は日本語の環境で育てられることになる。スクットナブ・カンガスの四番目の定義を用いると社会常識、教養、生活観、価値観、世界観などに強く繋がっている母語がアイデンティティの対象として必要とされるのである。以下のライフストーリーインタビューで、A の子どもの幼児期の言語と親の母語教育と家族のコミュニケーションは日本語で行われることが見て取れる。しかし A の夫は、「A は日本語が堪能なため、家庭内ではほとんど日本語が話される環境ではあるが、子どもと A の夫は韓国語を学ぶための努力をしていることが推察される。

Y：育児の言語は何語でしたか？家庭での言語は何語ですか？

<sup>39</sup> 外的要因：社会政治的要因(所属する社会における教育制度や、保護者の所属する職場の規定による要因)、社会文化的要因(言語は文化の表れと見なし、その言語にはその社会において文化的価値があるとされていることによる要因)、社会経済的要因(その社会において、その言語を習得することによって喚起できる経済力による要因)、社会言語学的要因(その社会において、その言語そのものに価値があると信じられているために習得を狙う要因)、社会生活的要因(松岡・深澤 2022)(その社会におけるインフラや安全性、あるいは居住地や学費などの生活条件によって学校を選択し、その選択が言語選択につながる要因)。

<sup>40</sup> 内部要因：家族のつながり要因(保護者が、楽しい・つらいなどの感情や幸せな記憶などを言語によって共有できることが、子ども・親・祖父母のつながりを深めたり、相互理解ができたりするようになると考える要因、家族の一員としてのアイデンティティ要因(保護者が家族のルーツの継承を通して、子どもに国際家族であることや、家族の一員であることを認識してほしいと考える要因)、継承した文化要因(保護者が子どもに継承したいと思っている文化的慣習や社会的規範を考慮している要因)、子の言語発達は親の責任という意識要因(保護者が、自身の過去の経験、育ち、得た知識から、子の言語習得と進路に期待をし、それを支えるには保護者が関わらないといけないと意識する要因(学校を選択することで言語習得を図ることも、保護者が子どものことばを育てるために自身に課している責任であると捉える)、子どものエイジェンシー要因(家族の言語使用のパターンの決定や子どもの学校の選択など、子どもの言語使用環境を子ども自身が選択する要因)、言語能力評価要因(松岡・深澤 2022)(保護者が子どもの言語能力や言語使用状況を考慮する要因)、将来の移動可能性要因(JMHEART：2022)(家族の国の移動などによる将来の生活設計や、将来の移動が関わる教育の接続を考慮する要因)

<sup>41</sup> 黄(2002)は、食文化を社会集団全体の中で伝承されていくというよりも、家庭内で親から子供に伝承され、受け継がれる面が強い。また食文化は、居住地域ごとにその特性が変わり、食文化を共有する人々に、ある種の連帯感、つまりアイデンティティを持たせることになり、他の人々と区別する特性がある。さらに、食文化が持つ象徴性のため、それを共有する人々と密接な関係があり、彼らの意識を強く反映しているといえる。

Aの長女：小さい時は韓国語でした。小学校の頃、なぜ韓国語で育ててくれなかったのかと母と言い合いになった時がありました。気持ちは韓国語であったが、日本語に慣れてしまったので。韓国の親戚と会話するには応用会話ができなくて悔しかったです。(2018年6月5日 一回目のインタビューより、日本語、下線筆者)

A：目立つのがいやで、子供達にも外で韓国語を使うのをやめようと言った。家庭内では日本語でコミュニケーションをとっている。(2018年9月21日 二回目のインタビューより、原文日本語)

Aの夫：妻は日本語が堪能でそれに甘えてしまって家庭内では日本語でコミュニケーションをしています。が、本当に韓国語を習いたいです。車の中には韓国語のCDを聞いてこつこつやっていますが…そういう韓国の環境に入れば話せるだろうと思うけど。(2018年9月26日 三回目のインタビューより、原文日本語)

Y：韓国の文化にはどれくらい触れていますか？

A：通学の時間往復3時間でK-popを聞いているし、家では韓国ドラマを観ています。(2018年6月5日 一回目のインタビューより、原文韓国語、下線筆者)

Y：Aさんの家の家庭料理は何ですか？

A：わかめスープ(미역국<sup>42)</sup>、ブルコギ(불고기<sup>43)</sup>、トッポッキ(떡볶이<sup>44)</sup>等をインターネットのサイトで仕入れたりと、韓国の身内から送ってもらったりして常に韓国の食文化に触れています。(2018年6月5日 一回目のインタビューより、原文韓国語)

#### 5.4.2 B 家族の事例

Bの子ども、ゆ(仮名)は幼い時の言語は日本語であったと振り返る。幼い時には韓国語が話せない父親もいたので、家庭内では日本語で話していた。しかし、日韓国際交流のNPO法人を立ち上げ、活発に活動している母親の影響で家では常に韓国の文化の中で生活していた。

Y：幼い時お母さんから家庭内では韓国語もしくはどのように触れさせた。どういうふうな環境であったのかお聞きしたいです。

ゆ：うちの父は、私の父は日本人なんですけど、まったく韓国語をしゃべれない。  
母と祖母が日本語もしゃべれるので。なので、家の中は基本的に日本語でした。小さい時から。

Y：そうですね。

ゆ：母と祖母二人でしゃべる時、結構、韓国語しゃべっていたのを聞いていて覚えています。

Y：お祖母さん父方ではなく母方の祖母ですか？

ゆ：母方の祖母ですね。ずっと一緒に住んでいました。

Y：はい。

Y：幼い時韓国の文化とか、食文化とかあると思いますが、そういったものを含めてどういった感じだったんですか？

ゆ：うちはですね。結構あったと思います。うち母が地元の〇〇で日韓交流のNPOをやっているんですよ。

Y：そうなんですか。

ゆ：家に、チョコリが沢山あったりとか家に「한복(はんぼく)」沢山あるんですよ。

Y：そうですね。

ゆ：幼い時にあのおう、母とかお祖母さんが着せてくれたセクドンチョコリ着て撮った写真とかあるんですよ。それも

<sup>42</sup> 韓国の一般家庭でも「わかめスープ」はよく食べられる韓国家庭料理のひとつ。牛肉や貝類と一緒にわかめを煮込み、醤油やごま油で味を調える。辛くなく、あっさりした味わいで、年代・性別を問わず、多くの人に親しまれているスープ。 [https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2126](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2126)(2022.9.22 アクセス)

<sup>43</sup> 日本では「ブルコギ=韓国焼肉」というイメージが先行しているが、ブルコギとは「焼く」のではなく、醤油ベースのタレにつけた薄い牛肉とにんにく、野菜類、きのこ、春雨などを鍋で「炒め煮」にする韓国料理。 [https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2025](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2025)(2022.9.22 アクセス)

<sup>44</sup> 長い餅に牛肉と野菜などを入れて炒めた食べ物。韓国民族文化大百科事典(トッポッキ) <http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0017201>(2022.9.20 アクセス)

あるし、えっと、うちはキムチとかコチュジャンとか家で作っていたのでお祖母さんが小さい時から作っていたので。それを見ていたりとか食べたりとかというのをありました。

Y：そうなんですね。(2022.2.16 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

B は韓国語を話そうとしない夫もいたので、娘と一緒にいる時には日本語で会話をしたそう。しかし、B の母も日本で生活したこともあり、日本語も堪能であったため、B が仕事で忙しい時には子どもを母に預けていた。B の母は日本語で会話を交わすことになるのだが、聖書や賛美歌等は韓国語で教えることになる。また、日本語で会話はするのだが、内容は韓国的な儒教的な要素が随分入っていた。B の家庭は B と B の母との会話は 7 割が韓国語であった。それを聞いて育てられた、B の子ども、ゆは留学してから 6 カ月間は言語的な面で苦労はするが、その後は韓国語が聞こえるようになった。留学から帰ってからは B の説教を通訳したり、韓国からの観光客を案内するようになる。

Y：〇〇さんを育てる時には韓国語でしたのか？日本語でしたのか？

B：母親も日本語が堪能で。母親に預けていたんですね。私が仕事が忙しいので、母親が〇〇を日本語で育てていたんです。とにかく、〇〇パパもいるので、〇〇パパは韓国語を一言も話せないし、しようとしなないし、日本語しかつうじないので母親も日本語で話すのが…。(中略)。私と母とは韓国語で話していたんです。なるべく韓国語で…。6(韓国語)：4(日本語)、7(韓国語)：3(日本語)の程度で、韓国語で話していて、娘がいる時には日本語を混ぜながら話していた。最初からバイリンガルの環境だけど、韓国語を一生懸命に教えようとはしなかった。

日本人(娘)だから、日本語を正確にするのが正しい。しかし、一つ原則があったのが、変な言葉を話さないこと、(中略)家では母親と相談したのは標準語、敬語。最初、どのような言語が入力されるのが大事だと思っていて娘には韓国語やほかの言語を教えるのではなく、正確によい文章に完全な日本語をマスターするのが簡単だろうと。

Y：形は日本語であるんですが、中身は、魂は韓国語みたんですけど、儒教的な。

B：それはそうですね。表現は日本語で表現しますが、教えたのは母親と私が二人で(韓国的な要素を)入力したので。私が留守中に、母親は(韓国式で)娘を膝に座らせて、韓国的な感情的な部分を日本語で教えていたはずだし、私もそうだったし。

ところで、韓国語を教えようとはしなかったけど、私達(私と母)が話しているのを聞いて韓国語に対する理解も無意識の中にいたので、韓国へ留学に行ってから韓国語の学習が早かったのではないかと。1年留学して帰ってきたんですが、(教会の)説教通訳、韓国からの観光者講義をしながら回っていた。

B：うちの母親が韓国語をしっかりと教えないとね。娘に小学校高学年になった時に聞いたんです。英語をするか韓国語をするかと。そしたら、英語を先にすると言っていたので、日本語は敬語で正しい日本語を使うことを基本にして、日本語を正しく使うことであれば、他の言語も順序に学んでいけばよいと判断した。

英語を先に学んで、英検を準備するなり英語は勉強した。〇〇大学へ入学して2年間勉強はしたものの3年時に韓国の大学へ留学をした際には、英語ができれば大丈夫だと思っていたらしいだが、半年間は(韓国語で)苦労したらしい。

Y：しかし、6ヶ月後には(韓国語が)聞こえたようですね。(2022.2.16 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

ゆは大学に入ってから母親の国の言葉を学ぶことになる。幼い時はハングルが分からなくても韓国語が話せなくても困らなかった。韓国の親族に会っても韓国語を話せなくても困らなかった。しかし、韓国語を直接学ぶことにより、少しは変わったという。韓国語は習わなかったといえ、母と祖母が話していることをずっと聞いて育った。「賛美歌とかあれは家族、韓国の親族がしゃべった言葉、イントネーションとか、発音とか、やっぱり耳に残っているんですね。なので、自分が韓国語勉強し始めて一番おもしろかったのは日本の他の子

たちは、ハングルとか一から一緒に韓国語勉強してくるんですけど、私の中では音だけはあるんですよ。なので、その、音に文字とか言葉の意味をはめていくという感覚でした」と言う。本人は幼い時、韓国語を話さなかったが、大学を入学することになり、母の話す韓国語を学び、留学が終わってから、自分が韓国語を話しているということにとっても嬉しい感覚だったという。また、(韓国が) 今まで知らない国だったのが、言葉がわかることでいろんなことが見えるように、聞けるようになった。韓国の親族達とも今までは心理的な距離感<sup>45</sup>があったのに韓国語を話すことにより縮まった感じを覚えた。韓国語を話すことで(私自身を)認められているような感じだった。しかし、幼い時から韓国語を使いこなしている日韓国際結婚家庭の子ども達から見れば遅れているという。さらに、韓国語を親と話す時には(自分のことが) 偽物のような感じが時々すると言った。太田(2022)は、主に言語文化的に異なる地域に移動した後の「継承語との距離感」について、ある言語との距離感を分析する際には言語能力のほかに、使用頻度や、個人内における言語カテゴリー、さらには使用相手との関係性を踏まえた使用感情や使用意義を考慮することで、より具体的にその「距離感」について分析することが可能になったことを示した。

Bの娘(仮名:ゆ)のライフストーリーから「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」の移動の3つの観点を貫く「移動とことば」の角度から捉えると、下記のようなになる。

まず、「空間の移動」からはみるとBの娘は大学生になり韓国で1年間留学を経験した。留学から戻り、研究のために韓国を複数回移動している。次に「言語間の移動」はBの娘は日本で生活していたころは、家庭内では日本語を使用していたが、家族会話(BとBの母親)で韓国語を耳にする機会があり、家庭内では韓国語も聞こえる環境であった。一方家庭の外に出ると日本語環境になり、自分は日本人だと思い成長ようになる。高校生の時サマーキャンプを通して同じ境遇にいる国際結婚家庭の子どもたちと自分たちの悩みを打ち明けることになる。キャンプではBの娘が進路を変える(元々は韓国と関わりがない医者を目指していた)劇的な講演を通して日韓交流の研究をする研究者になる。大学に進学につれ、大学での韓国語の授業を履修し韓国へ留学まで果たす。帰国してからは家庭内ではBと韓国語で話すようになるがBの娘は自分(韓国語を話す)のことをニセモノという。この「ニセモノ」ということばが今まで日本人として振舞ってきたBの娘(ゆ)の韓国語への距離感と言える。さらに、Bが牧師であるため教会には英語を話す留学生も出席していてBとBの娘は英語で話し留学生の悩みを相談している。Bの娘は日常的に3つ(韓国語、日本語、英語)の言語間の移動が見られる。

Y: あんまり関わりたくないと思っていたんですね?

<sup>45</sup> 川上他(2011: 66)幼少期より家庭内で日本語を使用したり、日本語を学んだりするが、日本語以外の言語の使用によって自分自身と日本語との間に距離が生まれる。ところが、その距離が日本に来て大学で日本語を学ぶことによって、新たな日本語を発見し、自らの中にある日本語や日本的なものを新しく捉え直すことになる。そうなると、来日前の「日本語との距離感」が来日後に変化していくことになる。

ゆ：そうですね。なんか面倒だな。言葉を勉強するのに面倒だなという。

Y：なるほど。

ゆ：私だから結局言葉がハングルをわからなくても韓国語しゃべれなくても困らなかった。結局、やっぱり日本人のコミュニティーに完全に生きていたし、母もおばあちゃんも韓国の親戚も結局みんな日本語をしゃべれるから、しゃべれなくても困らなかったというのが一番大きな理由ですね。

Y：韓国語に直接自ら学ぼうとしていたのは〇〇大学に入ってから？

ゆ：はい、大学に入ってから勉強始めました。

Y：そうなんですね。その、習ってからは韓国/韓国語をどう感じましたか？あのおう、おそらく韓国語はしゃべれなくても通じるそういう世界で住んでいたのが韓国語をお母さんがしゃべっている韓国語を自分が直接学ぶことによって少し変わっているとは思いますが。

ゆ：うん、うん。そうなんですよ。あのおう、一番大きかったのは…。あのおう、習わなかったとはいえ、小さい時にやっぱり母親と祖母がしゃべってる会話を聞いてたりとか、あと、うちのお祖母ちゃんはですね。お祖母さんはキリスト教の宣教師なんですけど、ので、小さい時に私にずっと韓国語の聖書の言葉を覚えさせようとする、したんですよ。だから、今からお祖母さんがいふからそれを覚えなさいと。(中略)例えば、賛美歌とかあれば家族、韓国の親戚がしゃべった言葉、イントネーションとか、発音とか、やっぱり耳に残っているんですね。なので、自分が韓国語勉強し始めて一番おもしろかったのは日本の他の子たちは、ま、ハングルとか一から一緒に韓国語勉強してくるんですけど、私の中では音だけはあるんですよ。なので、その、音に文字とか言葉の意味をはめていくという感覚でした。なので、本当になんかどんな言葉でもいいですけど。なんか「アチム朝」とかは聞いたことがあるんです。私の中では。意味が分からないけど、聞いたことがある言葉ではあった。それを要は初めて習うとこういうハングルでこういう意味なんだ。こういうのがわかってくるのでその意味では発音とか単語とかを勉強し始めるとすぐ覚えるのが早かったです。

Y：そうですね。耳がまだ覚えていたからでしょうね。

Y：今、大人になってから〇〇大学に行かれて、また、2年勉強(韓国語)して韓国に留学してかなりおそらく結構しゃべられると思いますが、お母さんと会話をするときには日本語なんですか？韓国語ですか？

ゆ：結構、留学終わってから半分くらい混ぜてしゃべれるようになりました。

Y：会話の中で…半分(日本語と韓国語)ですね。

ゆ：私も外で教会で韓国語の通訳したりとか母の(説教の内容)通訳を私がしたり。

Y：通訳でしたらもう上級レベルですね。

ゆ：すんなりという感じだったので。

Y：そうなんですね。

半分半分混ぜてしゃべる時はどんな感覚ですか？

ゆ：そうですね。あのおう、割りと留学してから終わったくらい一番韓国語を喋ったりしていた時は割と本当に自然に韓国語で時々喋っているみたいな時があってそれは私の中ですごく嬉しい感覚ですね。時々だから、韓国に留学した一年したんですけど、最初の頃から半年くらいはあんまり本当にわからなくて現地のスピードに慣れてなくて授業とかあんまりわからなかったんです。半年目に結構急になんですけど教授が何言っているのわかる。

Y：はい。

ゆ：その韓国語が韓国語として聞こえる。日本語として一回自分の中で翻訳しなくて聞こえるようになった。その時はすごく嬉しかったですね。で、それが結局自分の中での距離ともつながっていて今までわからない国とか知らない国だったのが言葉がわかるというだけですごくあのおういろんなことが見えるようになった、聞けるようになった感じは(嬉しい)。韓国の親戚とも韓国語でしゃべれるようになったので今までしゃべったことがない親戚と喋ったりとかもできるようになったので。それは向こうの親戚から私が認められた感じがすごくしました。

Y：そうなんですね。

ゆ：多分、今までは私が母が日本人と結婚したということにすごく反対していた。あんまり付き合いがなかったですよ。私自身もいとことかいるんですけどここに。叔父とか従弟とかいるんだけど。多分、どっか半分日本人。日本人だって思われているんですよ。だから、あんまりすごく距離を、心理的な距離をすごく感じていた。言葉がしゃべれるようになるとちょっとそれが縮まったかなあつていう感じが。認められてという感じがします。

Y：その輪にやっぱり仲間として入ったという意識を持つようになった。

ゆ：でも、ここ最近思うのはときどき家で母と日本語で、日本語と韓国語で混ぜてしゃべる時に。あのおう、ちょっと後ろめたさある。なんでかつという、先言ったみたいに私元々韓国語をネイティブにしゃべっていた人間じゃな

い。

Y: はいはい。

ゆ: ですよ。なので、私他に日韓ハーフの友達とかいるんですけど彼女たちすごく上手。で、彼女たちはなぜかという小さい時からバイリンガルで育てられた。すごく上手い子とかがいるんですけど、同じハーフだけど自分と時々比較しちゃっていて私はすごく遅れんですよ。だから、韓国語を勉強するのを韓国のこと知るのも遅れた人間なので。なんか今韓国語を親としゃべるという感覚がなんかちょっとニセモノのような感じがします。ときどき。  
(2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

### 5.4.3 C 家族の事例

C は夫の家族と一緒に住んでいたため、子どもへの育児言語は日本語になってしまったという。しかし、姑さんがいない時には、子どもに韓国語の絵本や童謡などを聞かせるということでCとのつながりを求めていた。Cの夫は韓国語の学びのためにCさんと出会っていたので韓国語を学ぼうとして努力していた。

Y: 家庭内では日本語でしたか?

C: 日本語。

Y: 韓国語を使う余裕はありましたか?

C: 余裕はなかった。

Y: (韓国人に) 誰かに会ったりそういうのはなかったですか?

C: その時代は周りに韓国人もいなく、国際電話代も高くして…。韓国語を使う機会がなかった。ところで、(韓国語を) 忘れたらいけないと思って1年後、子どもが生まれてから子どもとは韓国語で使わなきゃとおもっていた。しかし、姑さんがまだ言語が成立されてない年齢に韓国語は使わないでねと言われ、韓国語も使わずに、ずっと日本語で。

Y: 育児言語が母国語ではないとストレスとかはなかったですか?

C: いや、あったよ。本当に多かった。

Y: 子どもに日本語で育児をしたのですが、韓国語的な要素の本とか音楽とかは聞かせましたか?

C: 聞かせたよ。韓国へ行って童謡や絵本、童話の本を買ってきて姑さんがいない時に読ませたりしたよ。

Y: 姑さんが(韓国語を使うのを) 反対したの。

C: 韓国語を(子供に)使わないようにと。昔の人でね。

Y: ご主人は韓国語を学ぼうとしたのですか?

C: 韓国語を話したいということで私に出会ったので韓国語を学ぼうとしたの。初めて会ったきっかけも(言語交換) それだったし。今も(韓国にいる)弟/妹と電話でお話ししていると(私の韓国語を) について言ったり。

Y: あ、本当ですか?

C: 聞き取りはほとんど理解している。

Y: 読むこともできるし理解できるのですね?

C: うん、大抵難しい言葉はわからないけど、簡単な表現などは理解できるよ。

Y: 韓国に対する文化的なことや言語的なことに対して、相当受容的であり、韓国に対するイメージが相当ポジティブですね。

C: そうだね。(2022.3.8 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

### 5.4.4 D 家族の事例

D の家庭は、子ども達は15歳と13歳でインターナショナルスクールに通っている。子ども達は小学生の時からハングル土曜学校に通っている。家庭内では日本語を使っているが、Dは夫と結婚してから韓国語勉強を始め、家族旅行で韓国によく行くので使うようになった。また韓流の影響もあり、子ども達は韓国のドラマや映画を字幕なしで見たりしている。Dの夫は在日韓国人3世で、韓国での留学を終えて、韓国の企業で働いていたため韓国

語は堪能である。土曜学校の宿題は D が小学校の低学年までは面倒をみて、小学校高学年になってからは D の夫が面倒をみていた。現在、子ども達は学校の関係もあり、英語が優先になっているが、学校では韓国の歌が好きな友達（英語圏）がいて韓国語でいろんな韓国の文化をシェアすることが多くなり、韓国語を勉強する量も増えている。

Y：ご主人と結婚されてから韓国語は勉強されたんですか？

D：そうですね。あのう、主人は日本で育っているから第一言語は日本語なんです。その後、日本の大学を卒業してから韓国に留学しているので言葉として問題はないんですね。

Y：韓国語も出来るんですね。

D：はい、もちろん。

Y：なるほど。

D：その後、韓国の企業で働いていたので、ま、その時に、でも母国語ではないんですね。第二言語ですね。でも、生活するとか仕事をする分では支障はないくらいであって。私はどっちかというと旅行に行くので韓国語よりは英語の方が外国語として勉強した。日本の英語ですけど、やっぱり英語の方がいろんな国で使えるので英語の方を。主人も仕事柄韓国語と英語と日本語と混じって勉強していたみたいで、主人と出会って韓国に行くようになって短い韓国語の勉強をするようになりました。読み書きとかですね。

Y：読み書きで。一応読んだりとか書いたりとかすることは出来るんですね？

D：簡単なのは。

Y：家庭内で D さんとご主人さんとは主な言語は？

D：第一言語が日本語なので。

Y：なるほど。じゃ、お子さんたちは？

D：子どもたちは、えっと、小さい時は日本語はもちろん主で韓国語は聞いたりとかしていたんですけど幼稚園とか行き出したら完全に韓国語より日本語になってしまっ。うち幼稚園までは上の子が卒業するまでに日本の幼稚園行っていたんですけど、小学校に上がる時にインターナショナルスクールに入って今度は逆転して英語に、日本語で、韓国語。韓国語が3番目になって。でも、韓国語は映画をみたりドラマみたりするのは問題ないくらいで。

(2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

D は結婚前には韓国料理を食べていたけれども、直接作ったことはなかった。家族のために韓国の料理を作っている。子どもの学校がインターナショナルスクールということもあり、国際的な弁当は普通である。

Y：先ほど、食文化というものが出ましたけど、あのう〇〇さんはご自宅で日本のものも作りますか？

D：私も大好きなので結婚してから結構作って、結婚前から食べたことはいたけど、作ったことはなかった。結婚してからは子供たちに食べさせるし、主人も食べるので私が韓国の料理を覚えて結構作るようになりました。

Y：覚えていらっしゃるんですか？特に何を作って子供たちに食べさせているんですか？

D：えっとですね。今日はお弁当だったんですけど、今日はたまたま寒かったので子ども達がトッポッキ(떡볶이)食べたいと言われてトッポッキを持たせたり、週末は、この間はポッサム(보쌈<sup>46</sup>)を食べたいというから豚のかたまりを買ってきてポッサムを作ったりとか。

Y：ポッサムをお弁当にしたりとかしないんですよね？

D：お弁当はしなかったんですけど、週末家族と食べる時ポッサムが食べたいというから。

Y：私もポッサムは作らないんですけど。すごいですね。

D：結構、鍋(뚝배기<sup>47</sup>)とかも作るし。

<sup>46</sup> 「ポッサム」とは、茹でた豚肉(サムギョブサルや赤身など)を、キムチやニンニクなどと一緒に野菜に巻いて食べる韓国料理。韓国旅行「コネスト」[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2045](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2045)(2022.9.21 アクセス)

<sup>47</sup> 韓国の鍋料理。「チゲ」とは、韓国語で鍋料理の総称を指す。韓国旅行「コネスト」

Y：そうなんですか？結構…私はチヂミ(지집이<sup>48</sup>)かサムゲタン(삼계탕<sup>49</sup>)かもしくはチャプチェ(잡채<sup>50</sup>)とかキムパ(김밥)。

D：キムパ(김밥<sup>51</sup>)もよく作る。お弁当で。

Y：インターナショナルスクールでは、きのうある文献で読んだことがあるんですが、国籍がみんな違う子供が通っているからお弁当がインターナショナルだと。

D：そうですね。(2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

#### 5.4.5 E 家族の事例

E 家族は家庭内では韓国語を使うように決めている。E の夫は韓国に留学した経験がある。また、大学生と大学院生の時には距離的に近かった韓国を月に3～4回訪れていた。専門が古代史ということもあり日本と韓国について詳しい。E の家族は家庭内ではほとんど韓国語を使い、外でも E と子どもが話す時には日本語よりは韓国語の方が多い。子どもが YouTube 等を見ている際に日本語で声をかけられると「아빠는 한국말로 말해! (パパは韓国語で話してちょうだい)」と言う。今は E の子どもが(家族と)韓国語で話したがるし、E も E の夫も子どもに韓国語で話しかけている。

Y：〇〇君をどのように養育したいのか？親として意見を聞かせて下さい。

E の夫：家では韓国語、外では日本語で…。(2019年8月8日、原文日本語、下線筆者)

E：深く考えたことはないんですが、言語は今のように韓国語、日本語。家では韓国語をして外では日本語をして、本人が後で韓国語が嫌なら日本語でもいいし、本人が選択できるように、もし韓国に興味があるなら小学生になったら韓国へ一か月ずつ行って韓国で生活もしてみてもいい。他は健康でやさしく…。(中略)

Y：家では韓国語を外では日本語を守っていききたいということですね。

E：でも、本人がいやなら思春期になっていやならもう一度考えてみて。今は本人が韓国語をしたがるし私のも韓国語を…。一人で日本語の YouTube をしている時日本語で話しかけると「아빠는 한국말로 말해! (韓国語で話してちょうだい)」といいます。今は本人が韓国語でしようします。(2022.3.25 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

#### 5.4.6 F 家族の事例

F の家族は F が日本語を専攻、F の夫が台湾に留学経験もあり、台湾で生活したこともある。家庭内では日本語と韓国語を混合に使っている。F は一番目の子(中学1年生)は30%、

[https://www.konest.com/contents/article\\_search.html?s=0&q=%E3%83%81%E3%82%B2](https://www.konest.com/contents/article_search.html?s=0&q=%E3%83%81%E3%82%B2)(2022.9.21)

<sup>48</sup> 「チヂミ」とは、ネギやキムチなどが入る韓国式のお好み焼きのこと。主に朝鮮民主主義人民共和国(通称：北朝鮮)で話される「チヂミ」の名で日本では親しまれているが、韓国では油で焼いた食べ物全般を指す「プチムゲ」、または、小麦粉をまぶし焼き上げた食べ物を指す「ジョン」と呼ばれる。韓国旅行「コネスト」

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2190](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2190)(2022.9.21 アクセス)

<sup>49</sup> 「参鶏湯(サムゲタン)」とは、主に生後数十日の若鶏のお腹に、もち米や高麗人参(朝鮮人参)、なつめ、栗などを詰めて長時間煮込んだ韓国の伝統料理。韓国旅行「コネスト」

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2061](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2061)(2022.9.21 アクセス)

<sup>50</sup> 「チャプチェ」とは、漢字で「雑菜」と表記するように、韓国春雨のタンミョン、人参、きのこ、細切り牛肉など様々な食材を炒めて和えた韓国料理。韓国旅行「コネスト」

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2158](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2158)(2022.9.21 アクセス)

<sup>51</sup> 「キムパッ」とは、ご飯と様々な具材を海苔で巻いた韓国海苔巻きのこと、韓国語で「キム」は韓国海苔、「パッ」はご飯を指す。[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2189](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2189)(2022.9.21 アクセス)

二番目の子(小学校3年生)は20%程度韓国語を理解しているという。子ども達には言葉を学ばせるために、韓国の子ども園へ4~5カ月間、1カ月間入所させたり、いろいろな体験学習もさせてきた。すべては母語(韓国語)継承のためであった。韓国語を子ども達が出来ないと思っていたし、母のことを理解してくれるだろうし、とにかく韓国語で会話を続けるのは頑張ってきた。しかし、小学校に入ることになり子ども達はだんだん韓国語を使わなくなってきた。最近になってからは2カ月間毎日15分ずつ韓国語をFに教えてもらっていた。学校でも友達から「(ハングルを)教えて頂戴」、「韓国語をはなしてみて」と言われる。Fの基準からみれば子ども達は決して韓国語が上手なわけではない。しかし、友達からみればFの娘達は上手そうに見える。子ども達は韓国語を書いたり、話したりすることにより優越感をもっている。Fの夫の勧めもあり、一番目の子は3級を取得して、二番目の子にはTOPIK1級(初級)を受けさせようとしている。

Y: 家庭内でご主人との言語は日本語ですか?

F: 日本語。

Y: 子ども達とFさんの言語はどうですか?

F: 現在は、80%は日本語、20%は韓国語を使っています。

一番の子は(韓国語を)もっと聞き取れるので、その子とは30%は韓国語、70%は日本語、二番目の子は韓国語が20~30%。

Y: Fさんの育児言語はどんな言語でしたか?

F: 育児言語は私が(韓国と日本を)行ったり来たりしました。幼い時は、(保育園へ行く前は)2歳までは私が育っていた時は韓国語90%、パパと話す時には日本語、私とずっと韓国語でしゃべっていたが、保育園へ行き出して日本語を使い、韓国語と混ぜて話していました。

F: ところで、私は家で済州道の方言を使って話しているんです。子ども達には。

Y: 本当ですか?

F: 済州道で5カ月間住んでいて、一番目の子は済州道の方言を聞き取れるんです。語彙だけ少しことなるので。それで、私が済州道の方言を使うのを好きで外へ出かけて話す人と人はわからないので。(中略)

Y: 先生は一年に一回一か月滞在をして。

F: 毎年一年に一回。ある時は二カ月間子どもを連れて。その目的が純粋ではないが。

Y: 本当ですか?

F: (韓国へ)行ってこども園へ入れようとして行くのです。言葉を習わすために。

Y: よい目的ですね。

F: それで(韓国へ)行って、ある年にはソウルへ行って私が韓国語の研修を受けて子ども達はこども園へ通い、済州道(実家)へ行った時には、二番目の娘を産んで、(一番目の子を)こども園へ4-5カ月間通わせて。一番目の子が4-5年生の時には、二番目の子をこども園へ入れるために(実家に)行って二番目の子を一カ月間、入所させて。一番目の子と私は体験学習等であっちこっちを回っていたので、そういうことは夫がすごく配慮してくれました。

Y: (前略) Fさんがこのように努力したのは母語継承のためだったんですか?

F: あ、そうですね。韓国語を子ども達が出来ないと思っていました。私のことを理解してくれないだろうし、まずは、韓国語で会話を続けるのは頑張りました。しかし、学校へ入るとすべて(韓国語を)忘れてしまっただけで、私が(韓国語で)難しい言葉をしゃべると一番の子は理解できず。それで、娘との関係で誤解が生じた場合それを韓国語で説明したのですが、子どもがそれをわからずにいる。(中略)今は子どもが韓国語が上手になればいいという気持ちではなく、このくらい(韓国語を)しゃべることに感謝しようと。

Y: 子どもが中学校1年生、小学校3年生ですが、韓国語を学ぼうとして勉強したり、土曜ハングル学校通ったりしていますか?

F: ハングル学校があるけど遠くて。

F: それで、通わず、家で私が二番目の子を教えていたのです。二カ月間毎日15分ずつ。子どもも楽しんでいて、

好きだったので。しかし、私が大学院へ入学して余裕がなくなり。

Y：忙しいですね。

F：一番目の子も（ハングルを）教えてくれと習いたがっていたんです。冬休みの時に私が3週間、教えましたね。一番目の子も二番目の子もゲーム感覚で学んでいて楽しんでいましたけど、私が忙しく、最近一番目の子が（韓国語を）教えてくれと。

Y：学ばないのではなく積極的ですね。

F：それが学校で子ども達の友達が（ハングルを）教えてちょうだいと、韓国語を話してみととか。それで、私の基準からみれば子ども達の韓国語は下手ですが、（日本の）友達からみれば（Fさんの子ども達の）韓国語が上手なのです。クラスメートからみれば（上手）。

F：だから子ども達は韓国語を話すことに…。何と言ったらいいんだろう。

Y：優越性があるんですね。

F：はい。習いたがっていますね。私のことで忙しいのに、パパが一番目の子も二番目の子にもハングル検定<sup>52</sup>を受けさせようと言っていました。

Y：受けたんですか？ハングル検定試験を？

F：一番の子は3級を取得して、二番目の子はTOPIK<sup>53</sup>1級（初級）を受けさせようと。（2022.2.25 インタビューより、原文韓国語、下線筆者）

#### 5.4.7 G 家族の事例

Gは中国の大学で日本語を専攻して卒業している。また、香港では英語も2年間勉強していた。在学中に南米を除いてほとんどの国を旅行していた。Gの妻は大学在学中に韓国に留学、卒業してから韓国の旅行会社で勤めていた。現在Gは私立大学の職員として中国語も英語と使いながら仕事をしている。Gの妻は地域性のこともあり、韓国語を活かせる仕事は難しく会社で勤めている。Gの家族は基本家庭内では韓国語を使っている。韓国にいる家族と毎日映像電話で、韓国語で会話している。

Y：家では日本語も韓国語も使うんですか？（原文韓国語）

G：基本韓国語を使います。なぜなら韓国の家族（おじいちゃん할아버지、おばあちゃん할머니）と映像で毎日通話をします。その時に、韓国語を使うためには言語を使わないといけないので家庭内では韓国語を使います。

Y：（韓国語）教えたことはあるんですか？（原文韓国語）

G：別に韓国語を教えたことはないんです。（2019.9.18 インタビューより、原文韓国語、下線筆者）

Gの家族はGもGの妻もGの子どもも韓国の食べ物が好きでよく韓国食を作って食べている。しかも、有名な韓国の〇〇シェフの本まで購入していろんな料理にチャレンジして

<sup>52</sup> ハングル能力検定協会は1992年10月9日の創立から今年で30周年を迎える。韓国・朝鮮語検定では、日本で一番歴史が長く、唯一日本語母語話者のための検定試験。全国主要都市の会場と全国各地に準会場を設置。1999年9月に「特定非営利活動法人」として、東京都の認可取得。多数の高校、大学等で当検定資格を単位として認めている。2012年12月より1級合格者が通訳案内士試験の韓国語筆記試験免除対象になるなど、上級合格者の資格活用の幅が広がっている。語学教室の開講、講師就任、翻訳・通訳業、企業での採用条件としている。  
<https://hangul.or.jp/about/outline/>（ハングル検定能力協会、2022.9.19 アクセス）

<sup>53</sup> 韓国語能力試験(Test Of Proficiency In Korean)は、大韓民国政府（教育省）が実施する試験であり、韓国における大学や企業が唯一採択する韓国語（ハングル）資格試験。試験結果は、大学の教育課程の運営、奨学金支給、留学や就職など幅広く活用されており、世界90カ国で毎年40万人の韓国語学習者が受験している。  
<https://www.kref.or.jp/examination>（公益財団法人韓国教育財団、2022.9.21 アクセス）

いる。料理は G の妻が作るが韓国で留学と仕事の経験があり、考え方も韓国的なところもあり、韓国の食文化も好きでよく作っている。

Y：食文化はhowですか？（原文韓国語）

G：食べ物私の妻も韓国で住んだことがあるので、辛い物も韓国の食べ物もよく作るし、味噌チゲ(된장찌개<sup>54</sup>)、キムチチゲ(김치찌개<sup>55</sup>)もよく作るし全然抵抗感がないんです。

G：豆腐煮物(두부조림<sup>56</sup>)まで作るんです。私は料理に興味がないんです。最近〇〇シェフの本も買ってきていろいろとチャレンジもしているそうです。

Y：(奥さんが)考え方が韓国的で、2年間過ごしていた影響も大きいですね。

G：友達も多く、本人が韓国が好きで、韓国に留学も経験し仕事もしていたと思います。だから私と国際結婚もしているし。

Y：日本で住みながらGさんは韓国を感じているようですね。(2022.4.17 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

#### 5.4.8 H 家族の事例

H の家族は H が日本に留学経験が 2 年あり、カナダで語学研修を 1 年間している。H の妻は韓国のある大学で、5 年間国語国文科を専攻して韓国語を勉強した。現在、5 歳の娘を育児中である。子どもが生まれる前には H は韓国語を、H の妻は日本語をということで両方(両言語)発達するだろうと思っていた。しかし、なかなかできずに、娘に韓国語を教えようとすると逃げるし、韓国の絵本を読ませようとすると、本人が遠ざけようとするのがあった。フィッシュマン(Fishman,1991,2001)は、子どもを持つ家庭だけでなく、婚姻前の男女にも言語シフト(language shift：言語移行、言語交替)についての認識を持たせるべきだと主張する。言語シフトが起こると元に戻すのは至難の業なので、減算的バイリンガリズム<sup>57</sup>に陥らないためにも、早期から心得でいるべきだとする。H と H の妻は国際結婚家庭であるので子どもはバイリンガルになると漠然と思っていた。しかし、親である H 夫婦は共働きということもあり時間的にも余裕もなく、積極的に韓国・韓国語を教えるのは自分ではないと言った。それは、韓国語が自分の母語ではないからということである。現在、家庭内では韓国の家族と電話をする時に少し韓国語が話されるくらいである。

Y：あう、それに関していて家庭環境で国際結婚されているので日本語と韓国語を両方使っているのか？ご夫婦の間ではどんな言語を使っているのか？子供との関係ではどういう言語を使っているのか？ 教えて下さい。

H：あう、夫婦で、二人で会話する時にも日本語になっていて、子どもと(日本語で)99%くらいで。

H の妻：韓国語が出てくる場面では韓国に電話して画面を通して通話をするときに韓国語が聞こえてくるくらいで

<sup>54</sup> 「テンジャンチゲ」とは、テンジャンという荒くつぶした韓国味噌を煮込んだスープ料理。。

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2118](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2118)(2022.9.21 アクセス)

<sup>55</sup> 「キムチチゲ」とは、酸っぱくなった古漬けキムチと豆腐、ネギ、豚肉などを一緒に煮込んだ、ピリ辛の鍋料理。

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2111](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2111)(2022.9.21 アクセス)

<sup>56</sup> 豆などの煮込み料理のこと。 [https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2316](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2316)(2022.9.21 アクセス)

<sup>57</sup> 第二言語は習得するものの、それによって母語が喪失してしまう現象を指す(坂本 2014：5)

す。

H: でも、それが悩ましいのがあかちゃんの時はそれが韓国語なのか日本語なのかそもそも言葉がわからない時には、全然抵抗感が与えずに、普通に 할아버지(お祖父さん), 할머니(お祖母さん)と電話出来たのに、今はあのお自分のしゃべっている言語が聞こえてくると、なんかそれが理解できないわけですから、ちょっと KAKAO とかなんか電話することに距離感をちょっと感じている。正直になんか悩ましいことではありますね。正直に生まれる前はなるべくパパは韓国語で話しかけてあのお妻は日本語でしゃべれば両方発達するのではないかと思ったんです。なかなか出来ない。まず、私も反省するところが昔からはじめてなかったのもおもしろいながらも、結局、日本語しかつってなかったの、今更といいます、あのお遊びに韓国語を教えてあげようかとしても、逃げちゃったりしますよね。でも逆に気持ちの波があるみたいですね。先 할아버지 なんていった？とか韓国語ではこんなことなんていうの？とか聞いてくる時もあるので。

Y: インプットとしては(韓国の)絵本とか(韓国の)童話とかもしくは今 YouTube とか見せているんですか？

H の妻: 見せたりとか読んだりとかはしようとしていた時期はあったんですけど、やっぱりこれもやりたくないとか違うのみとなってやっぱり本人が遠ざげようというような感じになってそれでやっぱり聞かなくなる。そんなふうになってやっぱり日本語に戻ってしまうところですかね。

Y: ○○さんは国語(韓国語専攻)なので、結構韓国語を教える財源は沢山あると思うんですけど、それにも関わらずえっとインプットをしていないのは忙しいということですか？

H の妻: そうですね。やっぱりどちらかと言えば、あのお韓国語を教えるのは私ではないほうがいいという意識があるんです。

Y: 母語じゃないからですね。

H の妻: そうですね。なるほど

H: 自分の責任…。(2022.2.19 インタビュー、原文は日本語、下線筆者)

H も H の妻も子供には積極的に韓国と日本の文化を教えようとはしていない。H の妻は食物アレルギーがあり、一緒に食べられないものもあるが、韓国のピビンパやスンドゥブと一緒に食べたりしている。韓国と日本の伝統文化を積極的に教えようとはしていないのだが、「100 日の写真は韓服(ハンボク)着せて七五三の時は着物を着せてどっちも残しておけばいくいく子どもが大きくなった時にアイデンティティのなんか自分でわかりやすいのでは。なんか両方血が流れているので」と、H は両方のアイデンティティを受け継ぐ娘のために、100 日記念には韓国の伝統衣装を着せて写真として残している。

Y: ご家庭の中では食事とか文化的な面はどういうふう交流されているんですか？

H: あのお、どっちかという私が韓国の料理を作って食べて子どもと妻は別に他の食べたいものと食べたりそれがもしみんな一緒に韓国の料理が食べたいなら一緒に食べたり。子どもは和食も韓国の料理もピビンパ(비빔밥<sup>58</sup>)とかも一緒に食べているような気がします。スンドゥブ(순두부<sup>59</sup>)も好きだし。

Y: 遊びでは、例えばユンノリ(율놀이<sup>60</sup>)とかもしくはお玉も(日本も韓国もあるけど)旗揚げとかそういったもの

<sup>58</sup> 「ピビンパ」とは、ご飯の上に野菜や山菜のナムル(和え物)を彩りよく盛り付けた韓国を代表するご飯料理。韓国語で「ピビンパ」のピビンは「混ぜ」、パッ(파)は「ご飯」を意味。食べる前にピリ辛のコチュジャン(唐辛子味噌)を少しづつ加えながら辛さを調整し、スプーンでよくかき混ぜて食べる。

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2137](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2137)(2022.9.21 アクセス)

<sup>59</sup> 韓国語で「スンドゥブ(純豆腐)」[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2109](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2109)(2022.9.21 アクセス)

<sup>60</sup> 「ユンノリ」は、高句麗・百濟・新羅の韓国の三国時代に起源を持つ韓国固有の民俗遊び。日本のすごろくに似た遊びで、サイコロの代わりに「ユッ(윷)」という4本の木の棒を投げる。「ユッ」の表裏の組み合わせでコマが進む数が決まり、全て裏または表の場合は、もう一度投げるができる。韓国民族文化大百科事典

[http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Index?contents\\_id=E0042794](http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Index?contents_id=E0042794)(2022.9.21 アクセス)

もあるんですけど、そういった文化的な要素が入るものはいかがですか？

H: まったくそんなのを教えようとしたことがない。

Hの妻: そんな文化的な遊びだったりそういう遊び(日本の遊び) さえもあんまりやってない感じです。

Y: なるほどですね。

Hの妻: はい。

Y: それは何か理由があるんですか？

Hの妻: 何と言いますか自分が意識して頑張れば出来たかもしれませんが、それはおいて今までいろいろ別に子どもが先に興味を持っているものついてあげようと、まずここでは受け身という感じでここで意識的に何かを教えようとしたアプローチはなかったんですね。で、あのう例えば習いことも友達から何かを聞いてやりたいと言うならばそれでさせてみて続けさせてやってあげたり。伝統的な日本側でも日本のも韓国のも意識をもって教えようとするのがあんまりなかったんじゃないかなあ思うんですね。

Hの妻: そんなに国籍を意識したそういうのは特にしてないかもしれません。

Y: 子ども用の韓服(한복<sup>61</sup>)とかそういうものとか着せたりとか？

Hの妻: そうことはしたことがないかな。結婚の写真撮るの中で100日写真(백일<sup>62</sup> 사진)の時に娘は覚えてないんですが、ハンボクとか韓国で写真撮ってきたので、ハンボク着せてそれを残しておいたんですね。それを説明したことはないんですけどもうちょっと大きくなったらこれがハンボクという韓国の伝統衣装で日本の着物みたいなものだよとつもりではあるんですけど。それ以外はないんですね。

H: 100日の写真は韓服(ハンボク)着せて七五三の時は着物を着せてどっちも残しておけばいくいく子どもが大きくなった時にアイデンティティのなんか自分でわかりやすいのでは？なんか両方血が流れているので。(2022.2.19インタビュー、原文は日本語、下線筆者)

#### 5.4.9 I 家族の事例

I は日本で2年間留学を終え、韓国で8年間日本と関連がある製造業に勤めていた。Iの妻は韓国へ1年間留学の経験があり、韓国観連会社に5年間勤めていた。二人は韓国で結婚し、韓国で5年間生活することになる。しかし、2022年1月から子どもの教育のために、永住目的で来日している。韓国で日本でも家庭内の言語は日本語を使っている。二人は日本語を使うのが楽だと言っている。子どもは韓国で生活する際に祖父と祖母の話しは理解していて韓国語で返事などをしていた。

Y: 子どもが生まれる前にどんな言語を使っていましたか？

Iさんの妻: 日本語で。

Iさん: 日本語が楽で。

Y: 日本語で。Iさんが楽なんですか？それともIさんの妻が？

Iさん: 私が(日本語を)使うことに楽だし、お互いに会話が…。

Y: IさんがIさんの妻を配慮して日本語を使っていたのでは？

<sup>61</sup> 韓服(ハンボク)は、直線と曲線が調和を成す韓国の伝統衣装。女性用をチマ・チョゴリ、男性用をバジ・チョゴリと言い、北朝鮮では「朝鮮服(チョソノツ)」とも呼ばれる。日常生活で着ることはほぼなくなったが、名節や身内の結婚式など特別な日の儀礼衣装として親しまれている。韓国民族文化大百科事典

<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/SearchNavi?keyword=%ED%95%9C%EB%B3%B5&ridx=1&tot=31>(2022.9.21)

<sup>62</sup> 昔から、100が「成熟、完全」を意味する数字だと伝えられてきたため、韓国では出産や交際などの100日前や後に、物事がうまく行きますようにと願って、祝い事を行なう風習がある。「百日祝」には、無病長寿と幸せを願った縁起の良いペギルボツ(100日のお祝い服)を着せるのが慣わし。現在では、家族だけで質素に済ませる家庭が増えた他、現代的にスタジオで写真撮影をすることも一般的である。

[https://www.konest.com/contents/korean\\_life\\_detail.html?id=428](https://www.konest.com/contents/korean_life_detail.html?id=428)(2022.9.21 アクセス)

Iさん：配慮というより最初出会ったのも日本で出会ったし日本語で会話を交わして生活してきたのでずっと日本語を使うのが楽なので。  
Y：そうなんですネ。  
I：互いに言語勉強のためになるためには私が韓国語で会話を試みようとしたんですが、結局は日本語で…。  
Y：子どもが生まれてからもIさんも日本語を使ってIさんの妻も日本語をずっと使っていたんですね。育児言語が日本語であるんですね？  
Iさん：はい。そうです。(2022.2.15 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

#### 5.4.10 J 家族の事例

Jは2009年度9月から編入留学で来日。仕事も私立大学の職員や国際交流センターの職員を経て、2019年4月から2020年9月まで日本関連の会社に勤め、2022年度10月から日本で勤めている。妻は高校生の時に1年間ニュージーランドに交換留学、大学ではタイ語を専攻し、大学卒業後は短大に入り直して保育士になる。3年間の保育士を経て、カナダで2年間WHを経験がある。4歳と7カ月の娘を育児中。2019年4月から2020年10月まで韓国で居住。現在は日本で生活している。Jの家族の家庭内の言語は日本語である。2019年4月、2020年10月まではJの家族と一緒に生活していたため韓国語を使う機会もあり、家庭内ではJの妻も韓国語を使う努力をしていた。当然、Jの子どもも祖父と祖母が言っている言葉もわかっていた。しかし、2020年10月から日本で生活しているので、家庭内では日本語がメインになっていた。Jが韓国語の絵本を読んであげると、YouTubeで韓国語のものを流すと、「わかりにくい」からと「日本語がいい」と言う。Jは子どもと韓国語で話すことにより距離感を感じると言った。距離感をどこまで縮められるか、むしろ、その一番目の子どもとの距離が(韓国語で話すことにより)どんどん離れていくと自分とも仲良く出来ないし、韓国語に反感と抵抗を持っているのではないかと心配している。

太田(2022)は継承語と距離感を言語能力、使用頻度、個人内における言語カテゴリー、使用相手との関係性を踏まえた使用する際の感情や意義を主な考察要素とし分析を行った。Jが韓国語で子どもに話しかけると「わかりにくい」から「日本語でいい」と言われる。距離感をどこまで縮められるか、むしろ、一番目の子どもとの距離が韓国語で話すことによりどんどん離れていくと自分とも仲良くできないし、韓国語に反感と抵抗を持っているのではないかと心配している。Jは妻が韓国語を使用して家庭内で韓国語を使うのはよいけど、子どもが妻と接する時間が長いと、子どもと妻との絆も深いと思っている。妻が韓国語を話すことで子どもも面白く、興味を持ち話せるようになってきている。しかし、Jの妻はJが韓国語で子どもに話しかけることにより韓国語への理解も深まることになると思っているため、是非韓国語で話しかけてほしいと語った。

Jの家族はJもJの妻も留学の経験と日本と韓国を越えた移動をする、あるいはその移動経験がある。中島(2016)は文化の継承「親子の絆」を保持するべく「継承語教育はしなければならないもの」「子どもは継承語を話せなくてはならない」ということば観を有する。無論、親と子どもが情緒的に結びついている関係であるためには、親子が分かり合えることばが存在することは重要である。しかし、Jの家族のように継承語だけが親子の情緒的なつな

がりを形成するものではない。Jは子どもとの距離感を縮めるためにも第二言語である日本語を媒体として使っている。一方、Jの妻は子どもが韓国語も話してほしく、Jには子どもに韓国語で話しかけてくれることを望んでいる。

Y：家庭内の言語はどうなっていますか？  
Jの妻：日本語です。  
Y：〇〇ちゃんと〇〇ちゃんとJさんと話す時は？  
J：日本語です。(中略)  
Y：〇〇ちゃんとお話しは、会話する時は日本語がメインですか？  
Jの妻：そうですね。私はもう日本語です。あのう、韓国に住んでいた時はJさんのご両親が一緒だったので、自分がわかる韓国語で話したりとか結構ありました。  
Y：〇〇さん以外のハラボジ(할아버지)、ハルモニ(할머니)の言語が〇〇ちゃんの耳には届いているという環境だったのですね。  
Jの妻：(韓国に)住んでいた時には理解していて〇〇ちゃん。感動していたのです。  
Y：〇〇さんは姑さん舅さんとお話し、会話を交わす時には、韓国語だったんですか？  
Jの妻：そうです。韓国語ですね。  
Y：舅さんと、姑さんは日本語でお話しかけようとしなかったんですか？  
Jの妻：ほんとうに、単語で、おやつ食べなさいとか、あのう、そう言ってくれる時もありましたけど、勉強、言語(韓国語)の勉強を私に頑張ってくれという感じでした。  
Y：〇〇ちゃんはお父さんが韓国人であることを意識していますか？どんな感じですか？  
Jの妻：そうですね。わかっていますね。あのう、ハルモニ(할머니)、ハラボジ(할아버지)と電話する時とか韓国語で向こうで話される時、韓国語とか日本語とかもわかっている、でも、自分がやっぱり日本語で育ってしまっているの、日本に帰ってきてからずっと。なので、全然その努力の差が出来てしまって韓国語が全然わからなくなっちゃっているの苦手意識があるみたいですね。  
J：あのう、夜中はたまに10回~13回自分から絵本を読んであげたりしますが、その時は韓国語の絵本とか読んであげたりします。アニメーションとかYouTubeを使ったりするときは韓国語を見せたりするときもあったんですけど、前からずっとあったんですけど、最近韓国語を流すと日本語がいい。はっきり、(娘が)わかりにくいという自分も多分わかっているんです。韓国語はわかりにくい。内容がわかなくなっちゃった。  
J：自分と(娘)の距離があると。韓国語を話すパパは嫌だ=パパ嫌だというふうになっちゃってそういう考えがある。  
J：あのう、韓国語をしてもいいんですけど、自分が思う家庭内の過ごす時間。言語も大事ですけど。その間寝るまでにたったの4時間で韓国語を使ってしゃべって接する中で距離感をどこまで縮められるか。  
むしろ、その〇〇との距離がどんどん離れていくと自分とも仲良く出来ないし、韓国語に反感というか抵抗が出来てしまうんじゃないかと思って。むしろ、妻も韓国語を使ってその中で自分が少し使ってあげることは全然OKです。(〇〇ちゃんと)妻と接する時間はすごく長いのでそのやっぱり自分との絆よりはあると思うのでその関係のなかで妻が韓国語を話す自然に韓国語もおもしろいものなんだという、ちょっと話してみようという興味が湧いてくると自分は思っているんです。ただ、自分が韓国語を喋り続けるともう韓国語が嫌なんじゃなくて自分(ばば)との距離を置いてしまうという、そういうこともあって、自分は韓国語、妻は日本語というやり方はしないんじゃないかなと。  
Jの妻：私は全然いいと思うんですけどね、私はもっとパパが韓国語で話せば多分韓国語の一つ理解が深まると思って、ほしいなあとは思っているんですけど、なかなか。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

Jの家族は2年ほど韓国に住んだことがあり、Jの妻は韓国の食べ物にも沢山触れていた。好きな食べ物はサムギョプサル、ピビンパ、オリタンである。ジャージャー麺と小豆お粥と豆のそうめんは途中半端な甘さでダメだという。おやつとして食べたいけど、食事としての量も結構多くて困っていたという。食べる量が多いというのは韓国のもてなしであり、「情」である。Jの妻は日本に帰国してからは、たまにはあるけど、韓国食も作る。Jが作る料

理は中華料理が多い。

Y：家庭内の食文化はどうなっていますか？  
Jの妻：私がほぼ日本食のような感じですけど、でも、韓国料理もたまにします。  
Y：Jさん料理が上手なのでJさんは何か作りますか？  
Jの妻：たまに作るんですけど自分が作るのが韓国料理ではないんです。  
Y：何を作るんですか？  
J：チャーハンとか焼きそばとか作るんです。  
Y：中華が多いんですね。そうなんですね。  
Y：(韓国にいる時)食べ物とかは困ってなかったですか？  
Jの妻：食べ物はあの場合者もあれば合わないものもあれば。  
Y：合う物はこういったものがありますか？  
Jの妻：えっと、やっぱりサムギョブサル(삼겹살<sup>63</sup>)とか。あとう、ビビンバ(비빔밥)とか、カモのスープ(오리탕<sup>64</sup>)。  
Y：おりたん、おいしいんですね。  
Jの妻：結構好きなんですけど、えっと、合わなかったものは少ないんですけど、ジャージャー麺(짜장면<sup>65</sup>)。あれ、あずきのお粥(빈죽<sup>66</sup>)が苦手でした。  
Y：日本でのゼンザイとは違っていたんですか？  
J：食事があまいのが苦手なんです。  
Jの妻：なんか、そうだね。中途半端な味がダメです。食事系だけけど。  
J：豆のそうめん(콩국수<sup>67</sup>)も食べられない。  
Y：ちょっとあまいからかな。  
Jの妻：そうですね。  
J：あとう、不要な甘さとか。おやつなのか食事なのか  
Jの妻：おやつとして食べたいけど、食事としての量、量も結構困りました。沢山食べるという。  
Y：そうですね。日本と比べればかなりの量は多いとは思いますが。なるほどですね。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

#### 5.4.11 K 家族の事例

K は 2010 年 3 月二重学位<sup>68</sup>のために来日。専攻は経済学、副専攻は日本語。〇〇市の観

<sup>63</sup> 「サムギョブサル」とは、豚のバラ肉を使った焼肉で、赤身と脂身が3層になっていることから、韓国語で「サム(三)ギョブ(層)サル(肉)」と呼ばれている。牛焼肉よりも豚焼肉が人気の韓国で「サムギョブサル」は豚焼肉の中でも圧倒的な消費量を記録。国民的な人気を誇る焼肉として「韓国焼肉=サムギョブサル」と言われるまでになった。

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2042](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2042) (2022.9.21 アクセス)

<sup>64</sup> 「オリタン」とは、アヒルのダシが効いたスープに粉唐辛子とエゴマの粉、アヒル肉が入ったピリ辛鍋。

[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2066](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2066)(2022.9.21 アクセス)

<sup>65</sup> 「ジャージャー麺」とは、韓国風中華料理の代表格とも言える麺料理。韓国語で「チャジャンミョン」と発音。豚肉、タマネギなどをチュンジャンと呼ばれる黒味噌で炒め、水溶き片栗粉でとろみをつけたソースが麺にかかっている。[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2173](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2173)(2022.9.21 アクセス)

<sup>66</sup> 小豆を使ったお粥は世代を問わず人気。甘くない「パッチュッ」と、おやつ感覚で食べられる甘い「タンパッチュッ」の2種類がある。中でもセアルシムという白玉団子が入る小豆粥は、韓国では冬至(トンジ)の厄除け料理としても普及している。[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2138](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2138)(2022.9.21 アクセス)

<sup>67</sup> 「コングクス」とは、大豆やソリテという黒豆を原料に作ったスープで食べる韓国の冷たい麺料理。韓国語で「コン」は豆、「ククス」は麺を意味し、豆腐料理専門店や麺料理専門店で食べられることが多く、夏限定メニューとして提供するお店が少なくない。豆の香ばしい風味が広がる濃厚なスープは栄養満点。自然な甘みがあり、豆乳好きの方にもおすすめの韓国料理。[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2171](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2171)(2022.9.21 アクセス)

<sup>68</sup> 二重学位取得プログラムとは 協定を締結している大学に在籍しながら、大学の3年生(あるいは2年生)として入

光ホテルで1年半を勤めた後、◎◎市で5年間営業と販売の仕事をした後電機関連会社に勤めている。2022年4月から●●市本社で勤務中。看護師である6歳年下の妻と6歳の息子、3歳の娘を子育て中である。Kの家庭内の言語は90%以上が日本語である。妻は韓国のドラマや映画等はよく見ていて、韓国文化には興味があるものの、韓国語を積極的に使って会話まではしていない。韓国にいる家族と子ども達が電話をする際にはKさんが韓国語で通訳をする。新型コロナウイルス流行の前には、距離的に近いということもあり、3カ月に1回程度で韓国を訪れていた。一番目の子は韓国の家族との交流もあって、結構言葉も通じていたが、二番目の子は生まれて間もない頃に新型コロナウイルスの影響により、韓国へ渡航が出来なくなっていたため韓国・韓国語を接する機会がなかった。

Y: 奥さんは日本人なのですが、韓国語でコミュニケーションを取ったり韓国についてよい感情は持っているんですか？

K: 韓国、言語に関しては本人が韓国ドラマや韓国歌手やこれに関して関心が多くて韓国語を聞くのは聞けるんですが、話せることに関しては…私が留学生の時も感じましたが日本人の方がとてもシャイな方が多くて私の妻も同じく話すことに少し躊躇っているんですね。基本私が日本語を使っているのです。

Y: 家庭内では日本語を使っているんですね。

K: 普段90%以上（日本語）を使っています。

Y: Kさんが子ども達とお話しをする時にも日本語ですか？

K: はい、日本語です。

Y: 韓国のKさんお家族がいらっしゃると思いますが、韓国にいるお祖父さん、お祖母さんと孫との電話は（日本語か韓国語か）どのようにしていますか？

K: 電話する際には父親と母親は日本語が出来ないので韓国語で話す時が多く、一番の子どものはコロナの前だったため往来が多かったです。3カ月ごとに1回ずつ。

Y: 1年に3-4回は？

K: はい、1年に3-4回程。  
一番の子どもは（韓国の家族と）交流があって言葉も通じたりしたが、二番の子どもが生まれて間もない時期にコロナの状況になり韓国・韓国語を接する機会がなくなり…。一番の子どもは少しは韓国語出来るんですが、お祖父さんには私が通訳してお話しをしたり…。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

Kの家庭はKの妻が料理が上手で全般的に担当している。家ではチゲ、ピビンパ、石焼ビビンパ、ユッケジャンも作っている。外食でも韓国のレストランで韓国食を好んで食べている。3ヶ月に1回くらい韓国を訪れていて、韓国の文化を楽しんでいたのに新型コロナウイルスの影響により行けなくなっているのので街で韓国の食材を購入している。

Y: 家庭内で共働きなので時間が無いでしょうけど、家庭内で韓国的な要素、もちろん日本語を使っていると言っていますが、韓国的な要素や韓国的な文化とかそういったものはどのようにしているか？

K: 普段は日本スタイルで生活しており基本ベースは、妻が韓国の料理が食べたいと言っていると韓国の料理を本人（妻）が作っていたり、私が買い物をして買ってきたり、レストランに行って食事をするなり、そういうふう（韓国の食文化を）接しています。

Y: 韓国料理を作る場合は奥さんが作るんですか？Kさんが作るんですか？

K: 私は料理はしません。

Y: 留学生の時によくしていたのでは？

K: いいえ、私はしません。

学し、2年間（あるいは3年間）で卒業に必要な単位を修得すると〇〇大学および協定大学双方の学位が取得できるプログラム。[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1415302.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1415302.htm)(2022.9.6 アクセス)

K: 妻は料理が上手で…。普段は妻が料理を全般的にしています。  
Y: チヂミ、チゲとか食べるんですか？  
K: チゲ(찌개)もそうだしビビンバ(비빔밥)も石焼ビビンバ(돌솥비빔밥<sup>69</sup>)とかユッケジャン(육개장<sup>70</sup>)とかこういうふうに作ります。  
Y: そうなんですね。外食をする際にも韓国食を求めているんですね。  
K: たまに、気晴らしに福岡に行って韓国系のマートとか…。月に1-2回、2ヵ月に1回はショッピングもしています。そうですね。しょっちゅう韓国に行ったり来たりしたのですが、コロナの状況で行けなくなって…。だからものすごく行きたがっています。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

また、一番目の子どもの1歳祝いでは伝統衣装である韓服を子どもに着せ、親であるKさんもKさんの妻も着ていた。親戚や知人を招待して祝ったり、子どもの1歳の祝いをわざわざ韓国で開いたりすることにより、後に子どもへの韓国へのつながりの記録、経験をさせているように見える。しかし、最近韓国と往来する回数も減り、韓国に対する感情的な(熱い気持ち)要素は薄くなってしまったという。

Y: 韓服(伝統衣装)を着せたり、お正月になったら韓国の文化的な行事はしますか？  
K: 家ではそんなのしたことはありません。一番の子どもが1歳の時に韓国で。  
Y: 1歳祝いを韓国で。  
K: 結婚式は日本で、1歳祝い(돌잔치<sup>71</sup>)は韓国でしたんですよ。その時に、僕も韓服を妻も韓服を着て、一番目の子どもも韓服を着て。  
Y: 二番目の1歳祝いの時はどうでしたか？  
K: コロナの影響もあり、別に韓服を韓国から注文したりする余裕もなく、正直に申しますと韓国を往来する回数も減り、韓国に対する感情的な要素が薄くなってしまったんです。以前よりは…。  
Y: 往来がなく心的に遠ざかってしまったんですね。  
K: はい、そうです。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

#### 5.4.12 L 家族の事例

Lは観光経営と副専攻で日本語を専攻。2011年に日本に国際交流員として来日。〇〇市で5年間国際交流員を勤めた後、◎◎市に移り、国際会議の企画業務の仕事をして1年半した。2018年から●●市に移り、出版業兼IT情報関係の仕事をしている。Lの妻は英語専攻で、アメリカに半年間留学の経験があり、大学で韓国語を2年間習った。卒業しても3年間独学で勉強。JRに3年間務め、○△大学で1年間務めた後○□図書館で司書として7年間働く。その後、◎○大学図書館で2年間働く。2018年結婚。現在は育児休暇中、1歳5か月(インタビュー当時)の娘が一人いる。

<sup>69</sup> 日本からの観光客に定番なのが、韓国料理でお馴染みの「石焼(トルソッ)ビビンバ」。ジュージューと熱く焼かれた石焼の器で運ばれてくる。[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2137](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2137)(2022.9.21 アクセス)

<sup>70</sup> 「ユッケジャン」とは、細く割いた牛肉とネギ、わらび、もやしなどの野菜をピリ辛に煮たスープを指す。唐辛子入りの真っ赤なスープが特徴で、牛肉からとった出汁が効いたコクのある味わい。  
[https://www.konest.com/contents/gourmet\\_guide\\_detail.html?sc=2122](https://www.konest.com/contents/gourmet_guide_detail.html?sc=2122)(2022.9.21 アクセス)

<sup>71</sup> トルチャンチとは、初めての誕生日(満1歳)を祝う宴のことである。「トル」とは赤ちゃんが生まれた日から1年になる日のこと。「チャンチ」は「宴、パーティー」という意味。韓国ではこの日になると、親戚を始め、友人や知人を招待して「トルチャンチ」を開く。[https://www.konest.com/contents/korean\\_life\\_detail.html?id=1598](https://www.konest.com/contents/korean_life_detail.html?id=1598)(2022.9.21)

Lは家庭内では韓国語で話そうとしているし、意識もしている。ここは日本であるので自然に日本語を学習するチャンスがあるけど、韓国語はネイティブであるLが話さないといけないと思い意識して(娘に)声をかけている。Lの妻はできるだけ家では子どもに韓国語で話しかけている。簡単な言葉は韓国語で話しかけ、どうしても難しい場合は日本語で話しかけている。子どもは日本語も韓国語も話している。割合的に言うと韓国語の方が多く、Lの子どもが公園で同じ年齢の子どもに韓国語で話しかけているが、相手の子どもは理解できずにいた。Lの子どもが、最初に言った言葉は韓国語のパップ(밥ご飯)であった。最近は、二文字単語の韓国語を話している。例えば、ウィジャ(椅子의자)とかシクッタン(食堂식당)。パップ(ご飯밥)等である。Lの妻は大学で2年間韓国語を学び、1年間は仕事をしながら聴講生として韓国語を学び、その後Lに出会って、韓国語を教わり、独学で韓国語を勉強し続けている。さらに、家にテレビがないため、韓国のラジオをずっとつけてヒアリングをしている。

Y: Lさんの場合は、日本語の方が多ですか? どうですか?

L: そうですね。基本コミュニケーションは日本語で、してあって出来るだけ家庭内では韓国語であの話をしようと努力してるほうで、意識しているほうですね。

Y: やっぱりそれは国際交流員をされたからって言うことですか?

L: 子供がやっぱり日本の環境ですから。日本語はほっといても自分であのチャンスがたくさんあると思うんですけど、やっぱり韓国語などは、その後、喋るけど、意識してネイティブの私が喋ってあげないと取り組み意識して自分のほうが韓国語で声掛けていますね。という状況です。

Y: なるほどですね。〇〇さんと子供にも韓国語で話しかけてるんです。

L: そうですね。〇〇さんは日本語で声かけ続けます。

Y: なるほど。そしたら、one parents one language であの親がもちろん違う言語を持っているということで、それぞれって言うことになんですね。

Y: 〇〇さんは〇〇(子ども)ちゃんに日本語で?

Lの妻: 外へは日本語で話すようにして。できるだけ家の中では、韓国語もあったり、日本語もあったり。

Y: なるほどですね。あのう、日本語と韓国語両方を家庭で使う場合にやっぱり自分の母語じゃないんでおそらく育児言語が、あのう自分の母語じゃない場合ストレスがあるかもしれないんですけどその辺はどうですか。

Lの妻: そうですね。なので結局交代するとかは、日本語になってしまいますし、簡単にご飯食べないとか(밥 먹자)、おむつ変えようか(기저귀 갈까)とかそういう簡単なフレーズは韓国語でどうしても駄目なことしたときは日本語。

Y: 子供が話してるのは、日本語?韓国語?どっちか?

Lの妻: 両方をはっするんですけども。割的には韓国語の方が多くて。

Y: ああ、そうなんですか。

Lの妻: 最近、2文字話せるようになったのはママ何々、パパ何々という二つ話せるようになって。で、最近、あのう公園で毎日会う同じ年ぐらい友達いるんですけど。子どもは相手の子供が話してるのが理解できるけど、私の子供が話したことを相手が理解できなくて。今はまだそんな単語しか話せないの。なんとも思っていないんですけど、今後もうちょっと話せるようになれば、あれっ、子供が思うんじゃないかなって言うのは少し思いました。

Y: ご家庭はやっぱり日本語なんですけど韓国語の量が多い。インプットのことが多いということですね。

Lの妻: インプットが多いですね。単語、例えば、ウィジャ(椅子의자)とかシクッタン(食堂식당)。パップ(ご飯밥)。一番、最初の話したのがパップ(ご飯밥)だったんです。やっぱり韓国語の方が多いですね。

日本語でたとえば、ないないない片づけるようなないって言うか。(2022.2.26インタビューより、原文日本語、下線筆者)

## 5.5 考察

子どもには、居住地の言語である日本語をきちんと身につけてほしいと考えている。特に、事例 A、事例 B は日本語習得の重要性を強調している。

A の長女は、育児言語は韓国語であったが、学齢期になると日本語のみになってしまう。思春期の頃は、A に向かってなぜ韓国語で育ててくれなかったのかと反発もあったものの、大学生になり自ら韓国語を履修し、韓国語スピーチ大会にも出るように自信にもつながっていた。専攻と違う韓国語をさらに学ぶために留学も考えていたが、国家試験等も控えていたことと A の反対もあったので断念した。しかし、社会人になってからもずっと韓国の文化に触れ続けている。A の次女は家庭内の言語は日本語であったものの、「高校生平和大使<sup>72</sup>」にも選ばれ、日本の代表として一週間韓国に滞在することになる。大学では独学で韓国語を学び、韓国の文化に触れている。

B は夫が日本語しか話せないこともあり、B の母（韓国人）とも日本語で会話を交わすことになる。また、日本語で会話はするのだが、内容は韓国的な儒教的な要素が随分入っていた。聖書や賛美歌等は韓国語で教えることになるが、B の家庭は B と B の母との会話は 7 割が韓国語であった。それを聞いて育てられた B の娘（仮名：ゆ）である。

C は育児言語として韓国語を教えることを、姑からも反対もあり、やめざるを得なかった。母語教育はさせることは出来なかったが、C の子どもは大学生になり、二人とも第二外国語として韓国語を学び、卒業旅行として韓国を C と訪れる。韓国語を学び、韓国人である母（C）との旅行は印象深かったようで再び韓国へ行きたいと語ったと言う。C の子どもは大学で習った韓国語を家でも使用している。

D の長女と次女の場合は、幼稚園に入る前までは韓国語も家庭内では使っていた。しかし、幼稚園に行き出してから完全に日本語のみになってしまった。ただ、日本人である D が結婚を機に韓国語を学び、土曜ハングル学校の課題を小学校低学年まで面倒をみていた。在日韓国人の父親は小学校高学年までは課題の面倒を見ていた。映画やドラマや K-pop を聞く時には問題がない。また、クラスメートからも韓国の歌を共有することで韓国語を通して輪が広まり友情も高まっている。学校では韓国に関するイベント等も開催され参加している。

E の家族は家庭内では韓国語を使う。家庭内で E の夫が子どもに韓国語で話しかけると E の子どもは韓国語で話して頂戴という。外でも E と子どもが話す時には日本語よりは韓国語の方が多い。また、韓国にいる E の親と毎日映像通話で韓国語を聞かされ話している。

F の家族は家庭内では日本語と韓国語を混合して使っている。F は一番目の子(中学 1 年生)は 30%、二番目の子(小学校 3 年生)は 20%程度韓国語を理解していると語る。F は子ども達が韓国語ができないと悲しいと思っていて、小学校に入る前まで韓国の子ども園

---

<sup>72</sup> 高校生一万人署名活動は、韓国の被爆者や被爆二世との交流を基礎に、2003 年より韓国の高校生との交流を続けている。歴史認識などを巡って日韓関係が悪化する中で、高校生同士の交流は大変意義深い民間交流となっている。

「<https://peacefulworld10000.com/archives/3896> 2019 韓国訪問 | 高校生平和大使・高校生 1 万人署名活動 (peacefulworld10000.com)

に入所させ、韓国語の継承のために力を注いでいた。また、Fの夫も韓国語能力検定試験やハングル検定試験等を子どもたちが受けるように促して、語学の資格も取っている。

Gの子どもは家庭内では韓国語で話し、韓国にいるGの親族とは韓国語で映像通話をしている。また、Gの妻が家庭内で韓国の食べ物をよく作りGの子どもは辛い韓国の食べ物も母親の影響を受けてよく食べている。

Hの家族はHもHの妻も日本・カナダと韓国に留学の経験がある。二人は、子どもが生まれる前にはHは韓国語を、Hの妻は日本語を話すことで子どもは両言語が発達するだろうと思っていた。しかし、Hは家庭内では日本語を使っている。Hの妻は韓国で国文国語科を専攻して会話が出来ることが、母語ではないので自分が教えることではないかと思っていたと語る。

Hの子どもは、Hの韓国の親族からの電話は韓国語で話しかけられると理解できないので少し距離感を感じているようである。また、韓国語も教えようとするとう逃げたり拒否したりする。しかし、韓国からかけてくる電話の内容が気になってどんなことを話していたのかを聞いてくる。文化的な面では100日記念写真を韓国の伝統衣装を着せて撮影している。子どもが大きくなったら両方のアイデンティティを受け継いだことをわかるように記念として残している。

Iの家族でIは日本に留学の経験があり、Iの妻は韓国語の専攻で韓国に留学の経験がある。しかし、二人が出会ったのが日本で、付き合いからずっと日本語で話していたため、日韓国際結婚家庭を築いて、子どもが生まれても家庭内では日本語が話される。家庭内で日本語を使用しているのは「日本語を使うのが楽」だからという。一方、Iの両親はIの子どもには韓国語で話しかけているのでIの子どもは韓国語はある程度理解している。

J家族は、Jが日本に留学の経験があり、Jの妻はニュージーランドに留学の経験とカナダでワーキングホリデーを通して異文化を体験している。J家族の家庭内の言語は日本語のみである。また、韓国で生活した時にはJの両親から韓国語のインプットもあり、家庭内は韓国語を使い、理解していた。ところが、日本に戻り家庭内では日本語のみになるとJが4歳の子どもに韓国の絵本や動画などを見せようとするとう「わかりにくいから日本語がいい」と言う。Jは自分の母語である韓国語を子どもに話しかけることで子どもとの距離感が生じてしまうのではないかと心配していた。また、Jが韓国語を使うことで子どもと仲良くできず、韓国語に反感と抵抗が生じてしまうのではないかと述べていた。一方、Jの妻はJが韓国語で子どもに話しかけてほしいと語る。しかし、Jの方針は家庭内では子どもとは家族共通語である日本語で話す。Jの家族は韓国で生活する際に韓国の食文化を楽しんでいた。現在は日本に居住しているため頻繁には作らないが、たまには作って食べている。

K家族は家庭内では90%以上は日本語を使用している。しかし、新型コロナウイルス(COVID-19)の流行の前には、3ヶ月ごとに韓国を訪問して韓国の家族と交流を行っていた。文化的な面では家ではKの妻が韓国の料理を作り、外食では韓国のメニューを注文する時も多い。Kは一番目の子どもの1歳祝いは韓国で行った。親族を招待し祝ってもらい、伝統衣装を着用し、記念写真も撮影した。K家族は子どもに継承語教育は行ってないが、精神的

な面や文化的な面を通して子どものアイデンティティを維持しようとしている。

L 家族は、家庭内ではできるだけ意識して子どもに韓国語で話しかけている。家庭内では韓国のラジオを午前中ずっとつけている。韓国のラジオをつけるのは、子どもの教育方針として家に TV がないということもあり、また、L の妻が韓国語をずっと勉強し続けているからでもある。1 歳 5 か月（インタビュー当時）の子どもは、単語は韓国語で発していて、育児にかかわる言葉（おむつ替えようか、ご飯たべようか等）も理解している。

「パターナリズム(paternalism)」という語は、英語の father を意味するラテン語 PATER に由来する概念であり、日本語では家父長制温情主義（中西・上野 2003）や父権的干渉主義（中村 2007）などと訳されることもある。「あなたのためを思って」という言説のもと、干渉されるその人のためにという理由で干渉する、個人の自由に対する介入・干渉原理の一つである。

稲垣は（2015）は他者への干渉・介入を意味する「パターナリズム」の観点から、在アイランドの在留邦人の親に対するインタビュー事例の研究で継承語教育の成長を検討している。継承語を親が押し付けるのではなく「自分にとってじゃなくて子どもにとって、何が大切なんだろう。」と自らに問いかける時、そこには新たな言語実践観が生まれる。その気づきこそが「パターナリズム」の自覚であり、その自覚から新たな言語実践としての継承語教育が始まると述べる。

鈴木（2014：16）は、父親と母親の出身国の違う子どもたちを「国際児」と呼び、「父親の文化と母親の文化という二つの文化（国）を融合（統合）した、自己肯定的なアイデンティティ」が自然な「国際児としてのアイデンティティ」であるとして、母親が日本人で父親がドイツ人のドイツ在住の 10 代後半から 30 代前半の女性の 10 名にインタビューして、二言語・二文化の知識と文化的アイデンティティの関係を調査した。その結果、半数以上が両文化への帰属感があつたが、4 名はドイツ優位、1 名は日本優位であつた。文化の知識や理解は文化的アイデンティティと強い関係があつたものの、言語との関係は明確ではなかつたと報告している。

## 5.6 日韓国際結婚家庭の子どもの国籍と名付けについて

名前とは、人を互いに識別するためだけのものだけのものではなく、人にアイデンティティを与え、また、社会的属性やルーツ、帰属意識を示すものでもある。すべての文化が名付けについてそれぞれのルールを持っている。

日本で生まれた日韓国際結婚家庭の子どもたちは、両親によって付けられた名前が日本式、日本と韓国でも両方使える式、日本では日本人の親の名字を韓国では韓国人の親の名字を名付けて二重国籍の申請もしている。

例えば、日韓国際結婚家庭の子どもの中には、「山田<sup>やまだ</sup>世<sup>せ</sup>奈<sup>な</sup>」のように、名字は日本人親の名字のままであるが、名前は日本でも韓国でもよくある名前の発音と漢字を選ぶ傾向がある。

ハタノ（2009：26）は、「人はどのように名付けられ、どのように呼ばれるかについて自

分たちは違う文化があると知ることは、異なる社会で暮らしてきた異なる者同士が理解し合っていく過程の一部分なのである」とした。

以下では、日韓国際結婚家庭の子どもたちの国籍と名前の諸相とそこに表れている親の考えやアイデンティティについて検討したい。

### 5.6.1 Aの子どもの事例

Aは子どもが幼い時に国籍を変更していたため、子ども達は日本国籍のみになった。子ども達の名前は日本名のみである。

### 5.6.2 Bの子どもの事例

Bは韓国国籍であるが、子どもは日本国籍にのみしている。その理由として、日本生まれ、日本育ちなので、日本語と正しく学び話せるように促していた。Bが子どもに韓国語を教えようとしたが、興味がなかったようで教えていない。Bの子どもの名前は日本名のみである。

Bの子ども：言葉は、母が積極的にうちは韓国語を教える方針ではなく、私の意志にまかせてくれるという方針だったので。なんか話したらいいですよ。国籍も日本籍しか持ってないですよ。

Y：二重国籍ではなくて元々日本国籍だけということですね？

Bの子ども：はい。日本で生まれたし日本人だから日本語を取り敢えずしっかりさせるんでいいじゃないかって。私が韓国語が習いたいということであれば教えるけどという。ま、でも、母は教えようとしてくれたらしいんですけど、私がある時あんまり関心がなくて。あんまり韓国語をちゃんと習わなかったんで。本当に小さい時にはわからなかった。

Y：そうなんですね。(2022.3.8 インタビューより、原文日本語)

### 5.6.3 Cの子どもの事例

Cは子ども達に国籍を選択させたかった。二重国籍から国籍を日本に変更するのも面倒だったので、最初から子ども達の国籍を日本のみしている。また、当時同居していた姑の勧めもあり日本だけにしている。

Y：子ども達の国籍はどうですか？

C：日本。

Y：本当は(子ども達に)選択させたかったけど、姑さんがいらっしやって日本としなさいとして日本にすることにしました。

Y：生まれる時には二重国籍だったのですか？

C：最初から日本。なぜなら、私がよくわからなくて二重国籍を考えていたけど、後に(国籍変更)変えるのも面倒なので。姑さんと夫の家族も日本がよいと言っていたので、日本にしたの。(2021.11.20, インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

### 5.6.4 Dの子どもの事例

Dは夫が在日韓国人3世で子ども達の国籍は二重国籍であり、当然パスポートも二つ持っている。国籍を選択するの子ども任せにしている。名前も韓国読みにしてつけている。Dは言語を通して文化を学べると語った。「小さい時に(韓国語を)学んでいることによって自

分のルーツを知って、下の子の名前が〇〇という名前をつけているんですけど、どっちかという日本でも韓国でも使えるお名前なんですけど。」(中略)「日本国籍をとったとしてもお父さんのルーツである〇(Dの夫の姓)っていう名前をとれば〇(Dの夫の姓)で日本人になればルーツは残る。」と語った。Dは在日韓国人である夫と結婚することにより、Dの夫の姓(韓国姓)を名のるようになった。子ども達もファミリーネームとして、父の姓を付けている。Dは日本的に考えて、女性が結婚すると夫の姓を付けるというふうの説明してくれたが、夫の姓(韓国姓)を子ども達に付けることより自分のルーツ残すことができる。尚且つ、Dが韓国の姓を名乗ることによって国籍を超える家族の意味合いも含めていると言えるだろう。

Dの子ども達は言語ポートレートのインタビューの際に自分が日本と韓国のハーフ(国際児)であることを誇りに思っていた。

D: 子どもは〇〇〇というんですが、〇〇丸のまま韓国のパスポートと日本のパスポートを二つ持っているんですよ。

Y: 二重国籍なんですよ？お子さんは？

D: あおう、国籍を選択するのは本人に任せようとしているんです。で、名前も上の子は〇〇、下の子は〇〇という名前をつけて日本なら〇〇なんですけど。

Y: そうですね。

D: だけど、韓国読みにしていて〇〇という名前に。

Y: かわいいですね。

D: どっちの国籍をとるとか何を勉強して何を学びたいとかは本人の選択に任せようとしているので、で、ただ、教育で、インターナショナルスクールを選んだのは言語だけではなくその学びの色々な視点から物事をみるという教育の方針を。

D: その、えっと、(私は)日本でしか生まれ育ってないので、その韓国語を学ぶことによって韓国、言語って文化とすごく密着しているなっていうのが私すごく思うのとだから言語を学ぶことによって韓国の文化も学ぶし、あおう、食を通してとかもそうですし、もちろん日本人だから日本料理でしか作れないのですが、主人は韓国の料理が好きなので食べさせたりとか、そういうことを小さい時に学んでいることによって自分のルーツを知って、下の子の名前が〇〇という名前をつけているんですけど、どっちかという日本でも韓国でも使えるお名前なんですけど。〇(Dの夫)という名前(名字)選んだ理由は子供がたとえば日本の将来生まれて20(歳)くらいになると選べないといけないんですね。韓国(二重国籍を認めている<sup>73</sup>)、日本は二重国籍(認めてないので)ではないので。例えば、どっちを選ぶかは本人の自由ですけど、日本で育っているから日本を選ぶ可能性もないことはないので日本の名前より、私の名前(名字)をとって子供につけるよりも韓国の名前(名字)家族としてつけて。たとえば、私の娘が日本国籍をとったとしてもお父さんのルーツである〇(Dの夫の姓)っていう名前をとれば〇(Dの夫の姓)で日本人になってもルーツは残るのかということ、

D: 残せてあげられるのは言語と食べ物の食事と名前かなあと思って〇(Dの夫の姓)を選んで、私も〇(Dの夫の姓)になって子供たちに残したいなと思いました。(2022.2.16インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.6.5 Eの子どもの事例

Eは日本に留学経験があり、Eの夫も韓国での経験がある。また、Eは国際交流員としても5年間働いていた。国際結婚家庭であるので子どもの二重国籍にしようと考えていたが、

<sup>73</sup>平成23年1月1日、韓国の国籍法一部改正に伴い、韓国では重国籍が認められる(※1)ことになりましたが、日本の国籍法には変更がない。 [https://www.kr.emb-japan.go.jp/people/ryouzibu/consulate\\_kokuseki.html](https://www.kr.emb-japan.go.jp/people/ryouzibu/consulate_kokuseki.html)(2022.9.25アクセス)

兵役<sup>74</sup>の問題や学校(入試)問題があり日本国籍のみしていたという。二重国籍の所持者は22歳までに国籍を一つにしないといけない法律があるため、悩んだ末日本国籍のみにしている。名前も日本名のみになっている。

Y: 子どもの国籍はどうなりますか?

E: 日本。はい、韓国で産んだので…韓国の国籍を二重国籍をしようかと迷っていました。(2019年8月8日)

E: 軍隊問題や学校問題があるので日本国籍のみに。(2019年3月20日、インタビューより、原文韓国語)

### 5.6.6 Fの子どもの事例

Fの子ども達は二重国籍である。国籍の選択については子ども達が選択するだろうと言っている反面、日本で生活を営んでいるので日本を選択するだろうと言及した。名前も日本でも韓国でも使える呼びやすい名前を付けている。日本名にしてしまうと韓国の家族からは呼びにくい名前に、韓国名にしてしまうと日本では目立ってしまう可能性があるため、二つの国でも通用できる名前を付けている。

Y: お子さんは二重国籍ですか?

F: 二重国籍です。

(中略)

Y: 二重国籍なのですが、お名前はどのように使っていますか?

F: 名前は韓国と日本で共通して呼ばれそうな名前を探して一番目の子は〇〇、二番目は〇〇。

Y: そうなんですね。

F: 名前を付ける際にものすごく気にしていたと思います。

F: 日本名で名付けてしまうと韓国の家族に会った時この子は日本人だろうということもあり、だからといってパパが日本人なのに韓国の名前を付けるのは(日本) 社会生活する際に目立ってしまうとだめなので。

Y: では、Fさんこれから国籍を取得することになりますが、国籍問題についてはどのような考えですか?

F: 私の場合、家父長制な考えかもしれないが、夫が韓国語もしゃべられないし、これからも日本で、また日本で住んでいるので子どもの国籍は子ども達が選択するのではないのかと…。おそらく日本国籍を選ぶのではないかと…。(2022.2.25 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

### 5.6.7 Gの子どもの事例

Gの子どもは二重国籍である。保育園でも「自分のパパは韓国人です」、「私は韓国人です」と誇らしげに自慢をしていた。名前は日本でも韓国でも使える呼びやすい名前を付けている。韓国のパスポートにはGの姓を、日本のパスポートにはGの妻の姓を付けている。学校でもGの妻の姓を使っている。

G: そんな(韓国語) のが出るとすべて知っているから優越感を感じたのでは?

学校ではこの子が二重国籍であることを知っているんです。(娘が) 韓国人だと自慢していたんですよ。「私は韓国人

<sup>74</sup> 朝鮮戦争(1950-1953)により、南北分断という悲劇がもたらされた朝鮮半島。地上に残された最後の冷戦地帯として、今もなお南北が対峙する現実が続いている。こうした背景もあり、すべての韓国の成人男性には、一定期間軍隊に所属し国防の義務を遂行する「兵役」義務が課せられている。実際の軍隊服務期間を「現役」または「補充役」、除隊後の8年間を「予備役(予備軍)」、それから満40歳までを「民防衛(民防衛隊)」と言い、20歳で入隊した場合約20年間の服務義務を全うするのが、韓国の徴兵制度である。

[https://www.konest.com/contents/korean\\_life\\_detail.html?id=557](https://www.konest.com/contents/korean_life_detail.html?id=557)(2022.9.22 アクセス)

です」と言ったよね。

S：みんなが（私が）韓国人（であることを知っている）…。保育園の時から。

G：保育園に通う時から友達に「パパが韓国の人という韓国人だと言っていた」。その隣の小学校へ入学することになって（保育園からの）友達も同じ小学校に通っているのでSちゃんのパパが韓国人であることをみんな知っているかもしれないし、二重国籍であることを知っていると思います。（2022.4.17 インタビュー、原文韓国語、下線筆者）

### 5.6.8 Hの子どもの事例

Hの子どもは二重国籍になっている。ある一定の年齢になると国籍を選択することになるが、HとHの妻は子どもの国籍は子どもが選択するだろうが、日本生まれ、日本育ちであるので、結局将来は暮らしやすい所を選択するのではないと思っていた。名前は「両国のそれぞれの名前をつけても違和感がない名前を考えて」読みやすい名前に付けている。日本では妻の姓を付けて、韓国ではHの姓を付けて登録している。Hは「外国人で日本で住んでいるので日本人として日本に住んでいる妻の姓をそのまま使うのが自然か流れ」だといい、保育園でも妻の姓を付けて呼ばれている。

Y：Hさんの国籍はまだ韓国？〇〇さんは日本ですよ？お子さんはどうなんですか？

H：多分、二重国籍になっていて出生は横浜で出生申告したので。（領事館での説明）その届だけで二重国籍になっているのかなあ。

Y：（前略）子供の国籍については？

H：まず、私は父が韓国人だからといってママが日本人だからといってなんかどっかにするよりは、結局本人の選択というなるんですが、予想ではやっぱり生まれ育てられたのがこっちだから結局自分がこれからの将来に暮らしやすいところを選択するのではないかと思っています。

Y：なるほどですね。奥様も同じ考えですか？

Hの妻：そうですね。本人の意思に任せたらいいのかなあというところで、自分が生きやすい方法を選択する方がいいのかなあと思います。日本を選んだから韓国を選んだからいうつもりは特にはないんです。

Y：娘さんはHを名乗るんですか？〇〇（日本名）を名乗るんですか？

Hの妻：〇〇（日本名）を名乗っています。

Y：〇〇さんの姓を付けているのはなぜなのでしょう？

H：そもそも、それについて真剣に相談することなしで普通に私も自然で受け止めているところなんですけど、（娘は）日本では〇〇〇〇になって、韓国では〇〇〇〇になるという。両国のそれぞれの名前をつけても威圧感がない名前を考えて私はあのおう他の考え方とかはしらないんですけど、普通私は外国人で日本で住んでいるので日本人として日本に住んでいる妻の名字をそのまま使うのが自然か流れかなと。（2022.4.11 インタビューより、原文日本語、下線筆者）

### 5.6.9 Iの子どもの事例

Iの場合は、子どもの国籍が二重国籍である。韓国のすさまじい教育問題、軍隊の問題等を考えて子どもの教育のために、日本に永住を決意しているIは、子どもの国籍には選択肢を与えたいと言っている。

Iの妻：韓国語も半分半分教えながらしていたのですが1歳過ぎからちょっと日本で住む話も出て教育は日本でさせたいって〇〇さんが言ってくれて医療のこととか軍隊のこととか子供が生まれて価値観も変わってきて教育のことも。

Y: なるほど。そしたら、先ほど軍隊の問題が出ましたが子どもがおそらく両親の国籍が違うので二重国籍<sup>75</sup>になっていると思いますが。

I: まだ、二重国籍で男の場合は16歳（正確には22歳）までにはっきり決めないと軍隊に行けないといけないので子どもが大きくなったらどう考えに変わるかわかりませんが、今日本に住んで日本にも国籍をすぐ変えられるように、韓国にしたいなら韓国に出来るように状況にしていたほうがいいのかと。思って。

Y: わりと、日本だったらのびのび育てるからということも含めてやっぱり移住、移民を考えていたのかな？

I: そうですね。

I: 生まれた時に女の子だったらずっと悩んでいたかもしれないけど、男の子だったので悩むことなく日本に行かなくきやと思っていました。兵役の問題が一番気になっていました。私は、正直本当にこれは個人的な考えですけど長く話せないんですけどそれは正直（兵役）時間の無駄と思うのでそういうのはなるべく避けたいという考えです。自分がもし本当にしたいのであればそれはあとでも出来るので一応どっちかも選べるのが環境を作ってあげたい。(2022.2.15 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

### 5.6.10 Jの子どもの事例

Jの場合は二人の子どもは二重国籍である。日本では妻の姓を名付けている。韓国ではJの姓を付けている。名前は日本でも韓国でも使える呼びやすい名前付けている。J夫婦が、子どもに「○○ちゃんは日本人でもあるし、韓国人でもある」んだよと伝えていて子どもは「すごい」と言い、自分が特別な存在だと感じて嬉しがっていた。Jの子どもは自分が普段日本語を使っているので、自分は「日本人」だと認識している。

Y: あおう、お子様のお名前を教えてください。○○(Jの妻の名字)○○です。○(Jの名字)○○ですか？

Jの妻: 日本では○○(Jさんの妻の名字)です。

Y: お子さんは何歳ですか？

Jの妻: 3歳で今年4歳になります。

Y: ○○ちゃんは国籍はどうなっていますか？

Jの妻: いま二重(国籍)です。

Y: では、生まれて可愛い二番は？

る: ○○です。

Y: ○○○○で、日本では(Jの妻の名字)○○ですか？

J: 国籍の話もパパ何人？韓国人。で、ママは？日本人。○○は何人なのと聞いたら日本人という。日本で生活していて日本語が母国語になっている状況なので、自分は日本人という思っているんです。

Y: その時Jはあなたはダブルだよと言ってあげているんですか？

J: そうです。自分も妻も○○は日本人でもあるし韓国人でもあるというふうには伝えてあります。

Y: その時の○○ちゃんの反応はどうですか？

J: はてなです。

Jの妻: すごいとか言っていました。

Y: すごいと。

Jの妻: 特別な感じで、特別だよと伝えたら、嬉しくて。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

<sup>75</sup> 平成23年1月1日、韓国の国籍法一部改正に伴い、韓国では重国籍が認められることになったが、日本の国籍法には変更がない。日本国籍のみを保有している方が韓国国籍を取得した場合には、「自己の意思により外国国籍を取得した」とこととなり、国籍法第11条1項により韓国国籍を取得した時点で日本国籍を喪失する。その場合、日本国籍の喪失届「国籍喪失届」のお届出が必要である。https://www.kr.emb-japan.go.jp/people/ryouzibu/consulate\_kokuseki.html(2022.9.5 閲覧)

### 5.6.11 Kの子どもの事例

Kの二人の子どもは二重国籍であり、パスポートも見せてくれた。韓国ではKの姓を付け、日本では母の姓を付けている。子どもの漢字は日本でも韓国でも使える漢字ではあるが、日本名と韓国名がそれぞれある。つまり、韓国では漢字を音読みで読むので、同じ漢字であっても日本の名前では呼ばれない。保育園に通っている子ども達には妻の姓で呼ばれるようにしている。

K: (パスポートは) 二つとも持っています。  
Y: 可愛い。  
K: 韓国の名前は?〇〇で、日本では(妻の姓を) 〇〇。  
Y: 日本では奥さんの姓をつけていて、〇〇と言っているんですね。  
K: 理由があるんですが…。  
Y: 理由を説明して下さい。  
K: 先生はどうですか?  
Y: (中略)日本では学校に通って日本人と連携が多く、〇〇(韓国名)で呼ばれないので、韓国人にあったら〇〇(日本名)ではなく、〇〇(韓国名)と呼ばれる。日本のコミュニティに入ったら〇〇(韓国名)と呼ばれないのです。〇〇(日本名)と呼ばれるんです。  
K: 私と同じですね。  
Y: そうなんですかね。〇〇ちゃんは韓国でも〇〇ちゃんと呼ばれるんですか?  
K: 漢字も〇〇で名前も日本でも〇〇…。  
Y: そうなんですかね。名前はKさんが名付けたんですか?  
K: はい、私が名付けました。  
Y: どの名前を〇〇ちゃんか。  
K: 名前を付けたきっかけがあるんですが、最初私が付けたい〇〇、〇〇こんな感じで名付ける時にも僕が〇〇、〇〇という名前を付けたいというふうに妻に話しをして、音読の漢字リストを見せてどんな感じにするかは妻に選択権を与えたんです。この漢字とこの漢字を付けたい、この漢字とこの漢字を合わせて名前を名付けて選んだので。  
K: いじめの問題の可能性もあり、僕が名字を〇〇(妻の姓)、妻の名字で(子どもの名前)付けていたきっかけになりました。  
Y: 保育園に通う時はどうでしたか?  
K: 通時からずっと〇〇という(妻の姓)名字で。  
Y: それ(いじめ)を念頭にして奥さんの姓にしたのですか?  
K: はい、そうです。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

Kは子どもに「父は韓国人であり、母は日本人なので君は二つを全部持っているんだよ」とアイデンティティについて話している。また、自分の家門のことは受け継がなければならないと思っている。その系譜を息子も受け継ぐべきであると考えている。

K: そういう問題もあり、帰化もそうだし、(僕の)家からも反対もありそうだし、(僕の)家門と言いますよね。系譜を繋いでいかないという使命感と責任感があります。  
いつかは息子にも伝えないといけない責任もあるし、そういったことを教えないといけない務めもあります。それで、子どもにもいろいろとアイデンティティについて話しているんです。  
父は韓国人であり、母は日本人なので君は二つを全部持っているんだよ。まだ、幼いのでどれくらい理解しているのかはわからないけど、のちに先祖代々から繋いできたというのを教える予定です。両方(韓国と日本)で僕の場合は生活してきた環境とか韓国人なのでそういうことについて考えているところもあり、息子が系譜を繋げないといけないという継承に関する責任は持つべきだと思っています。  
Y: 継承せねばならない。韓国的な血の系統が確実だけど、今は日本で生活しているし、永住しているけど、言語的な継承の要素は難しいだろうけど、そういう精神的な文化的なことは受け継ぎたいですね。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

### 5.6.12 Lの子どもの事例

Lの場合は、子どもの国籍は二重国籍である。日本では妻の姓で届けを、韓国ではLの姓で届け出を出している。名前は韓国でも日本でも使える呼びやすい名前で付けている。

Y：ちなみに。お子さんの国籍はどうなってます。おそらく国際結婚しているので。  
 L：両方を持つてる状況です。二重国籍の状況です。  
 Y：そしたらお名前はどうかっているんですか？  
 L：日本では、〇〇（妻の姓）で、韓国では〇（Lの姓）で届け出を出してます。  
 Y：なるほどですね。日本では日本、お母さんの姓名を使っているんですね。  
 お名前の後の名前はですね。呼びやすい名前につけたんですか？どうなんですか？  
 Lの妻：〇〇。  
 Y：〇〇。  
 L：女優さんの〇〇さんがいますね。  
 Y：そうなんですね。国際結婚家庭で、日本語韓国語どちらかを使ってもらいました。  
 Lの妻：：両方です。  
 Y：そうなんですか。なるほど。両方。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線筆者)

### 5.7 考察

田中(1996)は、人が日常生活の中でどれほどたくさんの固有名詞に囲まれているかを論じている。彼は人類の歴史を振り返って、名前の意味の理論的分析の必要性を感じたという。換言すれば、個人の名であっても、その名を作っている民族という集団への帰属を示している点で、決して、個人のレベルにとどまることはできないのである(田中1996:11-12)。まさに、名前に、アイデンティティというものの二重性がある。自分は自分であって、それ以外のものではありえないと主張する自分は、他方ではどこかに所属している(どこにも所属しないことが、すでに所属である。人はこの独特の所属の仕方にもまた名をつけるであろうから)、あるいは所属せざるを得ないというこの原理は、名づけ、すなわち、ことばの原理そのものから発しているように思われる。(田中1996:13)

固有名詞は、その名を帯びている人や物を孤立させるのではなく、より多く、所属をきめる目じるしの役割をはたしていると言えるであろう。(田中1996:187)

田中が指摘するように、名前の使用には、社会的アイデンティティの二つの側面が関係している。一つは、個人を他の個人と区別する、個人のアイデンティティの側面。もう一つは、グループのアイデンティティ、つまり、個々人を彼・彼女が属している複数のグループに結びつけるものという側面である。

日韓国際結婚家庭の子どもの国籍と名付けについて以下の表にまとめる。

表 5-2 日韓国際結婚家庭の子どもの国籍

国籍	日本	韓国	二重国籍
	A、B、C、E		D、F、G、H、I、J、K、L

表 5-3 日韓国際結婚家庭の子どもの名付け

	日本式の名前	韓国式の名前	両国で使える
名前別	A、B、C(1番目の子ども)、E、I、K		C(2番目の子ども)、D、F、G、H、J、L

日本式 (A、B、C(1番目の子ども)、E、I、K)、日本と韓国でも両方使える(C(2番目の子ども)D、F、G、H、J、L)式である。A、B、Cの子どもは日本国籍で名前もCの次男を除いては日本式である。E、Iの子どもは二重国籍で名前は日本式のみである。Iの子どもの名前は日本の漢字を訓読みにして名付けているが、韓国式に変えた場合は日本式の名前に変えることができない。しかし、韓国でも使える名前である。F、G、H、J、Lの子どもは二重国籍で名前も日本でも韓国でも使える名前である。Kの子どもは二重国籍で日本でも韓国でも使える漢字は使っているものの、日本では日本式の発音があり、韓国では韓国語の音読みでパスポートを作り、韓国の家族にも韓国名として呼ばれる。

以上のことから、日韓国際結婚家庭の子どもの国籍は、子どもは世代別にA、B、Cは日本国籍で名前も日本名のみになっている。E、F、G、H、I、J、K、Lの子どもは二重国籍で日本では日本人親の姓を付けている。また、韓国でも日本でも使える名前を付けている。Dの子どもはファミリーネームとして在日3世の父親の姓をつけている。名前は日本でも韓国でも使える漢字を選び名前を付けている。特徴としては、Dを除いて日本では韓国人の親の姓をつけていないということである。それについてKは「韓国の名字を名付けていることでいじめなどのことも考えて日本人の親の姓にした」と語る。

日韓国際結婚家庭の親は、柔軟な考え方と彼らの中に二つの文化の結合によるアイデンティティが形成されていることを見ることができる。日韓国際結婚家庭にとって、名前は単にエスニック・アイデンティティを表現したり、自分のエスニックな出自を隠したりするための手段ではなく、自分の文化の多様性や個性を積極的に表現する一つ方法であると考えられる。名前は、その人が属する地域や宗教、エスニックグループ、そして社会的グループと密接な関係がある。衝突しあるいは互いに入れ替わったときなどに、変化を受けてきたと指摘している(松本・大岩川 1994)。

### 5.8 日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ

鈴木(2012)は、国際結婚した日本人の女性がインドネシア国籍に変更することと、文化的アイデンティティ(文化的帰属感)にはどのような関係があるかを明らかにした。事例を通して国籍を変えたとしてもインドネシア人になれるわけではなく、インドネシア人というよりは依然として日本人として認識されて、結果として自分が日本人(元日本人)である事実を強く再確認するに至ると考察した。Aは、日韓国際結婚をする前に日本に関する文化形成がされていたため、日本に対する拒否感はあまりなかったという。しかし、国際結婚を通して留学生活では見られなかった現実の問題が浮き彫りになり自分の生活に及ぼすようになった。以下のライフストーリーインタビューから、Aの文化的なアイデンティティを

考察することが出来た。

A は、日本の文化については留学経験と大手企業に勤めた社会人経験もあり、語学も含め日本の組織文化等も身につけている。しかし、国際結婚して自分のアイデンティティを明かすことが出来ない時期が続き、一時は日本を離れようとも考えていた。

このように、母国を離れて生活している A の疎外感や苦痛、そして異国で葛藤している様子が窺える。

ホール(1990)は、ディアスポラの経験とは個々人のあいだに必然的に存在する異質性や多様性を認識することだと指摘し、ナダクリシナン(1996)は、ディアスポラの経験は疎外感や苦痛をとまなうものであり、政治的また文化的な損失やアイデンティティの葛藤を意味するものだと指摘した。

Y：国際結婚されてカルチャーショックはありませんでしたか？

A：〇〇の都市の美容室に行った時、その従業員に「私が何人に見えるか」という質問をし、その後「私は韓国人です」と言った。その時、従業員の反応もよかったし韓国に対する好感をもっていたので、主人の仕事先の都市の美容室でも同じ質問をしていました。しかし、全然違う反応と、韓国人であることを明かした時の冷たい態度に啞然として自分をアピールしたい気持ちが萎縮しました。その時から自分の国籍を明かすのが面倒くさくなりました。寂しい思いをしながら、自分のアイデンティティである韓国人であることを明かさずに生きてきました。また、当時韓流ブームになり韓国のドラマが日本で人気がありました。ちょうど、子供たちが公園デビューした時のことで「韓国のドラマのあの俳優を知っていますか」等の質問をしたけれど、ママ友の韓国や韓流に対する無関心と冷たさで自分が韓国人であることを明かすことができなかつたんです。(2018年9月21日、二回目のインタビューより、下線筆者)

Y：日本でディアスポラとして生活していて大変なことはありませんか？

A：日本は物価が高いので生きるのに精一杯でした。(中略)日韓関係が悪くなり、マスコミ等でも韓国について悪く報道されていた時には嘆かわしい気持ちになり、息苦しくなつて一時韓国に戻ろうとしていました。しかし、ある日中韓文化フェスティバルの中で取材に来ていたアナウンサーの一言によりメディア嫌いがなくなりました。(2018年9月21日、二回目のインタビューより、下線筆者)

### 5.8.1 国籍による日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ

佐々木(2006)は、社会学の立場から在日朝鮮人の国籍変更後もエスニック・アイデンティティを維持し、「コリア系日本人」として生きていく人々の存在を描き出している。近年は、「韓国・朝鮮」「中国」籍を除籍する帰化者も増加傾向にあり、その国籍も多様化している「(李 2016:115、福本拓(2016:268))」。

#### 5.8.1.1 Aの事例

Y：いつ帰化(国籍変更)を決心したのですか？

Aの母：結婚する前に日本で4年間は留学生として生活していました。その頃、在日コリアンの友達が外国人在留カードを持っていることに違和感がありました。在日コリアンによると、日本に住むには帰化なしでは生活するのがかなり不便だということでした。当時にはあんまりわからなかったが、結婚して1年後帰化をしようとしていた頃、在日コリアンの友達が言っていたことがなんとなくわかりました。例えば、日本で交通事故に遭ったとき、外国人である場合は外国人在留カード及びパスポートまで提出しないとイケません。日本で外国人として生きる(生活する)には大変息苦しい感じがします。さらに、海外から再入国する際に外国人と日本人の並ぶラインが異なります。その時、ママは違うラインで立っていることで子どもにも異質感を抱かせたくなかつたのです。また、病院や

公の場で韓国名が呼ばれると注目を浴びたりします。さらに、いちいち夫との出会いから結婚までを聞かれる時があり、プライベートまで言いたくないこともありました。帰化することによって、アイデンティティや愛国心が変わったわけではありません。(2019年5月24日、四回目の電話インタビューより、下線筆者)

A は、日本で生活するためにはやむを得ず結婚 1 年後に帰化を選んだと説明した。さらに、筆者が下線を引いた「子供達に異質感を抱かせたくない」ということもあり、子供が不利益を被ることを避けたいという母親の気持ちも察することができた。日本では法律的には外国人に対する政策または国際結婚家庭に対する支援等もほとんどないのが現状である。そのなかで生活するために、生活に不利にならないように生きるためには仕方なく帰化せざるを得ない。すなわち、鈴木 (2012) が国際結婚者の国籍変更については、当事者がおかれている社会・文化環境の中で、「実生活上の快適さ」と「永住の覚悟」という両者の理由が複雑にからみあい、国籍変更に至ると述べているが、A の事例と重なるところがある。さらに、三宅 (2016) の日系ディアスポラと英国日本人会の調査では、英国籍をもちながら自らを日本人と感じており、その根拠が永住権保持者と異なる点が興味深いと指摘している。

### 5.8.1.2 B の事例

B は父親の仕事の関係上 1 歳から 6 歳まで日本で過ごし、小学校 1 年生から 18 歳まで韓国で住むようになる。小学校の時にはいじめがひどく転校を 5 回もすることになる。韓国語の標準語を使い、クラスメートと言動が違う B は韓国人なのに、日本人扱いをされていた。日本での生活も長く、ジャーナリストとしての生活も長く、日韓国際交流センターや NPO 法人を立ち上げ、積極的に活動している B は日本に住んでいる在日コリアン達にも励みになっていた。

B: (前略) ブランコに乗っていると後ろから押されて落ちてしまい…。先生が押した子どもに「なぜ、押したのか」と聞くとチョッパリ(췁밭이)<sup>76</sup>だからというのです。しかし、私はチョッパリ(췁밭이)ではないのです。100%韓国人なのですが、なぜチョッパリというなら、私の言動が(韓国人の)子どもとは違うのです。遊びも。6年間日本で住んでいたのに、(韓国人の)クラスメートが遊んでいた遊びも知らないのです。そして、日本語と韓国語の両方を使っていて、韓国に帰国していたので私の韓国語は標準語なのです。訛りがない標準語の韓国語。私はどこまでも日本語と同時に(韓国語を)外国語のように、習っていたので。私がNHK国際放送のアナウンサーをしている時に外部から私の韓国語を調査していたのです。研究している人曰く、(中略)典型的な標準語と言っていました。また、(クラスメートがいじめをしたのは自分とは違う)異質ななことについてのこと。(2022.3.8 インタビューより、原文韓国語)

B: 84年から新聞に連載を始めたが、その時〇〇通信を通して連載を始めて、〇〇で連載をしていた頃いろんな反応がありました。手紙、はがきが在日同胞から届いたのです。日本で戦後何十年も住んでいるが、新聞に韓国人の名前で、自分の本名で記事を書いて連載されているのははじめてみた。書面の記事を読み、涙が出ました。手紙を受け取ってその記事を切り取って父親に見せたら、父親が枕元(病院に入院していたので)に入れながら喜んでいました。

<sup>76</sup> 1880年にパリ外国宣教会が横浜で出版した韓仏辞典『Dictionnaire coréen-français』に「췁밭이, Pied à corne divisée en deux.」との記載がある。同じく横浜で出版されたカナダ人宣教師ジェームス・ゲイル(英語版)著の韓英辞典『Korean English dictionary』(1897年)にも「췁밭이 A cloven foot.」とあり、日韓併合条約以前からチョッパリという単語が存在していたことが確認できる。国立国語院標準国語大辞典(<https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do>)には「日本人が足の親指と残りの指を分ける下駄を履くことから来た言葉」とある。

### 5.8.1.3 Cの事例

Cは来日してから5年後に国籍を変更することになる。国籍を変えることに、(韓国人としての)アイデンティティの揺らぎもなく、「名前が変わったということで私自身が完全に変わることもない」、ある先生からCが国籍変更したということを指摘されるがCは「時代遅れだ」と考えていた。「行政的なことで(国籍を)変えたけど」と言う。Cにとって国籍=アイデンティティではないということである。国籍が変わったということで自分自身がすべて変わるわけではない、「私は〇〇(韓国名)であり、ここで生活(住む)ための(帰化)一つの手段である」。Bは柔軟性と流動性を持って日本で生活をしている。仕事ではビジネスネーム(韓国名)を使って活動している。行政的なネームは日本で生活するために変えている。つまり、小張(2004:53)が指摘したように、複言語話者にとっては「『母語=アイデンティティ』という単純な公式が成り立たない場合がある」ことを意味している。

Y: Cさんの国籍はどうですか?

C: 私は日本に来て5年ほど経ってから姑さんかの勧めがあったの。なぜなら不便なところもあったし。

Y: 30年前はそうだったでしょうね。

C: 戸籍謄本に私の名前が記載されていないのよ。戸籍にもなく、外国人として記載<sup>77</sup>されていたので。

C: 名前が〇〇〇。

Y: そうそう。

C: 名前だけ挙がっていて戸籍には私という存在がなくて。それで、それをみた姑さんが驚いていて、国籍を日本に帰化しなしというお勧めがあり。

Y: 悩みはなかったですか?

C: それで、韓国の親に相談したら、日本でずっと住む予定だし、子ども達もそうだし、夫も日本人なので。日本人と結婚したのでその国の文化を受けれて、(帰化する)従うのがよいと言って。

Y: 帰化してっから自分のアイデンティティについてゆらぎとか悩みはなかったのですか?

C: 最初は名前が…。韓国語を教えながら活動していたので日本ではそういう(ビジネスネーム、ペンネーム)配慮がある。私が〇〇〇(韓国名)で働いているの。ビジネスネームと区別してくれているの。そういうのはありがたい。まったく、(アイデンティティの)ゆらぎはない、名前が変わったということで私は(変わらず)私なので。名前が変わったということで私自身が完全に変わることもない。

(中略)お仕事する際には(韓国人である)元々の私のスタイルを見せることが出来て、今私が日本で生活するために子ども達と便宜上(帰化をしていた)。

Y: 行政的なものですか?

C: 書類上はそうだけど、私自身が変わったわけでもなく。(教育委員会の先生から帰化することによる叱責は)20年前だったけど、時代遅れだと考えていた。

Y: (その先生は)国籍=アイデンティティだと思っていたのですか?

C: でも(その考えが)時代遅れだと思っている。最近、今の時代に…。20年前に(外国人は帰化しないで)聞いていたけど、私はそういうのを聞いていて少し機嫌が悪くなり。今も私の心は変わらず。行政的なことで(帰化した)変えたけど私のことを帰化したということで日本人になったと思ってそういう発言をするのか。

Y: 国際結婚することにより現地で生活しないといけいなので行政的な面とは随分違うでは?

C: そう、違うからね。

C: ほかの人から「国籍はどこですか?」と言われると(私は)堂々と話せるのよ、名前が変わるということで私自身が変わることはない。私は〇〇〇(韓国名)であり、ここで生活(住む)ための(帰化は)一つの手段である。

<sup>77</sup> 法務省: 国際結婚、海外での出生等に関する戸籍Q & A (moj.go.jp)

<https://www.moj.go.jp/MINJI/minji15.html#name6>(2022.9.19 アクセス)

C：私は姑さんとかのお勧めで（国籍を）変えたけど変えても別に変わったこともなく。（2021.11.20 インタビューより、原文韓国語、下線筆者）

#### 5.8.1.4 Dの夫の事例

Dの夫のアイデンティティはどのようになっているのか。韓国に留学していた頃「やっぱり（自分は）韓国人だなあ」と思ったと言っていた。「顔もそうですし、水があう」ということで「僕の国はここ（韓国）じゃないかなあ」と思ったと言う。また、20代前後くらいに来日した祖母の死の間際には韓国語しか話さなくなり、「自分も韓国人だ」というのがあった。在日韓国人3世と結婚しているDのアイデンティティは、日本人だと思っている反面、国籍は「ただ単に年齢みたいな感じであって数字というそういうものであって、何人だからというそのものもない。私もその例えば子どもたち家庭とかも接する時も何人だから、感じのというとらえ方というのはいないんですね」と偏見を持たないDは幼い時からの親の影響もあり、夫との結婚も反対がなかった。

Y：ご主人さんは在日（コリアン）の三世とおっしゃっていましたがそのご主人さんは間のゆらぎとかおそらくないだろうとおもうんですけど。

D：主人は韓国留学した時になんかやっぱり向こうの韓国人だなあということを思ったと言っていました。

Y：どういう時だったでしょうかね？

D：顔もそうですし、水が合うというかやっぱり僕の国はここじゃないかなあ。なんとなく空気環境とか留学した時にふっと思ったらしいです。

Y：なるほどですね。

D：それ前に日本がいやだとかそうことはなかったみたいなので。

Y：そうなんです。

D：韓国に行った時にそう思ったらしんです。

Y：やっぱり自分のアイデンティティは韓国…。

D：そしてお祖母さんが一世のお祖母さんが20前後くらいに（日本）来たと思うんですけど、そのお祖母さんがもうちょっと前日本で亡くなった時に、もちろん日本語も20歳から日本に来て90何歳までいたので日本語も出来るんですけど、どんどん死ぬ間際になると韓国語しかしゃべれなくなって。だから、やっぱりなんかこうこれだけ日本で長く住んでいてもやっぱりお祖母ちゃんは韓国。そのお祖母さんと喋っているとよけい自分も韓国人だあというのがあった。

Y：やっぱり身はここ（日本）にいても韓国語を喋ることによって。

D：言語ですね。

Y：そうですね。言語を通して自分のルーツを辿っていることでもあるし、自分のアイデンティティは一部韓国にあるんだということでしょうかね？

Y：Dさんは在日（コリアン）の三世のご主人さんとお子さんも土曜学校に行かせてインターナショナルスクールに通わせているんですけど、〇〇さんはどうなんですか？国が、韓国語が入っていて英語もちょっと入っていてDさんのアイデンティティはどうなんですか？

D：私はやはり日本人だなあインターナショナルスクールに行けば行くほど思うこともあるんですけど、でも、なんか日本人、韓国人だからという感じではなくて垣根がない感じですね。それぞれの文化を知っているんですけど、子ども達もそうなんですけど、何人という感覚ではないんですね。国籍はただ単に年齢みたいな感じであって、数字というそういうものであって何人だからというそのものもない。私もその例えば子どもたち家庭とかも接する時も何人だから感じのというとらえ方というのはいないんですね。（2021.11.20 インタビューより、原文韓国語、下線筆者）

### 5.8.1.5 Eの事例

Eの夫はEが国籍変更(帰化)することを反対していた。「できればやってほしくない」といい、抵抗感を持っていた。Eの夫が国籍変更(帰化)の部分は公開したくないとことでここではインタビュー内容は記載しない。Eは日本で永住をするつもりではあるが、帰化はまだ考えていない。

### 5.8.1.6 Fの事例

Fは歴史教育を韓国で受けていたので、帰化(国籍変更)をすることに反感を持っている。姓を変えて帰化(国籍変更)をした韓国人の友達もいたそうだが、「私もしてみたいとは思わなかった」という。育児をしている間、子どものアイデンティティについても、自分のアイデンティティについて悩む時期が多かった。「韓国から日本に戻ると(宇宙に)浮かんでいる気持ちでした。それが、一番目の子が5歳までは続いて、私がほんのりと感じているのは小学校に入る前の5歳の時までは、私が(宇宙に)浮かんでいたような感じでした。日本の社会にも二足で立たずに、味見をしているような感じでした。(中略)ずっと葛藤があり、混乱があり、(宇宙に)浮かんでいるような感覚が何年間続いた」と言う。子どもが幼い時には韓国に帰る可能性も置いていて、(日本を)離れる気持ちもあった。しかし、長女が小学校3年生になった時点で「(一番目の子どもが)小学校3年生の時に解決ではなく、日本に定着せねばいけないという気持ちが強くなりました」という。特に、長女が「(一番目の子が)中学校に進学するから完全100%(ここで定着しないと)」と思っていた。留学や仕事の経験があるFは、子どもが幼い時には母語継承のために、韓国の子ども園にも1か月から5か月間入所させ、頻繁に日本と韓国を行き来していた。Fは自分のアイデンティティについて次のように語った。「韓国人という私の中のアイデンティティが韓国人ではないと考えていました。日本と〇〇(住んでいる地域)と済州道(出身地)と韓国、4つが混ざっている感じでした。私のアイデンティティは、私が韓国語を教える時には韓国人というアイデンティティが大きくなるのです。楽しいんです。元々その生まれつきのアイデンティティなので、そして、子どもを通しての日本のアイデンティティと〇〇(住んでいる地域)アイデンティティが高くなるのです」と語る。

Fは二つの文化の関係性をどのように位置付け、統合していくかという危機をもたらす。危機は、文化移動による二文化の接触直後に生じるが、通常、性急な解決は供給されない状態のまま(モラトリアム<sup>78</sup>)、再統合に至り(一時的な再統合、仮の再統合とも考えられる)、

---

<sup>78</sup> もともとは「支払猶予」を意味する経済用語。非常事態において債務の決済を一定期間延期し、経済の崩壊を防止する措置のこと。精神分析家のE・エリクソンがこの用語で、子供と大人の中間にあたる青年期の心理的特徴を示唆した。すなわち、青年期というのは単なる子供から大人への過渡期ではなく、それ自身が一つの文化をもつ時期なのである。大人になるためには多くの困難に遭遇するが、モラトリアムは将来のことを顧慮することなく、役割演技などによってさまざまな実験を試み、自己の問題を創造的に展開する時期であり、成長のための猶予期間である。こうしたモラトリアムを提供することで、社会は青年にさまざまな同一視を経験させ、アイデンティティの確立をサポートする。モラトリアム(心理学)とは - コトバンク (kotobank.jp)(2022.9.22 アクセス)

次に、二文化が接触するまでは、その状態が継続する。国際結婚者のアイデンティティ形成には、一時帰国や韓国からの訪問者(親族、友人)による韓国文化(出身文化)との接触が、生じる度に、危機やモラトリアムを経て再統合されると考えられる。

F: おそらくずっとここで住むのではないかと。帰化(国籍変更)を考えたことはないんです。帰化といえばなんかそんな歴史教育のせいで反感もあるようです。姓を変えることに対して…。ところで、姓を変えて帰化する韓国人の友達もいるけど、私はその友達をみて「私もしてみたいとは思わなかった」んです。

Y: 日本で住みながら、本人に対するアイデンティティのことで揺らぎはなかったのですか?

F: アイデンティティは私が20歳にここ(〇〇)に来たのです。大学3年生の時に5週間の研修を受けて、そして、6ヶ月後再び交換留学生として1年間を過ごしてここ(〇〇)でアイデンティティが確立されたのです。

Y: どのようにですか?

F: だから、2年生の時までは私のアイデンティティをよくわからずに、ここに来てからいろんな人と交流をして文化を接して、そして、国際交流員をしながら外国人も職場に多くて。ニュージーランド人、南米の人、ハワイの人、こういった人々が私の同僚であり、交流を深めていたので、私のアイデンティティはその時に作られたと思います。留学を経てここで(国際交流員として)働きながら…。

Y: Fさんが〇〇に住んでいて韓国を行ったり来たりして、日本と韓国で受ける文化的な衝撃があるんですが、そういうのを見て私はどんな人なのか?と反問したことはありますか?

F: 子ども達が幼い時に、こういうことをよく考えていたのです。子どもが生まれて間もない頃、子どものアイデンティティについても悩み、私のアイデンティティについても悩んでいて、幼い時には夫婦間で育児のことで葛藤も多いし。調整しないといけないので、そういう過程で「あ、本当に韓国へ帰ろうか?」とこういうことを瞬間的に何回も考えたことがあります。それで、韓国へ里帰りして帰っていいですが、なんか気心地悪いし、もう(日本)家へ帰らないと思っていろいろ買って(日本へ)戻ると(宇宙に)浮かんでいる気持ちでした。それが、一番目の子が5歳までは続いて、私がほんのりと感じているのは小学校に入る前の5歳の時までは、私が(宇宙に)浮かんでいたような感じでした。日本の社会にも二足で立たずに、味見をしているような感じでした。

Y: はい。

F: 日本で受け入れ難い社会問題や身の回りの問題があった時、なんといっても韓国がよいと。(両国を)比較していたんです。(中略)ずっと葛藤があり、混乱があり、(宇宙に)浮かんでいるような感覚が何年間続いたのですが、私が40代になり一番目の子が小学校に入って、1-2年生の時には(私が)不安がっていました。子どもが幼稚園に通うと私が幼稚園に通っているような、また、子どもが小学校に通うと私が小学校通っているような感覚にとらわれたことがあって、いろいろと悩みはありましたが、それで(一番目の子どもが)小学校3年生の時に解決ではなく、日本に定着せねばいけないという気持ちが強くなりました。

Y: 子どものために。

F: 特に、(一番目の子が)中学校に進学するから完全100%(ここで定着しないと)。だから、子ども達が子ども園、幼稚園、小学校低学年の時には少しでも(韓国へ帰る)可能性を置いていたのです。韓国へ帰ることもありうる。可能性を置いていて私が日本に定着をしないこともありうる。(日本を)離れる気持ちもあったけど、(中略)現実的な問題があり、現実受け入れて妥協するようになりました。

韓国語を教えたかった理由は、60歳になると私が好きだった通訳・翻訳の仕事ができなくなるので、韓国語を教える仕事は出来そう。

Y: 韓国語を教えながらFさんが韓国人であることを忘れないようなつながりでもありますか?

F: そうですね。それがとても強いようです。韓国語を自分の母語を教えることが出来るととても幸せだと。ここ(日本でこの地域社会で私はあくまでも外国人であり、いくら長く住んでいても私の根っこは外国人なので、言語の面でも文化の面でも問題はあり、社会的に弱者でもあるけど。(日本人と)同じではないが母国語を教えることによりこの地域社会の市民と交流をしているので、この社会に私が役に立つ存在になったような。そして、他の職種であれば私が日本の組織を合わせないといけないのですが、いつも、日本式の思考方式と行動は組織文化に合わせないといけないのが、韓国語を教えることにより、あるがままの私を表すことが出来るのです。あえて、あるがままの私(韓国的な私)を表現すればするほど受講者は喜んでくれるので。

Y: 日本の中にながら韓国を感じ取って韓国語を教えることにより本人のアイデンティティが成り立っていくとい

うことですね。

F: はい、そうですね。私のアイデンティティを、韓国人という私の中のアイデンティティが韓国人ではないと考えていました。日本と〇〇と済州道と韓国、4つが混ざっている感じでした。私のアイデンティティは、私が韓国語を教える時には韓国人というアイデンティティが大きくなるのです。楽しいんです。元々その生まれつきのアイデンティティなので、そして、子どもを通しての日本のアイデンティティと〇〇アイデンティティが高くなるのです。なぜなら、与えられた環境に対して葛藤なく受け入れることができるので、そうしないとなぜこうなの？となるので。そうするとストレスになるし。(中略)  
お仕事をする際には日本のアイデンティティが大きくなります。正確であればいけないし、きめ細かく、具体的にしないといけないし。(2022.2.25、インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

### 5.8.1.7 Gの事例

日本での生活満足度と結婚満足度が高いGは、帰化(国籍変更)は考えていない。生まれはソウルで、留学は9百万人が住んでいる都市、英語の留学先の香港も7百万人の人口の都市であったため人が多い所よりは静かで暮らしやすい〇〇市(今住んでいる場所)で暮らしていいと言っている。

Y: 国籍はどちらですか?

G: 大韓民国です。

Y: 帰化を考えたことはあるんですか?

G: ありません。

Y: 日本で住みながら満足度はどうですか?

G: 〇〇(住んでいる地名)で住みながら満足度は高いです。なぜなら、私がソウルで生まれて育って、留学を8百万名がいるところでして、それが終わってからは香港という7百万の人口の都市で留学。人が多いのが嫌いです。特に、マクドナルドで並んで注文する自体がきらいです。

Y: 満足度が高いのは〇〇が静かでのどかだから?

G: はい、のどかだし静かだし揃えているものは揃えているし。

Y: 車さえあれば。

G: そうですね。

Y: 生活の満足度は80%結婚に関する満足度は?

G: 高いです。結婚に関する満足度は90%。(2019.8.8インタビューより、原文韓国語)

### 5.8.1.8 Hの事例

Hは帰化も名前も変えないと言った。日本で社会生活をする上で不便もなく差別も受けたこともなく、これからもずっと韓国名を名のり生活するつもりである。

Y: では、ゆくゆく永住が長くなるとおそらく日本で住むに当たって国籍を帰ったり、名前を通称名で名乗ったりする方々も増えているんですけど。それに関してはどういうふうに思っているんですか?

H: 私はそれについてまったく変える気がしないんですね。変えないと思います。で、私はなんか私が社会生活で会った人たちがよくて良かったかもしれませんが、もう、一回も自分が〇さんだとして今働いているその組織ももう一人の〇さんも含めて韓国人のスタッフが二人いるんですけど、韓国人のスタッフとして一回もなんか差別的なことも経験したこともなければ、社会生活ではなくてもプライベートでも私はあろうアジア部署でありいろいろ公共機関とかでやる時にもとうとう〇(韓国名)と名乗るし、これからも私は〇(韓国名)として生きていこうと。

### 5.8.1.9 Iの事例

Iは2022年1月に子どもの教育のために、日本へ移住のために来日した。Iの考え方は柔軟

性を持っていて「これから移住して死ぬまで住むつもりなのでなるべく…。もし取れるなら帰化(国籍変更)することも考えている」語る。

Y: 敏感な問題ですが国籍とかはどういうふうに考えていますか？

I さん: もちろん、状況次第ですけど、これから移住して死ぬまで住むつもりなのでなるべく…。もし取れるなら帰化することも考えている。

Y: 年頭に入れているんですね？

I さん: それは仕事だったり経済的な面も上手くいった場合ということ。帰化だったり自分の住む場所が馴染むという。教育のために、子どものアイデンティティのためにですかね。子どもが日本人になりたい。別に私は片方がもともと自分は韓国人だからといって韓国の文化だったり考え方を無理やりに教えようとはあんまり考えていないので。(2022.2.15 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

#### 5.8.1.10 J の事例

J は国籍も名前も変えるつもりはないし、変える必要もないし、変える必要性があるかも疑問であると言った。

Y: J さんは日本で住みながら、国籍の問題とか、お名前の問題とか、永住の問題とかどういうふうに考えていますか？

J: ま、わりと最近そういう話を周りから言われていて考えているのは一応だったら国籍もお名前も変えるとは思んですけど、正直、そういう必要性が出てくるのかと考えてもちろん妻もそんな国籍も名前も変える必要はないんじゃないと思っているし。もし、本当に必要だったら変えるけどその必要性が本当にあるのかどうか疑問ですね。

(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線筆者)

#### 5.8.1.11 K の事例

K は、帰化(国籍変更)は全く考えたことはない。韓国の系譜を受け継がなければならないということもあり、日本で永住のために家を購入しているものの、K の系譜を守るためにはK の父からはK が 60 歳になって定年退職をしたら、韓国に帰国してK 名義の土地を守りながら生活するように言われた。K は系譜を受け継いでいくのが自分の使命であり責任であると語る。

Y: 日本での生活満足度が高く韓国としてのプライドも高くプラスの効果も多いようですが、家も購入して永住していますが、嫡孫なのでその系譜を繋いでいかないと韓国を念頭に入れているところもあるんですね。

K: 日本国籍で変えることも出来ず、帰化ということも考えたことは全くありません。

K: そういう問題もあり、帰化もそうだし、(僕の)家からも反対もありそうだし、(僕)も家門といいますよね。系譜を繋いでいかないという使命感と責任感があります。

いつかは息子にも伝えないといけない責任もあるし、そういったことを教えないといけない務めもあります。それで、子どもにもいろいろとアイデンティティについて話しているんです。

父は韓国人であり、母は日本人なので君は二つを全部持っているんだよ。まだ、幼いのでどれくらい理解しているのかはわからないけど、のちに先祖代々から繋いできたというのを教える予定です。両方で僕の場合は生活してきた環境とか韓国人なのでそういうことについて考えているところもあり、息子が系譜を繋げないといけないという継承に関する責任は持つべきと思っています。

Y: 継承せねばいけない。韓国的な血の系統が確実だと、今は日本で生活しているし、永住しているけど、言語的な継承の要素は難しいだろうけど、そういう精神的な文化的なことは受け継ぎたいですね。

K: はい、そうです。(2022.2.26, インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

#### 5.8.1.12 L の事例

L は国際交流員の仕事の経験もあり、韓国料理が食べたくなった場合はインターネットで

手軽く食材を注文し、直接韓国料理を作っている。

Y: Lさんもよく(料理を)作るんですか?  
 Lの妻: どうしてもやっぱり食べたいものを作ると韓国料理が食べたい。  
 Y: なるほどですね。  
 Lの妻: やっぱり私が作るよりも自分(夫が)で作ったほうが、美味しくできるので。作っています。韓国料理と日本料理両方できます。  
 Y: Lの妻さんが韓国の料理を作って食べさせたりとかしていますか。  
 Lの妻: しています。  
 Y: 例えばどういったものを?  
 Lの妻: 頻繁ではないんですけども、どうしても食べたいときがあれじゃないですか? お店に外に食べに行けないうし、家で作って食べ方しかないので、食材はインターネットで買えるので買って家で作っています。  
 Y: チゲとか?  
 Lの妻: テンジャン (味噌チゲ된장찌개)、キムチチゲ(김치찌개)作ったり、キムバ(김밥)食べたかったら作ったり。  
 Y: Lさんは何を作るんですか?  
 L: ピピングッス (피빔볶음 79) 作ったり普通に料理しています。  
 交流員時代に料理教室とかいろいろ自分で工夫したこともあるし、自分も食べるのが好きなので、やっぱり海外で長く住むとどうしても自分で解決しないといけないのがあっていろいろレシピは増えています。(2022.2.26 インタビューより、原文日本語)

## 5.9 考察

表 5-4 日韓国際結婚家庭の親の国籍

国籍／性別	日本	韓国	備考
	A(妻)韓国→日本 A(夫)日本 B(夫)日本 C(妻)韓国→日本 C(夫)日本 D(妻)日本 F(夫)日本 G(妻)日本 H(妻)日本 I(妻)日本 J(妻)日本 K(妻)日本 L(妻)日本	B(妻)韓国    D(夫)韓国 F(妻)韓国 G(夫)韓国 H(夫)韓国 I(夫)韓国 J(夫)韓国 K(夫)韓国 L(夫)韓国	※国籍変更(帰化者)は A、Cのみ。

A、Cは日本での生活のために、永住を覚悟して国籍を変更している。すなわち、鈴木(2012)が国際結婚者の国籍変更については、当事者がおかれている社会・文化環境の中

<sup>79</sup> コチュジャンのタレで和えた辛口のククス(蕎麦など麺料理の総称を指す韓国語)で、一般的にスープは入っていない。https://www.konest.com/contents/gourmet\_guide\_detail.html?sc=2172(2022.9.22 アクセス)

で、「実生活上の快適さ」と「永住の覚悟」という両者の理由が複雑にからみあい、国籍変更に至ると述べている。しかし、国籍が変わったということで自分が日本人になったわけでもなく自分は自分であり、誰より祖国への愛国心も強く、韓国と韓国語を教えるのに誇りをもっていた。つまり、三宅(2016)が日系ディアスポラと英国日本人会の調査で、英国籍をもちながら自らを日本人と感じており、その根拠が永住権保持者と異なる点が興味深いと指摘していることと似ている。

日本人配偶者と結婚している、B、E、F、G、H、J、K、Lは国籍を変える必要性も感じなく、外国人として生活するのにも不便を感じていない。Iは子どもの教育と永住が目的で再び来日することになっている。Iは父親の影響もあり、日本で暮らしながら必要に応じて国籍を変えることも考えている。Dの夫は在日韓国人として国籍も韓国であり、子どもたちも二重国籍になっている。また、名前もファミリーネームとして韓国名を名っている。

#### 5.10 名乗りによる日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ

矢吹(2011)は国際結婚夫婦の日本人妻の「名乗り」の選択に注目し、6つのパターン<sup>80</sup>に分けて分析を行った。日本志向の妻には日本では日本姓を、アメリカではアメリカ姓を使用する傾向が、アメリカ志向妻には日本でもアメリカでもアメリカ姓を使用する傾向が多く見られる。

##### 5.10.1 Aの事例

研究対象者Aは、結婚後間もない時期に日本に帰化することにより日本名を名乗ることになった。因みに、Aは日本では日本姓を韓国では韓国姓を使用している。つまり、Aは矢吹の「名乗り」選択の「日本では日本姓をアメリカではアメリカ姓を使用」に該当する。筆者が日本名の名乗ることについて質問をすると以下のように答えてくれた。

Y: 日本名を名乗ることになった理由はありますか?  
A: 日本の公共機関などで韓国名が呼ばれると、病院などでは親しくない人から韓国人ですか? 国際結婚されていますか? という質問をされる。さらに、韓国名が呼ばれたことにより注目を浴びることになり、結局目立ってしまう。目立つ事なく無難に生きるためには日本名を名乗るしかない。(2019年5月24日4回目のインタビューより、下線は筆者)

##### 5.10.2 Bの事例

Bは日韓国際交流センターやNPO法人を立ち上げ、活動をしているため、韓国名で積極的に交流をしてきた。以下のインタビュー内容は韓国名で連載をしていたら、在日コリアンからの手紙やはがきなどが届く。Bは日本でも韓国でも自分の実名で活動している。

B: 84年から新聞に連載を始めたが、その時〇〇通信を通して連載を始めて、〇〇で連載をしていた頃のんな反応

<sup>80</sup> ①日本でもアメリカでも日本姓を使用②日本でもアメリカでもアメリカ姓を使用③日本でもアメリカでも混合性を使用④日本では日本姓をアメリカではアメリカ姓を使用⑤日本では混合性、アメリカではアメリカ姓を使用⑥日本では日本姓アメリカでは混合性を使用。④は日本志向の妻に、②はアメリカ志向の妻に多く見られる。

がありました。手紙、はがきが在日同胞から届いたのです。日本で戦後何十年も住んでいるが、新聞に韓国人の名前で、自分の本名で記事を書いて連載されているのははじめてみた。書面の記事を読み、涙が出ました。手紙を受け取ってその記事を切り取って父親に見せたら、父親が枕元（病院に入院していたので）に入れながら喜んでいました。（2022.3.8 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者）

### 5.10.3 Cの事例

Cは国際結婚してから間もない時に国籍変更をすることによって、名前も夫の姓にしている。韓国名は仕事上使うことがあり、ビジネスネームで使っている。日本名は行政的な書類関係で使用している。Cは名前が変わるということで自分が変わることはないという。形式的な行政的なことが変わったとしても自分は変わらないという。

C：最初は名前が…。韓国語を教えながら活動していたので日本ではそういう（ビジネスネーム、ペンネーム）配慮がある。私が〇〇〇（韓国名）で働いているの。ビジネスネームと区別してくれているの。そういうのはありがたい。まったく、（アイデンティティの）ゆらぎはない、名前が変わったということで私は（変わらず）私なので。名前が変わったということで私自身が完全に変わることもない。（中略）お仕事する際には（韓国人である）元々の私のスタイルを見せることが出来て、今私が日本で生活するために子ども達と便宜上（帰化をしていた）。（2021.11.20、インタビューより、原文韓国語、下線筆者）

### 5.10.4 Dの事例

Dは結婚をして、夫の姓（コリアン姓）に変える。Dは日本では女性が結婚すると夫の姓に変えるため、Dも同じく日本の感覚で姓を変えている。夫の姓に変えていることで、在日韓国人なのか、在米韓国人なのかと聞かれる。国籍は変えずにパスポートは日本にしている。

Y：結婚される時には〇〇さんはあのご両親からは反対はなかったですか？  
D：うちの家系がですね、あんまり国籍とかあのおう例えば年齢とかなんというのですが、ジェンダーとかですけど、そういうのに対しても偏見とかそういうなんというですか。そういうのが全くないんですね。それで先からそういう環境で育てるので知り合った方がたまたま国籍が違っただけで、なので国籍に関するあのおう何が言われたことは全くなくて。はい、えっと、たまたま結婚した人が韓国国籍だったので日本人同士でしたらご主人の名前(姓)に変えますよね。  
Y：そうですね。  
D：私の感覚としては、私は日本人、主人は韓国籍だけで、だから私も〇（夫の姓）に変えたんですよ。  
Y：なるほど。  
D：日本名、日本の名字を、たまたま主人が韓国籍ただけで〇にだけあってそこはおすごく驚かれんですけど。その感覚的には日本人と結婚するのと一緒だから主人の名前(名字)に変えるという。子ども達も〇（夫の名字）で家族がみんな同じという日本的な考えで。韓国は別姓ですよ。  
Y：日本人の名字が例えば佐藤〇〇さん、もしくは〇〇を取って佐藤〇〇という、日本名だけで使う方も結構多いんですけど。  
D：そうです。女性の方はみんな、私の友達の中で日本人で在日（コリアン）と結婚されても奥さんはそのまま日本名を使われたりという感じが多いですね。  
Y：極力ご主人のお名前である〇（ご主人の姓）をとったのはやっぱり家族みんな〇〇という。〇ファミリーという意識を考えて変えたという。  
D：日本人の山田さんなら山田に変える感覚と一緒に、たまたま韓国方だけで国籍は〇〇（旧姓）のまま日本のパスポートにしたので。（2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線筆者）

### 5.10.5 Eの事例

Eは仕事上、韓国名を名乗って活動している。普段のレストラン予約や美容室予約では夫

の姓を名乗っている。夫の姓を名乗っているのは、実生活上の便利さのためである。  
(2019.3.20 インタビューより、原文韓国語)

### 5.10.6 Fの事例

Fは国籍変更はしていないが、状況を見て、子ども達の学校行事などや実生活では夫の姓(日本姓)を使用している。仕事(翻訳、通訳、韓国語教師)では、韓国名を名乗っている。

Y: ○○で生活するのに不便なことはないので帰化もせず、通称名も使っていないということですね。  
F: はい、そうですね。保育園に(子供を)送ったり、学校へ子ども達を行かせているので私のことを夫の姓に呼んでいるのです。  
Y: そうですね。  
F: だから、私も(状況をわきまえて)区別して使っているのです。(子ども達の)学校に関連することや美容室に行ったりする時は外国人という面倒なので。  
Y: そうですね。  
F: 事実、(店側も)私が外国人という姓を名のると(店側の)人も緊張することもあるので、夫の姓を名のります。私の仕事関連(通訳、翻訳)のことに関しては私の韓国名を名のるんですが、学校、子どもに関連する事には(夫の姓を名のるんです)。(2022.2.25 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

### 5.10.7 Gの事例

Gは職場でも生活面でも韓国名を使って生活している。(GとLINE連絡)

### 5.10.8 Hの事例

Hは仕事の関係上、公共機関を訪れる時があるが韓国名を堂々と名乗り、プライベートの面でも妻の姓を名乗るのではなく、韓国名を名乗っている。韓国名で生活している中で不便を感じたこともなく、差別もうけたことがない。韓国名は変える気もしないし、変えないと語る。

Y: では、ゆくゆく永住が長くなるとおそらく日本で住むに当たって国籍を変えたり、名前を通称名で名乗ったりする方々も増えているんですけど。それに関してはどういふふうに思っているんですか？  
H: 私はそれについてまったく変える気がしないんですね。変えないと思います。で、私はなんか私が社会生活で会った人たちがよくて良かったかもしれませんが、もう、一回も自分が○さんだとして今働いているその組織ももう一人の○さんも含めて韓国人のスタッフが二人いるんですけど、韓国人のスタッフとして一回もなんか差別的なことも経験したこともなければ、社会生活ではなくてもプライベートでも私はあのうアジア部署であり、いろいろ公共機関とかでやる時にも堂々と○(韓国名)と名乗るしこれからも私は○(韓国名)として生きていこうと。(2022..2.19、インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.10.9 Iの事例

Iの妻は韓国で生活していた頃、日本名を名乗り生活していた。Iは永住のために2022年1月来日することになる。Iは必要に応じて、帰化も考えていた。名前を日本名にするかどうかはまだわからないと語る。

Y: ○○さんは韓国にいる時にお名前は日本名を名乗られたんですか？  
Iの妻: はい。(日本の姓)名字もそのまま。韓国で、一回子どもたちが集まるノリバン(놀이방)で、私が韓国語で話していたら(相手が)外国人とわかって日本人でわかったらすぐ去って帰ったお母さんがいて。いやだったのか、ちょ

うど反日で不買運動<sup>81</sup>もひどかったのでもちよつといやだったのかあと思って。それで別の落ち込むこともなくそれだけで。私が一生懸命に韓国語でしゃべっていたら韓国語上手だねと言ってきて“どこで習っていたの”とかそういうふうに話しかけてくれるお母さんが多かったです。だった一回だけで。さーと帰ることをみて私は面白いなあと思いました。(2022.2.15 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

#### 5.10.10 Jの事例

Jは名前も国籍も変える必要はないと語る。もし必要だったら変えるけどその必要性が本当にあるのかどうか疑問に思っている。

Y: Jさんは日本で住みながら、国籍の問題とか、お名前の問題とか、永住の問題とかどういうふうに考えていますか？

J: ま、わりと最近そういう話を周りから言われていて考えているのは一応だったら国籍もお名前も変えるとは思いますが、正直、そういう必要性が出てくるのかと考えてもちろん妻もそんな国籍も名前も変える必要はないんじゃないと思っているし。もし、本当に必要だったら変えるけどその必要性が本当にあるのかどうか疑問ですね。

Y: なるほど、今のところはあのような不便も感じないし、あえて変える必要はないというふうに考えているんですね。わかりました。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

#### 5.10.11 Kの事例

Kは自分の名前にプライドを持っている。自分のことを紹介する場合、韓国の名字と名前を詳細に説明し、その場の雰囲気盛り上げる。

Y: お名前をKと言った時、周りの反応は？また本人が韓国の名前を使った時にどうですか？

K: 私は正直にプライドを持っています。あえて、日本名で名前を変えようと思ったことも特になく、普段(僕を)紹介する時に、「私の名前は○○○(韓国名)と申します。○ですか？○と言われたら漢字の○ですと。別に相手は威圧感を感じることもなく。フルネームで話す時には○○と言ったら「恰好いいですね」と言われることもあります。

Y: 官公署や市役所や銀行に行ったり、レストランに行った時、名前を記入するんじゃないですか。その時に、日本人の方が呼べない時にはあるんですけど。そういう時、不便は感じませんでしたか？

K: 僕はそういうのが全くなかったです。反対に僕が失礼にならないように、日本人の方も最近では国際社会ですので理解してくれているので。

Y: 不便を感じることなく、あえてプライドを持っているんですね。

K: 名前がある意味ネタ話になっています。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

#### 5.10.12 Lの事例

Lは生活面でも職場でも韓国名を名乗り生活している。特に不便を感じることなく日本で快適に暮らしている。

Y: (私の場合) 銀行に行ったときにですね。自分の本名を名乗るんですが、(中略)。

L: 確かにそういうケースもよくあります。でも普通に日本語でパーっと私が喋るので、そういうふうにはなってないですね。

Y: なるほど。たまに、そういう場面もあるけれどもそこまで差別感を感じたりとかしていない…。

L: 日常生活面においてはそんなにそうですね。そういうサービスってことは経験してないですね。

<sup>81</sup> 2019年7月から、日本による韓国への輸出厳格化措置に反発するため、韓国で日本製品不買運動が発生し、「NO JAPAN」「ボイコットジャパン」というリストが韓国のインターネット上に回された。ターゲットにされた主な商品は日本産ビール、ユニクロの衣料品、日本への旅行などである。

<https://news.yahoo.co.jp/byline/shinmukoeng/20191213-00154570>(2022.9.5 閲覧)

Y: 11年目になると生活の心地よさとか日本が韓国より日本のほうが住みやすいんじゃないですか？どうですか？  
 L: 慣れてしまったというところですかね。日本も韓国もそれぞれいうところがあって今はその快適に住んでいる状況ですね。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

## 5.11 考察

表 5-5 日韓国際結婚家庭の名乗り

名乗りの選択種類	研究協力者
日本でも韓国でも日本姓を使用	A(夫)、D(妻)、G(妻)、H(妻)、I(妻)、J(妻)、K(妻)、B(夫)
日本でも韓国でも韓国姓を使用	B(妻)、D(夫)、G(夫)、H(夫)、I(夫)、J(夫)、K(夫)
日本でも韓国でも混合姓を使用	
日本では日本姓を韓国では韓国姓を使用	
日本では混合姓、韓国では韓国姓を使用	A(妻)、C(妻)、E(妻)、F(妻)
日本では日本姓、韓国では混合姓を使用	

日本人配偶者と結婚している韓国人女性 A(妻)、C(妻)、E(妻)、F(妻)は子どもの学校行事や生活の便利さのために日本名(Fは夫の姓)を名乗り、韓国語や英語を教える際には韓国名を名乗り活動している。4人とも韓国と韓国語を教えることに誇りをもっていることとやりがいを感じている。自分のアイデンティティが韓国につながっていることに自身をもっと表現することができるという。

日本人配偶者と結婚している韓国人男性 D(夫)、G(夫)、H(夫)、I(夫)、J(夫)、K(夫)は日本でも韓国でも韓国名を名乗っている。日本で仕事や生活する上に不便を感じなく、韓国名を名乗っている。

ジェンダー別で見ると、女性の方が生活の便利さのために日本名と韓国名を混合に併用している。男性は仕事でも生活でも韓国名を使用しているのをインタビューの内容から確認することができた。

## 5.12 永住による日韓国際結婚の親のアイデンティティ

賽漢卓娜(2011:126-145)は、結婚移住女性の「定住」を私的領域だけではなく公的領域でも視野を広げつつ、彼らの行動や態度の基準となる「基準集団」という概念を用いて「定住」過程を分析している。対立した家族と過ごす私的領域を出て、公的領域にも活動範囲を拡大したことで、精神的な寄り所となる「居場所」を発見し、地域社会に居住を続けることが可能となったことを明らかにした。行動範囲を公的領域にも拡大したことで、「日本でくらししていく可能性を自ら開拓した」といえ、結婚移住女性の主体的な「定住」の在り方を提起している。また大野(2022)は、結婚移住女性は「ホーム」に内在する非対称な権力関係に

影響を受けながらも、主体的な行為により複数の居場所をもつことで「定住」する。すなわち、結婚移住女性たちにとっての「定住」とは、精神的な安らぎを得ながら、同時に地域社会の非対称なジェンダー構造の中に取り込まれていくというジレンマを抱えるプロセスなのであった。結婚移住女性を単なる社会統合の「客体」ではなく、「移動する主体」としてとらえ、空間移動と社会的移動を組み合わせた概念である「モビリティ」を、さらに特定の社会関係からの離脱を含む概念にまで高めた。しかし、国際結婚移民女性に関する定住や移民の研究は多いが、留学の経験があつて国際結婚移民男性の研究は管見の限り見当たらない。ここでは、日韓国際結婚している韓国人の女性と韓国人の男性の永住とアイデンティティの関係について明らかにする。

### 5.12.1 Aの事例

Aは2022年6月に韓国の家族に会ってきた。その後、8月にレストランでAと会って以下の話を聞くことが出来た。新型コロナウイルスの影響により2年以上、韓国に帰られずにもどかしい思いで日々過ごしていたAは2022年3月の食事の時に国籍変更(日本から韓国へ)や韓国への訪問についてとても不安を持っていた。しかし、韓国で家族に会い日本に戻ってAは国籍変更はなしで、ここ(日本)で子どものためにも頑張り母親として自覚を持って、もっと前向きならなければと語った。Aはもともと日本に留学の経験もあり、日本の大手企業で仕事の経験もあり、日本の文化については詳しい。しかし、留学と仕事の経験で得た日本の知識や生活様式とは違う「見えない外国人生活者」として生活をする上で、苦痛を覚えていた。それは、過度なメディアからの韓国に関する報道、ヘイトスピーチ等で本当の自分を表すことが出来ず、何かに挑戦することや、何かに積極になることにも、躊躇いを覚え、あまり目立たずに日本で静かに暮らそうとしていた。

A：国籍の問題（日本に国籍変更をしたものの、コロナの時制で長く韓国へ戻れないということで韓国に再び戻した方がよいか、相当悩み迷っていた）でいろいろあつたけど、やはり子ども達もここにいるし、一人の母親としてしっかりと前向きにここ（日本）で頑張らないとね。（2022.8.24、インタビューより、原文韓国語）

### 5.12.2 Bの事例

Bは18歳で音楽の勉強のために来日、その後アメリカに留学にする予定であった。音楽を断念した後、大使館に勤務しながら英米文学を専攻していた。大使館退職後、アメリカにある在米コリアンの放送局でアナウンサーの仕事があつたが行けなくなった。その後、ジャーナリストとして活躍する。1988年ソウルオリンピックの取材が終わり、イギリスの大学へ東洋学部（日本と韓国専攻）の教授として招聘されるが、〇〇市で陶磁器のハイビジョンテレビ番組制作等で忙しくなり、何回も延期した上、結局行けなくなる。〇〇市で移住し日韓国際結婚家庭を築く。日韓国際交流センターやNPO法人を立ち上げ精力的に活動をしている。Bは結婚前仕事をしていた時に日本人に対して心を開かなかった時があつた、当時Bの父親がその態度を見て厳しく叱る。国際結婚を機に〇〇市で日韓国際交流センターやNPO法人を立ち上げ活動していたが、その時父親の遺言でもあつた「日本と韓国の架け橋

になれ」を思い出す。□□クラブの基になる「知らせる努力、知る勇気」は日本で韓国の文化を知らせる使命でもあり、永住の目的でもある。

韓国人と日本人が情緒的に遠い理由は生活面で互いにライフスタイルを知らないからである。1975 年日本に留学で来日した韓国人が下宿先のおばさんとトラブルになり B は仲介役を頼まれた。(中略)大使館の図書室から韓国のお膳の写真を借りてきて、下宿先のおばさんに(匙でご飯とスープを箸でおかずを食べるといふ)韓国の食文化を説明した。留学生は韓国式食文化(スープにご飯を入れて食べる)で食べようとしたということで下宿先のおばさんとトラブルになった。こういうトラブルのことを解決しながら B は政治的なことで外交的なことで日韓関係の溝が深いのではなく互いのライフスタイルが違うので遠い国として認識すると語った。

B はアパートの持ち主であるおばさんとの関係の中で B が日本人であるアパートの持ち主のおばさんを信頼できずにいたことを次のように語った。「私はそのおばさんに心を開けなかった。洗濯物を取り込んでくれたり、煮ものを作ってくれたりしてくれたが、食べなかった。それを見ていた父親から“なぜ食べなかったのか?”と聞かれて(中略)、父親曰く“君はなぜおばさんともお話しもせず、付き合いもせず、おばさんがどんな人なのかもわからないのに、おばさんが作ってくれた煮物も食べずにいたのかものすごく叱られました。(2022.3.8 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

日本を離れようとする度に、B の父親から言われたのは「対馬になりなさい、玄界灘に橋をかけて君 (B) 自らが橋になればよい。だから、日本人でも韓国人でもない。引き算をせずに君 (B) は韓国人でもあるが君 (B) は日本で人生の半分を生きていたので、国籍は韓国人であるが、君 (B) は日本人でもある。君の体には魂、Spirit の中に日本が盛り込まれている。日本のことを知り、日本で住み慣れ、日本について語れるし、日本語も堪能だし、(日本は) 半分は君のものではないのか? だから、日本は私と関係がない国だと思わず、日本も私のものであると生きればよいのでは?」これが私の父親が話していたのですが、父親が日本に赴任して、父親が描いた通りにいけなかった部分を私にいろいろと押し付けている。

「玄海人<sup>82)</sup>」というキーワードは父親の遺言でもあり、「玄海人として足算をしながら行きなさい」と。(2022.3.8 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

Y: これからのこと(永住)は心配しないだろうと思いますが…。

B: 心配なところは多いです。不安なところも多いです。(中略)「○○クラブ」を立ち上げていたので最後まで書類もまとめて、次の世代につなげないと。そういう計画を立てています。オンラインの時代になっているので「知らせる努力、知る勇気」。(日本と韓国が)互いにライフ(生活様式)を知らなかったので、心を知らなかったので、距離がある。(日本と韓国を)知っている私達が、互いに韓国と日本の文化を共有出来るそういうプラットフォームを作り運営したい。仕事は娘がしているも企画は私がするから。(2022.3.8 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

### 5.12.3 C の事例

C は来日して 31 年目を迎える。日本にずっと住むつもりで老後対策も立てている C は日本が生活しやすい、友達もいる、好きな場所は日本にあると語った。韓国は韓国人なので住みたいと思うけど、たまに家族に会って、旅行するくらいでよい。住みたいとは思っていない。また、子どもも日本で生活しているし、C 自身も日本で仕事をしているため日本にずっと住むつもりであると語った。

<sup>82)</sup> 玄海人とは、日本と韓国の真の友好親善と両国民の心の交流が、さらに大きい友情へと発展する事を願い、日々実践し、その輪を広めていくために集まった全ての人々を称する。玄海人とは国籍、年齢、地位などあらゆる垣根と利害を超えて、お互い正しく認識し、理解し合うという一つの考えで行動し、両国民の心と心を持つ人々の思いを一つにして、日韓を問わず、両国がわだかまりのない関係として、長い歴史と共に生きる事が出来るように、今必要な活動を行うための集まりである。この時代に生きた者の大切な役割として、1 人でも多くの玄海人が、その力を出し合い、真の日韓友好を実現することを願っている。http://ww7.tiki.ne.jp/~genkaijin/genkai01.htm(2022.9.14 アクセス)

Y：これから日本で住むようになりますが、どのような考えを持っていますか？  
 C：悩んだことは一度もない。ほとんど、ずっと、これから日本で住むつもりなので。そして日本での老後対策を立てているのよ。私は韓国で住みたいという考えは韓国人だからないとはいえないけど、日本が（生活しやすい）楽だから、「住めば都」といってここ（日本）が楽だし、友達もそうだし、私が好きな場所も日本が多いので。韓国はたまに家族に会って兄弟に会ったりするのはいいけど、旅行に行くのはいいけど、韓国で住みたいとは思わない。  
 Y：生活基盤は日本である。  
 C：そう。あたり前。あと、夫も日本人だしお墓も日本にあるのでそれも守ってあげないと。  
 Y：お子さんも日本で生活しているし。  
 C：これから結婚もすることになると、私が（子ども達を）面倒見ないといけないので。あと、日本で仕事をしているので…。これかれもずっと日本で。(2021.11.20 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

#### 5.12.4 Dの事例

Dは新型コロナウイルス流行の前には韓国語と英語を習っていた。しかし、新型コロナウイルスの影響により中止している。日本にいる両親の面倒や子どもの勉学のことで世話などもある。以下のインタビュー内容でも日本で生活しつづけることは察することが出来る。

Y：なんか、えっと、コミュニティーとか習い事とか  
 D：韓国語を習った時と英語とを習った時があったんですけど、コロナでやっていないということと。うちの両親の具合が悪いので、中止している状態ですね。  
 Y：介護とかでお忙しい？  
 D：〇〇の手術とかしている。ちょっと今の時期、気をつけないと。  
 Y：心配でしょうね。  
 D：はい。それがちょっと大変で。(2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

#### 5.12.5 Eの事例

Eの親はEが韓国で生活しているならば、すぐに会えるのに遠く（日本）にいるから気に入らないと言っている。Eは生活満足度も結婚満足度も高く、韓国と異なって祭祀<sup>83</sup>もなく楽な点も多いとポジティブに考えていた。Eは日本人配偶者ビザで、これからのことについては深く考えたことはないけど、子育てしながら静かに暮らしたいと語った。老後にも日本にずっと住みたいが、親の健康が悪くなったりすると故郷に帰らなければならないと述べる。

Y：結婚に関する満足度が高いようですが。  
 E：私は少々不満はあります。私の母親が韓国にいるなら一緒に会えるのに遠くいるから（会えないので）気に入らないと言っております。私は日本で住むのも満足しています。結婚生活度もそうだし日本で結婚生活するのも、逆に楽な点も多いようです。夫の親との関係も韓国とは異なって祭祀もなく楽な点があるとポジティブ的に考えています。(2019.8.8 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

<sup>83</sup> 祭祀（チュッサ）は本来、韓国で神様や亡くなった祖先を祭ることを言う。しかし韓国人が「祭祀をする」と日常で使う場合には、日本語の「法事をする」に近いニュアンスであり、神様でなく亡くなった祖先を祭るという意味で話されるのがほとんどである。祭祀は普通長男が行う。なぜなら、長男は家系を代表する長であり、長男によって家がつながっていくと思われているからである。故に、韓国では長男を大事にする傾向がある。祭祀は旧正月（ソルラル）、秋夕（チュソツ）だけでなく、曾祖父、祖父、父の命日にも家族が集まって行われる。

[https://www.konest.com/contents/korean\\_life\\_detail.html?id=448](https://www.konest.com/contents/korean_life_detail.html?id=448)(2022.9.24 アクセス)

Y: 永住についてはどのような考えを持っていますか？  
 E: 日本でのビザは日本人配偶者ビザです。これからの（永住）計画については深く考えたことはない。子どもを育てながら今のように静かに暮らしたいです。  
 Y: 老後とは考えていますか？  
 E: 老後も私は日本で住みたいけど、(韓国の) 親の介護が必要だったりとかすると (故郷に) 帰ってから世話をしないです。(今のところ)よくわからないけど。(2022.9.26SNS で返答)

### 5.12.6 F の事例

F は 2 年前に永住権を取得している。穏やかな夫と住んでいる地域も落ち着いて生活できる環境であるため、日本にずっと永住を考えている。F は長女が中学生になるにつれ 100% 日本に定着(永住)しなければならない気持ちが強くなっていくと語る。子どもの成長と共に日本に永住の気持ちが強まる F は老後の備えとして韓国語を教えている。しかし、「日本に永住することは少々寂しいだろう」と日本と韓国を行き来しながら生活できたらと語った。

F: 日本で受け入れ難い社会問題や身の回りの問題があった時、なんといっても韓国がよいと。(両国を) 比較していたんです。(中略)ずっと葛藤があり、混乱があり、(宇宙に) 浮かんでいるような感覚が何年間続いたのですが。私が 40 代になり一番目の子が小学校に入って、1-2 年生の時には (私が) 不安がっていました。子どもが幼稚園に通うと私が幼稚園に通っているような、また、子どもが小学校に通うと私が小学校通っているような感覚にとらわれたことがあって、いろいろと悩みはありましたが、それで (一番目の子どもが) 小学校 3 年生の時に解決ではなく、日本に定着せねばいけないという気持ちが強くなりました。  
 Y: (日本に) 慣れてきたのですね。  
 F: 日本に定着 (永住) せねばならないという気持ちがだんだん強くなったようです。  
 Y: 子どものために。  
 F: 特に、(一番目の子が) 中学校に進学するから完全 100% (ここで定着しないと)。だから、子ども達が子ども園、幼稚園、小学校低学年の時には少しでも (韓国へ帰る) 可能性を置いていたのです。韓国へ帰ることもありうる。可能性を置いていて私が日本に定着をしないこともありうる。韓国語を教えたかった理由は、60 歳になると私が好きだった通訳・翻訳の仕事ができなくなるので、韓国語を教える仕事は出来そうで。  
 Y: (前略) 韓国へ移住とかはどのように考えていますか？  
 F: 夫も日本人だし、性格も穏やかな人であり、(私も) ここ〇〇(住んでいる地名)が好きだし。  
 Y: そうですね。  
 F: おそらくずっとここで住むのではないかと。  
 Y: これかも日本の〇〇に永住することになりますが、老後についてはどのように考えていますか？  
 F: お金を沢山稼いで〇〇〇 (韓国の実家) に一軒を買いたいです。(日本と韓国を)行ったり来たりしたよいなあと。ここ (日本) にずっといたら… (少し寂しいだろうし)。なぜなら、私がここ (日本の〇〇) で無難に暮らしています。平和に。大きな葛藤もなく。たまに、いらいらすることはあるけど。ところで、韓国へ行く飛行機のチケットをチケッティングすると、(韓国へ行く) 一か月前から (うきうき) 楽しくなるんですよ。私が、毎回そういうのを感じながら、毎年 (韓国へ) 行かなければと思いました。(韓国へ) 行ったら姉、兄にも会いたいし。  
 Y: 韓国で一時滞在をしているうちにここは私が住む場所ではない、ここは私が住む場所と思ったことはありますか？  
 F: (日本へ) 帰る日程が決まっているんじゃないですか。だからここ (韓国の実家) でずっと住むわけにはいかないし、何日後、一か月後、日本へ帰国する日程が決まっているので、ここ (韓国の実家) では住めないということは考えたことはないんです。  
 Y: 一時期限だけここ (韓国の実家) にいるので楽しめるという感覚があったのですね。  
 F: はい、そうだったんです。韓国へ帰ると日本ではありえないことが起きるので、それをみながら驚くのです。  
 Y: 文化衝撃ですね。  
 F: はい。(2022.2.25 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

### 5.12.7 Gの事例

Gは結婚のために来日している。日本の〇〇市に住みながら生活満足度も結婚満足度も高いと語った。Gは中国での留学経験（日本語専攻）と香港での留学経験（2年間の英語の学び）を通して国籍を超える友達が大量にいる。性格も明るく職場での人間関係も円満で働いて得る満足度も高い。Gは日本で永住者であり、Gの妻が老後に関していろいろと準備している。

Y：日本には留学のために来たのですか？ G：いいえ、中国で大学は卒業したのです。それで、2011年日本に定着（永住）のために来たのです。 Y：定着？結婚？ G： <u>結婚をするつもりで彼女(妻)の家に来たのです。</u> Y：日本で住みながら満足度はどうですか？ G： <u>〇〇で住みながら満足度は高いです。</u> なぜなら、私がソウルで生まれて育って、留学を8百万名がいるところでして、それが終わってからは香港という7百万の人口の都市で留学。人が多いのが嫌いです。特に、マクドナルドで並んで注文する自体がきらいです。 Y：満足度が高いのは〇〇が静かでのどかだから？ G：はい、 <u>のどかだし静かだし揃えているものは揃えているし。</u> Y：車さえあれば。 G：そうですね。 Y：生活の満足度は80%結婚に関する満足度は？ G：高いです。 <u>結婚に関する満足度は90%。</u> (2019.8.8インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)
Y：日本での永住権はありますか？ G：はい、永住者です。 Y：(日本での)老後についてはどのような考えを持っていますか？ G：老後対策はしていないのです。おそらく、妻が貯金や老後に対して準備等はしていますが。基本、私の場合は私学年金…。(2022.9.26、SNSで返答)

### 5.12.8 Hの事例

Hは日本に留学をし、日本でキャリアを積んできて日韓国際結婚をして永住している。今のところ韓国へ帰るつもりはなく、日本で頑張って「いつでも韓国へ帰る時には家族を連れて行ける」環境を作っておきたいと語る。

Y：子供の教育のために日本にずっとHさんは永住する予定ではありますか？ H：一応、まあ、実際の方向としては、まずあのうここ(日本)で結局自分のキャリアも積んできたので(韓国に)帰るとか自分であしたりこうしたりするよりは、 <u>こっち(日本)で定着して自分をキャリアアップしつつ、韓国は遠い国ではないので今はコロナで全然いけてないんですが、あのうやはり結局経済的な問題にもなりますので、今のうちに頑張っていていつでも韓国へ帰る時には家族を連れていけるような経済的な状況を作っておけば私が韓国の国内で親は釜山に住んでいるけど私がソウルに住むとしたらそれで日本に住むことと同じく毎日会えるわけではないのでそれぞれでよいのかと考えています。</u> Y：帰りたい気持ちはありますか？ H： <u>帰りたい気持ちは今のところ多分ないんです。</u> 時々には挨拶に行きたい時にいけるようなそういう状況を作っておくことが自分の目標ですね。 Y：なるほどですね。(2022.2.19インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)
--

### 5.12.9 Iの事例

Iは日本での留学経験と8年間の製造業の会社で、日本との取引で日本への出張も多かつ

た。Iの妻は子どもが生まれてから医療、軍隊（兵役）、価値観、教育のことを含めて変わってきたと語る。Iは自分の辛かった学生時代の受験勉強のことと兵役のことを語りながら子供にはよい環境を与えたく日本への移住を決心した。Iは状況次第だが、「移住をして死ぬまで住むつもりなので、もし取れるなら帰化することも考えている」と語った。男性の韓国人の研究協力者の中で帰化まで考えているのはIだけだった。日本での移住でのIの親の反応をみると、母親はI家族が日本に移住する日まで反対をしていた。Iの父親は「帰化をするなり日本で住むなりどこで住むなり君がやりたいことをやりなさい」と言う。Iは父親の発言に共感をしているし、「国籍の問題に関しては私は違う考えを持っています。日本であれ韓国であれ、行ったり来たりするの（は）互いに生活するためなのでまずは私達が軟らかくならないと」と語っている。

<p>Iの妻：韓国語も半分半分教えながらしていたのですが、1歳過ぎからちょっと日本で住む話も出て、<u>教育は日本でさせたいって〇〇さん（夫）が言ってくれて医療のこととか軍隊のこととか子供が生まれて価値観も変わってきて教育のこと</u>も。</p> <p>I：私は高校時代時代結構つらかったのでそういうのが経験させたくないというのと。あと、生まれた時に女の子だったらずっと悩んでいたかもしれないけど男の子だったので悩むことなく日本に行かなきゃと思っていたのですね。<u>兵役の問題が一番気になっていました。私は正直本当にこれは個人的な考えですけど長く話せないんですけどそれは正直（兵役）時間の無駄と思うのでそういうのはなるべく避けたいという考えです。</u></p> <p>自分がもし本当にしたいであればそれはあとでも出来るので、<u>一応どっちかも選べるのが環境を作ってあげたい。</u></p> <p>I：日本に来ること自体をためらったのではなく〇〇市に行くか〇〇市に行くかを悩みました。結局、私の職場もそうですが<u>子どもがどういった環境で住むかが…そういった部分を（悩んでいました）。</u></p> <p>Y：育児について相当悩んでいたのですね。</p> <p>I：<u>移住も子どものために来たので。</u>（中略）</p> <p>Iさん：もちろん、状況次第ですけど。<u>これから移住して死ぬまで住むつもりなので、なるべく…。もし取れるなら帰化することも考えている。</u></p>
<p>Y：Iさんが（日本へ）永住することによってご両親は反対はなかったですか？</p> <p>I：父親は反対はなかったですが、母親が物寂しがっていました。</p> <p>Y：Iさんはご長男？</p> <p>Iの妻：お母さんがね。ちょうどぎりぎりまでにね（反対をしました）。</p> <p>I：日本に引っ越しする日まで日本に行かないでと…（中略）。<u>父親は帰化をするなり日本で住むなりどこで住むなり君がやりたいことをやりなさいと。そういう父の影響を私も受けているし共感しているので（中略）、国籍の問題に関しては私は違う考えを持っています。日本であれ韓国であれ行ったり来たりするの互いに生活するためなのでまずは私達が軟らかくならないと。</u>（2022.2.15 インタビューより、原文日本語、下線は筆者）</p>

### 5.12.10 Jの事例

Jは家庭事情で2019年韓国へ帰国することになる。Jは家族の維持のためにも日本永住を決意している。日本永住を決意したのはJの妻の願いでもあった。Jの妻は「自分は子どもが一番いい環境を与えたいと思って、日本がいいわけじゃなくて、自分だと調べるちゃんと自分でみて選べて与えられるというので」、「韓国にいる時には情報を得られるのが一番もどかしくて、例えば、健康診断、定期健診<sup>84</sup>ですかね」と語る。英語はネイティブ並みに

<sup>84</sup> 乳幼児健康健診表は職場加入者及び世帯主住民登録住所地で郵便発送している。また、全国乳幼児健診機関で健診

話せるが、韓国語は現地に行ってから学ぶことになり、言語の壁を感じていた。また、Jの仕事の面でも日本の方が待遇がよく、再び(2020年10月)日本へ移住することになる。

Jは周囲に韓国人とのコミュニティもなく、韓国語を使う機会も全くない環境である。Jは「あんまり韓国に帰りたいたか今の家族のため精一杯で頭いっぱいなので」と語り日本での生活を頑張っている。

<p>Y: 日本に戻られたきっかけは何ですか?</p> <p>J: まず、あのう、そのもともと日本に行く(もどる)ということだったので。(中略)</p> <p>話してみたら日本に残るのが一番この家庭の維持というか上手く行くのではないかと、もちろん、自分の仕事も韓国国内で探すよりはこっちの方が条件もいいし、ま、その妻も全部出来るので日本語で。韓国語は出来なくて、ま、子どもの面倒みたり、自分がしなくても家庭のことは全部してくれるので日本に残ることを半年前から決めて今になっています。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)</p>
<p>Y: (前略) 妻のためにもJさんが日本での永住を考えていたのでは…。</p> <p>Jの妻: そうです。もう、私がお願いしたようなものなんですけど。</p> <p>Y: そうなんです。</p> <p>Jの妻: はい、ですね。その子どもがいなければこれから新しいスタートで韓国で言語を学びながら全然かまわないんですけど、子育てをする、そして、生活をするときに、やっぱり自分が家庭の奥さん、母としてその最善を尽くせるかといったら韓国では言葉がわからなくてその児童センターとか幼稚園とか病院のこととかそういうのもわからないし、得られる情報がすごく限られてしまってあのう向こうのお父さん、お母さんに聞いたり、Jに聞いたりしても、やっぱり100%自分が調べて得られる答えではないというか。</p> <p>Y: なるほどですね。</p> <p>Jの妻: 日本にいたらその自分の力でいくだけでも調べて子どもたちにいいものをしてあげたり行動できるんですけど、それが出来ないもどかしさがすごくあって、子どもは成長していくから、そこで何もしままいるのがいやだなと思って、自分の言語能力が追いつけぱいいんですけど、もう、無理だなあと思って。</p> <p>Y: なるほどですね。ある意味、子どものために日本永住を決心したということにつながるんですね。</p> <p>Jの妻: そうですね。自分は子どもが一番いい環境を与えたいと思って、日本がいいわけじゃなくて、自分だと調べるちゃんと自分でみて選べて与えられるというので、そうですね。韓国にいる時には情報を得られるのが一番もどかしくて、例えば、健康診断、定期健診<sup>85</sup>ですかね。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語)</p> <p>Y: ありますね。</p> <p>Jの妻: 日本でしたら、6カ月検診とか、10カ月検診とか、そういうのすらあるの? ないの? 受けられるの? あのう、そういうことも誰も知らないんです。お知らせはきてなかったんですか?</p> <p>J: 知ってはいるんですけど、その時は自分も忙しくて。</p> <p>Jの妻: Jさんも仕事が忙しくて夜中に帰ってくるかの感じでなんかそうやってすべてがJさんに任せにしていられないので、家庭のことも、子育てのことまでは手が回らない、私がしたいと思っていたので、そういう点でも難しいなあと考えていて。</p> <p>Y: ある意味の一人の女性としてではなくてお母さんの立場でいろいろ考えているということが強いんですよね。お母さんとしていい環境を作ってあげたいということとお母さんが情報を得られる日本のところをえらんだということにつながるんですね。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)</p>
<p>Y: Jさんはどうですか? 仕事以外に韓国人に触れる機会はありますか?</p> <p>J: まったくないんです。</p>

を受けることができる。生後4カ月から60ヵ月までの乳幼児を対象に健診時期別に選定する。

[http://nrc.go.kr/portal/html/content.do?depth=ph&menu\\_cd=03\\_02\\_00\\_04](http://nrc.go.kr/portal/html/content.do?depth=ph&menu_cd=03_02_00_04)(保健福祉部 2022.9.6 アクセス)

<sup>85</sup> 乳幼児健康健診表は職場加入者及び世帯主任民登録住所地で郵便発送している。また、全国乳幼児健診機関で健診を受けることができる。生後4カ月から60ヵ月までの乳幼児を対象に健診時期別に選定する。

[http://nrc.go.kr/portal/html/content.do?depth=ph&menu\\_cd=03\\_02\\_00\\_04](http://nrc.go.kr/portal/html/content.do?depth=ph&menu_cd=03_02_00_04)(保健福祉部 2022.9.6 アクセス)

Y：Jさんは寂しくないんですか？

J：多分、不思議なことなんですけど自分はあんまりホームシックとか感じない、感じにくい人なんです。あんまり韓国に帰りたいとか今の家族のため精一杯で頭いっぱいなので。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.12.11 Kの事例

Kは日本で永住者として生活している。安定した職場で勤めていて、子どもの安全のためにも家を購入している。日韓国際結婚家庭との交流はないが、趣味の仲間はある。「趣味生活の集まりも好きだし、(中略) コミュニティに参加して日本人と国籍を越えて人間同士で仲良く活発につながっている」日本での満足度も高く、韓国に帰ろうとも思っていない。家族はKが日本で安定して生活しているので嬉しく思っている。ただ、Kが定年を迎えたらK系譜と祭祀を守ってほしいと言われた。Kも自分が自分の家門を守らないといけないという意識は常にある。

Y：日本で永住するつもりで、定着するつもりで家を購入したんですが…。そこについてはどのような考えを持っていますか？日韓国際結婚した人達は韓国へ行こうとする人もいるし、他の国を考える人もいるんですが、Kさんの場合は家を購入していたので。

K：家を買いたくて買ったよりは子ども、以前住んでいた家は危険度が高く、家の前を車が走ったりして危険性がありました。私も日本でずっと居住する予定であり、正直に職場も(ここで)安定した職場に勤めているし、いろんな要素により家を買おうと。妻と相談してから家を購入しました。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語)

Y：Kさんの周りに日韓国際結婚家庭のコミュニティ交流等がありますか？

K：日本では別に在日の方とかはそういうコミュニティは持っていません。(中略)  
別に、私からそういうコミュニティを探し求めたことはありません。

Y：奥さんもそういうコミュニティをしたりはしませんか？

K：ないんですね。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語)

Y：キックボクシングを3年していたら仲間との絆も深いメンバーも国籍を越えてKさんと関わりを持っているんですね。

Y：Kさんは孤立せずに相当日本のコミュニティに積極的に活発に参加しているんですね。

K：はい、そうです。

Y：そうですね。

K：一人で抱え込むタイプではなくて人たちと会話するのが好きな性格なので趣味生活の集まりも好きだし、(中略) コミュニティに参加して日本人と国籍を越えて人間同士で仲良く活発につながっていると思います。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

Y：全体的にみて日本で生活満足度は高いんですね。

K：正直に申しますと今の状況で韓国へ帰りたいというのは別になくて。

Y：韓国で住みなさいというご両親のすすめはないんですか？

K：そういうのは別にないようです。家柄が何かに固執したりすることでもなく、本人が生活するためには頑張るという主義なので。父親曰く、60歳になったら(韓国へ)帰ってきたらどう？と父親が亡くなると祭祀とか全般的な部分は(僕)が責任者であるのでそういうのは父親から聞かされました。

日本で(僕が)就職して家庭を築いているのを見て父親としてほほえましく感じているところがあって。(2022.2.26 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

### 5.12.12 Lの事例

Lは国際交流員時代の仲間とコミュニティがある。新型コロナウイルス流行の影響があり、基本はオンラインで話し合い、情報を分かち合っている。Lは来日11年目を迎えて日

本に慣れてしまったところも多く、快適に安定して不便なく生活していると語った。現在、家の購入は躊躇っている状況で、後々九州に戻りたいという計画を持っているために悩んでいる。

Y：国際結婚されていて日韓カップルとかコミュニティの交流とかはあるんですか？  
 L：自分の交流員時代の仕事仲間とかが韓国から来た交流員同士のコミュニティがあって、今全国にちょっとあのおう全国に所々に集めているような感じで今やるんですけど、そのコミュニティは、今はありますね。(中略)  
 Y：そうなんですかね。〇〇（Kの妻）さんはどうなんですか？日韓国際結婚家庭の方々とコミュニティはあるんですか？  
 K：私は。Lさんの知り合いと一緒に仲良くしている感じで、日韓カップルは私自体はいないんですね。  
 Y：11年目になると生活の心地よさとか日本が韓国より日本のほうが住みやすいんじゃないですか？どうですか？  
 L：慣れてしまったというところですかね。日本も韓国もそれぞれいうところがあって今はその快適に住んでいる状況ですね。  
 Y：安定的な面で見えてからですね。  
 K：そうです。安定的です。ずっと〇〇に住むのか、でも本当は九州に帰りたいという気持ちが二人ともあるので機会があれば機会を見て九州に帰りたいという気持ちがあるためにこっちの〇〇で家を買うことは難しい。どこで買うかということもいろいろ話し合ってます。  
 Y：生活の面ではどうですか。  
 L：そうですね、特に、不便というのはないですけど。(2022.2.26 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.13 考察

日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティは日本に長く住むことによりアイデンティティはどのように形成されているのだろうが、研究協力者の大部分は留学の経験があり、日本に永住している。

鈴木(2006、2008)は、インドネシア人と結婚し、インドネシアに文化間移動をした日本人女性のアイデンティティ形成のプロセスを再構成し、事例として提示している。異文化間結婚女性のアイデンティティ形成のプロセス(モデル)は、時間の流れとともにラセン的に進行していくと述べる。

表 5-6 永住による日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティ

	日本での永住期間	韓国での永住期間	第3国での永住期間
日本人配偶者と結婚した女性	A(30年)、B(50年)、C(31年)、E(14年)、F(19年)	I(4年)、J(1年7ヵ月)	
日本人配偶者と結婚した男性	G(11年)、H(12年)、I(2年4ヵ月)、J(7年)、K(12年)、L(10年)		

A は結婚して間もない時期に、子どもに異質感を抱かせたくなく国籍を日本に変更している。一時的に新型コロナウイルス流行で韓国に渡行ができなかった時期に自分の国籍が

日本であるため、韓国へ行くのにも色々な手続きが必要で、大変な思いをしていた。しかし、最近韓国の家族に会ってきた A は、国籍の問題でいろいろあったが、自分はここに家族、子どもがいるので「ここ（日本）でしっかりと頑張らないとね」と語った。成人になり社会人になっている子どもたちの成長を見守る日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティのゆらぎはあるものの、全体的に日本の生活に満足している。

A と B は日本に留学の経験と仕事の経験がある。A と C は自分の居場所(好きな場所)は日本にあるといい、仕事や子どもの世話や墓などのこともありずっと日本に住み続けると語る。しかし、永住をし、国籍を変更していても二人は韓国に対する愛国心や自分が韓国人であることを誇りに思い、韓国の文化と韓国語を教えている。

B は日韓文化交流の仕事に長く携わっていて、日本と韓国を知らせるためにも日本に住み続けると語る。

E は日本人配偶者ビザで滞在している。日本で生活する満足度も高い、子どもを育てながら静かに暮らしたいと語った。しかし、両親が病気になったら自分が世話をしないといけないと語る。

F は子どもの継承語教育のために、小学校入学の前に子どもを韓国に頻繁に連れていった。二つの文化の接触により F の中に日本永住へのゆらぎがあった。しかし、F は長女が中学生になるにつれ 100%日本に永住しなければいけない気持ちが強くなったと語る。

G、H、I、J、K、L は日本に永住する予定である。ある程度、安定した職を得て家庭を築いて日本での生活も落ち着いているからなのか。

G、H、K は日本で家を購入している。I は妻の家に暫く滞在中であり、就活中(2023 年 1 月時点就職が決まっている)でもあるが、子どもの教育のため、永住の目的のために来日している。L は家を購入するかしないかで悩んでいる時であり、将来は L の妻の地元か九州での生活も念頭に入れている(2023 年 1 月時点九州に居住地を変更)。

#### 5.14 日韓国際結婚家庭の教育観

芝野 (2022 : 88) は「学校は、親が望む言語使用や文化伝達を具現化する上で重要な役割を果たす」と述べている。しかし、日本では韓国系<sup>86</sup>の学校も少ないし地域によっては在日本大韓国民団(民団)や韓国教育院などで開催する土曜ハングル学校<sup>87</sup>も存在しない。各家族の親の教育観により学校選択は異なり、家庭内の言語政策 (FLP) に影響を与える要因も探ることができる。

日本在住の日韓国際結婚家庭の親の中には、日本と韓国で勉学を終え、仕事をしながら家

---

<sup>86</sup> 各種学校：東京韓国学校（東京都）、コリア国際学園（大阪府）。一条校：建国幼・小・中・高等学校（大阪府）、大阪金剛インターナショナル小学校・中学校・高等学校（大阪府）、京都国際中学校・高等学校（京都府）、青丘学院つくば中学校・高等学校（茨城県）(<https://www.yna.co.kr/view/AKR20181017117800073> 2023 年 2 月 7 日アクセス)

<sup>87</sup> オリニ(子ども)土曜学校は神奈川 1 カ所、山梨 1 カ所、埼玉 4 カ所、新潟 1 カ所、宮城 1 カ所、愛知 1 カ所、大阪 3 カ所、兵庫 3 カ所、京都 1 カ所、奈良 1 カ所、滋賀 1 カ所、広島 1 カ所、岡山 1 カ所、福岡 1 カ所、沖縄 1 カ所、香川 1 カ所で合計 25 カ所。(2022 年オリニ土曜学校.pdf (mindan.org)2023 年 2 月 7 日アクセス)

庭を作り、出産や子育てを日本で経験する者が多い。子どもの成長とともに、研究協力者は子どもにどのような教育を受けさせるのか（受けさせたのか）を考えるようになる。以下では、彼らの教育観について検討する。

日本に長期滞在する日韓国際結婚家庭の中には、日本の福祉や保育制度の充実、生活の便利さに魅力を感じ、さらに韓国に比べて日本のほうが子どもの勉強のプレッシャーが少ないという意識から、日本で育てようとする者が少なくない。筆者が調査を行った段階で、日本における日韓国際結婚家庭の研究協力者は30代から60代にわたる。30代以降の日韓国際結婚家庭の子どもたちは保育園、幼稚園、小学校に通っている。子どもたちのほとんどは日本で生まれ育ち、さらに日本の教育機関で教育を受けている。

しかし、日韓国際結婚家庭の研究協力者たちは子どもにエリート教育をさせるのではなく日本の一般の学校に通わせ、子どもが大学生になり韓国や英語圏に留学をしたいなら行かせるという返信を得ることができた。これに関して以下の事例を研究協力者ごとにみていきたい。

#### 5.14.1 Aの事例

Aは子どもが韓国へ留学のことで相談をした時、専門と違う韓国語を学び、国家試験を控えている今は現実的に無理だと言った。日本で生まれていたのでここ地元で頑張ってもらいたいと語った。Aの娘は大学に入ってからはずっと両親と韓国の親族を訪問していたが、友達と二人で韓国を旅する。Aの子どもは通学時間を利用して毎日、韓国文化(K-pop、K-drama)に3時間以上は触れていた。子どもは大学で韓国語を受講し、韓国語スピーチ大会にも出て自信を持つようになる。親が日韓国際結婚しているということでプラスのイメージが強く憧れを持っている。Aの夫は子どものPTAに積極的に関わってきた。また、子どもの学期中には韓国を訪問せずに、子ども達には学校を休まないように促していた。また、張(2018)は、大学生ニューカマーの子どもたちの文化的アイデンティティの調査において親子間使用言語が日本語である大学生を取り上げた。そこで、2000年代後半である彼らの学齢期は、多文化共生に対する意識が現在ほど高くなく、親の母語や母文化を周囲から評価される経験が少なかったことを指摘している。

A：子供が小さいときには年に2回韓国を訪問した。夫がまじめな人で子供達が皆勤賞をもらっている。学校を休ませて韓国には行かなかった。(2018.9.21 インタビューより、原文日本語)

Y：子育ては大変だったのでは？PTA等で採め事はどうでしょうか？

Aの夫：長女の小学校の時には会長を中高にもPTAに関わっている。今もPTAの役員をしていて学校と関係をしてい。その理由は？親が学校と関わってくることによって子供の成長も見届けることができる。学校も協力してくれる。役員をすることによって情報が早く回ってくる。その情報をどう対応していくのか学校との連携でいろんなことができる。日本人で積極的に取り組むことによって。こういう保護者がいるからアンテナを張っているんだよ。事前にお互いにして新しい発見をする(中略) 親が関わりを持つことにより視点が変わってくるんだ。(2018.9.26インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.14.2 Bの事例

Bは家庭内では日本語を使っていた。Bの子どもが小学校高学年になると韓国語と英語の内、どちらかを学ぶか選択肢を与えた。家では、親子同士でも敬語を使い、正しい日本語を使うことを心かけていた。Bの娘は日本の公立小中高を卒業し、国立大学、国立大学大学院を卒業した。幼い時には祖母から韓国語を聞かされる。「賛美歌とかあれは家族、韓国の親戚がしゃべった言葉、イントネーションとか、発音とか、やっぱり耳に残っているんですね。なので、自分が韓国語勉強し始めて一番おもしろかったのは日本の他の子たちは、ま、ハングルとか一から一緒に韓国語勉強してくるんですけど、私の中では音(韓国語の音)だけはあるんですよ。なので、その、音に文字とか言葉の意味をはめていくという感覚でした。」と語る。Bは韓国語より英語を先に勉強したが娘の意志を尊重していた。今は日韓交流の研究者として活躍をしているが、彼女はBの影響を受けている。Bの娘のインタビューにもBの存在が大きいということを垣間見ることができる。Bの娘、ゆは「日韓交流を研究するとすごく母が昔仕事していた人とか、あのう関わりがある人の話とか知っている人とかいろいろ教えてもらったりして、その意味ですごく影響を受けていますね」と語る。

B：日本語は敬語で綺麗な言葉を使い、正しい日本語を使うのは基本である。日本語が出来れば他の言語も同じ順序に習っていけばいいだろうと。小学校高学年の時に英語を接する機会がありました。私が娘に韓国語を勉強するかと聞いたら、英語を先に勉強したいと自分の意志をしっかりと伝えてくれたので、英検を準備して勉強しました。韓国に留学に行く際にも韓国語は大学で習っただけで、英語が出来たら問題ないと思っていたらしく、最初(韓国語で)苦労はしたのでしょうか。

B：家で母親と決めたことは標準語、敬語(を使うことである)。今も「何を食べますか?」という。(親子同士で互いに)敬語を使う。父親も私にBさん、どうするつもりですか?というように。娘にも韓国語と日本語を中途半端で話すのではなく、正確によい文章を完全な日本語を学ぶのがよいと思っていました。(2022.3.8 インタビューより、原文韓国語)

Y：〇〇さんの研究や社会活動とかもお母さんの影響が強いですか?

Bの娘(ゆ)：それは大きいですね。

あのう、もともと修士論文が。えっと、学生時の卒業論文は「日韓交流の歴史」を書いていたんですけど、修士論文の時「朝鮮通信使のお祭り」が釜山とか対馬とかであるんですけど、そのお祭りをやっている市民の活動というのを修士論文では書きまして、で、その調査をしている時に日本で朝鮮通信使の研究にすごく1970年代くらいに力を入れて頑張っていたのは在日コリアンだったのがわかったの。博士論文でその在日の人たちにフォーカスをして論文を書いた。結局そうすると彼らは市民運動として歴史をやっていたというところがわかったの。今もずっとそういうなんか市民運動みたいなをやっていますけど。

結局、例えば朝鮮通信使とか日韓交流を研究するとすごく母が昔仕事していた人とか、あのう関わりがある人の話とか知っている人とかいろいろ教えてもらったりして、その意味ですごく影響を受けていますね。

Y：そうなんですね。なるほど。(2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

Bの娘(ゆ)：うん、うん。そうなんですよ。あのう、一番大きかったのは…。あのう、(韓国語を)習わなかったとはいえ、小さい時にやっぱり母親と祖母がしゃべってる会話を聞いてたりとか、あと、うちのおばあちゃんはですね。お祖母さんはキリスト教の宣教師なんですけど、ので、小さい時に私にずっと韓国語の聖書の言葉を覚えさせようとする、したんですよ。だから、今からお祖母さんがいうからそれを覚えなさいと。(中略)例えば、賛美歌とかあれは家族、韓国の親戚がしゃべった言葉、イントネーションとか、発音とか、やっぱり耳に残っているんですね。なので、自分が韓国語勉強し始めて一番おもしろかったのは日本の他の子たちは、ま、ハングルとか一から一緒に韓国語勉強してくるんですけど、私の中では音だけはありますよ。なので、その、音に文字とか言葉の意味

をはめていくという感覚でした。なので、本当になんかどんな言葉でもいいですけど。なんか「アチム(朝)」とかは聞いたことがあるんです。私の中では、意味が分からないけど、聞いたことがある言葉ではあった。それを要は初めて習うとこういうハンゲルでこういう意味なんだ。こういうのがわかってくるのでその意味では発音とか単語とかを勉強し始めるとすごく覚えるのが早かったです。(2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.14.3 Cの事例

Cは日本の大学に編入をして博士課程を修了するまで10年間ずっと勉学を続けてきた。机にいつも座って勉強と研究をしているCを見て、子ども達は自ら勉強するようになり、大学生になってからは第二言語として韓国語を2年間勉強することになる。

C: 夫は配慮もあり、(私に)学校勉強をしろと。そして勉強をすることにより子ども達にもよい影響を与えたの。私が(子ども達に)勉強しろというのではなく(私が)勉強している姿を見て(子ども)自らがやっていたので。(成長した子ども達が)今も話しているのは、ママがいつも机に座り勉強をしているのを見て、(私達も)勉強をしたのよ。私も子ども達に勉強しろとはあんまり言ったことがない。子ども達からそう言われてそうだったのかと(嬉しかった)。(2022.3.8 インタビューより、原文韓国語)

### 5.14.4 Dの事例

Dは子ども達(15歳、13歳)を土曜ハンゲル学校に小学校から通わせた。Dの周りの子ども達が塾や習い事のことでも忙しく土曜ハンゲルをやめていく。しかし、Dは言語を途中でやめてしまうとゼロになってしまうので、絶対継続させたいと語った。Dは子ども達をインターナショナルスクールに入れている。「言語だけを学ばせようとするのではなく、小さい時からいろんな国籍の子が居ていろんな価値観や考え方があってそれをお互いにリスペクトするという環境」であると述べている。また、「第三者の意見を含めたいろんな見方をして判断するような人間になってほしい」ということで通わせている。

D: 結局両親とも韓国人とかお母さんが韓国人だと小さい時から喋っているから読み書きは出来なくてもしゃべれる子が多くてうちはまったく在日(コリアン)と日本人なので、ひょっとしたらほとんど日本人という感覚、私が母国語でもないのになかなかこうしゃべる機会も少なく、継続が力なりではないんですけどとにかく言語とかもやめてしまうとゼロになってしまうのでそこはもう絶対続けさせたいと思ってちょっと部活の試合とかがある時にはお休みしながらでもなるべく行くような感じで今に至っているんですけど、在日の人はしゃべれない人が両親とも多くて、親が宿題を見てあげなくてやめていく子が多くてほんとうの在日(コリアン)の人は残っていないんじゃないかな。

D: はい、そういうものに共感してインターナショナルスクールにいれたのがあって言語だけを学ばせようとするのではなく、小さい時からいろんな国籍の子が居ていろんな価値観があって、いろんな考え方があってそれをお互いにリスペクトするという環境が子どもたちに今からの時代に最強かなと思ってインターナショナルスクールに入ったので子ども自体も何も本当に国籍とかジェンダーに関して偏見なくて育てられて。

D: 歴史の授業とかも日本と韓国のことでも第三者からみた歴史の勉強とかもするんじゃないですか？  
冷静に見えてすごくいいなあと私もいつも日韓でそういう問題でやっぱニュースとかでも過度に取り上げられていてどっちの言い分ももちろんどっちがいい悪いの分はまずなくてどっちも学んだ上の自分で判断できるようになってほしいしどっちの片方の意見ではなくて両方の意見と両方のものを読むようになってほしいなあと。学校でも一つのものに対していろんな味方をするというものをあるし、家庭でもそれは親がこっちの日本のニュースが正しいよ。韓国のニュースが正しいよというのではなくて両方のいろんな第三者の意見を含めたいろんな味方をして判断するような人間になってほしいなあとと思っています。(2022.2.16 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.14.5 Eの事例

Eは子どもに特別な教育ではなく平凡に公立学校に通わせる予定である。社会性を育てほしいということで、博物館や映画館や公園などいろんな体験しながら経験も積んでほしいと語った。Eの夫は「家では韓国語を外では日本語を守っていききたい」と、韓国語継承の言語維持の部分を強く語る。子どもも「아빠는 한국말로 말해!パパは韓国語でして頂戴」と、家庭内では韓国語で話すことを認識している。

Y：日本でも受験があるんじゃないですか。小、中、高をどのように行かせたいのか？具体的な考えは持っていますか？  
E：私たちは子どもが平凡に小、中、高校は公立を考えています。そして子どもは社会性が足りないようで…。  
Y：いいえ。  
E：社会性を育てあげたいです。  
Y：社会性を育てるために意図的になんかやっていますか？  
E：外に沢山出て体験をしたり、人がいる所で沢山出かけてみて時間がある時には外に出て博物館や映画館や公園などいろんな体験をしながら経験もして。  
Y：そうですね。Eさんの夫はどうですか？  
Eの夫：大学に行くかどうかはわかりませんが。  
Y：〇〇さんに似ているから行くでしょう。  
Eの夫：特になんかというか。こんなになってほしいというのがないというか。  
Y：家では韓国語を外では日本語を守っていききたいということですね。  
E：でも、本人がいやなら思春期になっていやならもう一度考えてみて。今は本人が韓国語をしたがるし私も韓国語を…。一人で日本語のYouTubeをしている時日本語で話しかけると「아빠는 한국말로 말해!パパは韓国語でしてちょうだい」とします。  
Eさん：今は本人が韓国語でしようします。(2022.3.25 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.14.6 Fの事例

Fは中学生の娘と小学校の娘がいる。長女は公立小学校に通った後、私立中学校に在学中である。次女は公立小学校に通っている。Fの夫は「公立（小学校）に通うことにより友達も作れる」と語っている。Fは子どもたちの社会性を大事にしていると言える。

F：一番目が私立に通っていて、二番目は公立小学校に通っている。  
Y：私立中学校と公立小学校。  
F：夫は公立に通うことにより友達との付き合いもよいと。他の人は遠く私立を、もしくはインターナショナルスクールとかに通わせているが、夫曰く、同じ町の友達を作れないので公立へ。(2022.2.25 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

### 5.14.7 Gの事例

Gは中国で4年間留学、香港に2年間の留学を経験し、Gの妻は韓国に1年間留学、ワーキングホリデーで1年間仕事の経験をもっている。Gは、現在は日本にいたので小中高は日本で通って、大学生もしくは成人になってからは、韓国の大学で通ってもいいし、もし本人が第3国アメリカ等に行きたいなら反対はしないと語った。Gは自分の留学の経験もあり、子どもにもいろんな選択肢を与えたく週1回の英語レッスンを受けさせている。また、家族で韓国旅行も年に1～2回はしている。Gの教育観としては韓国のことも日本のことも知ってほしく偏らずに考えてほしいと述べる。

Y：子どもをどのように育てたいですか？  
 G：韓国であれ日本であれ偏らずに公平に考えてほしいです。  
 Y：日本ではどういった教育を受ける予定ですか？それとも韓国？  
 G：私は、機会があれば韓国へ娘を（留学）送りたいんです。現在は日本にいたので小中高は日本で通って、大学生、成人になってからは韓国で通いたいなら韓国でもいいし、日本でも韓国でもないなら第3国で本人がアメリカなどへ行きたいなら反対はしません。  
 G：まだ、幼いので。後に本人が韓国の大学で韓国人として生きたいなら韓国の国籍で。ところで韓国は二重国籍を認めてくれるから。日本では日本国籍で入国するなら日本人として生きたらいいので。  
 Y：娘さんは保育園以外に習い事とかしていますか？  
 G：一週間に一回土曜日30分間、英語会話に通っています。月に4回です。(2019.8.8 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

### 5.14.8 Hの事例

Hの夫婦は、現地の公立学校に進学させて地域で育てたいという教育観を持っている。二人とも留学の経験があるし、モビリティ性を持つ二人であるが、Hは「ハーフだとしてそこ（インターナショナルスクール）入れなければいけないということは、考えたこと自体ない」と語る。

Y：○○ちゃんの教育としては同じ環境にある子ども達とのふれあいを考えているんですけど、小学校中学校高校に上がることによってインタナショナルスクールとかも念頭にいられているんですか？  
 H：まったく考えていないんです。  
 Hの妻：現地の公立で進学させることしか考えていなかったんです。  
 H：インタナショナルスクールはすごい学費がかかるという話を聞いたことがあって大体駐在員とか大手の会社に勤めている家庭の子どもが、なぜならば高い分カリキュラムが英語で授業をするというのがほとんどみたいんなので。あえて、ハーフだとしてそこ入れなければいけないということは考えたこと自体ないんですね。  
 Hの妻：地域で育てていくのがいいのかなあという考え方です。  
 Y：○○(Hの娘)のお友達はほとんど保育園に預けているので日本人の子が多いですね。  
 Hの妻：そうですね。(2022.2.19 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

### 5.14.9 Iの事例

Iは永住のために来日している。その理由としては子どもの教育のことが一番問題であった。「日本だったら**のびのび育てられる**」と語り、Iが韓国で受験勉強の大変さを自ら経験し、辛さを覚えているからこそ、子どもにはそういう経験をさせたくないと言う。

I：日本に来ること自体をためらったのではなく○○市に行くか○○市に行くかを悩みました。結局、私の職場もそうですが子どもが**どういった環境で住むかが…そういった部分を（悩んでいました）。**  
 Y：わりと、日本だったら**のびのび育てられる**からということも含めてやっぱり移住、移民を考えていたのかな？  
 I：そうですね。  
 Y：子どもを生まれる前まではそこまで深くは考えていなかったですか？  
 I：○○(妻)はそんな深く考えていなかったようですが私は前から○○大学に来て日本人の友達といろいろと学生時代の話しを中学生・高校生の時を話していたら自分と全然違う環境でみんな勉強していたので特に大抵体育とか好きだったんですけど、韓国の場合好きなことをするのが大変ですけど、日本の場合はある程度学校だったり教育環境でもそういうのが出来ていることと熱心に勉強ばかりするという状況でもないかと思っていましたのでそういうところと話しをしてみたら意外と韓国人は日本に来る前の考えだと日本人は考えが固いとか。教育がいわゆる植民地時代みたいにそういう固い環境だと思ってたんですけど、韓国と日本の状況が真逆だったので先生とも話し合いながら、ただ授業を受けるのではなく話しをしながらやっぱり違うかと思ってたんですね。そっちの方が**自分的に**

はそれが(日本の教育)正しいと思っていたので。

Y: 子どもに対する期待があれば?

I: まだ、3歳なのでわからないけど。

私はもう自分がしたいことをしてほしいなと思っています。世間的とするのではなくいろいろ小学校から高校まで勉強していく中で自分が好きな分野を見つけてそれに合った大学に行ってそういうレベルが高い大学に行くのがいいわけではないと私は思っているので自分が好きなどころに入って就職もしていいと思っています。やっぱりね。韓国だったら学歴がどうしても大事になってくるのでそうじゃなくてのびのび勉強もしてやってほしいなあとと思っています。(2022.2.15 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

#### 5.14.10 Jの事例

Jの妻は英語圏では留学とワーキングホリデーの経験があるものの、韓国・韓国語には関心があまりなかった。韓国語も現地に行ってから学ぶことになり、子育てをする上でもどかしさと大変さを感じる。日本にいたら自力で調べて、行動することが出来るが、言語能力が追い付かずに韓国での育児は無理があると思っていた。Jは妻が子育てしやすい環境は日本だと思って移住を決心して2020年10月、再入国することになる。J家族は子どもの教育について高校までは日本で通わせ、大学生になったら留学、第3国に行って視野を広げてほしいと語った。Jの日本での留学の経験とJの妻は高校生の時の1年間の交換留学生の経験や3年間のワーキングホリデーを通しての英語圏で働いていた経験が子どもの教育にも影響を及ぼしている。Jの夫婦は二人とも同じく語学を学ぶためのモビリティがあり、子ども達にも大学生になったから経験してほしいと語る。

Jの妻: はい、ですね。その子どもがいなければこれから新しいスタートで韓国で言語を学びながら全然かまわないんですけど、子育てをする、そして、生活をするときに、やっぱり自分が家庭の奥さん、母としてその最善を尽くせるかといったら韓国では言葉がわからなくてその児童センターとか幼稚園とか病院のこととかそういうのもわからないし、得られる情報がすごく限られてしまってあのう向こうのお父さん、お母さんに聞いたり、Jに聞いたりしても、やっぱり100%自分が調べて得られる答えではないというか。

Y: なるほどですね。

Jの妻: 日本にいたらその自分の力でいくらか調べて子どもたちにいいものをしてあげたり行動できるんですけど、それが出来ないもどかしさがすごくあって、子どもは成長していくから、そこで何もしないまいるのがいやだなと思って、自分の言語能力が追い付けばいいんですけど、もう、無理だなあと。

Y: まだまだ小さいので、〇〇ちゃんがどうなるかはわからないんですが、小学校、中学校、高校とかはどういうふうに考えていますか?教育方針とかそういったことをお聞きしたいんですけど。

Jの妻: ずっと日本で高校まではいかなあと思うんですけど、もともと私たち共通している日本でも韓国でもない第3国で何かを学べる環境をいつか伝えたいなあとと思っています。そう思っていて日本、韓国というのはベースとしてあって韓国も休みの度に行きたいと思っているので夏休みとか使ってしながら子供たちが大きくなったら留学であったり、なんかまた第3国に行ってみてまた違う視野を持ってほしいなあとおもっています。

Y: やはりJさんと〇〇さんの共通点でもある、外国語を違う環境という海外を視野入れてほしいということですね。なるほどですね。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

#### 5.14.11 Kの事例

Kは子どもにエリート教育をさせるのではなく、公教育を受けさせ、自分が好きなことを見つけることが大事だと語った。自分のルーツでもある言語を学べる土曜ハンデル学校や英語で授業を行うインターナショナルスクールには通わせる必要はないという。成人、20歳が過ぎて本人が韓国留学をしたいというなら行かせるし、子どもが日本人として日本で

ずっと暮らしたいなら、その考えも尊重すると語る。

Y: 子育てについてはどうですか？

K: 具体的にどういう？

Y: 例えば、韓国では小学校に入学する前に塾とか教育費用がかかり競争率も激しいんじゃないですか？そういう面についてはどのような考えですか？〇〇に住んだら福岡にインターナショナルスクールがあるし。〇〇に土曜ハングル学校があると聞きましたが、そういうのは視野に入れてますか？

K: 正直に申しますと子どもにエリート教育をさせるのではなく、これについては妻も同様です。だから教育については塾とかよりは公教育に本人が好きのように子どもが何が好きなかを考えて（中略）土曜学校とか韓国の学校についてはそこまで通わせる必要はないと思います。韓国の言語とか文化に関しては、これは僕の個人的な考えですが、成人か…、20歳が過ぎた時に本人の判断で韓国へ留学へ行きたいなら韓国へ留学をさせたりずっと日本人として過ごしたいなら日本人としてそういうのは本人に選択権を譲る予定です。（2022.2.26 インタビューより、原文韓国語）

#### 5.14.12 Lの事例

Lの夫婦は1歳5か月（インタビュー当時）の子どもを幼稚園に入る3歳までは家で面倒見て、徐々に友達と接する方法とかを学ばせようとしている。また、継承語であり、家庭内の言語である韓国語も教えるということも念頭に入れている。子どもの学校については、韓国系やインターナショナルスクールは考えていない。Lの妻は「日本に住んでいる限りはもう日本の学校に入れて、夏休みとか冬休みに韓国と一緒に連れて行って1か月なり、そこで過ごすことができればいいなと思って」と語る。

Y: 子供の教育に関して、何かこういった方針とか、子供はここに入れたいとか、もちろん家庭内での韓国語も維持したいという気持ちが強いと思うんですが、その辺はどういうふうに考えていますか？

L: そこまで先のことは正直に考えてはなくて、今、多分思っているのはコロナだから3歳までは家で面倒見てあげようという考えにして、徐々にプレー保育、幼稚園、プレー保育を活かしながら徐々に友達を接する方法とかを学ばせようかなあみたいなのは二人で話していますね。そうですね。あとは、やっぱり韓国語もちゃんと教えてあげると、いいことなんじゃないかなと思うので、その辺どういうふうにサポートしてあげればいいのかというのは2人で悩んでるところです。

Y: 小学校とかは一応まだ17ヶ月であるので、おそらく、先々のことはそこまで具体的に考えてないよって言うかもしれないですけど、小学校中学高校とかも。おそらくインターかもしくはそういった韓国の系の学校があると思うんですけどそういったものは念頭に入れていますか？

L: ないね。

Lの妻: 日本に住んでいる限りはもう日本の学校に入れて、夏休みとか冬休みに長い休みの時に韓国と一緒に連れて行って1ヶ月なり、そこで過ごすことができればいいなと思っています。（2022.2.26 インタビューより、原文日本語、下線は筆者）

#### 5.15 考察

グローバル化の進展は、ヒトやモノ、カネだけでなく、国境を越える情報の伝達を加速させている。今日、すでに国際移動をしなくても、海外の情報を容易に獲得することができる。日本在住の日韓国際結婚家庭の人びとは、インターネットを通じて韓国だけでなく、韓国の音楽や映画、テレビドラマなどのポピュラーカルチャーに日常的に接している。一部の日韓国際結婚家庭の親にとって、韓国ドラマを観ることがすでに彼女たちの生活の一部になっている。韓国ドラマを通じて、日韓国際結婚の家庭の親たちは韓国の言語やライフスタイルおよび韓国の人びとの価値観への理解を深めている。

A、B、Cは子どもを高校生まで公立学校に通わせた。Aは子どもの教育に関してはAの

夫がPTAの役員や会長等を務めて、学校と積極的に関わっていた。Aは韓国でエリート教育を受けていたため、子どもには習い事や塾などに行かせようとした。しかし、Aの夫の教育方針として子どもは公立に通わせ、塾等も自主的に勉強ができるようになって通わせることであった。

Bは子どもが生まれる前から、日韓文化交流のために励んでいた。Bの子どもが小学校高学年の時韓国語より先に英語を勉強したいということを尊重して英語を先に学ばせる。Bの活動により子どもの小学校に行って国際交流理解を深める体験学習も提供する。そういう親の姿を見て育ったBの子ども（ゆ：仮名）は今は日韓文化交流史を研究する研究者である。

Cは博士課程修了まで10年間勉学に励んだ。Cは子どもたちに特別な教育方針はなかったが、自らが学ぶ姿勢を子どもたちに示していた。子どもたちは成長して勉強する母の姿をみて刺激を受けていたと語る。また、大学に入ってから第二言語として韓国語を学び、卒業旅行ではCと韓国旅行を楽しむ。母の国である韓国の言語と文化を子どもたちも体験していることがわかる。

Dは教育方針として言葉だけではなく、小さい時からいろんな国籍の子ども、価値観や考え方があってそれを互いにリスペクトするという環境が子どもたちに最適だと考え、インターナショナルスクールに通わせている。また、土曜ハングル学校にも継承語教育のために通わせている。

E、F、G、H、I、J、K、Lはエリート教育ではなく、小中高は公立学校に通わせ、本人が大学生や成人になった時に韓国に留学や英語圏に留学などができればと語る。日韓国際結婚家庭の子どもであるからインターナショナルスクールや韓国系の学校に通わせるのではなく、地域で育てていくのもよいと語る。Hは、インターナショナルスクールは学費が高い（年間学費が約200万円）ということもあり、公立学校に進学させることを考えている。

Gは中国(4年間)と香港(2年間)に留学の経験がある、Gの妻は韓国の姉妹大学で韓国語を学び、ワーキングホリデーを通して旅行会社に1年間務めた経験がある。Gの子どもは公立小学校に通っている。G夫婦は移動の経験を通して多言語に触れている。Gの妻は考古学を専門としていて韓国語以外にイタリア語を勉強し、いつかは中東アラブ圏に旅行を考えている。G夫婦の言語と文化の背景もあり、子どもは月に4回英語のレッスンを受けている。

G、H、I、J、Kは子どもが大学生になったら韓国へ留学して韓国と韓国語を学んでほしいと語る。

以上のように、日韓国際結婚家庭の親の教育観による子どもの学校選択を考察した。親の留学経験や移動の経験がすべて子育てに影響を与えることではないが、各家庭の親の教育方針により学校選択は決まることを考察した。

## 5.16 日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティに影響を与える諸問題

いじめとヘイトスピーチは、国際結婚家庭の子供にとっては自分のアイデンティティを

否定することになる。2回目のライフストーリーインタビューで、Aの子どもは友達や教員からいじめを受けたことがあると語ってくれた。長女は部活の時にいじめを受けたことがある。日韓関係がとても悪かった時期でもあり、悪口を言われバレーボールのセンターから外されたこともある。次女は中学と高校の時、授業中教員が生徒に向かい「君たちは嫌いな国があるのか」と聞き、その教員は「私は韓国が嫌いな国だ」という発言したそうである。後日、教員はすぐに謝り、校長と教頭がAの自宅まで来て謝罪した。以下のインタビュー内容から、Aと子どもの気持ちとその時の対応を読み取ることができる。Aの長女はいじめられたことを親が心配するから言わなかったという。過剰なマスメディアの報道により、長女の周りの子どもにも影響を及ぼしている。インタビューの内容でAは次女の学校での教員のヘイトスピーチのことで驚きもあったものの動揺せず、対応していることがわかる。尚且つ、Aの次女はインタビュー内容からも推察されるが、ヘイト発言があった数日後その件を自分で解決することになる。Aの家庭内では韓国の儒教思想である目上の人には敬うことと韓国には先生の日<sup>88</sup>があるということをAは常に子ども達に教えていた。

Y：学生時代、いじめは受けたことはありますか？

A：中学校の部活の時に裏でいじめられました。ちょうど日韓関係が悪かった時期です。「韓国ってさ」といいながら悪口を言われました。バレーボールのセンターに入る予定であったが、仲間はずれになり外されました。とても悔しくて泣いていましたが、親にはいわなかったです。心配するから。(2018年6月5日 一回目のインタビューより)

Y：ヘイト発言した教員の話しを聞き、どんな気持ちでしたか？また、どのように対応しましたか？

Aの母：「○○先生一度韓国に行ってみて下さい」。娘にその発言をすると「韓国が嫌いだ」というのは「私は○○のお母さんの国が大嫌いだ」というふうに聞こえます。先生この動画を見て下さい。大阪での韓国嫌悪ヘイトスピーチをしている中で少女が目隠しをされている女の子に誰かがハグするとみんながハグをするシーンなのです。…(中略)。数日後、Aの両親は全校生徒に平和の歌のCD(350枚)を配り、また、母の日に合わせて学生達が親には内緒にフラワアレンジをしてプレゼントをする企画をAの父が行った。学校側も喜んでくれて民間放送局まで取材にきた。(2018年9月21日インタビューより)

Aの母：ヘイト発言の件があってから何日か経って、ヘイト発言をした先生に向かってある生徒が寝ていることを起こされたため「うるさい」と言ってしまった。学級委員をしている娘が「先生に謝れ」と指示をした。ヘイト発言をした先生でもあるけど、きちんと目上の人を敬って自分の役割を果たしていた。(2018年9月21日インタビューより)

Bはいじめまではなかったものの、小学校の同級生から国のことについてからかわれ、その話を母にしたらその後、「日韓文化交流」が始まり、互いを理解する場になっていた。

ゆ：えっと、あの小学校の時に一度だけその小学校の同級生たちがなんか韓国、韓国。中国、中国と言ってくるのがあった。それは別にどうとも思わなかったけど気持ちが悪かったので、多分家に帰って私の母に話したはず。多分、小学校2年生か1年生時だと思うんですけど。母がそれをすごく怒って。怒ったというか、それは問題だと思って学校に言いに行ったんです。それで私の担任の先生にそういうことがあったと話を逆にしてこれをその国際理解場にしましょう。そこで、だから韓国のこととかしゃべる会にしましょう。(中略)日本と韓国の話をしたり、うちの母が地

<sup>88</sup> 韓国で毎年5月15日は「先生の日(ススンエナル)」。毎日学校で顔を合わせる先生や、かつての恩師を敬い、感謝の気持ちを伝える日。もともとは1964年5月24日「恩師の日(師匠の日)」として始まったが、翌1965年に世宗(セジョン)大王の生まれた5月15日に日付を変更、名称も現在の「先生の日」に改称される。(出典:<https://www.konest.com/>)

元で頑張っている人みたいな説明をしてくれて、全然それ一回だけで。(2022.2.16、インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

C は子どもたちが 30 歳、27 歳を迎え子育ては終わっている。C が住んでいる地域が同和教育や外国人と仲良く暮らそうということで国際交流や人権問題にも積極的に取り組んでいて子どもたちはいじめやからかいなども受けたことがないと語る。

C：私が住んでいる町が〇〇なのでとても同和教育<sup>89</sup>と外国人と仲良く過ごそうという。ペルー、スペイン、中国、フィリピン、いろんな国の国籍の母親が多い。私がこの〇〇市に来た時には外国人は少なかった。韓国、中国ママ友もなく。だから最近 10 年前から私が住んでいるマンションにもフィリピンママもいて。それで私が住んでいる町が(外国人に優しい、住みやすい)よいかも知らない。

C：私が住んでいる地域の〇〇市がそういう(国際的なイベント)のが上手で、市ごとに異なるけど、〇〇市は外国人と仲良く過ごそうとか、どこの国の人でも同じだ。そういう教育をするし、先生たちも海外旅行もよくするし、アフリカとかいろんな国へ。どこの国の人でも平等だ。差別はしないようにしよう。(2021.11.20 インタビューより、原文韓国語、下線は筆者)

D の子どもは思春期でまだ成長の段階であるが、特にいじめの問題もなくクラスメートとは仲良く韓国の文化交流をしながら学校生活を楽しんでいる。

M：私から皆さんからでいいですか？えっと、私は友達が 6 年生の時にいたんですけども。

その友達からもともと K-pop とか韓国のメディアのこととかは知ってたんですけど、その友達からそういう影響を受けて、K-pop にすごいハマったんですね。そのおかげで韓国の歌とか聞いてると、歌詞を覚えたり、その単語を習ったりするときに、その K-pop を通じて韓国語はもっと上達するようになったりとか韓国語にもっと興味を持って、真剣に取り組んでいきたいなあというきっかけがすごいその友達にあってそれからは、今でも現在もそうなんですけど、韓国のドラマとか映画とか、あのショーとか歌をとかすごい、そういう韓国のものに触れることが多くなった。(2022.2.26 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

E は 4 歳の子ども、F は中学 1 年生と小学校 3 年生、G は小学校 2 年生、H は年長(5 歳)、I は 3 歳の子ども、J は 3 歳と 6 ヶ月(インタビュー当時)、K は小学校 1 年生と年少(3 歳)、L は 1 歳 5 か月(インタビュー当時)の子育てをしている最中である。E～L はまだ子どもが幼いということもあり、からかいやいじめなどは受けたことはない。しかし、D を除いては子どもには日本人配偶者の姓を付けている。

K はインタビューの中で子どもの名付けについて詳しく教えてくれた。子どもの姓を妻の日本姓に、名前も漢字を日本読みにして表記し、使用している。その理由として、韓国名にした場合いじめ等を受ける可能性があるのをそれを排除するためであると語る。

<sup>89</sup>同和教育とは、日本社会の歴史的発展の過程において形成された身分階層構造に基づく差別により、現代社会においてもなお著しく基本的人権を侵害され、特に近代社会の原理として何人にも保障されている市民的権利と自由を完全に保障されていないという、最も深刻にして重大な社会問題であると認識されている。広く社会の各分野にわたる同和教育の解決に当たっての教育対策は、人間形成にかかわるものとして重要な役割を果たすものである。このため、文部省では、学校教育や社会教育を通じて、広く国民の基本的人権尊重の精神を高めるとともに、対象地域における教育上の格差の解消と教育・文化水準の向上に努めることを課題として、次の方針の下に同和教育の推進に努めてきた。1)日本国憲法と教育基本法の精神にのっとり基本的人権尊重の教育が全国的に正しく行われることを推進すること、2)国民の正しい認識と理解を求めつつ、地域の実態を十分把握しこれに即応した配慮に基づいた教育を推進すること、3)同和教育と政治運動や社会運動との関係を明確に区別し、「教育の中立性」が守られるよう留意することなどである。五 同和教育の振興：文部科学省 (mext.go.jp) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318317.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318317.htm)

メアリー(2017)は、一次的アイデンティティ形成に影響を及ぼす幼少期に受けた偏見やいじめの経験は年を重ねるごとに消えていくもので、それは自我の意識の成長と、国際結婚の子どもであるという自らの多元的な背景の理解によるものであると述べている。

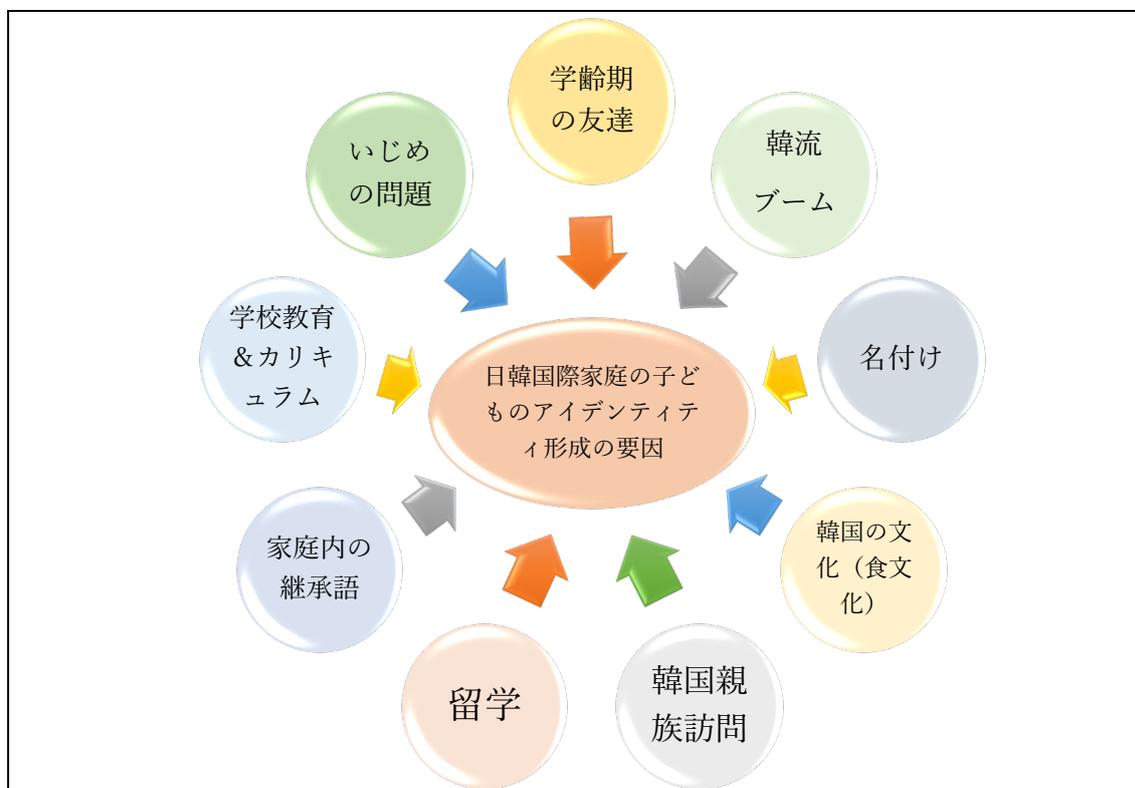
中川(1998)は、多文化教育は外国人の子供達に対して行うのではなく、日本の子供に対して行うべきものであると指摘している。馬淵(2011)は「多文化共生」を求める一方で、社会はまだその実現に至っておらず、特に教育の領域において理念と実際の社会は大きく乖離していると指摘している。竹田(2012)は、教育現場で働いている教員二人の話しについて「外国人児童・生徒の教育問題に現場での教師の言葉や行動は子供たちに影響を与えると述べて、教師の役割が非常に重要であることを述べていた。さらに、日本のマスコミのアジアに対する偏見のある報道は、子供たちにいわれのない差別を助長する」と述べている。

### 5.17 本章のまとめ

本章では、日本における日韓国際結婚家庭の実態を通じて親と子どものアイデンティティについて明らかにした。

1)子どものアイデンティティの形成の要因などを分析すると以下の図5-9のようにまとめることができる。

図5-9 日韓国際結婚家庭のこどものアイデンティティ形成の要因

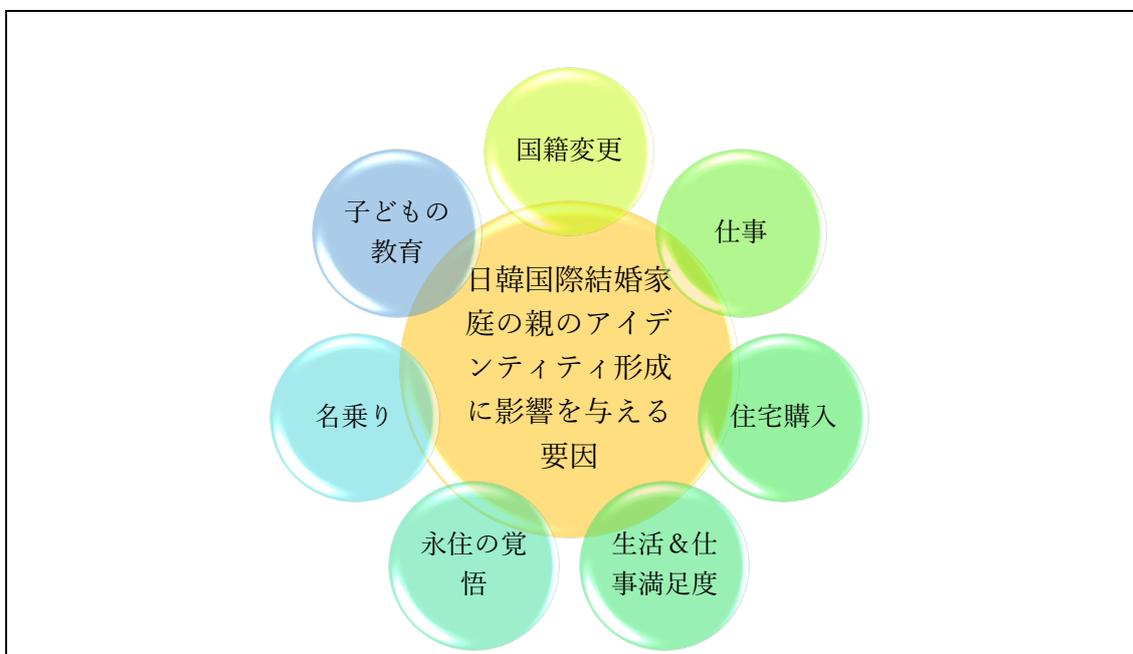


子どもたちのアイデンティティ形成に影響を与える諸要因は、エスニック文化か日本文化といった二項対立の構造では捉えきれない。アイデンティティを多元的、多重的なものとして育んでいくことが求められる。

研究協力者である日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティ形成過程要因には家庭内の継承語教育、韓国の文化(食文化を含む)、大学での第2言語としての韓国語の学び、留学の経験、学校の友達、学校教育(カリキュラム)、韓流ブーム、SNS、名付け、国籍(二重国籍)、韓国の親族訪問、親の教育観を挙げることができる。各家庭により、子どものアイデンティティ形成には異なりが見受けられる。これを決して一般化することもできない。

2) 日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティの形成過程は以下である。

表 5-10 日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティに影響を与える要因



「国籍を変更するかどうか」は異文化間結婚にとって非常に重要な事柄であり(鈴木、2003)、本研究の日韓国際結婚家庭の親の場合も、文化的アイデンティティが国籍変更<sup>90</sup>という課題(危機)と深くかかわっていることが明らかになった。AとCは生活上のメリット(利便性)のために国籍を変えている。しかしながら、たとえ「国籍変更」をしたとしても、その事実は、日韓国際結婚家庭の親の文化的アイデンティティに必ずしも直接的な影響を及ぼさないことが推察される。AとCは国籍変更後も母国人として強い意識を持ち続けている。さらに、韓国文化や韓国語を教えるのにも積極的で愛国心も強い。B、E、Fは国籍変

<sup>90</sup> 多くの先進諸国では、生涯にわたって二重国籍を認めているので、たとえ日本国籍に変更したとしても母国の国籍も維持されるが、日本は二重国籍を認めていないため、現状では、日本国籍を取得した外国人は母国(出身国)の国籍を喪失することになる。日本国籍に変更しない限り、参政権はないが、日本人と結婚した外国人配偶者は滞在許可および労働許可を取得できるので、日本国籍に変更しなくても、生活上支障はない。また、国籍変更には条件がある。

更については歴史教育を受けていたため抵抗もある。日本人女性と結婚している韓国人男性 G、H、I、J、K、L は国籍を変える必要性も感じず、外国人として生活するのに不便を感じないと語る。D の夫も同様に家族でファミリーネーム(韓国名)を使って生活、国籍変更も考えていない。I はこどもの教育のために来日しているので仕事上必要になってくると国籍変更も考えている。I を除いて、日本人配偶者と結婚した韓国人男性は国籍変更(帰化)、名乗りについては韓国国籍で韓国名を職場でも生活の面でも誇りを持って使っていたためエスニック(韓国)アイデンティティが強いということが確認できた。

「永住」は日韓国際結婚家庭の親の場合、ホスト国で生活は「本住まい」である。A は子どものためにも永住を覚悟していた。B は日韓文化交流のためにも、これからの地域社会での活動のためにも日本で住み続ける。C は子どもの世話、お墓を守ることに韓国語を教えることに老後も備えて日本での生活やすさを取り上げ永住のことを語った。E も子育てをしながら、老後はゆっくり日本で過ごしたいと語る。F は子どもが幼い時、日本を離れることもありうると考えていたが、子どもが小学校に上がり、また中学生になった時 100%永住することを決めていたという。G、H、K は日本で家を購入し、仕事も安定しているため日本で住み続けると語る。J、K、L は日本での生活上のメリットと仕事の関係上、日本での永住し続けている。I は子どもの教育のために来日している。

研究協力者は両文化の良い点と悪い点を明確に認識するとともに、二つの文化の視点を維持し、母国と日本という二つの文化のバランスを保ちながら生活している。

日本在住の研究協力者は日本で生活することによって、日本で再社会化(再文化化)していくが、(文化的)アイデンティティの基盤(基底)には、母国で身につけた母文化が保持され、それが消失することはない(鈴木 2012: 144)。母文化は(文化的)アイデンティティの基盤として生き続けるが、時間の経過と共に、二つの文化は個人の中で「ブレンド(Blend)」されていく。尚、韓流ブーム(4次<sup>91</sup>)を経て日本に定着している韓国文化は日本在住の研究協力者により影響をもたらしている。例えば、SNS では「おうちカフェ」がキーワードになり、SNS 映えするタルゴナコーヒーが話題になる。近くのスーパーマーケットやショッピングセンターで韓国の食材やコスメを安易に購入することができる。韓国の映画やドラマを通して韓国文化と韓国語も触れることが可能である。このような環境もあり、研究協力者は韓国人のアイデンティティを強く出している。一方で日本での永住が長期化することにより生活の便利さ、生活基盤(日本での仕事)、子どもの成長に伴い日本の文化をバランスよく取り入れている。また、留学の経験がアイデンティティに影響をもたらす(詳しくは岩崎 2018, 2022 を参照)、自分にも子どものアイデンティティにも影響を与える。つまり、自分のアイデンティティを認めつつ、日本の文化も認め、二つの言語と文化が共存し合っている二重アイデンティティともいえる。

---

<sup>91</sup> 第4次韓流ブーム(2020)は、新型コロナウイルスが急拡大した。コロナ禍によりステイホームが余儀なくされ、自宅で楽しめる動画配信サービスの需要が高まる。韓国ドラマ(「愛の不時着」「梨泰院クラス」、また映画「パラサイト」)も日本で大ヒットし、幅広い層が韓国コンテンツに夢中になる。

## 第6章 日韓国際結婚家庭における親子の言語ポートレート

言語とアイデンティティは密接に関わる。Baxter(2016:34)は、ポスト構造主義のアプローチにおけるアイデンティティの捉え方について“Reciprocally, identities are constructed by and through language but they also produce and reproduce innovative forms of language”と述べている。

言語ポートレートは、身体の線画に自分のことばを位置づけ、色を選んで描いたものである。1990年代から移民の子どもたちが言語レパートリーや自己のことばについて抱く感情を容易に表現できる方法として Krumm らが利用していたが(Krumm2013)、成人の言語レパートリーやアイデンティティの意識について知る方法としても活用されている(姫田2016)。また、言語ポートレートを描く活動および描かれた言語ポートレートが、言語レパートリーの背後にあるバイオグラフィーの物語を引き出す糸口ともなる。物語(ナラティブ)では、ことばへの思いやストーリーは線状に順を追うのに対し、言語ポートレートは全体と部分の関係性をも可視化し、亀裂や重なりといった矛盾したあり方も視覚的に現わせるマルチモーダルな調査方法である。

Busch(2017)が言語ポートレートで探る言語レパートリーを、「ことばの生きられた経験」(loved experience of language)と述べている。これは現象学の概念で、「体験」と和訳されることもある。

ヴィゴツキーは、「子どもが絵を描いているときは、描いている対象について語るのと同じように、絵の事物について考えている」(2002:137)と言った。描画は思考の表現化であると同時に、思考をうながすものである。思考の断片を集めながら言語ポートレートを描き、説明の中でそれらは有機的につながられる。臨床心理の領域でも、描画は、特に言語表現のつたない子どもの内的世界を知るために活用されることがあるが(Vinay2014:8)、それとは異なり、言語ポートレートの解釈は、調査者ではなく描いた者が自身で語る。また語っている間にもふりかえりが進むこともある(Castellotti et Moore, 2009:52-54)。

言語ポートレートは、個人的な言語価値の意識化をうながす場であり、また同時に、その意識化の結果を証明するツールとして活用できる。

研究協力者の親には2020年前のデータ収集は対面で行われ、言語ポートレートは筆者が手渡した線画と色ペンを用いて描かれた。2020年以降のデータ収集はZoomで行われ、言語ポートレートは事前に筆者がメールで送った線画を研究協力者が印刷して描き、そのスキャン画像を送ってくれた。データ収集の時には言語ポートレートについて、自分のそれぞれのことば(language)にふさわしいと思う色を選び、自分の体のどこに位置付けられるのかを考え、体につけるもの(例えば、腕時計)、または体の外(例えば、カバンなどの持ち物、背景)として描いてもよく、ラベルや注釈を書き加えてもいいとも説明した。研究協力者の子どもにも親と同様の説明を行った。しかし、まだ幼いEの子ども(4歳)、Gの子ども(8歳)にはZoomで行われたインタビューの時に自分がよく使うことば(語彙)を好きな色ペンを選んでもらい描いてもらった。

言語ポートレートについての語りは日本語と韓国語のどちらを使ってもいいとした。収集したデータは文字化し、ことばの位置付けの理由のほか、ことばについての意識の形成に関わる語りを抽出して分析し、考察した。

この章では、日韓国際結婚家庭における親と子どもの言語ポートレートを分析し、アイデンティティとの関係を明らかにする。

## 6.1 A 家族の言語ポートレート

A の家族に言語ポートレートを説明して描いてもらい、その後で説明を求めた。A はレストランで直接会い、描いてもらった。A の夫、A の子ども達は新型コロナウイルス感染症の影響により直接会えず、郵送してもらった。言語ポートレートに関する追加説明は SNS を使用して説明してもらった。言語ポートレートについての語りは日本語と韓国語のどちらを使っても良いとした。

### 6.1.1 A の言語ポートレート

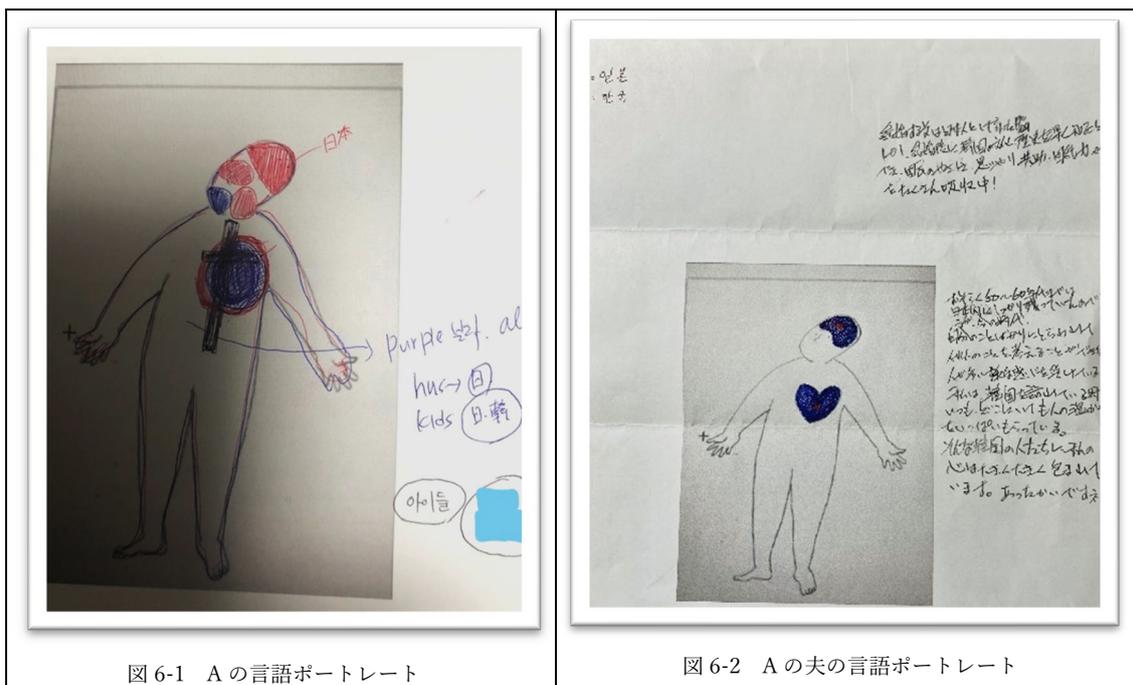


図 6-1 A の言語ポートレート

図 6-2 A の夫の言語ポートレート

図 6-1 は A の言語ポートレートである。A は「心の外側は赤色(日本)です。日本の心を持つことにより、日本人とのコミュニケーションをとることができる。しかし、心の内側は青色(韓国)」と語る。A は「私と仲良くなった日本人は外側の心の色を見て引き寄せられますが、時間が経てば経つほど内側の色を知り少しずつ染まっていく」と語る。頭は日本(の価値観)と日本語で考え、赤は日本を意味しているのだが、物事を判断する際には客観的か冷静に判断しながら日本での生活を営んでいるという。目は日本と日本語で捉えているという。韓国人でありながらも、韓国に対しては赤い日本のメガネをかけてみていると言う。さらに、自分自身に対しても赤いメガネで厳しく見ることで自分の成長につながっていると

いう。なぜなら、日本のマナーやサービス精神等学ぶ所が多々あるからだそう。口は日本と韓国が半々で、赤は日本、青は韓国を意味するそう。体は紫色で、赤(日本)と青(韓国)を混ぜた紫色で生活を営むのが家族にも周囲の人々にも迷惑をかけずに済むと語る。Aは体を全体的に紫色だといひ、赤(日本)と青(韓国)のを混ぜると紫色になるので日本での生活に合わせるためには自分の青色を赤色と混ぜるしかないと言ってくれた。Aの言語ポートレートに描かれている心臓の真ん中に十字架がある。異国の日本の地で子育てなどの生活に対する不安と戦っていたAにとって信仰は、生活を支える欠かせない存在であり、Aの日本での生活と深く結びついていることが窺える。

Aのアイデンティティと言語ポートレートからは、ハイブリッドのアイデンティティであり、融合アイデンティティであることが窺える。

Schumann(2011)は、トルコ系ドイツ人の事例を取り上げ、彼らの中で行われるドイツ文化を受容するのか、それとも自分たちのエスニック文化を維持するのかという両者の間の絶え間ない交渉は、一種の特別なアイデンティティを創造すると主張する(Schumann 2011:2)。個々人の内面における複数の文化の交渉あるいは統合による新しいアイデンティティの創造に注目することで、「ハイブリッド・アイデンティティ」という語を用いた。言い換えれば、自分の文化を選択するでもなく、相手の文化を選択するでもなく、両方の文化をもつことで、第三のスペースとも呼ばれるハイブリッド・アイデンティティが創出されるとしている。

鈴木(2012)は、インドネシアに文化間移動をした異文化間結婚女性の再社会化の様相は、インドネシア人の夫及びその周辺の人間関係(家族・親族・友人)、同国人との親密さや同国人コミュニティへの関与、子供の学校に関する事柄などを考慮し、おおよそ7つの型<sup>92</sup>に分類した。その中でA夫婦は「同国人・現地人社会双方志向」であり、同国人やそのコミュニティばかりでなく、夫の家族、仕事関係の現地人、地域社会とも良い関係にある。新しい環境の中でうまくやっていけるように再社会化するだけでなく、自国のコミュニティや出身国との関係も維持・発展させていこうとする。

### 6.1.2 Aの夫の言語ポートレート

図6-2はAの夫の言語ポートレートである。主に頭と心に色を塗っている。心臓は青色ハート型に真ん中に小さく赤でハートマークを入れている。「おそらく50~60年代までは日本(人)にもしつかり残っていたのでしょうが。今の時代、自分のことばかりにとらわれて他人のことを考えることができない人が多いような感じを受けている。私は韓国を訪れる度に、いつもどこに行っても温かさをいっぱいもらっている。心は大きく包まれています。あったかいですね」。頭は「結婚する前は日本人として育った脳(考え)しかなかった。結婚し、韓国の文化、歴史を深く知ることができ、国民のやさしさ、思いやり、共

---

<sup>92</sup> ①同国人志向(同国人コミュニティ志向)②現地人社会志向③同国人・現地人社会双方志向④孤立志向⑤国際志向⑥自国(出身国)志向⑦二国間移動志向(文化間移動志向)

助、団結力等たくさん吸収中！」と言及している。

Aの夫は「結婚する前は日本人としての考えしかなかった」と述べている。しかし、日韓国際結婚を通して韓国の文化を常時に受け入れていて、家庭では二つの文化が存在する。家庭内では主に日本語を交わす環境ではあるが、独学で韓国語も勉強している。異なった文化の理解のために常に努力していることが窺える。佐竹ほか(2015)は「異なった文化への理解は外国人配偶者を人として尊重することにつながる」と述べている。Aの夫は月に1回、夫婦でデートをする日を決め出かけている。また、年に1~2回程韓国を訪れている。さらに、Aの親族が日本を訪れると観光案内等家族で親睦を深めている。

### 6.1.3 Aの長女の言語ポートレート

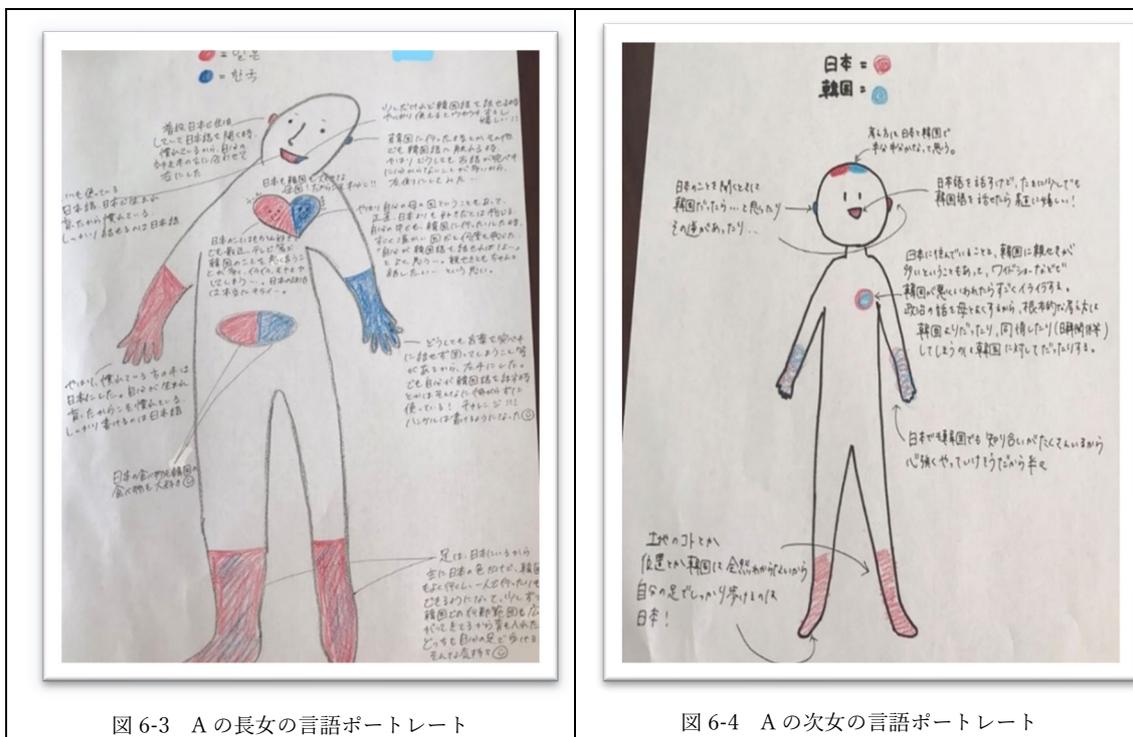


図 6-3 Aの長女の言語ポートレート

図 6-4 Aの次女の言語ポートレート

図 6-3 は A の長女の言語ポートレートである。右の耳(向かって左)は「普段日本で生活して日本語を聞く時慣れているから自分の利き手の方に合わせて右にした」、左の耳(向かって右)は「少しだけれど韓国語を話せる時やっぱり使えとウキウキするし嬉しい！」さらに右の手(向かって左)は「やはり、慣れている方の手は日本にした。自分が生まれて育ったからこそ慣れている。しっかり書けるのは日本語」と記していた。口は「いつも使っている日本語。日本で生まれ育ったから慣れている。しっかり話せるのは日本語」という。「心臓」はハート形に半分は日本と韓国を描いた。Aの長女は「日本も韓国も大切な母国！だからこそ半分！」に心臓の絵を赤(日本)・青(韓国)で二等分にして色づけしていた。脳や心臓に言語を描くのは自らの核と捉えていると解釈される(岩崎 2018)。さらに、岩崎(2018)は「心臓」に描くことは両方の言葉を情意的に捉えていることを表していると述べている。Aの長女は「日本のことはもちろん好き。でも最近テレビ等で韓国のこ

とを悪くいうことが多く、イライラもやもやしてしまう…。日本の政治は本当にキライ…」と記した。一方、青色の心臓の半分は「やはり自分の母の国ということもあって、正直、日本よりも好きだ」と感じる。自分の中でも韓国に行ったりした時すごく温かい国だと何度も感じた。自分が韓国語を話せれば…とよく思う。親戚ともちゃんと話したい…という思い」と語っていた。脳や心臓に言語を描くのは自らの核と捉えていると Coffey(2015)は述べている。Aの長女の核はすなわち日本(赤色)と韓国(青色)両方とも核となっていたと言える。お腹(胃)は「日本の食べ物も韓国の食べ物も大好き」と記した。Aの長女は、家庭内の食文化はAが韓国の食べ物をよく作るということを一回目のインタビューで教えてくれた。ブルデュー(1984)によれば、日常品をめぐる文化継承の中でも特に日々の食の味覚は幼少期の学びの中で最も強く長く記憶に残る、文化産物との関係の原型であるという。

左の耳(向かって右)は「韓国に行った時とかその他でも韓国語に触れる時、やはりどうしても言語が完璧に分からないことが多いから左側にしてみた…」と語った。Aの長女が通う大学では週一回の韓国語 I a, I b<sup>93</sup>科目がある。Aの長女はそれを一年間履修していた。インタビュー1年後は駐日韓国文化院<sup>94</sup>主催の「スピーチコンテスト」のスピード部門に出場したこともある。しかし、専攻科目の忙しさと国家試験の準備のために韓国語 II a, II b は断念せざるを得なかった。

左の手(向かって右)は「どうしても言葉を完璧に話せず困ってしまうこと等があるから、左手にした。でも自分が韓国語を話す時とかはそんなに怖がらずに使っている！チャレンジ!!! ハングルは書けるようになった」と語った。1年間学んでいた韓国語を通して自信につながったと言える。

両足は「日本にいるから主に日本の色だけど、韓国もよく行くし、一人で行ったりもできるようになって、少しずつ韓国での行動範囲も広がってきているから青色も入れた。どちらも自分の足で歩ける。そんな気持ち」といい、青と赤が混ざった色で長いソックスを履いているように描いていた。Coffey(2015)は、母語は自分の礎という意味合いで「足」と捉えられることも多いと述べている。Aの長女は韓国に連れて行ってもらったり、国際結婚家庭の子どもでもあるので「与えられた」移動やアイデンティティとは異なり、習った韓国語を活かし自ら韓国へと移動をしている。Aの長女のアイデンティティは半々ではなく「ホール(whole)」なり、常に日本と韓国の文化と言語が融合しているのである。

#### 6.1.4 Aの次女の言語ポートレート

図6-2は、Aの次女の言語ポートレートである。頭は「考え方は日本と韓国で半分半分かなあって思う」と記し、「日韓ニュースなどに対して感じることや考えることは、どちらかに寄った考えではなく、中立的な立場で意見をもつことが多いから(母と政治的なことを話すことが多いため、どちらかと言えば韓国寄りの部分が多い)」と語ってくれた。

<sup>93</sup> Aが専攻しているコースでは語学の科目は履修しなくても卒業は可能である。

<sup>94</sup> 1979年、東京都豊島区東池袋に開院し、日本における韓国文化の総合窓口の役割を担っている韓国の政府機関(<https://ja.wikipedia.org/wiki>)。

右の耳（向かって左は青）と左の耳（向かって右は赤）は「日本のことを聞くときは韓国だったら...とったりその逆があったり...」。口は「日本語を話すけど、たまに少しでも韓国語を話したら素直に嬉しい！」と「口は食事のマナー等に関し、日本にも韓国にも対応できるから」と語る。心臓は真ん中には青（韓国）で赤（日本）に包まれている。Aの次女は「日本に住んでいることと韓国に親戚が多いということもあって、ワイドショーなどで韓国が悪く言われたらすごくイライラする。政治の話をもとよくするから、根本的な考え方は韓国寄りだったり、日韓関係等で同情してしまうのは韓国に対してだったりする」と言う。両手は赤と青で混ざっており日本にも韓国にも知り合いがたくさんいるから心強くやっていけそうだから半々」と記し、「これは例えば私が韓国に行った時、向こうで過ごした時期は短くはあるけど、多くの身内や友人がいるため頼れる人も多く、心強そうだと感じたため」であると言う。両足は赤色で塗られていて「韓国のことについては全然わからないから、自分の足でしっかり歩けるのは日本！」と言う。足は自分の母語の礎という意味合いで捉えられることが多い。

Aの次女は言語ポートレートにも記述しているように日本と韓国と半分半分と記しているところが多かった。しかし、ライフストーリーインタビューで「生活全般は日本にあり、ふるさと韓国である」と言及した。Aの次女は日韓関係のニュース報道に関して母と話をする時間を通して自分のルーツが韓国にあることを常に自覚している。鈴木(2013)によると、国際児の場合には、(文化的)アイデンティティの基盤として、「複数文化」がある。すなわち、複数文化が「混合」、あるいは「融合」していると述べている。

## 6.2 B 家族の言語ポートレート

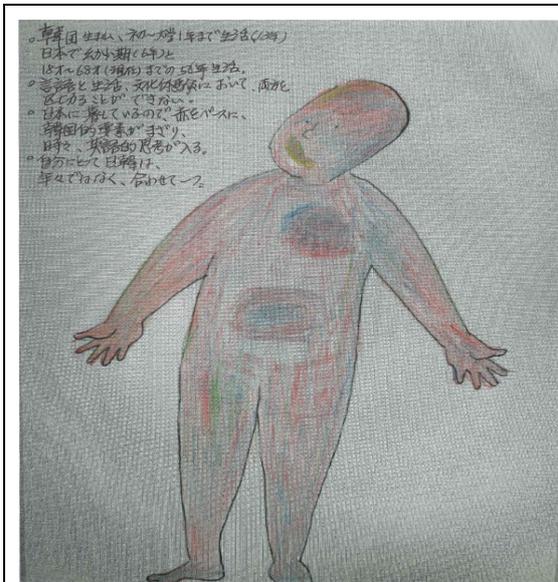


図 6-5 B の言語ポートレート

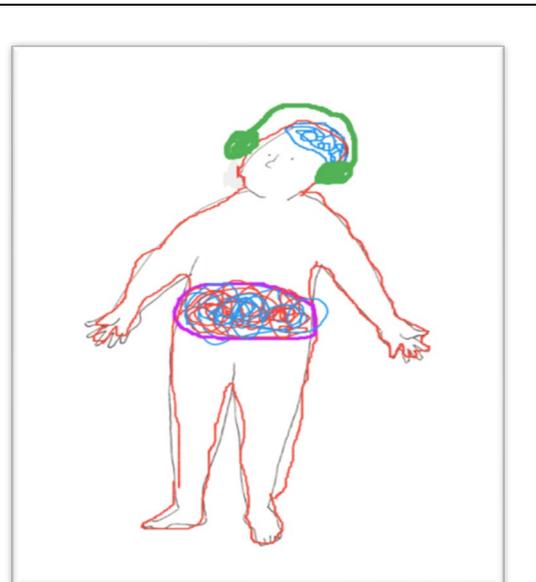


図 6-6 B の子どもの言語ポートレート

## 6.2.1 Bの言語ポートレート

在住50年目で、留学生として、そして大使館でも勤務、ジャーナリストとして活躍、大学で教鞭を取り学生を指導し、現在は牧師兼ジャーナリストであるBの言語ポートレートは日本と韓国のことばと文化が共存している。日本語と韓国語の区別がつかないという。日本語で話しているが、内容は韓国的な要素が多いと言い、言語を使う比率だけでいうと、日本語が70%、韓国語が30%であるという。

頭の中で「これは韓国、それは日本と区別がつかない。細胞一つ一つに日韓が配合されている」と語る。Bは「私の場合は同化されたわけではなく私のコンセプトが日韓交流活動のフレーズでもあったので日本と韓国を分けて考えていない。良い点も悪い点もすべてを受け入れる努力をしたので、赤色と青色が混ざって体の中の細胞が紫色になりつつある」と語る。Bは体の色が紫色になりつつあると言ったが、これは「日本と韓国が同化するのではなく韓国もあり、日本もあり、すべてを認めるということで二つを受け入れることができる」と述べる。これは同化ではなく（二つが）共存していると言える。

Bは「この共存のためには二つの国を生きるための「努力」をしなければならない。二つの国を生きるためには、私はどうすれば良いのか？どのように生き抜くかを私自身今、求めているのである」と言い、「体全体が紫色に塗られているわけではなく少し空いている部分があれば、色が塗られていない部分もある。その部分は「私が、まだ、未完成であり、まだ現在形で、なりつつあると言う。死ぬ日まで現在進行形であるだろう」と語る。

赤と青が混ざって紫色になるように、「片方(の色)が足りなくても色は異なり、良い意味で紫色になればと願いながら今までやってきた私の活動(日韓文化交流)であり、人生である」と語る。

Bは「私は二つの国を生きて来たので、どの部分が赤色でどの部分が青色なのがすべて体にまざって吸収され紫色になって生きて来たので、到底、分けることができない」と言う。日韓文化と言語が1つになりつつ、ホール(whole)になっていくのであろう。

Bは「胃袋の色は、中は青色。基本は韓国人なので。その上に日本が積み重なって蓄積されていく。日本の食べ物も文化も価値観も全部蓄積されていく」と述べる。週1回はお弁当デーということで地域の独居老人にお弁当を配膳している。そのお弁当の中身は日本の煮物や韓国のニラキムチ等、両国のおかずが入っている。お弁当を受け取る日本の人は日本にいらながらも韓国を感じることもできるだろう。

「口」と「頭」は英語で表現している。「口」は緑色、黄色。「英語的な部分があるということ。専門が英米文学だったので。」という。日本で英米文学を専攻し、アメリカやイギリスに招聘教授として呼ばれた経験や現在仕事の関係上英語圏の人との関わりもあるので頭と口の部分には英語を描いている。

また、「頭」にも英語がある。言語というものは頭で考えて思考するもので、相手の状況を理解して相手のポジションを確認しながら会話をするため、英語を使う際には英語の思考になるのでそのように描いたと語る。Bは来日していろいろな立場から、例えば留学生、大

使館の職員、ジャーナリストを経て、文化の経験も豊富である。Bは「すべてのことが蓄積されているのが、現在の私なので（日本と韓国を生きてきた、生き抜いてきた）分けることができなかつた」と語る。両国の言語と文化がBの中に共存していて、比率で分けることもできない。

Bは、日本と韓国で培ってきたアイデンティティは日本と韓国が共存するアイデンティティであると言う。二つ以上の言語と文化が蓄積された多層的なアイデンティティとも言える。

## 6.2.2 Bの子どもの言語ポートレート

Bの子どもは普段日本語で考え、話しているので頭は青色(日本語)である。しかし、「祖母や母の強い影響で、特に彼女たちの強い祈りや生活文化(韓国式)の教えの中で育ったので、メンタルや信仰的な面では韓国的な要素を感じているので、私全身を覆うのが赤色の韓国語である」と語る。Bの娘は韓国留学の経験があり日韓文化交流史の研究のために韓国を頻繁に訪問している。仕事の関係で韓国を訪れ韓国語の文献を用いて研究を進めているため、自分の体を覆うのは韓国語であることがわかる。食事は日韓両方よく食べており、大好きなので、お腹の中は混ざっている。しかし、英語が今一番話せるようにはなりたいため、ヘッドホンで英語を聞くことを表している。

川上(2014)は、事例として一青妙『私の箱子(シャンズ)』を分析した。その結果、幼少期より複数言語を通じて経験したことが意味づけられ、その新しく意味づけられた記憶が彼女の生き方とアイデンティティの再構築に繋がっていることが明らかになった。複数言語環境で成長した子どものアイデンティティ構築は、決して子ども時代から青年期に見られる出来事ではなく、成人後も継続することを示唆している。Bの娘がインタビューで語った「韓国語を使って母と会話をする際の後ろめたさを感じる」、「韓国語を話す時自分はニセモノ」であると語る。幼い時、韓国文化と韓国語が聞こえる環境であったものの、Bの娘は高校生の時にずっと自分を100%日本人だと思っていた。ある講演会の講師の話がきっかけで進路を変更し、韓国語が学べる大学へ進学する。よくわからない国、知らない国、関わりたくない国であった言語と文化を大学に入学して学び、韓国へ留学までする。韓国語をマスターして帰国してからは、母の活動と同様に日韓文化交流史や朝鮮通信使について研究をする研究者となる。成人になってからのBの子ども(ゆ:仮名)はアイデンティティ構築には、幼少期からの複数言語環境の記憶や複数言語を通じて構築された人との関わりについての経験が深く影響し、そのことの意味づけをめぐりアイデンティティ構築が継続的に変容していくと考えられる。複数言語環境で成長する子どもは、経験や記憶などを意味づける力こそが、アイデンティティの構築につながり、Kanno & Norton(2003)らの言う「想像の共同体」を想定することができ、自分にとって意味のあるものに「投資」することによって生きていく力を得ると捉えることが重要である。

### 6.3 Cの言語ポートレート



図 6-7 Cの言語ポートレート

Cは身体の部位の絵を次のように説明してくれた。体と頭の中には韓国語と日本語が半分ずつ占めているということで描いてみた。ピンク色は韓国語、緑色は日本語、空色(青色)は英語。「母国語は韓国語だけど、今は日本に住んでいるので日常生活では日本語が殆どを占めているので緑で表現した」と語る。そして、たまに英語圏の友達とコミュニケーションをとるために英語もたまに使うので空色で表現している。端的にいうと、韓国語と日本語が交差するということである。頭に花を描いたのは韓国語を話している自身であるという。「日本語を話している自身は、(体全体が)全部花で覆われているように楽しいという意味付けをして花で表現してみた」と語る。Cにとって韓国語も日本語も使いこなすのには問題なく、特徴は心臓の部分に日本語と韓国語のハートが重なって描かれている。Coffey(2015)は心臓のところに描くというのはその文化と言語が核となっていると述べる。

## 6.4 D 家族の言語ポートレート

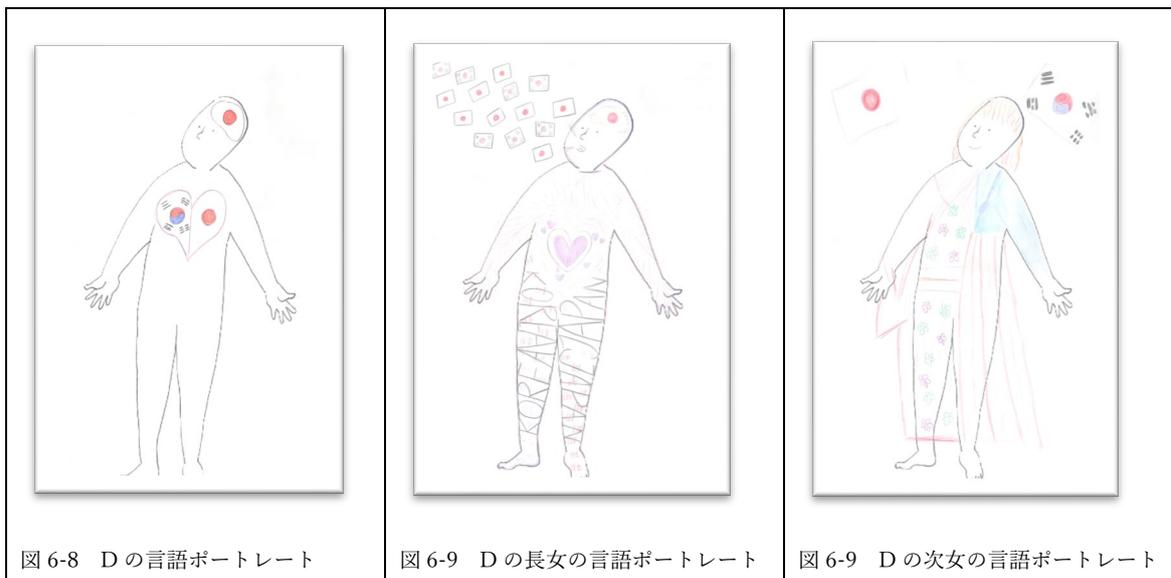


図 6-8 D の言語ポートレート

図 6-9 D の長女の言語ポートレート

図 6-9 D の次女の言語ポートレート

### 6.4.1 D の言語ポートレート

図 6-8 は D の言語ポートレートである。「頭の中は私が生まれ育った場所、日本が影響しています。そのため価値観や考え方はこれが大きく関わっています。ですが、心の中は韓国と日本の両方です」と語る。(2022.2.17.SNS で返信)

日本と韓国の国旗を心臓に描いている。日韓国際結婚家庭の親として二つの文化が共存し、核となっていると言える。D が国際結婚していることで、二つの文化が常にあり、心臓部分にはハートマークを日本と韓国を半々に描いている。Coffey(2015)は心臓のところに描くということはその文化と言語が核となっていると述べる。

### 6.4.2 D の長女 (M) の言語ポートレート

図 6-9 は「口から出ている国旗は私が話す事ができる言語を象徴しています。身体の縁は日本を象徴する赤で全て囲んでいますが、外側の青い点線は、住んだことがないけれど、自分の一部である韓国を表しています。たとえ住んだ事がなくても、心は日本の赤と韓国の青が混ざって、紫になっていた」と語る。(2022.2.17.SNS で返信) D の長女は、心は日本の赤(色)と韓国の青(色)が混ざって、紫(色)になっていると語る。心臓に言葉を描くのは自らの核と捉えていると解釈される(Coffey : 2015)。

D の長女は韓国に住んだことがなく、日本で韓国語を勉強している。日本では第一言語として日本語を使い、韓国語を話す機会は少ない。D の長女は土曜ハンゲル学校で韓国語を習って、日本語と日本の国旗、韓国の国旗を描いた。自分が 15 歳ということもあり、日本の国旗は 8 個、韓国の旗は 7 個を描いた。日本の旗が多いのは、「日本に住んだことしかなく、日本語が韓国語よりできるということなので、7 と 8 で足すと 15 になる」と語る。D の長女は日本で長く生活をしてきて「韓国には旅行に行ったり、韓国の街、文化や食べ物

には（自分の中では）触れたりするが、現地の韓国の人と比べると思考や価値観など、考え方が日本よりになっていて（中略）日本的な考えとか、脳の中が日本の方を重視した感じになっていて日本だけ（脳の中は）」と語る。

D の長女は学校で自分の国を代表して国を表現する民族衣装を着たり、国の文化を広めるイベントがあつたりして、韓国のことも日本のことも行う機会がある。心のハートマークの紫の色は「日本と韓国の国旗で青と赤がすごく特徴だと思っている。その色を混ぜると紫（色）になる。その時、心の中は日本のことも尊重し、韓国のことも尊重しているので、両方が混ざり合って、このように紫になった形」だと語る。また、真ん中に紫の大きなハートがあり、その周りにいくつかの小さなハートマークも描かれているが、これは赤がメインなのだが、周りの手足に合う色がついている。

それは実際、手足を使って韓国のことについて学んだり触れたりしたので、真ん中は日本を脳みそとみている。中は日本だとしても実際に自分が触れてきたことは、韓国のこともあるのだと。韓国を象徴している手足の四つの部分だけ青を使っている。全部で、足二つと手二つで4つである。Coffey(2015)によると、足は自分の母語の礎という意味合いで捉えられることも多い。

D の長女は「下半身に Korea そして Japan と英語で書き又、日本と漢字で書きハングルで 한국(韓国)と書いているが、手はたどってくる心臓、心臓まで辿ってきて足を同じようにしようかと思ったんですけど。デザイン性といろんなことを考えて、韓国をハングル(한글)で書いたり、漢字を使ったりすることで、いろんな象徴的な表現ができるのではないかと思いデザインした」と語る。D の長女が、英語でこれを Korea と Japan と書いているのは学校でインターナショナルスクールに通っているので英語で授業を受けている影響もある。

D の長女は英語で授業を受けているので得意な言語でもある。「日本語と韓国語も含め英語が世界な共通語でもあるので、そのような意味を込めて思い出した時に混ぜて、全部共通している色。なのでそのような統一ではないが、二つ国に共通するものだったり、二つの国のどちらにも含まれる英語を選択した」と述べている。

10 割中、日本語が5割で、英語が4割で、韓国語が1割になる。三つの言語が自分の中で、動いていると語る。土曜ハングル学校では小さい頃から色々と基本から習っていて、読み書きはできる。話す機会があまりなく、会話の上達が難しいところもあるが、先生との(韓国語)会話もできたり、友達とも韓国語で会話をするようになっていたので、多少は上達している」と思っている。

国籍はまだ決まっていない。韓国の文化については、小学校6年生の時に友達から影響を受けて、K-pop にすごくハマっている。そのおかげで韓国の歌などを聞いていると、歌詞を覚えたり、その単語を習ったりする時に、K-pop を通じて韓国語はもっと上達するようになり韓国語にもっと興味を持って、真剣に取り組んでいきたいというきっかけになる。現在も韓国のドラマと映画など、韓国の文化に触れることが多くなった。日本にいながらも韓国メディアを通して韓国のこのような文化に触れる機会は結構あると語る(2022.3.5 言語ポートレート

インタビュー)。移動しなくてモバイルを通して移動<sup>95</sup>している D の長女である。インターネットのような情報の移動を可能にするもの、そして情報そのものに対して、アーリは mobile(移動性)ないし mobility(移動、モビリティ)には大きく4つの意味があると指摘していた(2015:17-20)。Dの長女はアーリが移動について指摘している(1)に当てはまる。

### 6.4.3 Dの次女(N)の言語ポートレート

Dの次女は「私は着物と韓服、二つの国の伝統的な衣装を描きました。私の国籍を表すためには、国旗や色ももちろん大切ですが、衣装を選んだのには、それぞれの国の個性と歴史が背景にあるからです」と語る。(2022.2.17.SNSで返信)

Dの次女は、国旗を二つ描いた理由として、「私は韓国と日本のハーフで、日本と韓国っていうことだったので、絵を描いた時にも服で表しました。カールは特に意味はなく、自分自身の髪の色をカールヘヤーにした」と語る。Dの次女は伝統衣装で自分が国際児であることを表現している。身体は日本と韓国の伝統衣装が半々になっている服を着ている人を描いている。Dの次女は韓国と日本を描いてと言われたら「まず食べ物や服のイメージが強くあって」と言い、「韓国はハンボクを左に描いて、日本は着物で花柄、日本はちょっと花柄の着物が多いと思ったので花にした」と語る。次女(N)もSNSを通して韓国の音楽を聞いていて、学校に韓国の友達がいる K-pop を流しているので、1日のうちで韓国の文化に触れるのは1時間以上である。

### 6.5 E家族の言語ポートレート

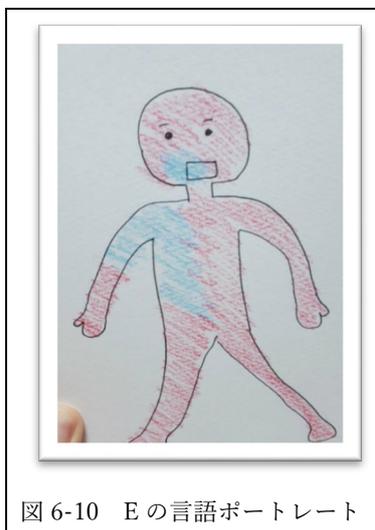


図 6-10 Eの言語ポートレート

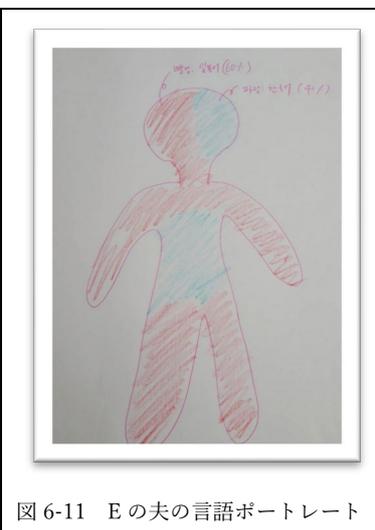


図 6-11 Eの夫の言語ポートレート



図 6-12 Eの子どもの言語ポートレート

<sup>95</sup> アーリは、Mobile(移動性)ないし mobility(移動、モビリティ)には大きく4つの意味があること指摘し説明している(2015:17-20) (1) 移動しているか、移動可能なもの (2) 暴徒、野次馬、野放図な群衆を形容し、境界の中に封じ込めることができない無秩序なもの (3) 上方ないし下方への社会的移動(垂直的な移動) (4) 移民や半永久的な地理的移動で長期的な移動(水平的な移動)

### 6.5.1 Eの言語ポートレート

日本で生活しているため日本語の比率が高い。頭の半分とお腹、胸は韓国語。それ以外は日本語で塗った。韓国語が母国語であるので身体を中心に母国語が占めている。そして、考える時には韓国語で考えることもあるし、日本語で考えることもあって半分ずつ色を塗った。韓国語で話す時は韓国語で考え、日本語で話す時は日本語で考えるようになる。また、日本で生活しているので日本語は人生の道具として必要なので手と足は日本語で塗った。母国語である韓国語を体の中心である「胸」に位置付けていた。脳や心臓に言語を描くのは自らの核と捉えていると解釈される (Coffey,2015) ため、日韓国際結婚家庭を築き日本で暮らしながらも韓国語が核となっていると言える。(2020年2月17日インタビュー、原文韓国語)

### 6.5.2 Eの夫の言語ポートレート

Eの夫は「韓国で韓国語を使っていた頃に比べると沢山忘れていた。それで体の胴だけに韓国語が少し残っている」と表現した。しかし、韓国語で話そうとすると自然に韓国語で出てくるので口は日韓半々である。Eの夫は家庭内では韓国語を使用し、家族言語として韓国語を使って維持をしようとしている。(2020年2月17日インタビュー、原文日本語)

### 6.5.3 Eの子どもの言語ポートレート

Eの子どもは4歳<sup>96</sup>である。4歳になると副詞を使いこなし、4-5個の単語を使って文章を作り話す。語彙の習得は急速に増える(キムキョンフェ他 2016:85)。インタビュー時にはEの夫婦に参加してもらい、言語ポートレートを説明してもらった。自分が好きなおもちゃを見せながら、韓国語でいろいろ説明してもらった。インタビュー最後に言語ポートレートについての質問をしたら、胸は韓国語でそれ以外は日本語であると答えてくれた。胸や心臓に言語を描くのは自らの核と捉えていると解釈される (Coffey,2015) ため、家庭で親と韓国語を使うことでEの子どもにとって韓国語が核となっていると言える。

E: ○○、韓国語が何色なの？
Eの息子: 日本語は青、緑。
E: 韓国語はどこなの？
Eの息子: 韓国語は赤です。
E: 先ほどは胸に韓国語がそれ以外は日本語と言っていました。 韓国語はどこ？胸？赤で塗ろうか？では、日本語はどこ？
Eの息子: これが日本語です。
E: なぜ胸に韓国語なの？

<sup>96</sup> おおむね4歳の子どもは全身のバランスを取る能力が発達し、体の動きが巧になる。自然など身近な環境に積極的に関わり、様々な物の特性を知り、それらとの関わり方や遊び方を体得していく。想像力が豊かになり、目的を持って行動し、つくったり、かいたり、試したりするようになるが、自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。(保育所保育指針第2章「子どもの発達」2「発達過程」(6)「おおむね4歳」、保育士試験合格指導講座 保育所保育指針、p37)

日本語で考えるの？頭も日本語？

Y：中心に韓国語を位置付けたのが大事な要素みたいなんです。〇〇君には。

E：韓国語と日本語。胸は韓国語、それ以外は日本語と言っていました。(2022.9.25 インタビューより、原文韓国語)

## 6.6 Fの家族の言語ポートレート

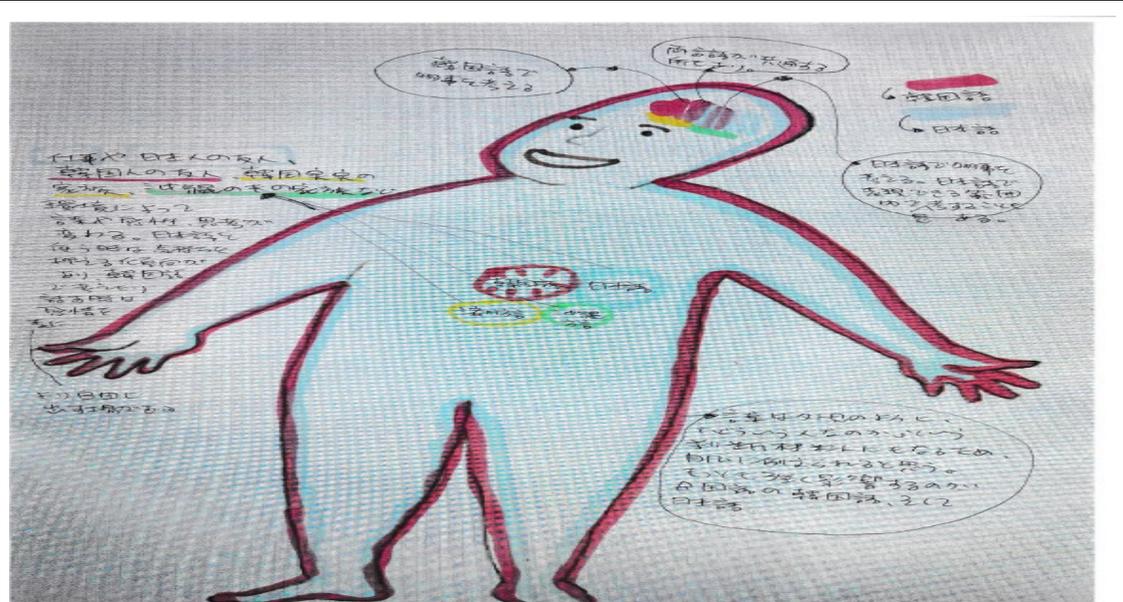


図 6-13 Fの言語ポートレート

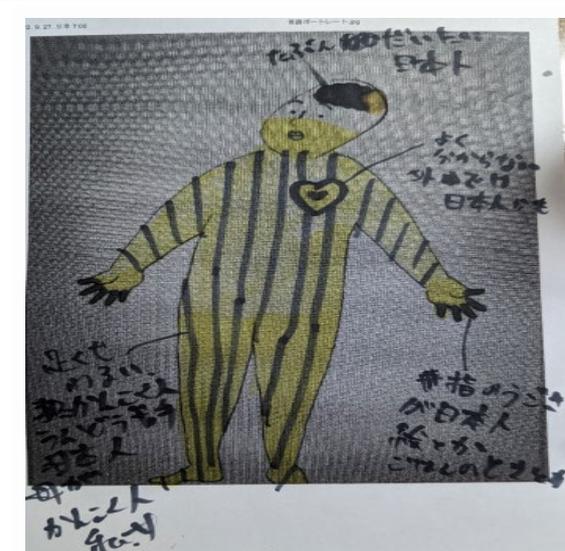


図 6-14 Fの長女の言語ポートレート

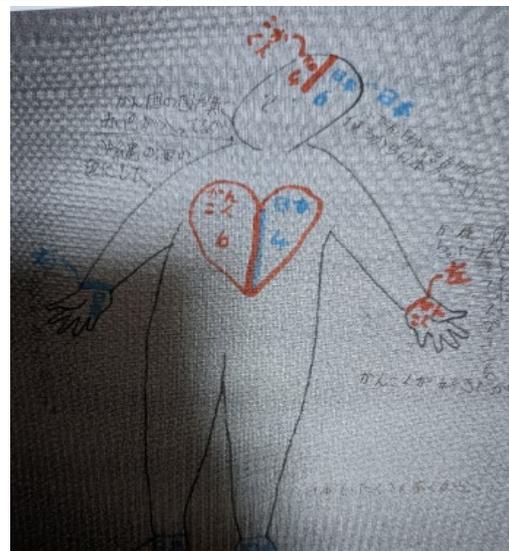


図 6-15 Fの次女の言語ポートレート

### 6.6.1 Fの言語ポートレート

Fは「ある時は日本語で考えることが楽な時もあり、ある時は韓国語で考える時が楽な時もあり、心の言語という思いのようだ」と語る。心で動いているけど、ある時には4つ(日本、韓国、出身地、住んでいる地域の心)があると語る。日本人の心、日本語を専攻しながら

ら(本土をしらないわけではないので)、○○(住んでいる地域)が日本ではあるが京都に住んでいた時、夫とも話していたのですが、京都が黒色で、韓国が白色、○○(住んでいる地域)が茶色と考えました。Fは住んでいる○○(住んでいる地域)が完全に100%日本と異なるわけでもないという。○○(住んでいる地域)文化が140年前から日本文化になり、日本語を使っていて日本人の制度が入って、本島の人も沢山入ってきているので、この間に○○(住んでいる地域)文化が20年前と比べると人の考えやスタイルが本土のようになったという。心は○○(住んでいる地域)の心があり、日本人の心もあり、韓国人の心もあり、私の生まれ育った済州道の心もあり、それで、4つの心があるんです。そして、中国語を少し習ったんです。英語も学校に通う時に少し習っていて(話すことには限りがあるけど)それも反映していると語る。英語は手先に位置している。心や思考に作用するのではないが、ある部分では機能できるので、言語というものは上半身と下半身に分けると上半身であるという。なぜなら、体を動かすのは上半身に作用するのだから、心と頭がなければ体を動かすことができない、中国語と英語が私の心を動かすほどではないので、手先に(中国語と英語を)足先で表すのは少し失礼だと思う。

#### 6.6.2 Fの長女の言語ポートレート

Fの長女は「家で(家族と)喧嘩する際には韓国人、(学校の友達と)喧嘩する際には日本人である。黄色は韓国であり、黒色は日本である。黒色と対照的に黄色で描いたという。日本人は暗いイメージがあり、黒色で表現しています。ハートは心臓で」と語る。

頭で考えるのは「たぶんだいたい日本人」と、心は「よくわからない外では日本人かも」と書いた。両手の指先は「指の動きが日本人。絵とかご飯の時とか」と語る。足わるい(あまり走れない)、韓国人。運動苦手な日本人」で、母が韓国人は私(だけ)と書いた。Fの長女は外見からも日本人と韓国人の区別がつかないということで他者からみられている自分は日本人に見られる語る。Coffey(2015)によると、母語は自分の礎という意味合いで「足」と捉えられることも多い。

#### 6.6.3 Fの次女の言語ポートレート

Fの次女は小学校4年生で、韓国に滞在した期間も短い。Fの次女は自分が韓国人でありながらも日本人であると考えている。頭の部分は日本語で考えていて青色の比率が高いという。日本も韓国も好きなのでハートが大きい。Fが韓国人だと明かすと周りの人からは「すごい」という反応が返ってくるので韓国の比率が少し大きいと語る。足は日本で生活しているからである。Coffey(2015)によると、母語は自分の礎という意味合いで「足」と捉えられることも多い。右利きで右の手を青色で日本を表現している。

## 6.7 G家族の言語ポートレート

Gは中国で日本語を専攻し、卒業した。卒業後は英語の勉強のために友達がいるイギリスに渡るが、気候などの問題もあり、香港に戻る。香港では友達の家でホームステイをしながら2年間英語を勉強する。留学が終わって韓国に戻る。言語ポートレートからもわかるように体の身体所々に多言語が分布されている。Gの家族は豊かな多言語アイデンティティのように見える。

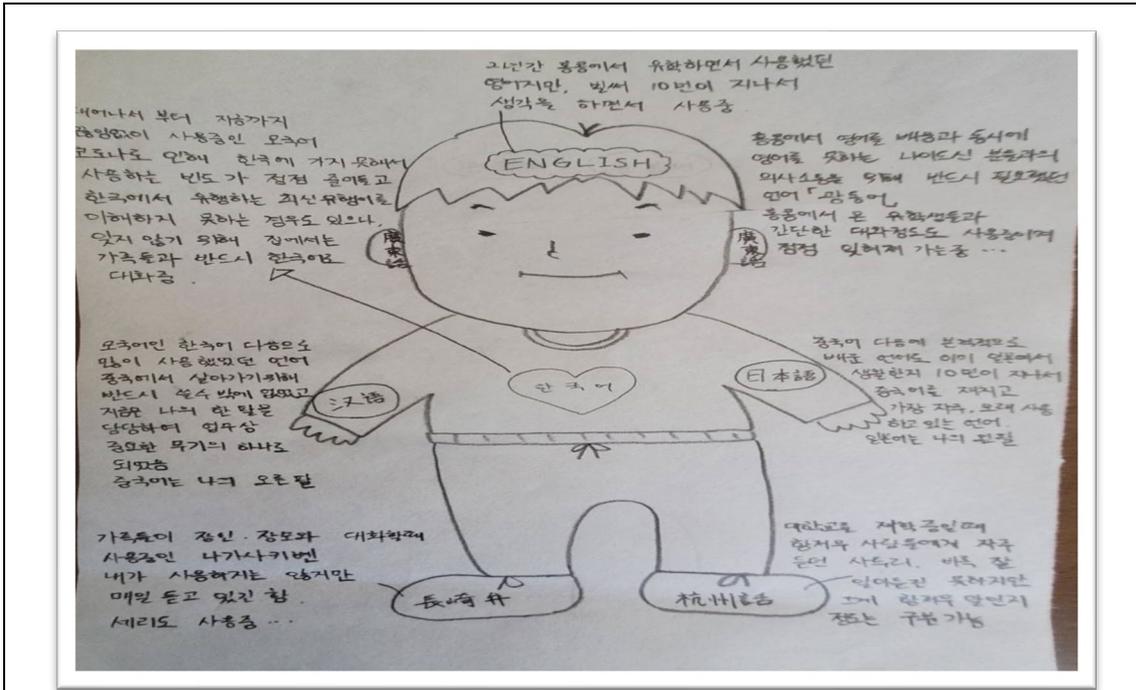


図 6-16 Gの言語ポートレート

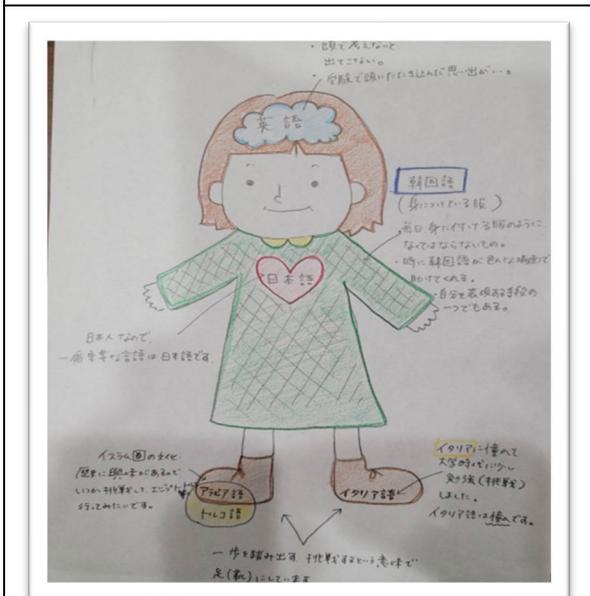


図 6-17 Gの妻の言語ポートレート



図 6-18 Gの子どもの言語ポートレート

### 6.7.1 Gの言語ポートレート

頭に英語を書いた理由は英語で話そうとすると一度、考えないといけないので母国語のようにすぐに出てこないの頭で書いた。Gは「広東語は両方の耳である。聞くのは(広東語を)沢山聞いていて、聞きすぎた」という。「2年間住みながら…香港で英語を習いに留学に行ったけど、事実私がアジア人であり、私から英語で話しかけない以上、その人達は広東語で話しかけるんじゃないですか。私が外国人であることを知らないの」と語る。(広東語は)聞くだけで上手なわけではない。広東語を聞いて物を買ったり食べ物を注文したりそのくらいで…わからないとメインは英語を使うのどと語る。

左側は日本語だが、よく使い長く使うが、しかし必要な言語で書いたと言う。日本語は私の左腕、右腕は中国語と記している。仕事上中国語を使っているという。最近使っていないが再び留学生が入ってきて中国語を使用している。

Gは地元の〇〇方言は話さないが、娘も保育園の時から〇〇弁を使っていると語る。Gの妻も〇〇方言を話して、姑、舅、妻の弟が〇〇弁で会話をするので…Gは〇〇方言を聞くという。Gは〇〇方言は使わずに標準語で家族と話している。杭州語は大学が杭州にあったので。(杭州にある)大学に通っていたから…しかし、杭州語はGはわからないという。中国はあまりも広くて方言が全然違うので通訳が必要だと言う。(杭州語は)わからないけど…当時は毎日聞いて、(意味はわからないけど)杭州語を話しているとわかっていたと語る。職場では上海語も聞こえているので大体意味はわかるという。足先にそのように言語が残っているという意味で書いたと語る。

割合で計算すると、韓国語 40%、日本語 20%、中国語 10%、英語 10%、〇〇方言 10%、杭州語 2.5%×2、広東語 2.5%×2の組み合わせになると語る。いろんな言語が使われているそんな環境で生活したGは言語ポートレートも豊かである。Gは「香港というところも本当に多国籍の人が住んでいてフランスの学生、トルコ、モンゴル、ベトナムの学生がいました。特に、(いろんな言語を)聞くのは(沢山)聞いた。タイの飲食店も多くてそういう所に行ったらサワディカー、学生達と交流もあるけど、話しは英語ですけどその国の言語が聞こえていた」と語る。

Gが勤務する職場では中国、韓国、日本、香港、台湾で使われている言語が聞こえてくる。聞く環境は日本語がほとんど80%、たまに韓国語が10%、残りが中国語5%、最近欧米の学生が来て英語を使うけどその前はほとんど使わなかった。そういうチャンスがなかったが、たまに、ネイティブの先生が来て話すので2%。最近フランス、アメリカ、ドイツの学生が来る。Gが使用する言語が今の職場で働く時にも聞こえてくる。Gは中国語可能者で最初は採用されたけど(中略)今は韓国語部分でも同僚と中国語部分は分担して仕事をしている。

Gが日本語を専攻し中国で留学をしていた頃、中国の様々な地域の言葉を聞いて留学生活を送っていた。中国での留学が終わると香港に英語を学びに移動する。香港では英語を学びに来る多国籍の人の言語が聞こえる環境で生活していた。Gは自分が習った言語を職場

で使用することで仕事での満足度も高かった。Gも母国語は心臓に描き、自らの核と捉えていると解釈される (Coffey、2015)。

### 6.7.2 Gの妻の言語ポートレート

英語は頭で考えないと出てこない。(英語は)受験で頭にたたき込んだ思い出があるという。Gの妻は「韓国語は身に着けている服のようだ。毎日、身に着ける服のようになくってはならないものと語る。時に韓国語が色んな場面で自分を助けてくれる。自分を表現する手段の一つでもある」と語る。韓国語が衣服のように必ず必要な存在であることを意味している。日本語は日本人なので一番重要な言語は日本語ですね。「一步を踏み出し挑戦するという意味で足(靴)にしています。アラビア語／トルコ語はイスラム国の文化、歴史に興味があるのでいつか挑戦して、エジプトとトルコに行ってみたいんです」と語る。Gの妻は大学時代に古考学を専攻していたため中東の歴史や文化や語学に興味がある。「イタリア語はイタリアに憧れて大学時代に少し勉強(挑戦)しました。イタリア語には憧れている」と語る。Gと同様にGの妻の言語に関する関心や経験は豊富である。多言語アイデンティティに見える。

### 6.7.3 Gの子どもの言語ポートレート

日本語で友達と話す時は楽しいし英語も好き、左は韓国語、日本語は心の中、英語は脳、頭に位置付けたという。小学校2年生であるGの娘は学校では日本語で授業を受けている。家庭内では主に韓国語を話している。中国語はGの留学時代の学習言語でもあり、職場でも使っている言語である。中国語はハートマーク、フランス語も少し習っている。アラビア語は右の足、話したらそこから出てくる。韓国語、日本語、英語が好きな理由は話す楽しいから。韓国語が楽しい理由はパパが本を読んでもくれる時、内緒話をする時便利だからという。韓国語は韓国にいる親族(祖父、祖母、叔母)と両親と話す。アラビア語、フランス語、英語、中国語の中で好きな言語は中国語と韓国語。韓国語は音楽の授業<sup>97</sup>で習ったことがある。音楽の時間に(韓国語の挨拶の言葉を)習って楽しかったと語る。Gの子どもは保育園の時から自分が韓国人だといい、父が韓国人であることを保育園の友達は知っていると語る。Gの娘は「友達から〇〇ちゃんは韓国人だねと言われると気持ちいい。ママとパパと韓国語で話す時は好き」だと語る。YouTubeで(いろいろな言語の)昆虫や食べ物などを聞くことが多いので言語ポートレートにも首にはフランス語、頭には英語、韓国語、心には中国語と日本語を描いていた。中国語と日本語は心の心臓の部分に描き自らの核となると言える。

---

<sup>97</sup> 小学生の音楽2、音楽でみんなとつながろう、p.7、メッセージ、杉本竜一(作詞、作曲)。教科書掲載曲一覧 令和2年度版(2020年度版)小学校音楽教科書のご紹介 (kyogei.co.jp) <https://textbook.kyogei.co.jp/2020shou/songlist.html> (2022.9.19 アクセス)

## 6.8 H 家族の言語ポートレート

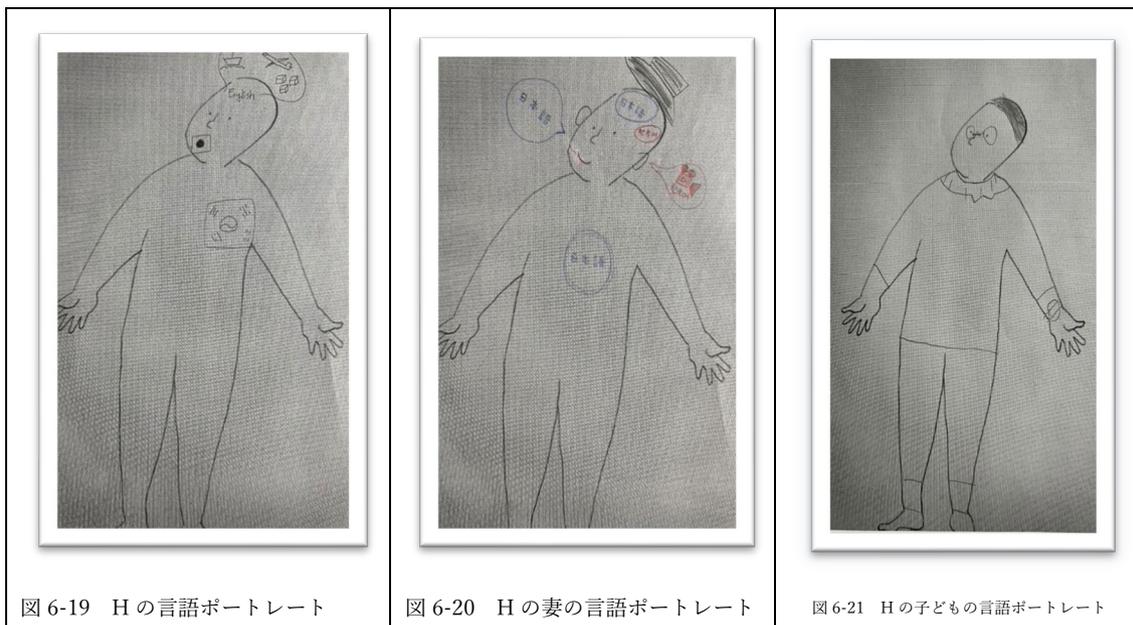


図 6-19 H の言語ポートレート

図 6-20 H の妻の言語ポートレート

図 6-21 H の子どもの言語ポートレート

### 6.8.1 H の言語ポートレート

H は、頭に船と飛行機と箱を描いていた。H は「一番、頭の中に入っているのは仕事の領域で言いますが、船とか自分がやっているのが通関手続きをさせて船から飛行機に飛ばして海外に送るということですが、すべての仕事が英語で行うことになっているのでその点で頭の中では仕事いっぱい描いた」と語る。H は外資系の会社で勤務し、仕事では英語を使っていると語る。英語は割合的には、週 5 回は仕事をしているので 2～3 割程度で、日本語と韓国語が 4 割を占めているという。また、10 年以上日本に居住して国籍変更(帰化)をするのではなく自分の韓国人のアイデンティティは忘れずに大人としての自覚を持って生活したいという。

H は「自分にとって生まれた国は韓国、死ぬまで韓国人として生きていくというのは変わらないと思います」と語る。外国人として定住している H は日本での仕事も順調で安定した生活をしている。

Y：テグッキ(태극기)が大きいのは私のアイデンティティは韓国ということですか？どうでしょう？

H：別になんか私は韓国人だという強い意識を持って毎日生きているわけではないので、ま、あう、結局私の日本に住んで 10 年何年間、もっと続けて暮らすことを考えると、ますます、なんかそういう溶け込んでしまって、なんか日本に住みながら実は自分が韓国からきた人というアイデンティティも薄れてしまうのではないかなと思いつつも、自分の母国のことはいつも忘れないように、忘れられないと思うんですが、意味として強い意識を持って生きるよりはそういう日本に住んでいる韓国人として生きている表現ですね。

H：そうですね。そういう意味で、私は両親もあえて日本にこれくらい住んでいるからこらからそろそろ日本人のように姓(日本名)を変えたりとかを考えてないのが、ま、日本に住むから日本人になるのではなく、どんどん、日本に住んでいるからこそ、自分の国は忘れていべきだという考え方は全然持っていないので、多分、生活を続けることとは別の問題と思っていて、いつも、自分の国は忘れないように意識しながら、やるべきことをちゃんとやって大人として生きていくというそういうつもりでいます。

Y：しかも、太極旗(テグッキ)を心臓の部分に、胸のあたりに描いているので、結構意味深いじゃないのかなと。

H: どうですかね。今は家族が自分の家族がまだ元気に韓国にいますけど私も家族も年取っていくといずれかそういう時はくると思うんですけど、そのあとはどうなるんだろうと思うんですけど。でも、自分にとって生まれた国はこれからも韓国人として死ぬまでには韓国人として生きていくというのは変わらないと思います。(2022.2.19 インタビューより、原文は日本語、下線は筆者)

## 6.8.2 Hの妻の言語ポートレート

帽子は、頭の中が日本語と韓国語で(自動的に)切り替えられる帽子でもあったらいいなと語る。頭の思考は韓国語と日本語が混ざっている。韓国の要素も含まれている。ふだんは国際結婚していることを忘れるくらい日本語中心の生活をしている。しかし、夫の日本語と韓国語を聞くと、自分が国際結婚していて、韓国語が根っこにあることを思い出す。頭の中から韓国語がなくなることはないで頭のところに描いた。耳には韓国のビデオマークが描かれている。最近、韓国ドラマを観ることが多くなり、韓国語も聞けて、好きだし、生活にも韓国的な要素があるということで(一応)映像を観ている。口は、口から出てくるのは韓国語で、何かを感じたり伝わるのは日本語だと思い、胸のところに描いた。韓国にいたら、心ももっと大きくなっただろう。日本語は80~90%を使っている。ドラマはヒアリングのためにも視聴している。Hの妻はスーパーで買い物していた時に韓国産と書いてあると、国産と韓国産は同一のものと考えて、書かれているハングル文字をみる時同じ空間に日本と韓国の要素が常にあるという。日韓スポーツ戦については日本を応援すると夫に悪い気がするとして、どちらも応援すると言う。韓国に留学経験があり、日韓国際結婚家庭を築いているHの妻は、日常生活では日本語を使っている。しかし、自分の中で韓国語がなくなるわけではないと語る。韓国ドラマを通して韓国語が聞ける環境作りをしている。買い物をする際は国産(日本)と韓国産と同様に考えている。

Y: はい、なるほどですね。頭の思考は韓国語と日本語が混ざっているんですか？

Hの妻: 混ざっているんですけど、ふだんは本当に国際結婚をしていることを忘れてしまうことを忘れるくらい日本語中心なんですけど、なんかやっぱりときどき○さんの日本語が韓国語があつてそういう時に、ああ、そうだ、そうだ、やっぱり、国際結婚しているし韓国語がやっぱり韓国語がそういう根源にあるんだなあという思い出したりとか、頭の中から韓国語がなくなるということはないなというのでここで書いてあったんですけど。

Y: 耳のところに韓国のビデオマークとは？

Hの妻: はい、最近、韓国ドラマを見るところが多くなってやっぱり、あのう、好きでみるし、韓国語も聞けるし、なので、生活もそうだなあと思って、一応映像を見ているよという感じですね。つけてみたんですけど。

Y: 口。

Hの妻: 口から出てくるのは韓国語だし、やっぱり、何か受け取った時に感じるというか伝わるのは日本語だなあと思って胸のところに描いたんですけど。

Hの妻: スーパーで買い物していた時に韓国産と書いてあれば、国産と韓国産は同一のものと考え方をしています、文字を見てもそうするかもしれません。(2022.2.19 インタビューより、原文日本語、下線は筆者)

## 6.8.3 Hの子どもの言語ポートレート

Hの子どもは韓国の祖父からの電話を遠ざけてはいるが、通話が終わるとどんな話をしたのか気にしていた。韓国語に関する内容は聞けなかったが、韓国というイメージは韓国

語を話す祖父であり、祖父の絵を描いた。家庭内での言語は日本語がメインではあるが、韓国からかかってくる電話を通して韓国語には触れている。H の子どもにとって韓国語は父親の言語であり、距離的には近いけど受話器から聞こえてくる言語であり、自分がしゃべられない言語であるため抵抗感があるように見える。

H：言語ポートレートについては説明したものの韓国には赤ちゃんの時に行ったことがすべてで、パパの国籍が韓国であることを意識しているわけでもない。  
 (この絵は) お祖父さんの絵だと。  
 Y：お祖父さんは韓国の人？  
 H：(韓国の) お祖父さん (Hの父親) のイメージ。(2022.9.30 SNS で返答)

## 6.9 I 家族の言語ポートレート

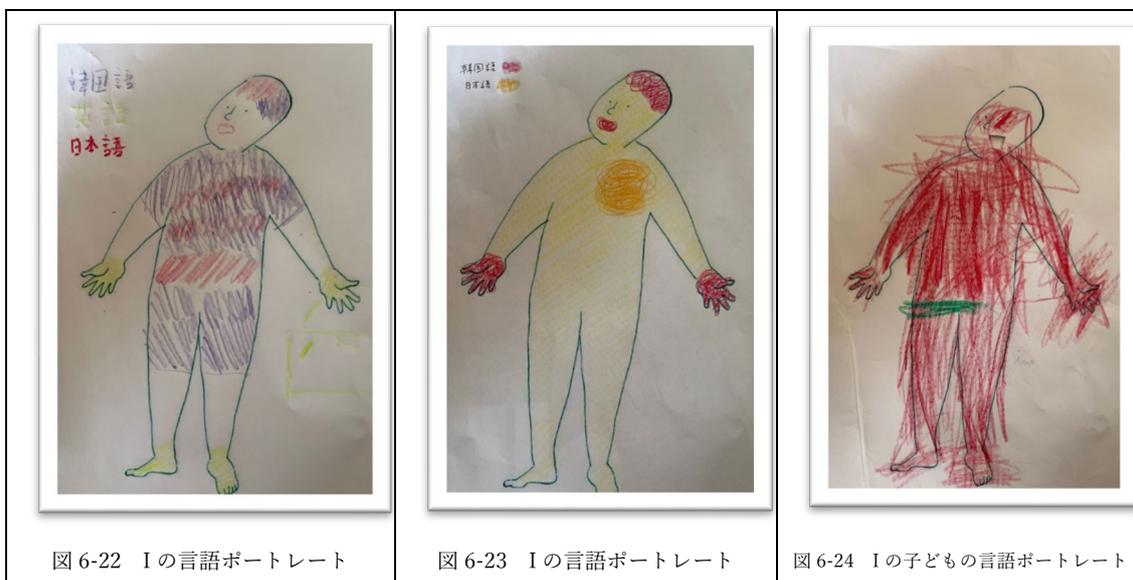


図 6-22 I の言語ポートレート

図 6-23 I の言語ポートレート

図 6-24 I の子どもの言語ポートレート

### 6.9.1 I の言語ポートレート

紫色は韓国語で、基本は母国語であるのでほとんど体部分を占めている。日本語は赤色で、生活の中では母国語よりは日本語を沢山使っているの、頭と T-shirt は半分ずつ描いたという。足の部分に「薄緑色は英語を表しましたが手と足、靴で表現したのは日常生活より業務上で沢山使っており絵のように表しました」と語り、仕事で使われている英語の重要性を感じ取る。

### 6.9.2 I の妻の言語ポートレート

母国語である日本語が基本であるため、体と心は日本語であり必要に応じて韓国語を使わないといけないので、手や頭、口を使わないと(韓国語を)使いこなせないの絵のように描いたという。I の妻は韓国で5年間在住して、夫の家族と韓国語で話し子どもの施設や公園などで必要に応じて韓国語を使っていた。

### 6.9.3 Iの子どもの言語ポートレート

4歳になる。Iの子どもは日本語と韓国語を色で塗ってみてと言ったら、絵のように描いた。日本語は赤色、韓国語は緑色で、赤は洋服で、緑色はベルトと言っていた。中心にベルト(緑色)をつけて描いている。まだ、成長の段階ではあるが韓国での家庭内では韓国語を使い生活していたため身に着けている洋服に赤色の日本語を描き、中心部である腰にベルトをつけて日本語で描いたのは興味深い。これからIの子どもは日本で住むことになるが成長段階により言語ポートレートは変わる可能性は高い。

### 6.10 J家族の言語ポートレート

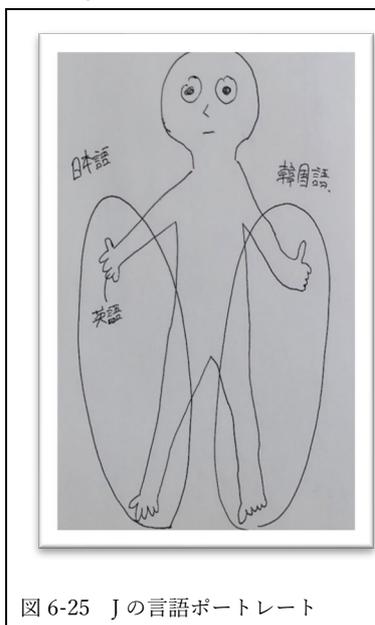


図 6-25 Jの言語ポートレート



図 6-26 Jの妻の言語ポートレート



図 6-27 Jの子どもの言語ポートレート

#### 6.10.1 Jの言語ポートレート

Jは言語ポートレートに深い意味はないと語る。右利きであるJは左側が日本語、右側が韓国語で半々占めているという。Jは「簡単に説明すると韓国語は右手、右足、日本語は左手、左足。ま、あとう普段生活するには左足も右足も普通歩いたり何か物を両手でつかんだりするにはあんまり負担はないんです。ただ、もうちょっと細かい作業するには左手と左足は上手く行かない時がある。右手右足は上手く行くので」と語る。

Y: 英語は指ですか？

J: 左手の薬指です。なかなか思い通り上手くない。必要あるかどうかよくわからないけど、なかったらダメ出し。そういう感覚の言語です。

Y: そしたら日本語、韓国語を%で表すとどれくらいですか？

J: 韓国語が60%日本語が37%なので、英語が3%

Y: なるほど。

J: 英語は今必要性を全然感じてないし、英語は(3%)です。

Y: お仕事では日本語がメインですね。(2022.2.20 インタビューより、原文日本語)

### 6.10.2 Jの妻の言語ポートレート

Jの妻は4つの言語を描いていた。頭は日本語ですべてを考えているという。心は常に英語を勉強したいと思っていて英語が好きだと語る。手には韓国語の本を持っていて勉強しないといけない気持ちを描いた。鞆にはタイ語を描いたが、引きずっている荷物であると説明し、専攻がタイ語であるが全然身に付かず、タイ語ができない自分の情けなさ、荷物として感じて引きずっているけど、いつか余裕ができれば学び直したいと語る。割合的に日本語は90%、英語は7%、残り3%は韓国語、タイ語は0.5%くらいであるという。韓国に居住していた頃は韓国語を今よりは話せていたが育児に追われている今はなかなか韓国語の勉強ができない状況であると語る。

Y：言語が4つ描いてありまして。日本語は頭なんですけど。

Jの妻：脳みそは日本語で考えていて全部日本語で。ハート心は常に英語を勉強したいなあと思っていて英語が好きだなあと手には韓国語の本を持って勉強しなくちゃという気持ちです。

Y：なるほど。鞆にはタイ語ですか？

Jの妻：引きずっている荷物です。

Jの妻：ゴミ袋ではないんです。荷物ですけど、あのう、大学の時にタイ語を専攻していたけど、全然あのう身に付いてないのであのうそのやっぱり学歴紹介の時にタイ語専攻してましたが常についてきますよね。全然タイ語が出来ない自分のその情けなさ、荷物的な感じで引きずっていますけれどそのうち余裕が出たらまたやり直したい。

(2022.2.20 インタビューより、原文日本語)

### 6.10.3 Jの子どもの言語ポートレート

Jの子どもは言語ポートレートを描いたものの、描かれた内容については説明してもらえなかった。(2022.9.30 SNS 返答)

## 6.11 Kの言語ポートレート

Kの仕事の忙しさにより、子どもと妻には言語ポートレートを描いてもらうことはできなかった。

### 6.11.1 K家族の言語ポートレート

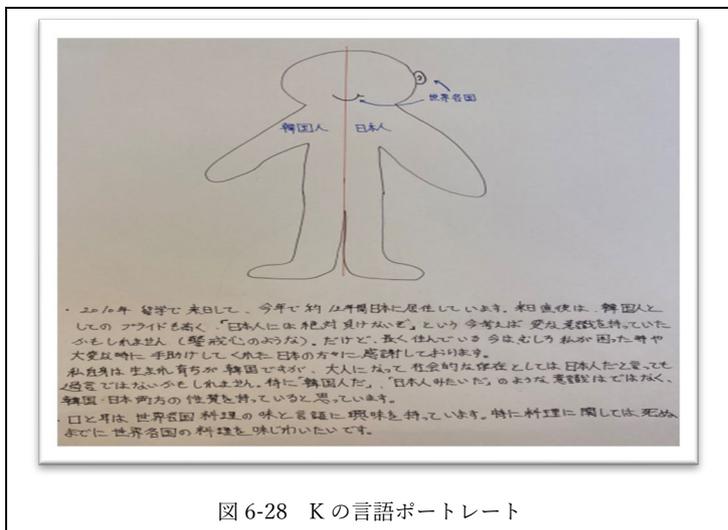


図 6-28 Kの言語ポートレート

Kは2010年留学で来日し、今年で約12年間日本に居住しているJは、来日直後は、韓国人としてのプライドも高く、「日本人には絶対負けないぞ」という変な警戒心があったという。しかし、長く住んでいてKが困った時や大変な時に手助けしてくれた日本の方々へ感謝を表現している。K自身は生まれ育ちが韓国であるが「大人になって社会的な存在としては日本人だと言っても過言ではないかもしれません」と語る。外見も日本人とほぼ変わらないKは日本の生活に溶け込んでいるともいえる。特に「韓国人だ」、「日本人みたいだ」のような意識ではなく、韓国・日本両方の性質をもっていると思っていると語る。日本のいいところを韓国のいいところ、吸収して生活している。「口と耳は世界各国の料理の味と言語に興味を持っています。特に料理に関しては死ぬまでに世界各国の料理を味わいたいです」と語る。

Y:韓国人と日本人という半々ですよ？

K:そうですね。そういうふうに描きました。

Y:私から見て韓国人が右ですか？日本が左？

K:これは別に意味を持っているわけではないが、身体的に単に思想的に韓国人、日本人が二つとも持っています。これを表現したかったので、単に心臓とか位置に関しては全く考えずに。

Y:そうですね。ここを見ると「韓国人のプライドが高い」という言葉が出てきますが、日本で生活するために韓国と日本二つとも持っているとして解釈していいですか？

K:そうです。

Y:料理が出てきましたが、口と耳が描いていますが、説明してくれますか？

K:そうですね。僕もYouTubeもみたりして各国の人達が…(中略)ある番組(韓国の番組)を見ていろんな考えと多様な言語が存在するんだと。なので各国の言語についても関心があります。(2022.2.26インタビューより、原文韓国語)

## 6.12 L 家族の言語ポートレート

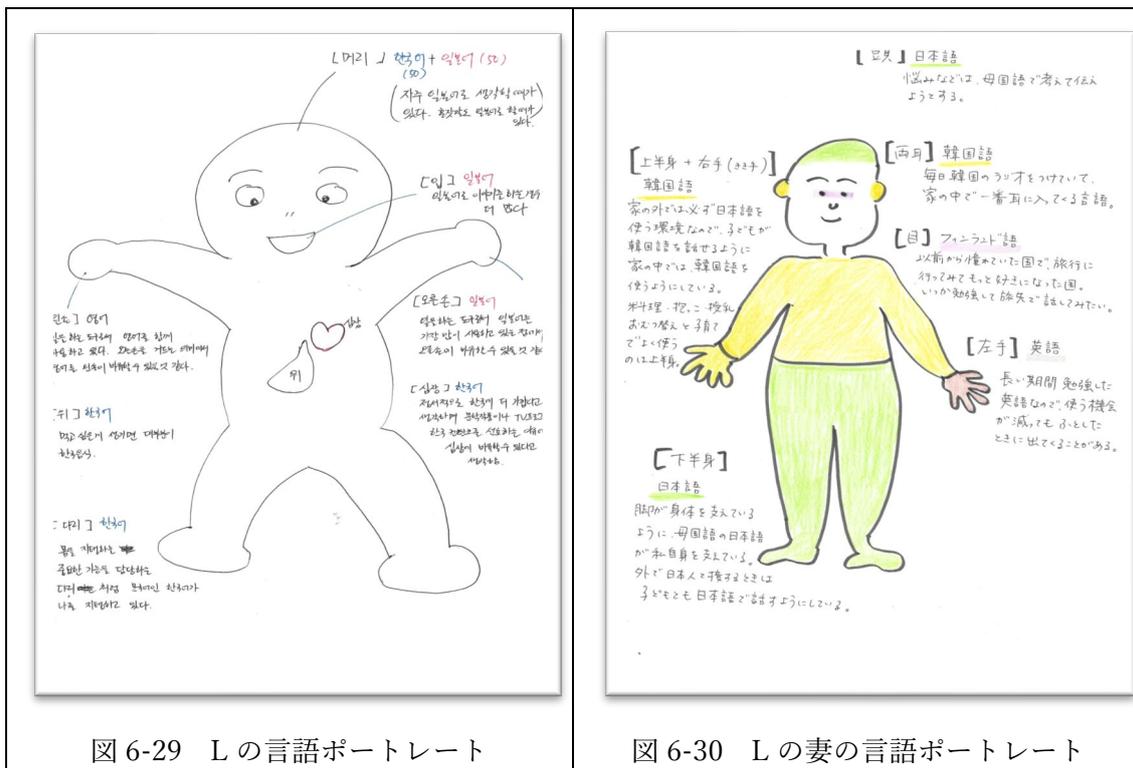


図 6-29 L の言語ポートレート

図 6-30 L の妻の言語ポートレート

### 6.12.1 L の言語ポートレート

頭は韓国語(50%)+日本語(50%)、よく日本語で考える時がある。独り言も日本語で話す場合がある。口は日本語で、日本語で話す場合が多いという。右手は日本語、仕事をする時の道具として日本語をよく使っている点で右手であるという。Lは「心臓は韓国語、情緒的に韓国に近いし、文学作品やTVプログラムや韓国のコンテンツを好む」ということで描いたという。脳や心臓に言語を描くのは自らの核と捉えていると解釈される(Coffey2015)。左手は英語、仕事をする上の道具として、英語を共に使っている。右の手を手伝うという意味で英語を左手に描いたという。Lは「胃袋は韓国語、食べたいものがあれば大半が韓国の食べ物である」と語っている。日常品をめぐる文化継承の中でも特に日々の食の味覚は幼少期の学びの中で最も強く長く記憶に残る、文化産物との関係の原型であるという(Bourdieu1984:79)。Lは「足は韓国語、体を支える大事な機能を担当する足のように、母国語である韓国語が私を支えてくれている」と言う。Coffey(2015)によると、母語は自分の礎という意味合いで「足」と捉えられることも多い。

### 6.12.2 L の妻の言語ポートレート

Lの妻は両耳に韓国語を描いている。家にテレビがなくてインターネットラジオをずっと朝からつけて、流して聞いているので耳には韓国語を描いている。目はフィンランド語である。新婚旅行がフィンランドだったことで英語も通じたが、人も親切で、町も綺麗で、とて

も印象に残っていたと語る。旅行中にフィンランド語も聞き取れたが、少し話せたらコミュニケーションの場も広がるのではないかと思っていて、今でもフィンランドのガイドブックを見たりして子どもが大きくなったら連れて行きたいと語る。Lの妻は右利きだが、英語は左手に書いていた。やはり、出てくる短いフレーズは英語であるという。Lの妻は「下半身は日本語で、自分を支える言語は母語の日本語である」という。Coffey(2015)によると、母語は自分の礎という意味合いがあり「足」と捉えられることも多い。一方、韓国語は上半身の右手で、子どもにも韓国語で話しかけているので、育児で一番使っている上半身に韓国語を描いている。Lの妻の中で育児言語として韓国語が占めている部分は大きい。それを日本語と分けることは難しいと言う。

Lの妻：私の体の中で一番動いて使っているところが上半身を右手で、あのう、家では韓国語を話せるようにしてるので、もう、うちは使っているのも韓国語、家では韓国語を使ってるので、子どもにやっぱり意識して韓国語で話していることもあるので、で、育児で一番使っている上半身の右手が韓国語だなという。

Y：割合的に日本語が何%？

Lの妻：難しいね。そうですね。まったく半々ではないんですね。やっぱり常に育児で悩んだりするので、すると日本語の頭の中で日本語の割合が多いです。でも毎日、結構体動かしてるので、韓国語の量も多いし、やっぱり難しいです。(Lの妻の言語ポートレートのインタビューより、原文日本語 2022.2.26)

### 6.13 考察

研究協力者の言語ポートレートを身体部位別に分けてアイデンティティとの関連性を分析すると以下になる。

#### 1) 「頭」

「頭」に言語と文化的要素を描いたのは A(日本と日本語)、Aの夫(日本+韓国)、Aの次女(日本と韓国)、B(日本と韓国区別がつかない、英語)、Bの子ども(日本)、C(韓国語)、D(日本)、Dの長女(日本)、E(韓国)、Eの夫とF(日本+韓国)、Fの長女(日本)、Fの次女(日本)、G(英語)、Gの妻(英語)、Gの子ども(英語)、H(英語)、Hの妻(日本語)、I(日本語)、Iの妻(日本語)、Jの妻(日本語)、K(日本+韓国)、L(日本語 50%+韓国語 50%)、Lの妻(日本語)である。

ほとんどの研究協力者が頭には母語を描いていたが、BとG家族とHだけは頭に英語を描いていた。Bは英語が専門で仕事上英語を使う機会がある。G家族は多言語アイデンティティを持つ家族であり、3人とも多様な言語に関心があり移動の経験も持っている。Hは仕事上、英語を使う機会が多いということで記している。「心臓・胴・頭」は核を表すため(Coffey, 2015)、言語アイデンティティの核とも言える。

#### 2) 「心臓/胸/心」

「心臓」に言語と文化的要素を描いたのは A(外側日本と内側韓国)、Aの長女(日本 50%と韓国 50%)、Aの次女(日本と韓国)、Aの夫(外側日本と内側韓国)、B(日本と韓国)、C(日本

と韓国)、D(日本 50%+韓国 50%)、D の長女(日本と韓国)、E(韓国語)、F(日本と韓国)、F の長女(日本)、F の次女(日本)、G(韓国語)、G の妻(日本語)、G の子ども(日本+中国)、H(韓国)、H の妻(日本語)、I(日本語)、I の妻(日本語)、J の妻(英語)、L(韓国語)である。

「心臓」に日本・韓国を描いた。脳や心臓に言語を描くのは自らの核と捉えていると解釈される(Coffey、2015)。しかも「心臓」に描くことを選んだのは、どちらのことばも情意的に捉えていることを表している。

Dの長女は「心のハートマークに紫色は日本と韓国の国旗で、青(色)と赤(色)がすごく特徴だと思っている。その色(青と赤)を混ぜると紫(色)になる。その時、心の中には日本のことも尊重しているし、韓国のことも尊重しているので、両方が混ざり合って、紫(色)になったという形」だと語る。また、真ん中に紫(色)の大きなハートマークを、その周りにいくつかの小さなハートマークも描いているが、これは赤がメインであり、周りの手足に合う色がついている」と語る。

Hは心臓に韓国の国旗を描いていた。Lは「心臓は韓国語、情緒的に韓国に近いし、文学作品やTV プログラムや韓国のコンテンツを好む」という。

### 3) 「口」

「口」には母語と学習した言語を描いた。A(日本 50%と韓国 50%)、A の長女 (日本語)、A の次女 (日本に韓国が包まれている)、B(英語と日本語)、D の長女(日本国旗+韓国国旗)、H(日本の国旗)、H の妻 (韓国語と日本語)、I の妻(韓国語)、K(日本と韓国)、L(日本語)である。特に、D の長女は口から出ている国旗は「私が話す事ができる言語を象徴し、身体の色は日本を象徴する赤で全て囲んでいる。外側の青い点線は、住んだことはないけれど、自分の一部である韓国を表している。たとえ、住んだことはなくとも、心は日本の赤と韓国の青が混ざって、紫になっていた」と語る。

### 4) 「手/腕」

A の長女は、右手は「慣れている手は日本にした。自分が生まれて育ったからこそ慣れている。しっかり書けるのは日本語」であると言う。左手は「どうしても言葉を完璧に話せず困ってしまうことがあるから」だとそう。

A の次女は、「両手は赤と青で混ざっていて日本でも韓国でも知り合いがたくさんいるから心強くやっていけそうだから半々」という。

D の長女は「手足を使って韓国のことについて学んだり触れたりしたので、真ん中は日本を脳みとみている。中身は日本だとしても実際に自分が触れたのは、韓国のこともあるよ。韓国を象徴している手足の四つの部分だけ青(色)を使っている。全部、足二つと手二つで4つである」と言う。

Eは「日本で生活しているので日本語は人生の道具として必要ですので手と足は日本語で塗った」と述べる。

F は「中国語を少し習ったんです。英語も学校に通っている時に少し習っていて」手先に描きました。

F の長女は、両手の指先は「指の動きが日本人。絵とかご飯の時とか」と語る。

F の次女は、右利きで右の手を青色で日本を表現している。

G は、日本語を左腕に描いていた。中国語は右腕に描いて職場で中国語をよく使っている。

H の妻は「何かを感じたり伝わるのは日本語だと思っている」と語る。

J は、韓国語は右手、日本語は左手に描いている。普段生活するのに、物を両手でつかんだりするには負担ではないと語る。ただし、「細かい作業をするには左手は上手く行かない時がある。右手は上手く行くので」と語る。

J の妻は手に「韓国語の本を持って勉強しなくちゃという気持ち」と語る。L の妻は右利きだが、英語は左手に描いていた。やはり「出てくる短いフレーズは英語である」と語る。韓国語は右手で「子どもに話しかけているので、育児で一番使っている上半身に韓国語を描いている」と語る。

## 5) 「足(脚)」

A の長女は、両足は「日本にいるから主に日本の色だけど、韓国もよく行くし、一人で行ったりもできるようになって、少しずつ韓国での行動範囲も広がってきているから青色も入れた。どちらも自分の足で歩ける。そんな気持ち」と言い、青と赤が混ざった色で長いソックスを履いているように描いた。A の次女は、両足は赤で塗っていて「韓国のことについては全然わからないから、自分の足でしっかり歩けるのは日本!」という。

D の長女は下半身に Korea と Japan と英語で書いて、日本を漢字で書いてハングルで 한국(韓国)と書いている。手はたどってくる心臓、心臓までたどってきて足を同じようにしようかと思ったんですけど、デザイン性といろんなことを考えて、あとう、韓国ハングル(한글)を实际使ってみたり、漢字を使うことによって、いろんな象徴的な表現ができると考えてデザインした」と語る。

F の長女は「足の悪い(あまり走れない)韓国人。運動が苦手な日本人」と述べる。自分の礎という意味合いで「足」と捉えられることがあるが、F の次女は足の悪い(あまり走れない)韓国人と語っている。G は杭州語と〇〇方言を足先に位置付、そのような言語が残っているという意味で書いたと語る。

G の妻は「一步を踏み出す挑戦をするという意味で」足(靴)にしているという。「アラビア語/トルコ語はイスラム国の文化、歴史に興味があるのでいつか挑戦して、エジプトとトルコに行ってみたいんです」と語る。G の妻は大学時代に古考学を専攻していたため中東の歴史や文化や語学に興味がある。「イタリア語はイタリアに憧れて大学時代に少し勉強(挑戦)しました。イタリア語には憧れている」と語る。

G の子どもは YouTube で好きなコンテンツをアラビア語で見ている。「アラビア語は右

の足で話したらそこから出てくる」と語る。

Iは「薄緑色は英語を表しましたが手と足に靴を持っている絵を描いた。Iは(英語は)日常生活に使うのではなく、仕事上使っていて描いたと語る。仕事で使われている英語の重要性を垣間見る。

Jは、韓国語は右足、日本語は左足に描いている。普段生活するには左足も右足も歩いたりするので、あまり負担ではないと語る。ただし、「細かい作業をするには左足は上手く行かない時がある。右足は上手く行くので」と語る。

Lは「足は韓国語、体を支える大事な機能を担当する足のように、母国語である韓国語が私を支えてくれている」という。

Coffey(2015)は、母語は自分の礎という意味合いで「足」と捉えられることも多いと述べている。

## 6)「耳」

Aの長女は「左耳は韓国に行った時やその他でも韓国語に触れる時、やはりどうしても言語が完璧にわからないことが多いから左側にした」と語る。Aの次女は右の耳(青色)と左耳(赤色)は「日本のことを聞く時は韓国だったらと思ったりその逆があったり…」と述べる。

Bの子どもは「英語が今一番話せるようにはなりたいので、ヘッドホンで英語を聞くことを表している」と語る。

Hの妻は耳のところに韓国のビデオマークを描いていた。「最近、韓国ドラマを観る(中略)好きで見ると、韓国語も聞けるし」と語る。

Lの妻は両耳に韓国語を描いている。家にテレビがなくインターネットラジオをずっと朝からつけていて、流して聞いているということで耳には韓国語を描いている。

## 7)「目」

Aは「目は日本(の価値観)と日本語で捉えている。韓国人でありながらも韓国を観る時に赤色の日本の眼鏡をかけて韓国をみている。さらに、自分にも厳しくすることにより自分の成長にもつながる。韓国人でありながら、赤い目でみているのは日本のマナーやサービス精神等、学ぶところが多いからという。

Lの妻は、目はフィンランド語であるという。新婚旅行がフィンランドだったことで英語も通じたが、人も親切で、町も綺麗で、とても印象に残っていたと語る。

## 8)「胃」

Aの長女は「日本の食べ物も韓国の食べ物も大好き」という。家庭内での食文化が韓国であることがわかる。Bは「胃袋の色は、中は青色。基本は韓国人なので、その上に日本が積み重なって蓄積されていく。日本の食べ物も文化も価値観も全部蓄積されていく」と述べる。Bの子どもは「食事は日韓両方よく食べており、大好きなので、お腹の中は混ざっている」

と語る。Lは「胃袋は韓国語、食べたいものがあれば大半が韓国の食べ物である」と語っている。日常品をめぐる文化継承の中でも特に日々の食の味覚は幼少期の学びの中で最も強く長く記憶に残る、文化産物との関係の原型であるという(Bourdieu1984:79)。

### 9) その他 (服/ベルト)

Dの次女は「私は韓国と日本のハーフで、日本と韓国っていうことだったので、絵を描いた時も服で表しました。体に日本と韓国の伝統衣装を半々になっている衣装を着ている人を描いている。

Gの妻は「韓国語は身に着けている服のようだ。毎日、身に着ける服のようになくはないもの」と語る。「時によって韓国語が色んな場面で助けてくれる。自分を表現する手段の一つでもある」とも語る。韓国語が衣服のように必ず必要なものとして捉えられている。

Iの子どもは日本語が赤色で、赤は洋服を示すという。また、中心にはベルト(緑色)をつけて描いている。

## 第7章 結論と今後の課題

本研究では、ライフストーリーインタビューと言語ポートレート調査法を採用し、日韓国際結婚家庭 12 組の A～L 家庭（表 3-6 研究協力者のプロフィール参照）の実態に基づき、親子のアイデンティティと言語について考察した。本章では、研究結果を具体的に論じ、今後の課題について述べることとする。

本研究で実施したライフストーリーインタビューと言語ポートレートの結果から、具体的には以下の 4 つの研究課題を設定した。

### 7.1 日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成要因

本研究の研究課題 1) として、日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティはどのように形成されるのかを設定した。まず、日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティ形成に対する結果と考察をまとめる。

#### 1) 日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティの形成要因

子どものアイデンティティ形成には第 5 章で述べたように、各家庭により日韓国際結婚家庭を取り巻く環境も異なるため、子どもによってアイデンティティ形成には様々な要因がある。子どもたちのアイデンティティ形成に影響を与える諸要因は、エスニック文化あるいは日本文化といった二項対立の構造では捉えきれないため、アイデンティティを多元的、多重的なものとして捉える必要がある。

研究協力者である日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティ形成過程要因には、家庭内の継承語教育、韓国の文化(食文化を含む)、大学での第 2 言語としての韓国語の学び、留学の経験、学校の友達、学校教育(カリキュラム)、韓流ブーム、SNS、名付け、国籍(二重国籍)、韓国の親族訪問、親の教育観、いじめの問題などを挙げることができる。各家庭により、子どものアイデンティティ形成には相違が見受けられる。

#### (1) 母語(継承語)教育

A と B は、子どもには、居住地の言語である日本語をきちんと身につけてほしいと考えている。特に事例 A、事例 B は日本語習得の重要性を強調している。言語以外の韓国の文化的な面と儒教的な思想で子どもを養育した。

C は育児言語として韓国語を教えることは姑からも反対され、やめざるを得なかった。母語教育をさせることは出来なかったが、C の子どもは大学生になり、二人とも第二外国語として韓国語を学び、卒業旅行として韓国を訪れる。韓国語を学び、韓国人である母(C)との旅行は印象深かったようで、再び韓国へ行きたいと語ったという。C の子どもは大学で習った韓国語を家でも話している。

D の長女と次女の場合は、幼稚園に入る前は韓国語も家庭内では使っていた。しかし、幼稚園に行き出し、完全に日本語のみになってしまった。日本人である D が結婚を機に韓国語

を学び、土曜ハングル学校の課題を小学校低学年までは面倒をみていた。在日韓国人の父親は、小学校高学年までは課題の面倒を見ていた。映画やドラマや K-pop を聞く時には問題はない。

E の家族は家庭内で韓国語を使う。家庭内で E の夫が子どもに韓国語で話しかけると E の子どもは韓国語で話して頂戴という。外でも E と子どもと話す時には日本語より韓国語の方が多い。また、韓国にいる E の親と毎日映像通話で韓国語を聞かされ話している。

F の家族は、家庭内では日本語と韓国語を混合して使っている。F は一番目の子(中学 1 年生)は 30%、二番目の子(小学校 3 年生)は 20%程度の韓国語を理解していると語る。F は子どもたちが、韓国語ができないと悲しいと思っていて、小学校に入る前まで韓国の子ども園に入所させ、韓国語の継承のために力を注いでいた。また、F の夫も韓国語能力検定試験やハングル検定試験等を子どもたちが受けるように促し、語学の資格も取っている。

G の子どもは家庭内では韓国語で話し、韓国にいる G の親族とは韓国語で映像通話をしている。また、G の妻が家庭内で韓国の食べ物をよく作り、G の子どもは辛い韓国の食べ物も母親の影響を受けてよく食べている。

H の家族は、H も H の妻も日本・カナダと韓国に留学の経験がある。二人は、子どもが生まれる前には H は韓国語を、H の妻は日本語を話すことで子どもは両言語が発達するだろうと思っていた。しかし、H は家庭内では日本語を使っている。H の妻は韓国で国文国語科を専攻して韓国語が話せるが、母語ではないので自分が教えることではないと思っていたと語る。

I の家族は、家庭内で日本語を使用しているのは「日本語を使うのが楽」だからという。一方、I の両親は I の子どもには韓国語で話しかけているので、ある程度韓国語は理解している。

J 家族は、J が日本に留学の経験があり、J の妻はニュージーランドに留学の経験とカナダでワーキングホリデーを通して異文化を体験している。J 家族の家庭内での言語は日本語のみである。また、韓国で生活した時には J の両親から韓国語のインプットもあり、家庭内では韓国語を使い、理解していた。ところが、日本に戻り家庭内では日本語のみになると、J が 4 歳の子どもに韓国の絵本や動画などを見せようとする「わかりにくいから日本語がいい」という。J は自分の母語である韓国語を子どもに話しかけることで、子どもとの距離感が生じてしまうのではないかと心配していた。一方、J の妻は J が韓国語で子どもに話しかけてほしいと語る。しかし、J の方針は家庭内では子どもとは家族共通語として日本語を話すことだという。

K 家族は、家庭内では 90%以上は日本語を使用している。しかし、新型コロナウイルス(COVID-19)の流行前には 3 ヶ月ごとに韓国を訪問して韓国の家族と交流を行っていた。K は一番目の子どもの 1 歳祝いは韓国で行った。親族を招待し祝ってもらい、伝統衣装を着用し、記念写真も撮影した。K 家族は子どもに継承語教育は行ってないが、精神的な面や文化的な面を通して、子どものアイデンティティを維持しようとしている。

L 家族は、家庭内ではできるだけ意識して、子どもに韓国語で話しかけている。家庭内で

は、韓国のラジオを午前中ずっとつけている。韓国のラジオをつけるのは、子どもの教育方針とともいえる。1歳5か月（インタビュー当時）の子どもは、単語は韓国語で発していて、育児にかかわる言葉（おむつ替えようか、ご飯たべようか等）も理解している。

以上のように、継承語教育のために家庭内で韓国語使用、土曜ハングル学校に通わせている家族はE、D、G、F、Lである。A、Cはこどもが成人しているが、大学の第2言語として韓国語を選び、家では韓国の文化に触れる環境であった。BはBの子どもが大学生になり、韓国に留学をし、現在は日韓文化交流史を研究する研究者でもある。H、I、J、Kは家庭内では日本語を話しているが、韓国の文化的な要素は多いと言える。

## （2）子どもの国籍と名付け

名付けの方法には、日本式（A、B、C（1番目の子ども）、E、I、K）、および日本と韓国でも両方使える（C（2番目の子ども）D、F、G、H、J、L）方式がある。A、B、Cの子どもは、日本国籍で名前もCの次男を除いて日本式である。E、Iの子どもは、二重国籍で名前は日本式のみである。Iの子どもの名前は、日本の漢字を訓読みにして名付けているが、韓国式に変えた場合は日本式の名前に変えることができない。しかし、韓国でも使える名前である。F、G、H、J、Lの子どもは、二重国籍で名前も日本でも韓国でも使える名前である。Kの子どもは、二重国籍で日本でも韓国でも使える漢字は使っているものの、日本では日本式の発音があり、韓国では韓国語の音読みでパスポートを作り、韓国の家族にも韓国名として呼ばれる。

以上のことから、日韓国際結婚家庭の子どもの国籍は、世代別にA、B、Cは日本国籍で名前も日本名のみになっている。E、F、G、H、I、J、K、Lの子どもは、二重国籍で日本では日本人親の姓を付けている。また、韓国でも日本でも使える名前を付けている。Dの子どもは、ファミリーネームとして在日3世の父親の姓をつけている。名前は、日本でも韓国でも使える漢字を選び名前を付けている。特徴としては、Dを除いて日本では韓国人の親の姓をつけていないということである。それについてKは「韓国の名字を名付けていることでいじめなどのことを排除するため日本人の親の姓にした」と語る。

## （3）いじめの問題

Aの長女と次女は、いじめを受けたことがある。Aの長女は親に心配かけたくなくて何も言わなかった。Aの次女は2回もいじめられたことがあり、学校の先生から謝罪があった。Bの子どもはいじめを受けてはいないが、クラスメートからのからかいがあった。地元で日韓国際交流文化(NPO単体の代表)として名知られていたBは子どもの担任と相談をし、小学校で国際交流の場を開くことになる。その後からかいはなくなったという。Cは長男も次男もいじめはなかったという。Eは4歳の子ども、Fは中学1年生と小学校3年生、Gは小学校2年生、Hは年長(5歳)、Iは3歳の子ども、Jは3歳と6か月（インタビュー当時）、Kは小学校1年生と年少（3歳）、Lは1歳5か月（インタビュー当時）の子育てをしている最中である。E～Lはまだ子どもが幼いということもあり、からかいやいじめなどは受け

たことはない。しかし、Dを除いて子どもには日本人配偶者の姓を付けている。

Kはインタビューの時に、子どもの名付けについて詳しく教えてくれた。子どもの姓を妻の日本姓に、名前も漢字を日本読みにして表記し、使用している。その理由として、韓国名にした場合、いじめ等を受ける可能性があるのをそれを排除するためであると語る。

鈴木(2007)は、「特に異文化出身の親の志向性が、彼らの子どもの言語、文化、教育に対する考えと密接し、家庭の言語・文化や学校選択に影響を及ぼし、言語・文化の継承に大きく関与していることが推察される」と述べる。すなわち、親の文化的思考(出身国あるいは居住国)が子どもの言語・文化の習得に大いに影響することを示していると述べている。アイデンティティは多様で、同じ家庭で育っても兄弟姉妹間でアイデンティティの表現は異なる。カルタビアーノ(2014)は「言語選択・使用は個人の民族的帰属意識とアイデンティティの大切な表示」としながら、アイデンティティと言語発達を直接関係づけることに疑問を投げかける。「民族的なアイデンティティの保持は必ずしも家庭の言語の保持と使用に直結していない」という Pease-Alvarez(2003)の説とも一致する。

## 2) 日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティの形成要因

### (1) 国籍変更

A、Cは日本での生活のために、永住を覚悟して国籍を変更している。すなわち、鈴木(2012)は国際結婚者の国籍変更について、当事者がおかれている社会・文化環境の中で、「実生活上の快適さ」と「永住の覚悟」という両者の理由が複雑にからみあい、国籍変更に至ると述べている。しかし、国籍が変わったということで自分が日本人になったわけでもなく、自分は自分であり、誰より祖国への愛国心も強く、韓国と韓国語を教えるのに誇りをもっていた。つまり、三宅(2016)が日系ディアスポラと英国日本人会の調査で、英国籍をもちながら自らを日本人と感じており、その根拠が永住権保持者と異なる点が興味深いと指摘していることと通じている。

日本人と結婚している、B、E、F、G、H、J、K、Lは、国籍を変える必要性を感じなく、外国人として生活するのにも不便を感じていない。Iは子どもの教育と永住が目的で再び来日することになっている。Iは父親の影響もあり、日本で暮らしながら必要に応じて国籍を変えることも考えている。Dの夫は在日韓国人として国籍も韓国であり、子どもたちも二重国籍になっている。また、名前もファミリーネームとして韓国名を名づけている。

従って、国籍変更は研究協力者のアイデンティティ形成には影響を与えていないといえる。また、ジェンダー別から見ると、G、H、J、K、Lは日本で永住はするものの、国籍を変更する予定はないと語る。

### (2) 名乗り方

日本人男性と結婚している韓国人女性 A(妻)、C(妻)、E(妻)、F(妻)は、子どもの学校行事や生活の便利さのために日本名(Fは夫の姓)を名乗り、韓国語や英語を教える際には韓国

名を名乗り活動している。4人とも韓国と韓国語を教えることに誇りをもっているし、やりがいを感じている。自分のアイデンティティが韓国につながっていることに自分をもっと表現することができる」と語る。つまり、日本人姓を名乗ることによるアイデンティティ形成に影響はないといえる。

日本人女性と結婚している韓国人男性 D(夫)、G(夫)、H(夫)、I(夫)、J(夫)、K(夫)は、日本でも韓国でも韓国名を名乗っている。日本で仕事や生活する上に不便を感じなく、韓国名を名乗っている。

ジェンダー別でみると、女性の方が生活の便利さのために日本名と韓国名を混合に併用している。男性については、仕事でも生活でも韓国名を使用しているのをインタビューの内容から確認することができた。

### (3) 永住

A は結婚して間もない時期に子どもに異質感を抱かせたくないために、国籍を日本に変更している。一時的に新型コロナウイルス流行で、韓国に渡行ができなかった時期に自分の国籍が日本であるため、韓国へ行くのにも色んな手続きが必要で、大変な思いをしていた。しかし、最近韓国の家族に会ってきた A は、国籍の問題でいろいろあったが、自分はここに家族、子どもがいるので「ここ（日本）でしっかりと頑張らないとね」と語った。成人して社会人になっている子どもたちの成長を見守る日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティのゆらぎはあるものの、全体的に日本の生活に満足している。

A と B は、日本に留学の経験と仕事の経験がある。A と C は、自分の居場所(好きな場所)は日本にあると言い、仕事や子どもの世話や墓などのこともあり、ずっと日本に住み続けると語る。鈴木(2009, 2012)は、成人女性の「居場所」については、「実際の居場所」と「精神的な居場所」の両方があるか、少なくともどちらか一方の「居場所」があることが、精神的健康につながるという。しかし、永住をし、国籍を変更していても二人は韓国に対する愛国心や自分が韓国人であることを誇りに思い、韓国の文化と韓国語を教えている。

B は日韓文化交流の仕事に長く携わっていて、日本と韓国を知らせるためにも日本に住み続けると語る。

E は日本人配偶者ビザで滞在している。日本で生活する満足度も高い、子どもを育てながら静かに暮らしたいと語った。しかし、韓国にいる両親が病気になったら自分が世話をしないといけないと語る。

F は子どもの継承語教育のために、小学校入学の前に子どもを韓国に頻繁に連れていった。二つの文化の接触により、F の中に日本永住へのゆらぎがあった。しかし、F は長女が中学生になるにつれ子どもの教育のために、100%日本に永住しなければいけない気持ちが強くなったと語る。

G、H、I、J、K、L は、日本に永住する予定である。ある程度安定した職を得て、家庭を築いて日本で生活も落ち着いているから韓国に戻ることは考えていない。

G、H、K は日本で家を購入している。I は妻の家に暫く滞在中であり、就活中でもある

が(2023年1月現時点で就職が決まり働いている)、子どもの教育のため、永住の目的のために来日している。Lは家を購入するかしないかで悩んでいる時であり、将来はLの妻の地元か九州での生活も念頭に入れている(2023年1月時点で転職して九州で生活している)。

#### (4) 教育

A、B、Cは、子どもを高校生まで公立学校に通わせた。Aは子どもの教育に関してはAの夫がPTAの役員や会長等を務めて、学校と積極的に関わってきた。Aは韓国で私立学校の教育を受けていたため、子どもには習い事や塾などに行かせようとした。しかし、Aの夫の教育方針として子どもは公立に通わせ、塾等も自主的に勉強ができるようになってから通わせることであった。

Bは子どもが生まれる前から日韓文化交流のために励んでいた。Bの子どもが小学校高学年の時、韓国語より先に英語を勉強したいということを尊重して英語を先に学ばせる。Bの活動により、子どもの小学校に行って国際交流理解を深める体験学習も提供する。そういう親の姿を見て育ったBの子ども(ゆ：仮名)は、現在は日韓文化交流史を研究する研究者である。

Cは博士課程修了まで10年間勉学に励んだ。Cは子どもたちに特別な教育方針はなかったが、自らが学ぶ姿勢を子どもたちに示していた。子どもたちは成長して勉強する母の姿をみて刺激を受けていたと語る。また、大学に入ってから第二言語として韓国語を学び、卒業旅行ではCと韓国旅行を楽しむ。母の国である韓国の言語と文化を子どもたちも体験していることがわかる。

Dは教育方針として言葉だけでなく、小さい時からいろんな国籍の子ども、価値観や考え方があってそれを互いにリスペクトするという環境が子どもたちに最適だと考え、インターナショナルスクールに通わせている。また、土曜ハングル学校にも継承語教育のために通わせている。

E、F、G、H、I、J、K、Lは、小中高は公立学校に通わせ、本人が大学生や成人になった時に、韓国に留学や英語圏に留学などができればと語る。日韓国際結婚家庭の子どもであるから、インターナショナルスクールや韓国系の学校に通わせるのではなく、地域で育てていくのもよいと語る。Hは、インターナショナルスクールは学費が高い(年間学費が約200万円)ということもあり、公立学校に進学させることを考えている。

Gは中国(4年間)と香港(2年間)に留学の経験がある、Gの妻は韓国の姉妹大学で韓国語を学び、ワーキングホリデーを通して旅行会社に1年間務めた経験がある。Gの子どもは公立小学校に通っている。G夫婦は移動の経験を通して多言語に触れている。Gの妻は考古学を専門としていて韓国語以外にイタリア語を勉強し、いつかは中東アラブ圏に旅行を考えている。G夫婦の言語と文化の背景もあり、子どもは月に4回英語のレッスンを受けている。G、H、I、J、Kは子どもが大学生になったら韓国へ留学して韓国と韓国語を学んでほしいと語る。

以上のように、日韓国際結婚家庭の親の教育観による子どもの学校選択を考察した。親の

留学経験や移動の経験がすべて子育てに影響を与えることではないが、各家庭の親の教育方針により学校選択は決まることを結論として導き出せる。

研究協力者は全体的に日本の生活に満足度も高く、子どもの教育のため、老後（居場所）のためにも日本で永住をしている。

## 7.2 世代別による日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ

研究課題2)としては、世代別による日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成はどのように異なるのかについて設定した。日韓国際結婚家庭の親は、年齢別にみると60代(B)、50代(A、C、D)、40代(E、F、H)、30代(G、I、J、K、L)になる。親のアイデンティティ形成には国籍変更（帰化）、名乗り、永住の覚悟、仕事、生活満足度、子どもの教育、子どもの世話、老後等が挙げられる。

60代のBは来日して50年である。日本での仕事のキャリアも、長く経験も豊富であり両国の文化がバランスよく蓄積されている。Bは国籍も名前も変更していない。日本と韓国の架け橋になり、日韓文化交流のために両国のことを積極的に知らせている。言語ポートレートから見えるBのアイデンティティは、日本と韓国が共存している。同和されるのではなく、互いを尊重し合い、自分の中に二つの言語と文化が互いに生きていることである。

Bは、日本と韓国で培ってきたアイデンティティは日本と韓国が共存するアイデンティティである。自分のアイデンティティはまだ未完成で現在形である。Bは二つの国を理解するために常に努力することであると述べている。

50代のAとCは、結婚して間もない時期に国籍を日本に変えている。子どもの学校関係や生活の便利さのためには日本名を名のっている。しかし、仕事関係ではビジネスネームを使い韓国名を名のっている。またAとCは、国籍と名付けが変わったということで、自分が変わるわけでもない。自分は〇〇(韓国名)であり、自分は韓国の文化や言葉を伝える伝道師でもあると述べる。Dは夫の姓である韓国姓を付けて生活しているため、周りの人からは在日韓国人なのか、在米韓国人なのかと聞かれるが、D家族のファミリーネームとして使っている。

40代はE、F、Hである。EとFは生活面では夫の日本姓を名乗り生活している。外国人の名前を記入した際に目立ってしまうことや煩わしいことを避けるためである。

30代のG、I、J、K、Lは日本で韓国名を名乗り、生活面でも仕事面でも自分の韓国アイデンティティを隠さず生活外国人として永住している。30代の日韓国際結婚家庭の親は生活満足度も高く仕事にもやりがいを感じている。

表 7-1 日韓国際結婚家庭の親の年齢

年齢	60代	50代	40代	30代	20代
母親	B	A、C、D	E、F、Hの妻	Iの妻、Jの妻、L	Kの妻
父親	—	Aの夫、Bの夫、Cの	G、Eの夫、Fの夫、	K、J、I、	—

		夫、Dの夫	Gの妻、H、Lの妻	
--	--	-------	-----------	--

表7-2 日韓国際結婚家庭の子どもの年齢

	30代	20代	10代	10歳以下
子ども (研究協力者 のみ記載)		Bの子ども(28歳)	Dの長女(15歳) Dの次女(13歳) Fの長女(13歳) Fの次女(10歳)	Eの子ども(4歳) Gの子ども(8歳)

以上のように、日韓国際結婚家庭の子どもの国籍は世代別にA(50代)、B(60台)、C(50代)は日本国籍で、名前も日本名のみになっている。E(40代)、F(40代)、G(40代)、H(40代)、I(30代)、J(30代)、K(30代)、L(30代)の子どもは二重国籍で、日本では日本人親の姓を付けていることを導き出せる。

### 7.3 ジェンダー(父が韓国人、母が日本人、父が日本人、母が韓国人)違いによる日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ

研究課題3)は、ジェンダー(父が韓国人、母が日本人、父が日本人、母が韓国人)別により、日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成にはどのような影響を及ぼすのかについて設定した。

表7-3 日韓国際結婚家庭の親のジェンダー別

	母親が韓国人	父親が日本人	父親が韓国人	母親が日本人
	A、B、C、E、F	Aの夫、Bの夫、Cの夫、Eの夫、Fの夫	Dの夫、G、H、I、J、K、L	D、Gの妻、Hの妻、Iの妻、Jの妻、Kの妻、Lの妻

母親が韓国人であるA、B、C、E、Fの中にE、Fは家庭内で韓国語を維持するために韓国語を使用している。A、Bは文化的な面で子どもに影響を与えている。例えば、韓国の食べ物や韓国の儒教的な思想である。Fは家庭内で韓国語を使う率は20~30%に留まっているが、子どもたちが小学校を入学する前には、韓国の幼稚園に入所させて言語と文化を学ばせるようにした。E、Lの妻は、子どもが休みに入ると韓国の幼稚園や小学校で体験学習ができればと語る。継承語教育のために韓国へ連れていきたいと語る。しかし、Lの妻は日本人母親であるが、韓国語の継承のために連れていきたいと語る。Dは日本人女性である。Dの夫は韓国で留学経験があり、韓国会社勤めの経験が長い。Dは在日韓国人と結婚を機に韓国語を学び、子ども達は小学生から土曜ハングル学校にも通わせて子どもの宿題も面倒みた。

子どもは母親との関わり、親子との親密性があるからこそ言語継承、文化継承につながる。

しかし、Eの家族はEの夫が韓国語を継承するために家庭内では韓国語を話している。Gの家族は、Gが韓国人で子どもに韓国語を継承するために韓国語を話しているし、第二言語として学んでいる英語レッスンに子どもの送り迎えをしている。

Dの夫は、子どもが小学校高学年に上がると土曜ハングル学校の宿題の面倒をみた。周りの友達も土曜ハングル学校をやめていたものの、Dの子どもはやめなかった。その理由としてDの「継続することで力になる」という教育価値観が働いていた。

子どもは成長過程であり、アイデンティティ形成には親の価値観や考え方は深く関わってくると考える。しかし、今の段階で母親と関わりで言語と文化継承がつながると断言できない。これから、縦断的な調査が必要であるだろう。

#### 7.4 留学や移動の経験による日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ

研究課題4)は、留学や移動の経験がある日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成はどのように影響をもたらすかについて設定した。

表 7-4 日韓国際結婚家庭の親子の移動の経験

留学 /移動の経験	夫婦両方が留学経験あり	夫婦片方が留学経験あり	親と子どもが留学の経験があり	移動する家族 (韓国で居住)
	E、F、G、H、I、J、 Jの妻(留学、WH)、L	A、C、Dの夫、K	BとBの子ども	I家族、J家族

① E、F、G、H、I、J、Lの日韓国際結婚家庭は、親の両方留学経験がある。②A、C、D、K、Lは親のどちらかが留学や移動を経験している。③は親も子どもも留学や移動の経験がある。④は日本で留学経験と英語圏で留学の経験がある家庭で、I家族とJ家族は韓国で居住したことがある。

① E、F、G、H、I、J、Lの日韓国際結婚家庭は、親同士が留学の経験がある。留学の経験がある日韓国際結婚家庭の親は子どもへの継承語教育、子どもの名付け、国籍、教育にはどのような影響を及ぼすのか。Eの家族は、家庭内では韓国語を家族同士で話している。Eの子ども自身も日本人であるEの夫が日本語で話しかけると「한국말로 말해! (韓国語で話して頂戴)」という。GとGの妻は留学経験があり、言語ポートレート(図6-16、図6-17、図6-18参照)には、身体部位別に各言語が描かれていて、多言語アイデンティティであることがわかる。Gの中国と香港での留学経験と、Gの妻の韓国での留学経験とワーキングホリデーを通しての仕事の経験は、子どもにも影響を与えている。Gの家族は、家庭内では韓国語を話している。Gの子どもは月4回の英語レッスンを受け、YouTubeでは昆虫や食べ物の映像を韓国語、中国語、フランス語、アラビア語で見ている。また、Gの子どもは学校でも自分のアイデンティティが韓国人であることを表している。Fは自分の留学と国際交流員を通して多国籍の人と交流をし、視野が広がったため子どもにも外国人との交流する機会を与えたいと語る。また、子どもが成長し、

韓国へ留学することにより、自分のアイデンティティ形成につながると考えられる。なお、子どもが韓国留学を通して、母である私 (F) のことを理解してくれ、韓国語が話す機会も増えるだろうと語っていた (2022.10.10 SNS 返答)。

- ② A、C、Dの夫、K、Lの日韓国際結婚家庭の親のどちらかが留学の経験がある。Aは留学の経験はあるが、子どもには韓国留学を進めなかった。国家試験を控えていることもに6ヶ月、1年間の韓国留学は時間のロスだと言い反対していた。地元でしっかりと安定した職を得て活躍してほしいと語った。Dの夫は在日韓国人で留学の経験がある。また、韓国系の会社でも勤務したことがある。子どもには、積極的に言語と文化を学べるように関わっている。Kは日本で留学経験があり、転職も何回か経験し日本で仕事を続けているが、子どもには韓国系の韓国や土曜ハングル学校などには念頭には入れず、子どもが大学生になったら、本人が生きたいなら行かせると語る。
- ③ Bも留学経験があり、Bの子どもも韓国で留学の経験がある。言語ポートレートにも描かれているように、Bは日本と韓国が共存している。細胞一つ一つが日本と韓国であるから分けることは難しいと述べていた。Bの子どもは体全体が韓国的な要素に包まれていると語り、食事は日本と韓国が混ざっていると語る。
- ④ 移動する家族のIとJの家族は、日本と韓国を移動していた家族である。I家族は韓国で5年間住み、2022年1月に来日した。J家族は2019年4月韓国に移住をし、2020年10月から日本に居住している。Iの家族はIの妻も韓国語を専攻して韓国語が話せる環境ではあるが、Iが留学していた頃からずっと日本語でコミュニケーションをとっていたため、家庭内では日本語のみになっている。しかし、Iの子どもはIの韓国人の両親との会話は理解していた。なお、文化的な韓国の要素はIの家族にはある。Jの家族は、Jの妻には韓国語があまり話せなく、韓国で生活していた頃、言語の壁があり、育児には苦勞をしていた。日本に再び戻っていたのも育児のためである。Jの子どもは、Jの両親の韓国語を聞いて理解はしていたものの、日本に移動をしていたため言語ポートレートにも描いているが(図6-27)、年齢(4歳)のこともあり、人は描いたが言語的な文化的なことは語れなかった。I家族は韓国から日本へ移動を、J家族は日本から韓国へ、韓国から日本への移動があった。Jの妻は言語ポートレート(図6-26)にも描いたように、手に韓国語の本を持っていて韓国語は勉強しないといけない言語として位置づけていた。

表7-4のように、留学の経験やワーキングホリデーの経験があっても、子どもへの言語と文化的アイデンティティ継承は各家庭の状況と親の価値観や教育観によって異なってくる。鈴木(2012)が述べるように、時間の経過とともに、「居住地の社会的・文化的・経済的状況」、「親自身の志向性」、「言語、文化、教育についての親の考え方」、「家庭の経済状態」なども変化し、それらは言語・文化を含む子どもの発達全般に影響を及ぼす。

## 7.5 結論

本研究では、ライフストーリー・インタビュー調査と言語ポートレートを通して日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティと言語の関係を解明することにより、アイデンティティの形成要因について検討した。その結果は、具体的に以下の8つにまとめられる。

1. 日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティは、韓流ブームや韓国文化や韓国語を積極的に取り組むことにより強まる傾向にある。
2. 国籍変更は、日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティに影響を及ぼさない。
3. 永住による日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティは、二つの文化と言語が共存（尊敬）し合っているアイデンティティである。
4. ジェンダー別による日韓国際結婚家庭の親の名乗りは、父親が韓国人の場合韓国名を使用し、母親の韓国人の場合は生活の利便性のため夫の日本姓を名乗る傾向がある。
5. 日韓国際結婚家庭の子どもの名前は、両国でも使えそうな名前を採用し、国籍も二重国籍にしている。
6. 日韓国際結婚家庭の親が留学と移動の経験があっても、子どもへの言語と文化的アイデンティティ継承は、各家庭の状況や親の価値観、教育観などによって異なる。
7. 日韓国際結婚家庭の子どもの学校選択は、親の留学や移動の経験によるものではなく、各家庭の状況と親の教育観によって異なる。
8. 研究協力者の言語ポートレートを身体部位別に分けてアイデンティティとの関連性を分析すると、頭と心臓（胸、心）に韓国語と日本語を描き自分の核（中心）であることを示した。さらに、腕と手で日本語（母語ではない生活言語）を人生の道具として位置づけていた。尚、足（脚）に自分の母語（日本語や韓国語）を描くことは研究協力者の礎という意味合いで捉われる。

結論としては、日韓国際結婚家庭の親のアイデンティティは二つの言語と文化が共存・尊重しているアイデンティティ、つまり「共存アイデンティティ」といえる。また、日韓国際結婚家庭のこどものアイデンティティは、幼少期に継承語教育（韓国語）が保持できなくても、家庭生活の中で飲食や韓国の行事など、言語以外の韓国文化によって影響・維持されることが示された。このことから、日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティには言語能力により形成されるだけでなく、言語能力以外の文化的要素によっても決定されていることが分かった。韓国文化、韓流ブームの影響などの文化的なものを通じて、日韓国際結婚家庭のアイデンティティが形成されていることがうかがえる。また、子どもは大学生になり、第二言語として韓国語を学ぶことにより継承語との距離感を縮めていることもうかがえる。まだ成長段階にある日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティは、親の価値観や教育観により学校選択や継承語教育にも影響を及ぼす。

## 7.5 今後の課題

本研究では、ライフストーリーインタビュー調査と言語ポートレート手法をもとに分析考察を行った。日韓国際結婚家庭の親子のアイデンティティ形成に関する質的な研究である。さらに、韓国をルーツとする個人のアイデンティティの可変性と多様性と多層性についての理解を深めるには、それぞれを長期にわたり追跡調査をすることが有効であろう。

多言語話者の言語意識とアイデンティティとの関係について考察した小泉(2011)は、言語使用者が言語を介した出来事に対して持った多くの感情が混ざり合うことで生まれ、形成される「言語意識」は、自己のアイデンティティを形成し、再構築していくためには不可欠であることを指摘している。また、アイデンティティは全生涯を通して形成されると捉えられる。

本研究では、調査時点における研究協力者のアイデンティティ形成に関する調査と言語ポートレートを通して、インタビューではかたりきれなかったアイデンティティの部分を、彼らの全生涯の中の一部を垣間見たものであり、今後彼らが大学や社会に出て、新たな他者との出会い、社会的な変化の中で、彼らのアイデンティティは変化していくものとも考えられる。よって今後の追跡調査を通して、彼らのアイデンティティがどのように変容していくのか、またそれに影響を与える要因についての研究も必要であると考え。そして、このような日韓国際結婚家庭の親子に関する研究を積み重ね、国際結婚家庭の教育に役立つ資料を蓄積していく必要がある。

日韓国際結婚家庭のこども(D、E、F、G、H、I、J、K、L)のアイデンティティはまだ成長段階にある。本研究では、彼らのアイデンティティは固定化せず、流動的に捉え、様々な経験とモビリティを通して構築され、変化を続けるアイデンティティについて考察を行った。そして今後は、日韓国際結婚家庭の子どものアイデンティティを継続的に調査する必要性があると考え。

既に成人した子どももモビリティの経験により、アイデンティティは流動的に変わる要素が大いにあると考えため、継続的な研究が必要になってくる。

そして、本研究と他の(日本と韓国の国際結婚以外の)国際結婚をしたカップルや家族のアイデンティティ形成と比較検討することで、また違った傾向を見つけることができるかもしれない。

## 【参考文献】

- アーリ・ジョン (2015) 『モビリティーズー移動の社会学』(吉原直樹・伊藤嘉高訳) 作品社
- 稲垣みどり(2015)「「移動する女性」の「複言語育児」在アイルランドの在留邦人の母親達のライフストーリーより『リテラシーズ』(19)、pp.1-17.くろしお出版
- 稲垣みどり(2022)「現象学的日本語教育の可能性 アイルランドで複言語育児を実践する親たちの事例」、ココ出版
- 岩崎典子(2013)「留学前後の日本語学習者の日本観・日本語観：複文化復言語使用者として」比較日本学教育研究センター研究年報(9)、pp.175-182.
- 岩崎典子(2018)「「ハーフ」の学生の日本留学一言語ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリー」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば』pp.16-18.くろしお出版
- 岩崎典子(2020)「SLAにおける留学研究の変遷と展望—さまざまな留学環境とそれぞれの行為主体性(agency)」『第二言語としての日本語の習得研究』(23)、pp.102-123.
- 岩崎典子(2021)「言語ポートレートから見る多層アイデンティティ「アイデンティティ戦争」から複言語使用者へ」三宅和子・新井保裕(編)『モビリティとことばをめぐる挑戦』pp.245-267.ひつじ書房
- 岩崎典子(2022)「「留学」研究からことばの学習と使用を考える—移動を重ねるスロバキア出身 Denisa の言語レポート—」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば2』pp.97-126.くろしお出版
- 上野千鶴子(2005)『脱アイデンティティ論』勁草書房
- 内山絵理華(2017)「日系2世のアイデンティティ形成における言語の影響と役割—継承語教育の観点から子どもの心を解く」『コンタクト・ゾーン=Contact zone』9、pp.98-14 (<http://hdl.handle.net/2433/228317>)
- エリオット、A.&アーリ、J.(2016)『モバイル・ライブズー「移動」が社会を変える』(遠藤秀樹監訳)ミネルヴァ書房
- 王曉音(2020)「中国人高度人材の家族関係の維持とモビリティ：東京都における異文化間結婚の事例を通して」三田社会学 25、pp.49-63.
- 大野恵理(2022)『「外国人嫁」の国際社会学：「定住」概念を問い直す』有信堂
- 小野原(2004)「アイデンティティ試論—フィリピンの言語意識調査から—」小野原信善、大原始子(編)『ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』三元社
- 小沢一仁 (2003)「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」東京工業大学工学部紀要 (人文・社会編) 26、pp.64-75.
- 岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波新書
- 岡本裕子(1994)『成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究』風間書房
- 生越直樹(2006)「韓国に対するイメージ形成と韓国語学習」、『言語・情報・テキスト』13、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻(齊藤明美編(2012)に「第1部 第2章 日本における韓国に対するイメージ形成と韓国語教育」として再掲)
- 生越直樹(2019)「韓国語学習と韓国に対するイメージ形成の関係：日本の大学生学習者へのアンケート調査を通して見た現状と変化」『言語・情報・テキスト』26、pp.27-40. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
- 尹得霞 (2022)「母親のライフストーリーから捉えた子どもの多言語習得環境の構造—在日中国人家庭の言語教育観を中心に—」東北大学大学院教育学研究科研究年報 70 巻(2)、pp.137-154.
- 温又柔 (2015)『台湾生まれ日本語育ち』白水社
- 温又柔 (2020)『魯肉飯のさえざり』中央公論新社
- 郝洪芳 (2021)『越境する親密性—東アジアの紹介型国際結婚—グローバルな家族と越境する親密性』明石書店
- 郭笑蕾 (2019)「国際結婚女性のライフコースに関する考察：日中国際結婚した高学歴女性へのインタビューから」三田社会学 24、pp.66-82.
- 郭笑蕾 (2020)「国際結婚移住女性の主体性と生活戦略についての考察」三田社会学 25、pp.127-130.
- 嘉本伊都子 (2008)『国際結婚論！？ [歴史編]』法律文化社
- 嘉本伊都子 (2008)『国際結婚論！？ [現代編]』法律文化社
- 河井享 (2013)「E. H. Erikson のアイデンティティ理論と社会理論についての考察」京都大学大学院教育学部研究科紀要 59、pp.639-651.
- 川上郁雄 (2001)『越境する家族—在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店
- 川上郁雄 (2013)「ことばとアイデンティティ—複数言語環境で成長する子どもたちの生きを考える」宮崎幸江(編)『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざままで生きる』pp.117-144. 上智大学出版

- 川上郁雄 (2013) 『「移動する子ども」という記憶とカーことばとアイデンティティ』 くろしお出版
- 川上郁雄 (2014) 「あなたはライフストーリーで何を語るのか：日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」『リテラシーズ』14、pp.11-24.
- 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子 (編) (2018) 『移動とことば』 くろしお出版
- 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子 (編) (2022) 『移動とことば2』 くろしお出版
- 川村千鶴子 (2012a) 『3.11 後の多文化家族—未来を拓く人びと』 明石書店
- 韓景旭 (2001) 『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』 中国書店
- 金カヨン (2018) 「ナラティブ探求を通じた韓国語学習者のアイデンティティ研究」高麗大学 博士論文
- 窪田光男 (2005) シリーズ言語学と言語教育「第二言語習得とアイデンティティ—社会言語学的適切性習得のエスノグラフィー的ディスコース分析」ひつじ書房
- 倉田尚美 (2018) 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子 (編) 『移動とことば』 pp.39-62 くろしお出版
- 小林多寿子 (2005) 「ライフストーリーを書く・もちいる」桜井厚・小林多寿子 (編) 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』 pp.209-253.せりか書房
- 小林玲子 (1992) 「日独結婚における夫婦間の調整過程—ミュンヘンでの事例研究から—」お茶の水女子大大学院修士論文
- 桜井厚 (2002) 「ライフストーリーインタビューをはじめ」桜井厚・小林多寿子 (編) 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』 pp.11-61.せりか書房
- 坂田麗子 (2004) 「JSL 児童生徒のアイデンティティを考慮した指導—I 市にあるペルー人学校での日本語指導を通じて」『年少者日本語教育実践研究2』
- 賽漢卓娜 (2011) 『国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性』 勁草書房
- 賽漢卓娜 (2017) 『「ナショナルな標準家族」としての日本の国際結婚』比較家族史学会監修、平井晶子・床谷文雄・山田昌弘編著『家族研究の最前線2 出会いと結婚』 pp.71-101.日本経済評論社
- 坂本光代 (2014a) 「文化間移動と子どもの言語発達」宮崎幸江 (編) (2014) 『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざままで生きる』 pp.3-13.上智大学出版
- 坂本光代 (2014b) 「多文化共生の実現に向けて」宮崎幸江 (編) (2014) 『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざままで生きる』 pp.149-164.上智大学出版
- 坂本光代・宮崎幸江 (2014) 「日本に住む多文化家庭のバイリンガリズム」宮崎幸江 (編) (2014) 『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざままで生きる』 pp.17-46.上智大学出版
- 佐々木てる (2006) 『日本の国籍制度とコリア系日本人』 明石書店
- 志水宏吉・清水睦美 (2001) 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤を巡って』 明石書店
- 芝野淳一 (2022) 『「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー—新二世のライフコースと日本をめぐる経験』 ナカニシヤ出版
- 鈴木一代 (2004) 「国際児の文化的アイデンティティ形成をめぐる研究の課題」埼玉学園大学紀要 (人間学部篇) 4、pp.15-24.
- 鈴木一代 (2005) 「日系国際児の文化的アイデンティティ形成—事例の検討—」埼玉学園大学紀要 (人間学部篇) 5、pp.85-98.
- 鈴木一代 (2006) 『異文化間心理学へのアプローチ：文化社会のなかの人間と心理学』 ブレーン出版
- 鈴木一代 (2007) 「国際家族における言語・文化の継承：その要因とメカニズム」異文化間教育 26、14-26.
- 鈴木一代 (2008) 『海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成』 ブレーン出版
- 鈴木一代 (2008) 『「国際児」の文化的アイデンティティ形成—インドネシアの日系国際児の事例を中心に—』 異文化間教育(19)、 pp.42-52.
- 鈴木一代 (2012) 『成人期の文化間移動と文化的アイデンティティ』 ナカニシヤ出版
- 鈴木一代 (2013) 「グローバル化社会と多面的アイデンティティ：国際結婚者と国際児の場合」『埼玉学園大学紀要』 (人間学部篇) 13、pp.97-106.
- 鈴木一代 (2014) 「バイカルチュラル環境と文化的アイデンティティ：日独国際児の場合」『埼玉学園大学紀要』 (人間学部篇) 14、pp.15-28.
- 鈴木一代 (2016) 「多文化環境と精神的健康：文化的アイデンティティと『居場所』を中心に」『埼玉学園大学紀要』 (人間学部篇) 16、pp.43-52.
- 鈴木一代 (2017) 「海外在住国際結婚家庭における言語・文化の継承：孫 (日系三世) は日本語・日本文化を継承で

- きるか?』『埼玉学園大学紀要』(人間学部篇) 17, pp. 65-74.
- 鈴木一代 (2018) 「グローバル社会における海外在住国際結婚家族のアイデンティティ形成と『居場所』: ありのままの自分を求めて」『埼玉学園大学紀要』(人間学部篇)、18, pp. 59-70.
- 鈴木一代(2019) 「日系国際児(ハーフ)から日系三世(クォーター)への言語・文化の継承: インドネシア在住の事例から」『埼玉学園大学紀要』(人間学部篇) 19, pp.77-90.
- 鈴木一代・藤原喜悦 (1992) 「国際家族の異文化適応・文化的アイデンティティに関する研究方法についての一考察」『東和大学紀要』 18, pp. 99-112.
- 関口知子 (2003) 『在日系ブラジル人の子どもたち異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店
- ソルドンフン他 (2006) 「結婚移民者家族実態調査および中・長期支援政策方案」女性家族部
- 宋 嶋營 (2009) 「韓国における国際結婚女性移住者に対する政策の転換とその要因」『政策科学』第 17 卷 1 号、pp.77-90.
- 宋 嶋營 (2011) 「韓国の多文化家族支援センターの教育事業が女性移住者の生活適応に及ぼす効果—全羅南道におけるインタビュー調査から—」『政策科学』第 18 卷 2 号、pp.21-32.
- 戴エイカ (2001) 『多文化主義とディアスポラ』 pp.101-133、明石書店
- 田中克彦 (1996) 『名前と人間』岩波書店
- 高橋朋子 (2013) 「『移動する子ども』のことばと心を育むために親ができること」川上郁雄 (編) 『「移動する子ども」という記憶とカーことばとアイデンティティ』 pp.335-346. くろしお出版
- 高橋満理子 (2010) 「韓国における継承日本語・日本文化教育の現状—韓日国際結婚家庭を対象に—」東アジア日本学会 日本文化研究 Vol.33, pp.137-162.
- 竹下修子 (1998) 「国際結婚に対する社会の寛容度」『家族社会学研究』10(2)、pp.71-82.
- 竹下修子 (2000) 『国際結婚の社会学』学文社
- 趙 衛国 (2007) 「中国人高校生の異文化適応過程—文化的アイデンティティ形成の要因に注目して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 47 卷、pp.337-34.
- 張 偉霞 (2018) 「中国にルーツを持つニューカマーの子どもたちの文化的アイデンティティ」『社会学雑誌』34、pp.146-167
- 趙 貴花 (2013) 「移動する人びとの教育と言語: 中国朝鮮族に関するエスノグラフィー」東京大学 博士論文
- 陳 天璽 (2013) 「多文化社会の中で育つ、育てる—ことば、家族、社会、そしてアイデンティティ」川上郁雄 (編) 『「移動する子ども」という記憶とカーことばとアイデンティティ』 pp.323-334. くろしお出版
- 鄭喜恵・八島智子 (2006) 「在日韓国人の言語使用とアイデンティティ」『多文化関係学 3(0)』、pp.141-149.
- 徳永あかね (2022) 「社会の主流言語を母語とする母親の家庭内言語方針 ~未就学児を育てる国際結婚家庭の母親へのインタビューより~」神田外語大学紀要(34)、pp 233-251.
- 中家晶瑛 (2022) 「親子間使用言語を日本語とするニューカマーの親子から見えることばの実践への意味付けと親子関係—ことば観との関わりに着目して—」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』13 号、pp.126-161.
- 中川 明 (1998) 『マイノリティの子どもたち』明石書店
- 中島和子 (2001) 『バイリンガル教育の方法~12歳までに親と教師ができること』アルク
- 中島和子 (2016) 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』アルク
- 中山亜紀子 (2016) 「『日本語を話す私』と自分らしさ—韓国人留学生のライフストーリー—」ココ出版
- 牧野和郎 (2013) 「日韓国際結婚家庭子女の文化的アイデンティティ形成に与える要因」韓国日本学会(8)、pp.204-210.
- 馬潤仁 (2011) 『「多文化共生」は可能か』勁草書房
- 白琇晶 (2015) 「国際結婚家庭における子どもの母語教育を支える要因と問題点—「韓国人の母親・日本人の父親」の事例研究」日本語・日本文化研究 25, pp.154-167.
- 花井理香 (2016) 「日韓国際結婚家庭の言語選択—韓国語の継承を中心に—」『社会言語科学』19-1、pp.207-214.
- 花井理香 (2016) 『国際結婚家庭の言語選択要因—韓日・日韓国際結婚家庭の言語継承を中心として—』ナカニシヤ出版
- 原華耶 (2021) 「日本における結婚移住女性の現状と課題」『東亜大学紀要』第 32 号、pp.55-62.
- 日出里美・小澤理恵子・鈴木一代・塘利枝子(2008) 「生涯発達におけるアイデンティティ関係性の視点から—」小

- 島勝(編著)『異文化間教育の研究』ナカニシヤ出版
- 深澤伸子 (2013)「復元語・複文化の子どもの成長を支える教育実践—親が創るタイの活動事例から」川上郁雄 (編)『「移動する子ども」という記憶とカーことばとアイデンティティ』、pp.347-372.くろしお出版
- 福本拓 (2016)「現代日本における国籍とエスニシティの揺動—その空間的側面に着目して—」地理区間 9-3、pp.267-283.
- 藤田ラウンド幸世 (2020)、「アジアの文脈における国際結婚家族とバイリンガル教育—韓国とタイの親が実践する子どものための日本語サークルの考察—」国際基督教大学学報 3-A、アジア文化研究(46)、pp.91-105.
- ホール、スチュアート (1990)「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』(4月臨時増刊号)42-5、pp.90-103 (小笠原博毅訳)
- 丸井ふみ子 (2012)「アイデンティティ研究の動向：異文化接触・言語との関係を中心に」『言語・地域文化研究』第18号、pp.193-209.
- 松岡里奈・深澤伸子 (2022)、「Family Language Policy 形成に影響を与える要因に関する一考察—タイに生きる泰日国際家族 A 家の父・母・子 3 者の語りから」『MHB 研究』18、pp.48-64.
- 松岡里奈ほか (2022)「学校選択調査から見た Family Language Policy に影響する要因の一考察—タイに住む日本人家族と泰日国際家族はなぜ日本語を学習言語としたのか—」『ジャーナル「移動するこどもたち」—ことばの教育を創発する』13号、pp.162-181.
- 箕浦康子 (1991)『子供の異文化体験』思索社
- 箕浦康子 (2010)「本質主義と構築主義 —バイリンガルのアイデンティティ研究をするために—」母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究 (6)、pp.1-22.
- 三宅和子 (2014)「在英日系ディアスポラの言語生活—国際結婚した日本人女性とコミュニティの形成—」文学論藻 (88)、pp.45-63.
- 三宅和子 (2015)「イギリスにおける日本人の国際結婚女性の言語生活—その社会的背景と子育て世代の日本語の保持・継承—」東洋通信 52(2)、pp.82-95.
- 三宅和子 (2018)「国際結婚家庭 2 世代の「移動」と「選択」」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば』pp.126-148.くろしお出版
- 三宅和子 (2021a)「モビリティ、21 世紀に問われている社会言語学の課題」三宅和子・新井保裕(編著)『モビリティとことばの挑戦—社会言語学の新たな「移動」』pp.3-27.ひつじ書房
- 三宅和子 (2021b)「モビリティと周縁性」三宅和子・新井保裕(編著)『モビリティとことばの挑戦—社会言語学の新たな「移動」』pp.28-29.ひつじ書房
- 三宅和子 (2022)「名前をめぐるアイデンティティ交渉」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば 2』pp.16-44.くろしお出版
- 三代純平 (2014)「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在—その課題と可能性について—」『WEB 版リテラシーズ』14、pp.1-10. <http://literacies.9640.jp/dat/litera14-0.pdf>
- メアリー・アンジェリン・ダアノイ (2017)「多元的主体としてのフィリピン・ジャバニーズにおけるアイデンティティの具体化」佐竹真明・金愛慶 (編)『「国際結婚と多文化共生」—多文化家族の支援にむけて』pp.143-166.明石書店
- 李善雅 (2011)「同時バイリンガル幼児の言語習得過程に見られる二つの言語の「混合」と「干渉」」社会言語科学 13-2、pp.88-96.
- 李善雅 (2017)「東北の日韓国際結婚家庭と多文化の子どもたち—母語、アイデンティティ、文化間移動をめぐる—」佐竹真明・金愛慶 (編)『「国際結婚と多文化共生」—多文化家族の支援にむけて』pp.201-218.明石書店
- リーベレス、F. (2020)『ストレンジャーの人類学—移動の中に生きる人々のライフストーリー』明石書店
- リーベレス、F. (2022)「「移動するこども」のライフストーリーとオートエスノグラフィ」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば 2』pp.153-177.くろしお出版
- 李娜 (2022)「中国朝鮮族複言語話者の言語使用とアイデンティティに関する研究」九州大学博士論文
- リアンテルミハタノ (2009)『マイノリティの名前はどのように扱われているのか—日本の公立学校におけるニューカマーの場合』ひつじ書房
- 柳蓮淑 (2005)「外国人妻の世帯内ジェンダー関係の再編と交渉：農村部在住韓国人妻の事例を中心に」『人間文化論叢』pp. 231-240.
- 柳蓮淑 (2006)「外国人妻の主体性構築に関する一考察—山形県在住の韓国人妻の事例から」『桜美林論集』pp.119-

133.

- 劉榮純 (2006) 「日本における国際結婚—韓国人妻のアンケート調査・分析を通して—」『ブール学院大学研究紀要』 pp.69-85.
- 八木真奈美・中山亜紀子・中井好男 (編) (2021) 『質的言語教育研究を考えよう』 ひつじ書房
- やまだようこ (2000) 「人生を語るの意味」 やまだようこ (編) 『人生を語る』 pp.1-38. ミネルヴァ書房
- 矢吹理恵 (1997) 「日米結婚における夫婦間の調整課題—性役割観を中心に」 発達心理学研究(12)、 pp. 37-50
- 矢吹理恵 (1998) 「日米国際結婚における夫婦間の調整課題 (2) —子育て観を中心に」 発達心理学研究(13) 、 pp.26-44.
- 梁正善 (2019) 「日本における日韓国際結婚家庭についての研究 —ライフストーリーを手掛かりに—」『西南学院大学大学院研究論集』 第9号、 pp.49-62.
- 梁正善 (2022) 「日韓国際結婚家庭における親子のライフストーリー—アイデンティティと言語を中心として—」『東アジア研究論集』 第30号、 pp.69-96.
- ユンソンヨン (2004) 『日本の地域社会における「在日外国人」の現状と社会風刺実践の方向性—「在日外国人」母親の社会的孤立への支援』『評論・社会科学』74、 pp.109-124.
- 渡辺己 (2004) 「北アメリカ北西海岸先住民にみる言語とアイデンティティ」 小野原信善・大原始子(編) 『ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』 三元社
- 渡辺幸倫・藤田ラウンド幸世・宣元錫・李怳鉉・袋曉蘭 (2014) 「多文化家族の子育て戦略の課題：日韓中の国際カップルへのインタビュー調査」『相模女子大学文化研究』34、 pp.1-26.

「外国語参考文献」

- Oriyama, K. (2010) Heritage language maintenance and Japanese identity formation: What role can schooling and ethnic community contact play? *Heritage Language Journal*, 7(2), 76-111.
- Sakamoto, M. (2006) Balancing L1 maintenance and L2 learning: Experiential narratives of Japanese immigrant families in Canada. In K. Kondo-Brown (ed) . *Heritage language development: Focus on East Asian immigrants* Amsterdam: John Benjamin Blackwell. pp33-5
- Skutnabb-Kangas, Tove and Robert Phillipson.(1989). 'Mother Tongue' the Theoretical and Sociopolitical Construction of a Concept
- Skutnabb-Kangas, T. (1981). *Bilingualism or not: The education of minorities* (L. Malmberg & D. Crane, Trans.). Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Stefanie Schumann (2011) .Hyrid identity formation of migrants: A case study of ethnic Turks in Germany, Norderstedt:GRIN Verlag.
- Wilson, S. (2020). *Family language policy: Children's perspectives*. London, UK: Palgrave Macmillan.

「韓国語参考文献」

- 강정희 (2002) 「재일 한국인의 한국어에 대한 언어태도 조사: 오사카 지역사회를 중심으로」 어문학 86、 한국어문학회 pp.1-29.
- 김경희 외 (2016) 『보육학개론』 창지사
- 김태진 (2014) 「재미동포 한국어 학습자 정체성 구성 요인과 계승어교육」 이중언어학 54、 이중언어학회 pp. 99-122.
- 마키노 가즈로 (2011) 「다문화 가정 자녀의 언어·문화적 정체성 형성에 미치는 요인」 전남대학교 석사학위논문
- 박애스터 (2017) 「연애결혼한 일본인 이주여성의 자녀 양육 갈등과 대처에 관한 질적 연구」 일본언어문화 38、 pp. 281-302.
- 박갑룡 (2014) 「여성결혼이민자 자녀의 자아정체성 과 민족·국가정체성의 상관성 연구」 전남대학교 박사학위논문
- 박관동 (2020) 「국제결혼 한족여성의 가족관계경험에 관한 현상학적 연구 : 고향 한족여성을 중심으로」 한세대학교 일반대학원
- 박세희 (2017) 「일본인 결혼이주자의 자녀양육을 둘러싼 사회문화적 갈등에 관한 질적 연구」 일본어교육연구 41、 pp.61-78.
- 박선영 (2019) 「내러티브 탐구를 통한 베트남 결혼이주여성의 정체성 연구 -이야기 정체성을 중심으로-」 상명대학교대학원 박사학위논문
- 부향숙, 김진한 (2010) 「미국 인종 및 민족 정체성 발달 이론으로부터 조망한 다문화가정 자녀의 생애 발달 이해」 한국성인교육학회 pp.59-89.
- 신혜정 (2007) 「다문화가정 자녀의 자아정체성에 영향을 주는 요인에 관한 연구」 이화여자대학교 석사논문

- 송선진 (2007) 「국제결혼가정 자녀의 사회화 과정이 자아정체감에 미치는 영향: 다문화교육을 위한 시사점을 중심으로」 서울대학교 석사학위논문
- 이재분 (2008) 「다문화가정 자녀교육 실태조사-국제결혼가정을 중심으로-」 한국교육개발원
- 이재분 (2009) 「다문화가족 역량개발을 위한 통합적 교육지원 방안」 한국교육개발원
- 유연숙 (2010) 「한국여성의 에스닉 비즈니스의 기업요인과 자원동원:일본 수도권 지역의 사례조사를 중심으로」 비교한국학 『Comparative Korean Studies』 18(3)、pp.119-145.
- 유연숙 (2011a) 「일본의 다문화정책과 한국여성 결혼이민자의 역할: 야마가타현 도자와촌의 김치특산물화와 고려관을 중심으로」 제외한인연구 24、 pp.77-115
- 원미진 (2015) 「재미동포의 언어 정체성과 한국어 능력에 대한 세대별 비교 분석 연구」 이중언어학 제 60 호、 pp.179-200.

### 【引用サイト】

- 厚生労働省「令和3年(2022)人口動態統計月報年計(概数)の概況」厚生労働省(mhlw.go.jp)(2022年11月25日閲覧)
- 厚生労働省『令和3年度人口動態総計年報』<http://www.mhlw.go.jp/>(2022年11月25日閲覧)
- 厚生労働省『令和3年度人口動態調査 上巻 婚姻 第9・18表 夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数』(<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003214862>, 2022年11月25日閲覧)
- 法務省『2021年度出入国在留管理』入管白書「出入国在留管理」 | 出入国在留管理庁(moj.go.jp)(2022年11月18日閲覧)
- 総務省「多文化共生の推進に関する研究会報告書」(soumu.go.jp)(2022年11月20日閲覧)
- 多文化共生センター <http://www.tabunka.jp/>(2022年11月27日閲覧)
- 韓国女性家族部 <http://www.mogef.go.kr/index.jsp>(2022年11月25日閲覧)
- 韓国統計庁 e-나라지표 지표조회상세(index.go.kr)(2022年11月25日閲覧)
- KONEST <https://www.konest.com/>(2022年10月9日閲覧)
- 多文化支援家族ポータル(タヌリ) <https://www.liveinkorea.kr/portal/KOR/main/main.do>(2022年11月25日閲覧)
- YTN新聞の記事 2020年3月19日付け[2019 혼인이혼] 전체 결혼 10건 중 1건은 외국인과 결혼] 연합뉴스(yna.co.kr)

## 「付録」研究協力者のライフストーリーインタビュー内容

(12組の内、紙面の都合により研究協力者のHとHの妻のライフストーリーインタビュー内容を記載する)

2022.2.19 Hさん/Hさんの妻インタビュー
Y:モビリティということでは〇〇さんは日本に留学に来たのはいつですか？
H: えっと、2009年3月から2011年3月まで。
Y: 留学が終わってから韓国へ帰りましたか？
H: 帰りました。帰って、2012年にまたワーキングホリデーで戻ってきてそれでその後から社会生活です。
Y: 2013年から社会人ですか？
H: 2012年の冬から、多分11月くらいかな。はい。
Y: 2011年から2012年は語学研修に行かれましたか？
H: その一年間であのウカナダで行って来ました。
Y: そうなんですね。わかりました。
Y: 奥様に質問なんですけど、国際結婚をされているんですがもし韓国の留学と英語圏の留学とかありますでしょうか？
Hの妻: はい、韓国に留学していました。
Y: どれくらい留学しましたか？
Hの妻: 2006年から2010年、10かな。5年間。はい。していました。
Y: どちらかの大学で勉強されたんですか？
Hの妻: はい、〇〇大学で。
Y: ちなみに専攻とかはどういったものを勉強されたんですか？
Hの妻: 国語国文学科で。
Y: 韓国語でいいですよね？
Hの妻: もう、帰ってきてから何年も経つので。
Y: 2010年に戻られたということですね。そしたら、時期的に合わせて、〇〇さんと出会われたのはいつ頃ですか？
H: 2012年の冬、私が入社した頃に妻はその時に先に会社で勤めていて。
Y: はい、
H: それが始まりで。
Y: 恋愛期間はどれくらいでしたか？
H・Hの妻: 結婚まで二年。
Y: 2年くらいですね。結婚される時には〇〇さん側のご両親、〇さんのご両親の中での反対はなかったですか？
H・Hの妻: 全然なかったです。
Y: はい、で、2012年に結婚されていて今お子さんがいらっしゃいますよね？
H: そうですね。
Y: お子さんは今何歳ですか？
H・Hの妻: 5歳。
Y: 5歳ですね。結婚してどれくらいですか？
Hの妻: 結婚は2012年。入社して1年くらい後で恋愛が始まり、私が大阪に転勤になって、でその時2015年の春結婚しました。今年で7年目になります。
Y・H・Hの妻: 早いですね。
Y: Hさんの国籍はまだ韓国？〇〇さんは日本ですよ？お子さんはどうなんですか？
H: 多分、二重国籍になっていて出生は横浜で出生申告したので。(領事館での説明) その届だけで二重国籍になっているのかなあ。
Y: 16歳(実際は22歳)になると国籍を取らないといけませんが、子どもさんまだ小さいのでまだわからないと思うんですが、Hさんと〇〇さんどういうふうを考えているんでしょうか？子供の国籍については？
H: まず、私は父が韓国人だからといってママが日本人だからといってなんかどっかにするよりは結局本人の選択というなるんですが、予想ではやっぱり生まれ育てられたのがこっちだから結局自分がこれからの将来に暮らしやすいところを選択するのではないかと考えています。
Y: なるほどですね。奥様も同じ考えですか？

Hの妻：そうですね。本人の意思に任せたらいいのかなあというところで。自分が生きやすい方法を選択する方がいいのかなあと思います。日本を選んだから韓国を選んだからいうつもりは特にないんです。

Y：あのおう、それに関していて家庭環境で国際結婚されているので日本語と韓国語を両方使っているのか？ご夫婦の中でどんな言語を使っているのか？子供との関係ではどういう言語を使っているのか？教えて下さい。

H：あのおう、夫婦で、二人で会話する時にも日本語になっていて、子どもと99%くらいです。

Hの妻：韓国語が出てくる場面では韓国に電話して画面を通して通話をするときに韓国語が聞こえてくるくらいです。

H：でも、それが悩ましいのがあかちゃんの時はそれが韓国語なのか日本語なのかそもそも言葉がわからない時には全然抵抗感を与えずに普通に할아비지, 할머니と電話出来たのに今はあのおう自分のしゃべっている言語が聞こえてくるとなんかそれが理解できないわけですからちょっとかかおとかなんか電話することに距離感をちょっと感じている。正直になんか悩ましいことではありますね。正直に生まれる前はなるべくパパは韓国語で話しかけてあのおう妻は日本語でしゃべれば両方発達するのではないかと思ったんです。なかなか出来ない。まず、私も反省するところが昔からはじめてなかったのもおもいながらも結局日本語しかつかってなかったのが今更とありますが、あのおう遊びに韓国語を教えてあげようかとしても逃げちゃったりしますよね。でも逆に気持ちの波があるみたいですね。先할아비지なんといつた？とか韓国語ではこんなことなんていうの？とか聞いてくる時もあるので。

Y：5歳ですよ？インプットとしては(韓国の)絵本とか童話とかもしくは今YouTubeとか見せているんですか？

Hの妻：見せたりとか読んだりとかはしようとしていた時期はあったんですけど、やっぱりこれもやりたくないとか違うのみるとなってやっぱり本人が遠ざけようというような感じになってそれでやっぱり聞かなくなる。そんなふうになってやっぱり日本語に戻ってしまうというところですかね。

Y：奥様は国語(専攻)なので結構韓国語を教える財源は沢山あると思うんですけど、それにも関わらずえっとインプットをしていないのは忙しいということですか？

Hの妻：そうですね。やっぱりどちらかと言えば、あのおう韓国語を教えるのは私ではないほうがいいという意識があるんです。

Y：母語じゃないからですね。

Hの妻：そうですね。なるほど。

H：自分の責任。。。

Hの妻・Y：いやいや。

Hの妻：童話を聞かせようとしたり pororo みようねとして見せようとしたりとかちょっと絵本買ってきてもらったりとかカルタ買ってきてもらったりとかして使って遊んでみたりとかはするんですが自分が思うように上手くない。今期強く続けていけないところですかね。

Y：難しいですよ？今後小学校とか入るとおもいますが、今は幼稚園ですか保育園ですか？

H：保育園です。

Y：保育園では韓国語もしくは英語とかの環境ではないですか？

H：only 日本語。一般的な

Y：そしたらHさんの周りにもしくは日韓国際結婚されているコミュニティーとかそういった友達とかの交流とかはあるんですか？

H：あのおう、特にそんなコミュニティーはないんですけど、なんかたまたま送っている保育園に私たちのような逆ですけど奥さんのほうが韓国人でたまに食事をしたり、昔の、コロナの前までには。

Hの妻：同じマンションにやっぱり韓国の方が住んでいて旦那さんは在日の方だけ韓国にルーツを持つ家庭があったりやっぱりそういう方が何人かいるからやっぱり交流しているのね。

H：同じ環境の子がちょうど小学校2年生くらいの自分の娘より3歳上なんですけど、おそらくあの子はママが韓国語を使う環境だから聞き取れるししゃべれる。ある程度韓国語が聞き取れてしゃべることも少しできるようで、ちょっと焦ることもありますけど。よその家庭はどうしているだろうと。

Y：今住んでいるところは千葉県なんですか？周りに土曜学校はあると思いますか？

Hの妻：なかったんです。都内まで出る方が近い。

Y：なるほどですね。もし、そういった学校とかも積極的に調べているのは韓国語をやっぱり子供に継承したい気持ちはあるということですか？

Hの妻：そうですね。

Y：ご家庭の中では食事とか文化的な面はどういうふう交流されているんですか？

H: まずは、結局実はあの方。  
Y: 私の偏食のせいかな。  
H: 関係ないかな。お肉がダメで。  
Hの妻: お肉を食べないせいでやっぱりちょっとその。  
H: でも、なんかそれとは関係なく。Hの妻: そうかな。  
H: あの方、どっちかという私が韓国の料理を作って食べて子どもと妻は別に他の食べたいものとか食べたりそれがもしみんな一緒に韓国の料理が食べたいなら一緒に食べたり。子どもは和食も韓国の料理もビビンパとかも一緒に食べているような気がします。スンでうぶも好きだし。  
Y: 遊びでは、例えばユンノリとかもしくはお玉も（日本も韓国もあるけど）旗揚げとかそういうものもあるんですけど、そういう文化的な要素が入るものはいかがですか？  
H: まったくそんなのを教えようとしたことがない。  
Hの妻: そんな文化的な遊びだったりそういう遊び（日本の遊び）さえもあんまりやってない感じです。  
Y: なるほどですね。  
Hの妻: はい。  
Y: それは何か理由があるんですか？  
Hの妻: 何と言いますか自分が意識して頑張れば出来たかもしれないですが、それはおいて今までいろいろ別に子どもが先に興味を持っているものついてしてあげようと、まずここでは受け身という感じでここで意識的に何かを教えようとしたアプローチはなかったんですね。で、あの方例えば習いことも友達から何かを聞いてやりたいと言うならばそれでさせてみて続けさせてやってあげたり。伝統的な日本側でも日本のも韓国のも意識をもって教えようとするのがあんまりなかったんじゃないかな思うんですね。  
Hの妻: そんなに国籍を意識したそういうのは特にしてないかもしれません。  
Y: 子ども用のハンbokとかそういうものとか着せたりとか？  
Hの妻: そういのはしたことがないかな。結婚の写真撮るの中で100日写真の時に娘は覚えてないんですが、ハンbokとか韓国で写真撮ってきたので、ハンbok着せてそれを残しておいたんですね。それを説明したことはないんですけどもうちょっと大きくなったらこれがハンbokという韓国の伝統衣装で日本の着物みたいなものだよとつもりではあるんですけど。それ以外はないんですね。  
H: 100日の写真はハンbok着せて七五三の時は着物を着せてどっちも残しておけば行く行く子どもが大きくなった時にアイデンティティのなんか自分でわかりやすいのでは？なんか両方血が流れているので。  
Y: なるほどですね。  
H: 習わせたことはないよね？  
Y: 私の場合は（省略）  
意識的に取り入れようとするまでは考えていないということですよ？  
Y: 子供の教育のために日本にずっとHさんは永住する予定ではありますか？  
H: 一応、まあ実際の方向としてはまずあの方ここで結局自分のキャリアも積んできたので帰るとか自分であしたりこうしたりするよりはこっちで定着して自分をキャリアアップしつつ、韓国は遠い国ではないので今はコロナで全然いけてないんですが、あの方やはり結局経済的な問題にもなりますので今のうちに頑張っていていつでも韓国へ帰る時には家族を連れていけるような経済的な状況を作っておけば私が韓国の国内で親は釜山に住んでいるけど私がソウルに住むとしたらそれで日本に住むことと同じく毎日会えるわけではないのでそれぞれでよいのかと考えています。  
Y: 帰りたい気持ちはありますか？  
H: 帰りたい気持ちは今のところ多分ないんです。時々挨拶に行きたい時にいけるようなそういう状況を作っておくことが自分の目標ですね。  
Y: なるほどですね。  
H: 一応、時々それについてなんかやはりちょっとあの方いろいろ考える時もあるんですが、私も40になりましたので、それで、やはり、年取っていく親のこととかいろいろ考えないといけないことを考えるとセンチメンタルもなったりするんですけど。ま、自分がやっていることは正しいとか、ま、その前に、私がわたしなりの道を家族連れて健康に過ごしていく形を見せてあげられるのが一番かな。それで、今のところ安定したこっちで持っているわけですから帰るといのは念頭に入れてないんですね。  
Y: なるほどですね。では、ゆくゆく永住が長くなるとおそらく日本で住むに当たって国籍を帰ったり名前を通称名

を名乗ったりする方々も増えているんですけど。それに関してはどういうふうに思っているんですか？

H：私はそれについてまったく変える気がしないんですね。変えないと思います。で、私はなんか私が社会生活で会った人たちがよくて良かったかもしれませんが、もう、一回も自分が金さんだとして今働いているその組織ももう一人の金さんも含めて韓国人のスタッフが二人いるんですけど、韓国人のスタッフとして一回もなんか差別的なことも経験したこともなければ、社会生活ではなくてもプライベートでも私はあのうアジア部署なりいろいろ公共機関とかでやる時にもとうとうと金と名乗るしこれからも私は金として生きていこうと。

Y：そしたら日本に永住しながらもちろん日本語でお仕事されているとおもいますが韓国語を使う機会はあるんですか？

H：あのう結局KAKAOで会話するだけですわね。

Y：そのKAKAOはご家族とするだけですか？

H：はい、

Y：それはどれくらい頻繁に？

H：週に一回くらい、週末に一回くらい電話したりしています。

Y：ご両親とお姉さんにですね。

H：それと今職場にもう一人の金がいるので二人だけの時間の時、ご飯食べる時とかしゃべったりします。

Y：奥様に質問ですが、日本では女性の方が結婚されると男性の姓をファミリーネームでつくと思うんですけども、日本名でそのまま使っていられるんですが、その辺について聞かせて下さい。

Hの妻：そうですね。あのう、外国籍の方と結婚する場合は夫婦別姓が可能でということでそのまま使っているんですが、韓国に行った時も韓国では夫婦別姓が当たり前のようにでしたしなんかそういう国の人と結婚して自分が外国の籍を名前を名乗るのもなんかまたちょっと不思議なような感じがするなと思ってしまうて住むところも日本なので変える必要はないのかなと思って、また変えようとなると手続きも混雑そうなのでそのままでもいいか。特に、あんまり深く考えもしなかった。

Y：娘さんは〇〇を名乗るんですか？〇〇を名乗るんですか？

Hの妻：〇〇を名乗っています。

Y：それをそういうふうに〇〇さんの姓をついているのはなぜなのでしょう？

H：そもそも、それについて真剣に相談することなしで普通に私も自然で受け止めているところなんですけど、日本では〇〇〇〇になって、韓国では〇〇〇〇になるという。両国のそれぞれの名前をつけても威圧感がない名前を考えて私はあのう他の考え方とかはしらないんですけど、普通私は外国人で日本で住んでいるので日本人として日本に住んでいる妻の苗字をそのまま使うのが自然か流れかなと。

Hの妻：これについて考えたことも話し合ったこともなかったんですね。

Y：〇〇さんは韓国式で夫婦別姓で考えていて〇〇さんはご主人が外国の籍でいらっしゃるから、ま、そこまで考えたことがないということですかね。

Hの妻：そうですね。はい。

H：話したことはなかったです。

Y：余談

Y：ある意味、尊重、ある意味リスペクトするという気持ちが働いているんですね。

H：そのつもりです。

Y：韓国のご家族がコロナの前に日本に来日したことはありますか？

H：あのう、コロナ前が最後で。今まで3回。

Y：年に一回。

H：それくらいで、こっちに来ていただいて泊まって3-4日に帰った。

Y：〇〇さんのご実家は？

Hの妻：〇〇県です。

Y：〇〇さんが韓国に行くときには年一回か二回かですか？

Hの妻：コロナの前には年に一回で。今まで3回ですね。

Y：それは時期的に年末年始？

H：結局二人とも働いているのであのう二人で有休を合わせられて（むすめがまだ学校にも行っていないので赤ちゃんだったので）自分たちの有休に合わせて行ってきました。

Y：今奥様は同じ職場ですか？

Hの妻：いいえ、まったく違う環境で働いています。

Y：正社員ですか？

Hの妻：正職員で働いています。

Y：〇さんが働いているのは貿易関係？

H：私が勤めているのは国際物流会社です。

普通に貿易会社で要するに貿易関係のところ、

Hの妻：私は保育所で働いていて事務員をしています。

Y：そうなんですね。子どもと触れ合うそういう場所で事務作業。

仕事環境はすごくいいですよ？

Hの妻：やはり出産してから働きやすいお仕事が出来たらいいなあとということで。完全に変わりました。

Y：いいと思います。今〇〇ちゃんが5歳とおっしゃっていましたが、今後ご出産の予定とかは？

Hの妻：ないですね。

Y：韓国にいらっしゃったときのお話しをお聞きます。5年間いらっしゃったら結構韓国人とのコミュニティー、韓国の旅行とか、韓国人との関わりが深かったのでは？その辺いかがですか？

Hの妻：そうですね。学部に通っていたので発表するのにグループを組んだりとかそういうかたと関わる機会は多かったんですね。

Y：個人的に今も親しくしている方はいますか？

Hの妻：いや、もうほとんど連絡はしていないんですね。

Y：向こうからも奥様からも？

Hの妻：はい、そうですね。なんか、やっぱりちょっと10年以上経ってお互いに状況が変わってしまって、仕事したり家庭をもったりして。

H：前はなんかそのベトナムに住んでいた友達と同じ留学生であの韓国にいた時に知り合ったベトナムの友達とか中国の友達とかわりと長く続いていたりとかして連絡先もわかってはいるんですけどでもなかなかなかなか連絡も取れなくなっちゃった。

Y：韓国に行かれた時に韓国語はある程度出来る状態で留学されたんですか？それとも語学堂からされたんですか？

Hの妻：えっと、日本にいる時から韓国語は勉強していて短期で何回かあってそれで大学に行ったん感じですね。

Y：そうなんですね。

Hの妻：短い期間で何回かは行きました。

Y：そうなんですね。韓国にわざわざ留学しようとしたきっかけはありますか？

Hの妻：なんか、当時って一番最初(韓国語)を勉強しはじめたのが2002年とかなんですね。ワールドカップなんですけど、勉強できる教材がなかったんですよ。それで、もっと勉強したいんだけど、中級以上勉強するにはもう留学したほうが早いよというようなその時代だったんですね。それで行くようになりました。最初は、で、当時は物価も安かったのが今みたく高くなかったので行きやすかったということもあったし。やっぱり行ったら楽しいしだったら行った方がいいかなあと思いました。それで行き始めた感じですね。

Y：で、5年間過ごして中期的に韓国に住む予定はなく日本に戻られたんですが、その辺はどうですか？

Hの妻：最初はやっぱり両親もそのまま韓国にいるんじゃないかと思っていたみたいなんです。それも全く考えていなかったわけではないんですが、やはりこのまま韓国に残ったとしてじゃ次に日本に帰るタイミングはいつだろうと思ったらやっぱりダメになった時に帰るそういうイメージしか浮かばなくて仕事が辛くなった何かで辛くなったそれで日本に帰ろうとなるんだったら一度まず日本に帰って自分の基盤を作ってまた楽しく韓国へ行く方が私のなかではよいイメージがあったんですね。なので、やっぱり最初は韓国から離れたくないなあとという気持ちでその韓国企業に入ってそれで金さんと知り合うんですけど。なので、最初日本に帰って来た時は韓国とつながっている会社で仕事しようというそういう気持ちで探していましたね。

Y：結局辿り着いたのは韓国につながっていきたいという気持ちで金さんと出会っている。ある意味これが国際結婚にもつながっているということですね。

Hの妻：そうですね。

Y：深いんですね。留学経験とかしかも一年ではなくて5年いらっしゃったのでその影響は強いんじゃないかというふうに思いました。韓国で文化、カルチャーショックはなかったんですか？

Hの妻：いや、最初はかなりあったような気がするんですけど、だんだん上書きされて大分思い出せないなあとこのところではあるんですよ。はい。でもなんかカルチャーショックがあったとしてもそんなに衝撃的でこれは無理

だということはないかと思えます。

Y:なるほどですね。

Hの妻:留学する前に大分勉強した期間があったのでやはり勉強する中でこういう国なんだというある程度勉強していたのでそういうのもあったかもしれないですね。

Y:そうなんですね。なるほど。

私の願望かもしれないけど、日韓国際結婚されているし韓国語をすごく追い求めて留学に行かれていますのでおそらく難しいかもしれませんが、娘さんもいらっしゃるのであれば韓国語をもうちょっと生活取り入れるタイミング、そういったものがあるのかという。私も意見かもしれませんが。留学の話から韓国語をずっと話したいという韓国とずっとつながりたいという気持ちが強いということであったのでちょっと意見としてですね。

Hの妻:何回か教えなくていいのかねと聞いたら本人がやりたくなったら一生懸命にやるしですね。日本語の言語形成が終わった後の方がきつとちゃんと勉強出来るよという金さんが言ったことがあって私もそうなのかなあと。まずは母国語の形成も大事なかなあなんて思ったりもするんですけど。

H:自分が正直になんかあのうここでまだまだ日本語完璧になんかしゃべってるよりはまずは子どものしゃべり方で日本語だからもうちょっとそのまま自然に成長してもらって。二人で話してみたのが小学校入ってもうちょっと大きくなったら新大久保とかそういうところに要するに自分たちと同じ在日系とかそれともニューカマーとか日韓の夫婦がそういう集まりがあるのは調べたら知っているのでもうそういうところに行って同じ環境にある人と付き合っ(交流)みてそういうのに一緒に参加することで自分のアイデンティティについてわかるようになるのかと思いつつも逆にそういうのが混乱させるのではないのかなあと思って進んでなくて実際何もやってない状況なので。

Y:欧米に住んでいる国際結婚家庭は One Parents One Language といって両方をする方もいるんですね。おそらく金さんがいった子どもの母語がまだ定着していないんじゃないかなというそれもある可能性もあるけど。実は子どもの脳ってかなり柔らかくて小学校入学の前まではかなり柔らかいんですね。で、二つの言語が飛び交う言語で育つそういう子供達は言葉を発するのになんか遅いんですね。なぜかという二つの言語が自分のなかに入るから。でも、あのう。ご夫婦がお話し合っ(て)日本語が定着してから韓国語を上(に)のせるというその考えも私は尊重します。もちろん、親の言語を両方取り入れて二重言語としてバイリンガルとして育てるのもありだと思っ(て)んですけど、そのためにも努力が必要であるので共働きされている方はかなりの覚悟を要すると思っ(て)います。先ほど教えてくれた小学校に入ったら環境つくりで日韓国際結婚されているそういう家庭との交流があればいいなあと言っ(た)のでそれもすごくいいなあと思っ(て)います。それは、金さんと松尾さんがお話ししてから娘さんを育てないといけ(ない)ので、でもインプットといっ(て)るかHさんがご自身が韓国人であることで機会があればはらぼじ(할아버지)、はる(も)に、こも(고모)とかのもしくはそういうものをあなたはダブルだよといっ(て)るのをつねに聞かせるのもいいかもしれ(ませ)ん。

H:そうですね。ハーフではなくてダブル。

Y:あなた(こども)は国際児だよ。

H:でも本当に自分で娘が生まれて結局自分の国際結婚した家庭で子どもを直接育ててみて今勉強になったことは実は結婚する前は国際結婚した家庭の子供って自然にバイリンガルになるという恩恵を受けていると思っ(て)いたんですね。普通に育てば両方を喋れる子になる。うらやましい子になると普通にそういう考えを思っ(て)いたんですね。実はやっぱり何もしなければ何もしゃべれないということがよくわかりました。

Y:かなり。

H:そうですね。これからもうちょっと積極的になんかちょっと折角しほ(むすめ)を半分ずつ分けてあげているんですからちょっとそういうのを勉強させるよりは体験させていきたいなといっ(て)るのは考えています。タイミングついてはどうすればいいかは悩ましいんですけど何もしなければハーフだとしても両方喋るわけにはいかないのがよく分かったの。会社で日本人の同僚がよく聞いてくるんですね。金さんの子どもって韓国語めちゃくちゃしゃべ(る)のではないの?みたいな。普通に聞いてくるんですよ。で、いや、はらぼじ、はる(も)に、お祖父さん、お祖母さんくらいしかしゃべれないんですよといっ(て)ると、えっ!もったいないよと。そういわれるたびにもったいないと思っ(て)ながらも。

Y:いや、まだ小学校まで入るまで時間がまだあるので簡単な言葉とか밥 먹자とか, 어디 갈까とか, 맛있지?とか, 사랑해とか簡単な言葉で夫婦で使ってみると。あれって何?はらぼじ、はる(も)に(할머니)が使っ(た)んじゃないといっ(て)うふうに。意外と子どもってですね。韓国語で話けるとこれ何の意味何だよと分かってくるんですよ。

H:みたいです。よく見てる YOUTUBE のチャンネルで韓国人で、福岡に住んでいる韓国人男性でたまたま私と

同じ年で子育て家庭のパパが撮っている VLOG みたいなそんなのがあってみてももちろんその人の子どもも日本生まれの6歳の息子で小学校1年生かな。息子なんですけど映像をみているとまったく日本語しかしゃべっていません。パパはずっと韓国語で声かけているんですね。あの子は日本語で答えながらもちゃんと聞き取れているみたいでいろんな会話が成り立っているんだなあと不思議だなと思いつながらなるほど会話をしようと努力するのではなくて自分が続けて韓国語ばかり喋れば子どもは結局聞き取れるようになるのかなあと答えは日本語だけ喋ってくるかもしれないんですけどとにかく理解が出来るようになるのかなあと。

Y: 耳がすごく柔らかいので吸収力が早いので聞くのはヒアリングは伸びると思います。

H: 先生の話聞いてこれを思い出しました。すごいなあと。

Y: 子どもは書くのが一番遅いので読むのも苦ってなんですけど聞いてしゃべるのがその次に読んでライティングになるのでその大人と順番と逆ですけど。金さんも悩んでいるところもあるかもしれません。

Y: 私も日々悩んでいます。高学年に入ると反抗期の第一に入るので書く文字を書こうとしないし韓国語しゃべれないでという時もあります。子どもに「カナダラ」を教えたくんですけど嫌がっていました。ゲーム感覚で取り入れたんですけど二番目は少しやってくれたんですけどなかなかやはり共働きするとすごく難しいですね。時間との闘いでもあるので。でも、少し取り入れる。

H: ○○に出会ったの——話し。——

Y: ○○ちゃんの教育としては同じ環境にある子ども達とのふれあいを考えているんですけど、小学校中学校高校に上がることによってインタナショナルスクールとかも念頭にいられているんですか？

H: まったく考えていないんです。

Hの妻: 現地の公立で進学させることしか考えていなかったんです。

H: インタナショナルスクールはすごい学費がかかるという話を聞いたことがあって大体駐在員とか大手の会社に勤めている家庭の子どもがなぜならば高い分カリキュラムが英語で授業をするというのがほとんどみたいなので。あえて、ハーフだとしてそこ入れなければいけないということは考えたこと自体ないんですね。

Y: なるほどですね。かっというって英語が上手になったりするのは環境に応じてなので国際結婚されている方のなかではインターナショナルスクール入れている方がいるのでその質問をしました。でも、国際結婚されている方の中でも普通の公立に入れたりする方も多いので各家庭それぞれなんです。

Hの妻: 地域で育てていくのがいいのかなあとという考え方です。

Y: しほさんのお友達ほとんど保育園に預けているので日本人の子が多いですね。

Hの妻: そうですね。

Y: わかりました。

それでは、言語ポートレートのところに移りたいです。

H: 頭に船と飛行機とお箱みたいなんですけど。一番、あたまの中に入っているのは仕事の領域でいいですが、船とか自分がやっているのが通関手続きをさせて船から飛行機に飛ばして海外に送るということですが、すべての仕事が英語で行うことになっているのでその点で頭の中では仕事いっぱい描いていて

Y: 仕事は英語で使っているんですね。

H: 仕事では基本英語しか使っていないので。

Y: それはあのう相手の国のその取引先の英語ですか？

H: 結局、直接輸出業務をするのではなくてあのう物流の会社なので本社がオーストリア外資系で勤めているんですけど、日本からヨーロッパの地域なんです。で、なんかドイツとかオーストリア向けが殆どでそれかアメリカかそれで結局メールとかすべてのやり取りはすべて英語だけになっていて、その仕事で使われる部分。そんな感じで一応書いてみました。Y: 英語は割的に何%ですか？

H: 仕事での%ですか？

Y: 日本の旗と韓国の旗が口を書いてあるんですけど、これを体全体に割る場合は何%ですか？英語がどれくらい示されるのか？

H: 週5回は仕事しているので、多分3%くらいです。多分、英語という言語の特徴もあるんですけど、メールの文書のやりとりなんです。こっちから出るは結局日本語が一番多くて、で、そういう面で割合という表現ではあれなんですけど、2-3割が英語になって半分半分は日本語と韓国語です。

Y: 日本語が50%ですか？

H: でも、テグッキがもっと大きいというのは

Y: テグツキが大きいのは何らかの心の現れだと思うので、その辺について聞かせて下さい。

H: はい、え、ま、そうですね。ま、日本語韓国語が4割、4割で、英語が2割くらいですかね。分ければですね。

Y: テグツキが大きいのは私のアイデンティティは韓国ということですか？どうでしょう？

H: 別になんか私は韓国人だという強い意識を持って毎日生きているわけではないので、ま、あのう、結局私の日本に住んで10年何年、もっと続けて暮らすことを考えると、ますます、なんかそういう溶け込んでしまって、なんか日本に住みながら実は自分が韓国からきた人というアイデンティティも薄れてしまうのではないなあと思いながらも、自分の母国のことはいつも忘れないように、忘れられないと思うんですが、意味として強い意識を持って生きるよりはそういう日本に住んでいる韓国人として生きている表現ですね。

Y: 忘れられない。。祖国であるので日本で住み続けるんだけど私は韓国人だよということであるのかな。

H: そうですね。そういう意味で、私は両親もあえて日本にこれくらい住んでいるからこれからそろそろ日本人のように苗字を変えたりとかを考えてないのが、ま、日本に住むから日本人なるのではなく、どんどん、日本に住んでいるからこそ、自分の国は忘れていくべきだという考え方は全然持っていないので、多分、生活を続けることは別の問題とされていて、いつも、自分の国は忘れないように意識しながら、やるべきことをちゃんとやって大人として生きていくというそういうつもりでいます。

Y: しかも、テグツキを心臓の部分に、胸のあたりに描いているので、結構意味深いじゃないのかなと。

H: どうですかね。今は家族が自分の家族がまだ元気に韓国にいますけど私も家族も年取っていくといずれかそういう時はくると思うんですけど、そのあとはどうなるんだろうと思うんですけど。でも、自分にとって生まれた国はこれからも韓国人として死ぬまでには韓国人として生きていくというのは変わらないと思います。

Y: 奥様の言語ポートレートを共有したいと思います。

Y: まず、帽子を描いてくれたんですけど。

Hの妻: これは横から子どもが描いていたんですけど、頭のなか日本語とちょっと韓国語なんですけど、そういうのが切り替える帽子でもあったらいいなあと。そういうふうにつなげるのかなあと。子どもが描いている時に考えていたんですね。

Y: はい、なるほどですね。頭の思考は韓国語と日本語が混ざっていることですか？

Hの妻: 混ざっているないんですけど、ふだんは本当に国際結婚をしていることを忘れてしまうことを忘れるくらい日本語中心なんですけど、なんかやっぱりときどき金さんの日本語が韓国語があってそういう時に、ああ、そうだ、そうだ、やっぱり、国際結婚しているし韓国語がやっぱり韓国語がそういう根源にあるんだなあといろいろ思い出したりとか、頭の中から韓国語がなくなるということはないなというのでここで書いてあったんですけど。

Y: 耳のところに韓国のビデオマークとは？

Hの妻: はい、最近、韓国ドラマを見るところが多くなってやっぱり、あのう、好きでみるし、韓国語も聞けるし、なので、生活もそうだなあと、一応映像を見ているよという感じですね。つけてみたんですけど。

Y: 口。

Hの妻: 口から出てくるのは韓国語だし、やっぱり、何か受け取った時に感じるというか伝わるのは日本語だなあと、思って胸のところに描いたんですけど。

Y: なるほどですね。

Hの妻: なので。韓国に行った時でしたらまた違ったかもしれません。

Y: そうですね。

Hの妻: 心にもうちょっと大きくなったのかなあとというのはあります。

Y: わかりました。%で割ってみると日本語はどれくらい示されるんですか？

Hの妻: 80~90%かなと思います。

Y: ドラマは聞いているというヒヤリングということですか。

Hの妻: はい。

Y: ありがとうございます。

Y: あたまの中で赤くこういう韓国語(한국어)というふうに書いてくれたのでおそらく片隅ではあるんですけど、韓国の要素、韓国の所はあるということなんでしょうね。

Hの妻: やっぱり考えてますね。韓国のことは。

Y: 気にはなるのではなくて常に一緒にある文化の言語というように認識されている可能性もありますよね？ご主人が韓国人であるし、空間的には日韓が一緒にあるということでもあるかもしれません。

Hの妻: スーパーで買い物していた時に韓国産と書いてあれば、国産と韓国産は同一のものと考え方をしています、

文字を見てもそうするかもしれません。

Y：なるほどですね。もちろん、スポーツの競技とか見た時に日韓お互いに戦うと思うんですけど、どちらを応援するんですか？

Hの妻：そもそもあんまりスポーツをみないけど、やっていたら、どっちも頑張れという気持ちですかね。日本頑張れとすると金さんに悪い気がします。なので、応援したら、私どこの国民だけなあと思うし、という気持ちでどっちも頑張れと応援しています。Hさんは？

H：私は確かに、そうですね。どこでも応援する気持ちだと思います。

Hの妻：お互いにいやな気持ちになったり。

H：見えないところで。

H・Hの妻：笑う。

H：今まではあんまりなかったのですが、多分、ま、例えば、ワールドカップで日韓戦があるとしてなんかお互いに応援すると思いますけど。

Y：なるほどですね。うちの状況を言う。

Y：どっちも応援することいいですね。

H：それについてはどちらも平和主義なので。

Hの妻：かな。

H：スポーツがあんまり好きじゃなくて。

Hの妻：そうね。

Y：なるほどですね。ありがとうございます。

## 研究協力依頼書

ご多忙のところ、お時間を割いて下さり、誠にありがとうございます。以下の内容をご一読の上、是非インタビューに協力していただきたく、お願い申し上げます。本研究にご協力いただいた方には僅かではありますが、謝礼をお渡ししております。ご査収いただければ幸いです。

### 調査の趣旨

現在「日韓国際結婚家庭の家族」として日本で生活する親子に対するライフストーリー・インタビューと言語ポートレート調査を行っています。

国際結婚家庭において、親の子どもへの言語継承とアイデンティティはどのような要因に影響されるのかという視点から、少数派言語を継承語にもつ親の言語使用実態とその継承意識に影響を及ぼす要因はなんなのか。国際結婚家庭の親子のアイデンティティを形成する要因はなんなのか。日韓国際結婚家庭の家族の生活全般に関わる社会と文化の適応はどのようなものなのかに関してご質問させていただきたいと考えております。エピソードやそれに対するお考えなどを中心にお話しいただき、適宜、こちらからも質問させていただきたく存じます。なお、インタビューでは、1時間前後を予定しております。

年 月 日

西南学院大学 国際文化研究科博士後期課程 梁 正善

「連絡先」住所 :

電話 : (携帯)

E-mail:

## 研究倫理遵守に関する誓約書

本研究では、以下の研究倫理に則り実施されます。

- (1) 匿名性は以下のような形で担保します。まず、お名前が公表されることは一切ありません。また、公開される際には、人物が特定される可能性のあるイニシャル等も用いませぬ。
- (2) 研究の協力はいつでも拒否することができます。また、発言内容を部分的にカットしたいなどのご希望がございましたら、ご遠慮なく申し出て下さい。
- (3) 記録のために用いたICレコーダーの情報は、研究代表者が責任を持ち管理致します。
- (4) 録音データは保管する必要がなくなった時点で、すべてのデータを破棄致します。
- (5) インタビューの内容等に関する研究データに関しては、学術論文、または報告書で公表する可能性があります。なお、ご本人のデータを用い、研究を公表する際には、必ず事前に承諾を取らせていただきます。

ご不明な点がございましたら、研究代表者にご確認下さい。以上の研究趣旨や倫理的誓約を読んだ上で研究にご協力いただける場合は、以下の研究承諾書へのご記入をお願い致します。

年 月 日

西南学院大学 国際文化研究科博士後期課程 梁 正善

「連絡先」住所：

電話： (携帯)

E-mail:

研究承諾書

上記の研究趣旨や倫理的誓約を踏まえ、研究に協力することを承諾致します。なお、研究承諾書は2部作成し、研究書と研究協力者で一部ずつ保管することに同意します。

年 月 日

お名前

## 謝辞

この博士論文を作成するまでは、多くの方々にご指導やご協力がありました。

主指導教員の韓景旭先生（西南学院大学大学院国際文化研究科）には、研究のご指導と共に、生活全般にかかわる相談等私の大きな心の支えになってくださりました。ここに深謝の意を表します。そして、副指導教員の金縄初美先生（西南学院大学大学院国際文化研究科）、片山隆裕先生（西南学院大学大学院国際文化研究科）、宮崎克則先生（西南学院大学国際文化学部国際文化学科）には中間発表、最終発表において貴重なご助言やご意見をいただき、また個人面談においても数々のご指導をいただき厚く御礼申し上げます。

今回、インタビュー調査に快くご協力いただいたA家族、B家族、C家族、D家族、E家族、F家族、G家族、H家族、I家族、J家族、K家族、L家族に心より感謝いたします。皆様のご協力がなければ、研究を進めることはできませんでした。ここに感謝の意を表します。特に、何回もインタビュー調査に応じて下さったA家族には感謝しきれません。また、電話やSNSでの複数の質問等にもご丁寧にに応じて下さったA家族からL家族まで本当に心より感謝申し上げます。

さらに、研究発表をする機会をいただき、貴重なご助言を下された「東アジア学会」にも厚くお礼を申し上げます。

また、李エリア先生（早稲田大学韓国学研究所 招聘研究員・事務局長）には研究や生活全般に関わる相談等落ち込む度に、温かい激励の言葉や応援をありがとうございました。また、木村貴先生（福岡女子大国際文理学部 国際教養学科）には、研究方向等について助言とご指導を受けました。ありがとうございました。また、同じアイデンティティ(朝鮮族のアイデンティティと言語使用)研究をする仲間である李娜さん（九州大学大学院比較社会研究科研究員）には助言や励ましの言葉や応援を感謝いたします。

筆者の博士論文を最後まで入念に日本語のネイティブチェックして下さった宮崎聡子先生（関西学院大学日本語センター）、伊藤正宣先生（小児科医師）、黄聖媛先生(福岡大学韓国語非常勤講師)に感謝の気持ちを表します。

最後に、韓国側と日本側、双方の家族に感謝のことばを伝えたいです。父と母はいつも心の支えになってくれました。いつも励ましてくれた姉と弟に感謝をしたいです。また、不器用な嫁を見守ってくれた夫の両親にも感謝をしたいです。この研究はまた、家事や出講や研究に至るまで、夫の全面的な支えによって可能でした。感謝致します。母の研究の契機になった息子達にもありがとうを伝えたいです。

このほかにも感謝したい方が多くいらっしゃいます。筆者はこのように日本で恵まれた環境で、皆様に支えられて本論文が完成いたしました。ご指導やお力添えいただいた皆様、誠にありがとうございました。